

日本保育学会第 64 回大会

緊急シンポジウム

(平成 23 年 5 月 22 日 於：玉川大学)

「災害時における子どもと保育」

報告書



一般社団法人

日本保育学会

子どものすこやかな育ちと幸せへの祈りと希求

本報告書は、第 64 回日本保育学会において開催された緊急シンポジウム「災害時における子どもと保育」ならびにその時の展示資料ならびに理事アンケート資料等、2011 年 5 月時点で提出された資料をまとめた報告書である。

2011 年 3 月 11 日の震災から半年が経過した現在でも、東日本大震災では 15,822 人の尊い命が奪われ、3,926 人の方が、依然、行方不明である(10 月 7 日現在、警察庁発表)。追悼の意を表し、心よりご冥福を祈りたい。被災された方々の復興再建への苦悩と悲嘆は如何ばかりかと胸が締め付けられる思いである。日本保育学会として、被災地域の保育に対して、当該地域の保育の主体性や自立性を尊重しつつ、子どもたちがすこやかに育つのに不可欠な保育環境を共に再建創出していくために、私たち会員一人一人の思いを一つにし、長期的かつ持続的に何ができるのかを具体的に考え行動し続けていかねばならない。また、尊い命やその子どもたちを守ろうと命がけで守った保育者や保護者の命がこれ以上二度と失われることなく、いのちをまもり育てる保育のいとなみのために、本震災から何を学び未来への防災のために現状をいかに改め、何を引き受けていかねばならないのか、その展望と責務が問われている。いのちを育む公的使命を担う園のあり方、環境を通しての保育の理念の中で、私たちはどのようにしてその保育の環境を守りまた再創出できるのかの難題に対峙することが求められている。本シンポジウム報告はその学会としての震災復興へ向けた最初の貴重な記録である。

この報告書完成に至るまでの歩みを記しておきたい。日本保育学会理事会では、3 月 11 日の東日本震災の発生以後ただちに連絡を取り合い、震災地域の会員の安否を取り、学会として何ができるのかを議論してきた。そして節電や余震で大会実施が危ぶまれる 4 月上旬、大会開催校玉川大学豊田一秀大会委員長のご英断を尊重し、理事会で 5 月の大会開催を決断した。そして大会プログラムには予定がなかった緊急シンポジウム「災害時における子どもと保育」を開催することを決定した。また、1 度のシンポジウムで終わりではなく、その後も継続的に災害時における子どもと保育に関して検討する委員会の設置を決定した。そして、本シンポジウムの企画や実施準備を、阪神・淡路大震災のご経験をもつ近畿地区理事の島田ミチコ会員、被災地の評議員である関口はつ江会員が中心となって、短期間の中できわめて精力的に進めてくださった。シンポジウム開催に当たっては、ここに掲載されているように、当該地域の園の聞き取りや調査をしてくださったり、理事評議員等にもアンケート調査を実施しそれを取りまとめ、学会当日シンポジウムの部屋隣の展示室に資料を掲載してくださった。当日のシンポジウムは、予定の人数を大幅に超え、また時間も延長されて開催された。その様子は本記録を読んでいただいても熱気が伝わってくるものとなっている。当日の会場には、参集した多くの人の震災復興への切実な思いが溢れ、資料展示も多くの人がみてくださった。シンポジウムでは話題提供者、指定討論者の会員の方々が、自分たちの心からの叫びでもある生の声を届け、大変困難な状況の現実と共に、その中で子どもたちの姿や保育者、保護者、園の絆のつながりと連帯の姿の中に新たな希望もまた見出し、専門的見識をふまえても話題提供をしてくださったからである。

そしてその当日の記録を残し、シンポジウムには参加できなかった方々にも知って考えていただくために、災害時における保育問題検討委員会（太田光洋委員長）の委員の方々が、このシンポジウムの記録をおこし報告書を編むまでの編集の労を取ってくださった。シンポジウムの企画および実施をしてくださった方、シンポジウムに話題提供や指定討論に登壇くださった方、シンポジウムに参加しフロアからも活発な議論に加わってくださった方、また大会時に資料展示作成や調査に協力くださった方々にも、学会として心より謝意を申し上げます。

これは震災2か月後になされたシンポジウムの記録である。地震や津波、原子力発電所における放射能の問題はその後、子どもたちや園、保育者、保護者にさらに深刻な事態をもたらしている。災害直後の課題とは異なる新たな局面での課題が半年たった今表れている。またこれからもその時期によって異なる様相を呈して当該地域の保育に関する課題は続くと考えられる。この子どもたちが大人になるまで私たちは新たな地域再建創出への支援を続けていかねばならない。それがこれからの保育を考える出発点になるだろう。

遅々たる地域復興の中で、懸命に子どもたちの命を守り、すこしでもよりよい保育をと知恵を絞り保育をされている保育者たち、またその園の支援に少しでも役立てばと駆けつけ地道な活動を続けられている保育界の方々と共に協働し、学会としてできるかぎりのことをしていきたい。それは学術のための学術だけではなく、保育学という学術が社会に向け、行政にむけて、行動しながら考えていく歩みを進めていくことである。その時私たちは、保育学会の真髄としての魂を受け継ぐことを忘れてはならないだろう。本シンポジウム指定討論の首藤美香子会員が引用しご紹介くださった、関東大震災直後の倉橋惣三初代会長の言葉に学びたい。（詳しくは首藤先生発言記録を読みたい）

「苦難とはいいいながら、再生日本の新しい生活には、子どもらの真実の進展のために、新しい道程が企画されている筈である。わたしたちおとながどんな急転回に困迷することであろうとも、幼きものの行路を塞ぐような荒徑にまかせておいてはならぬ。わたしたちは決してそれを怠ってはならない。教育は育つものに対する信仰である。・・・」

苦境の中でも、子どもたちの育ちが未来を創り、新たな社会を生み出していく。この確信を生み出すのは、子どもの命の輝きをまもろうと保育の責任を引き受ける者相互の信頼と連帯である。そこで生まれる新たな智慧と見識が道を開く。苦難の中でも保育の知恵は相互の支援と協創の中で今も生み出されている。子どものために、保育の未来のために必要なことは何かを、長期的な見通しをもちつつ、社会にきちんと発信していくことが、学術団体である保育学会に課せられている。本報告書に学び、私たちはこれからの時代の保育の姿、保育学の歩むべき未来を、実践の場の子どもたちと保育者、保護者の中の具体的な真実にふれて考え、たしかな行為の一步を着実に生み出していこう。その希求こそが、苦難の時に前途の道を拓く光明になるに違いない。

2011年10月8日

秋田 喜代美（日本保育学会会長）

目 次

まえがき 「子どものすこやかな育ちと幸せへの祈りと希求」

日本保育学会会長 秋田喜代美

1. 緊急シンポジウム「災害時における子どもと保育」全文（5月22日）	1
企画・司会 関口はつ江（東京福祉大学、東北北海道地区評議員）	
島田ミチコ（関西学院大学、近畿地区理事）	
話題提供 野呂 アイ（修紅短期大学）	
生駒 恭子（ほうとく幼稚園、いわき市）	
米田 芳恵（北須磨保育園、神戸市）	
井出 浩（関西学院大学）	
指定討論者 首藤美香子（白梅学園大学）	
緊急シンポジウム資料	43
2. 学会当日展示資料	
（1）東日本大震災下における保育にかかわる日本保育学会役員の見解	63
（2）学会員からの報告事例・報告・意見等	79
被災3県の概要	
① 岩手県・宮城県	
② 福島県	
資料	95
① 岩手県・宮城県	97
② 福島県	121
③ その他	188
④ 事例の概要	199
⑤ 保育関係団体による状況調査等	212
（3）阪神・淡路大震災記録	215

- 3. まとめにかえて 235
 - 1) 調査のまとめを終えて
音山若穂（災害時における保育問題検討委員会研究委員）
 - 2) 災害に学ぶ
関口はつ江（災害時における保育問題検討委員会副委員長）
- 4. あとがき 238
 - 保育学会ができることを問いつける
太田光洋（災害時における保育問題検討委員会委員長）

第64回大会 学会企画緊急シンポジウム

<タイトル>

災害時における子どもと保育

<日時>2011年5月22日(日)9:30~11:30

<会場>玉川大学 9号館200番教室

<企画・司会>

関口はつ江 東京福祉大学、東北北海道地区ブロック評議員

島田ミチコ 関西学院大学、近畿地区ブロック理事

<話題提供>

東北地方の子どもたちの現状 ……野呂 アイ 修紅短期大学

東北地方の子どもたちの保育に求められるもの……生駒 恭子 ほうとく幼稚園

阪神・淡路大震災の経験談と提言 ……米田 芳恵 北須磨保育園

長期にわたる子どもの心のケアについて ……井出 浩 関西学院大学

<指定討論>

首藤美香子 白梅学園大学

○開会

司会： それでは時間が参りましたので、緊急シンポジウムを始めさせていただきます。本日、司会進行を務めさせていただきます関口と申します。よろしくお願ひいたします。なにぶん今回のシンポジウムは本当に緊急の緊急という状態でございます。私どもが主体的に進めるといふより、むしろフロアの先生方と一緒に、この問題に我々が一人一人どう取り組んだらいいのか、という問題意識を掘り下げるような形で進めさせていただきたいと思ひます。どうぞ積極的なご参加をお願ひしたいと思ひます。

最初に時間のことについてご了解いただきたいと思ひます。当初2時間の予定でプログラムを作りましたが、話題提供の先生方のご発言内容がそれぞれ大変濃いものですから、指定討論のお話も含めるとほとんど2時間を費やしてしまうことも考えられます。そこで最初から30分の時間延長で、12時までという予定で進行させていただきたいと思ひます。

○企画者あいさつ

島田： 島田ミチコと申します。どうぞよろしくお願ひいたします。始める前に少し皆さんにお願ひがございます。ことしの3月11日に大変な災害が起こり、多くの人たちの命が奪われてしまいました。そして子どもたちも多くの命を失いました。2カ月少したちますけれども、いまだに身元の分からない方たちもたくさんいらっしゃるということで、シンポジウムが始まる前に、亡くなった方々の霊に、そして特に子どもたちの魂に黙禱を捧げたいと思ひます。ご協力のほどよろしくお願ひいたします。それでは黙禱。

〔一同、黙禱〕

島田： ありがとうございます。それでは企画の趣旨を少し申し上げます。座ってお話しさせていただきます。

今回のシンポジウムは緊急という言葉が付いておりますけれども、4月9日の理事会において緊急に開催するということが決まりました。プログラムに載せることもできずに、大変皆さまにご迷惑をおかけしておりますことをこの場を借りてお詫び申し上げます。

企画の意図ですけれども、チラシにも書かせていただいておりますように、今回の大震災は我が国のあらゆる分野において大変な課題を投げかけております。保育においても例外ではございません。今、起こっている現実を私たちが正確に受け止めて、どのように対応して乗り越えていけばいいのか。そして子どもたちの将来を見据えて、今、何ができるのか。あるいは、どのような将来を展望するのか。保育関係者の専門的な能力と行動が、今、問われているのではないかと思います。災害時において子どもの命を守り、そして子どもの人権を保障し、子どもが安心して生活できるためにはどのような支援ができるのだろうか。保育学会として、災害時における保育の方法、あり方、方向性をまとめていく必要があるのではないだろうかと考えています。

今回のシンポジウムは、それに向けての第一歩として災害時における保育現場の

実体験に焦点を当てて、劣悪な環境の中で子どもはどのように対応しているのか、あるいは非常事態における保育者の活動の実際から、保育者の役割の専門性とは何かを問い直してみたいと思っております。現在の子どもたちの働き、そして保育者からの働きから私たちは多くのことを学ぶとともに、保育のあり方、および地域復興に際しての保育への支援、そして保育・教育への根本的な問題を討論することを意図しております。先ほども申しましたように今回はその第一歩として、被災地の保育現場からどのような問題があるのだろうか、私たちが考えもしなかったこと、また気づきもしなかったような問題を今回浮き彫りにすることができれば、第一回目としてはいいのではないかと考えております。

話題提供や指定討論の先生方のお話の後、フロアの皆さま方の活発なご意見をどうぞお願い申し上げます。以上です。

○＜話題提供＞

司会： 以上のような趣旨に伴いまして、本日の話題提供は4人の先生方をお願いしております。今回の震災に直接かかわりを持っていらっしゃる東北地区のお二人の先生方をお願いしております。最初に、野呂アイ先生から東北地区全体の状態についてお話をちょうだいしたいと思います。引き続きまして、福島県の保育現場を担っていらっしゃいます生駒恭子先生から、震災と原発の問題、その他を総合して、今、保育現場がどうなっているかということについて詳細をお話しいただく予定です。

実は、今回のシンポジウムは、我々は阪神・淡路大震災における体験を生かすことができるのだろうか、ということにつなげたいという意図がございます。阪神・淡路大震災の経験が今回にどうつながるのか。我々はそこから何か学ぶことができるのか。そういう問題に関しまして保育現場のほうから米田芳恵先生、それからお子さんのフォローをずっと続けていらっしゃいました井出 浩先生から、引き続きお話をちょうだいする予定でおります。よろしく願いいたします。

○東北地方の子どもたちの現状 野呂 アイ 修紅短期大学

野呂： 皆さん、おはようございます。ご紹介いただきました私は東北北海道地区ブロック評議員ということで、このたびの話題提供を担うことになりました。私自身は宮城県仙台市に住まいを設けておりまして、しばらく尚絅学院大学にいらっしゃいましたが、現在は岩手県の一関市にあります修紅短期大学に特任で参っております。そういう関係で東北地方と申しましても、宮城県、岩手県の資料を基にしてお話しすることになります。福島県は、また独自に大変貴重なお話を伺えると思っておりますので、私からはそういうわけで限られた資料ですけれども、話題を提供させていただきます。私の資料は6枚の印刷物になっておりますので、そちらをごらんいただければと思います。

まず、このたびの震災に際しまして、全国の皆さまからお見舞いや励ましをいただきまして厚く御礼を申し上げます。私自身もある意味、津波ではないですが、地震の被害はありまして、ここにもちょっとライフラインの復旧経過についてメモしておきました。水道から水が出なかったり、電気がつかなかったり、通信が途絶えたり、ガスが供給されなかったりという、何日間かの不便をいたしました。

地震の影響というのは津波だけでなく、都市のほうは地割れを起こしておりますので、そういう意味で道路をはじめ住宅の中がいろいろ被害を受けているということで、まだまだ十分な住まいの様態を成していないということもあります。

そんなことですけれども、子どもたちの保育をめぐるってどういうことを私どもが考えていくかというところで、少しお話し申し上げたいと思います。プリント資料の1枚目は、大ざっぱに11日の地震発生から津波が現れて、そして続いて福島原発問題がずっと話題に上ってきた被害状況です。余震発生ということでもう一つ、4月に入りましてからかなり大きな地震がありまして、それでまた二次被害といいますか、そういった被害も加わったという出来事になるわけです。5月17日現在ですけれども、死者が1万5,000人余り、行方不明が9,000人余りということで、合わせて2万4,000人以上の人的被害になっているということになるかと思えます。

それから津波の影響ということもありまして、町の中の道路が遮断されたり、瓦礫（がれき）の処理が行き届かなかったり、それは非常に地域の差が大きいということです。例えば宮城県の場合、仙台は31%瓦礫処理が進んでいますが、石巻はわずか4%という具合です。町の中がまだまだ復興という動きにはなりにくい状態を呈しております。岩手県もそういう状態、福島県も同様というような感じです。全体の平均的ですが、今の瓦礫処理等は14%ということで、これは自治体のやり方に任せていいのかという問題が出てくるかと思えます。そういうことで、いろいろ生活上の基盤が整いにくいという中で私どもは暮らしているというところから保育教育の問題が問われていくのではないかと、一つは見ております。

今回、私がこういうことを考えるに当たって、日ごろの問題のとらえ方として一つあるわけですけれども、大人も子どもも、個人をとらえる場合にどういう視点でとらえるかということを考えております。この1枚目の下に示しております。それは古くはU.ブロンフェンブレンナー（Urie Bronfenbrenner）に倣いますけれども、生態的環境システムという観点が大事だと思って見ておりました。

つまり、非常に身近な人間のかかわり方、物とのかかわり、人とのかかわりというのはマイクロシステムという形で位置付けられます。それから近隣の関係で、隣近所、あるいはお家と幼稚園・保育園との関係がメゾシステムです。もう一つは、父親とか母親の職場の中身、職員室の様子とか、子どもには直接かかわりの薄いところのシステムということで、エクソシステムがあります。マクロシステムということで、私どもがどういう政策の下で、どういう法律の下で、あるいはどういう経済的な基盤の中で暮らしているのかという視点です。これがマクロという観点で位置付けられるわけです。もう一つを言えば、クロノシステムというのは歴史的な視点ということになっています。そういう5つの環境システムの提供ということで、私は震災の問題も考えました。そういうところから幾つかの資料等でまたちょっと述べさせていただきます。

2枚目の資料です。私もこのたびの話題提供に関してどういうふうに資料を収集するかということで、新聞等をまず丹念に探しました。それからインターネットとか関係機関。県や市の福祉関係、教育関係に問い合わせまして、データがないか、どういうふうに報告されているかということ伺いました。4月半ば、1カ月ぐらい

過ぎた時点で県や市からの提供はなくて、個別にいろいろ問い合わせ、やっと社会福祉協議会等の保育部会あたりから資料を少し提供していただいたということがあります。そういうわけでまとまったデータが非常に少ないということを今回感じております。

それともう一つ。これを掘り下げていきますと、このような資料から乳幼児関係の問題は、マスコミをはじめ関係機関があまりよく分析していないというふうには感じました。つまり、震災下の子どもの問題等を見ていく場合でも、いわゆる日本の乳幼児保育教育をめぐる政策、体制がどう動いているのかということは、非常に関心が弱いところに位置付けられているのではないかと思います。私たち国民というか、国全体もそうですし、あるいは各自治体、地方のレベルでもそうだと思います。私はこういう災害問題がなくてもそうだと感じますけれども、今こういう大震災という歴史的な出来事に出遭って、非常に緊急を要する事態にもかかわらず、そういうデータがまとまって出てきません。その動きが私は非常に気になりました。

ですから、一つはこういう震災をきっかけに、もう少し国民的レベル、市民的レベルで、乳幼児の保育をどうするのか、どう考えてくださっているのか、将来のある子どもたちの命をどういうふうに守り育てくださるのか、ということをもっと強調していくというのは今回の一つの役目だというふうにも感じた次第です。普段の乏しい状況が、ある意味でこういう出来事をきっかけに、具体的に現れているのではないのかも感じています。そんなわけで少し資料をごらんいただきたいと思います。

岩手県からの情報は保育所関係ですが、これは沿岸部中心の保育所の数ですので、全県下の保育所の状態ではないということでの限界はあります。96カ所ある中の67カ所に何某かの被害があったということが表1に示されています。死者・行方不明ということでも、子どもさん、乳幼児の亡くなった方は40人ほどおります。

それから宮城県の場合は詳しいデータがないのですが、過半数は通常保育に入っていたり、一部閉園したり、再開の見通しが立たなかったりで、こんな形でまとめてみました。幼稚園のほうはインターネットでちょっと探ったら、いろいろ詳しいデータは出ましたので、それをまとめて宮城県の私立幼稚園は全体的にこういう動きだということです。

そして人的な被害ということで見ますと、学校管理下で幼稚園にまだいるというのは、具体的には降園時間でもうお帰りになっている時刻ですけれども、バスで通園している方たちのために園バスが発車したり、園庭に置かれていたりという状況の下での被害です。学校管理外という形は、お迎え後、親御さんや近所の方との帰りの途中で亡くなっているという数になっております。そういう実態がまず一つありました。

保育園の関係者中心ですけれども、私は実際の現場を訪問しまして、関係の方にインタビューしまして状況を伺いました。それが3、4、5ページにわたる資料になります。最初の石巻市の場合と塩釜の場合は、園内にいて何某かの被害を受けて、園内で対応したという形です。どういうふうにそこで対応したかということですが

れども、石巻市は非常に被害が大きかったわけですが、こちらの園は浸水で1階はもうだめですが、幸いそういうところで終わっています。4日目ぐらいでその全員がお迎えできました。要するに親御さんの交通事情、お宅の事情、職場の事情があって、なかなかお迎えに見えにくいという事態がありました。ですから、水の中を親が漕いで迎えに見えて、子どもさんと出会ったという、すごく感動的な気持ちなども伺えました。

それから塩釜の場合は、あそこの地域的に松島・塩釜というのは島が結構ありますので、それで津波をある程度遮ったという関係で大きな被害は起こってない状況でした。その隣の多賀城市は仙台市にもつながる地域ですが、逆に結構な被害が出ております。やはり園庭の処理をどうするかというようなことはありましたが、大きな被害はなく過ぎたということです。

そして親たちが職場を失う中で保育をどうするか。11日から金土日に入っていくわけですが、11日は金曜日で、土日休みで休み明けのところはどう復帰できるか、再開できるかということで、急いで片づけをしていくわけですが、要するに、なんでそう急ぐ必要があったかといいますと、3月分の運営費が入るかどうにかかってくるわけですね。特に民間の私立保育園の場合にはそこが大変な課題になって、苦しい運営の中で自治体との交渉もあったというふうに伺いました。

親たちも雇用を解雇される状況が起こって、親たちの生活スタイルが崩れていくと子どもたちの保育も非常に変わっていきます。そういう子どもたちを取り巻く条件によって全員を受け入れた上での保育という形も取りにくいので、保育を続けていくためには、やはり保護者の職場保障という政策的な自治体の支援も必要になってくるはずですが、その点は、はっきりと自治体からは、保育しない分は運営費を出さないという動きも出てきたりして、大変苦労されたというお話を伺いました。

それから三番目に挙げた事例は、建物が全く流失してなくなってしまったところです。名取市というところの、本当に沿岸部の保育所です。ここで非常に貴重なお話を聴きました。やはり普段、避難の場所とか、どういうふうにどこへ避難するかというやり方を、日常生活の中できちんと職員が確認し合っていたということです。彼女たちは、市当局が最初に示していた避難場所と違うところを考えたのです。まずは車を使って避難するとか、浸水しても大丈夫なように3階以上の建物とか、そういうことを常日ごろからきちんと見定めておりました。そこまで行くのにどれぐらい時間がかかり、着いたらどうするか。そういう手はずなども決めていたようです。そういうわけで全員無事に障害児を含む50何名か60人足らずですか、その園児たちを守ることができているわけです。2日、3日ぐらいかけて、親御さんたちにもちゃんと引き渡してということを実現したわけです。

ここでは日ごろからそういう避難のことを職員間で確認し合い、訓練をしていました。とっさにどう判断するか、どこにどういうふうに逃げていったらいいか、その判断する機敏さというか、機転の利かせ方というか、そこが非常に大事なのかなという思いがしました。そういうことができたのは、やはり日常、保育の中で命を大切にという信念があったということから導かれた動きではなかったかと思えます。そういう点が三つ目です。

4番目に挙げた事例は、直接の保育所の職員ではないですけれども、近所に住んでいた保育の経験もおありの方が現在定年でお宅にいたようで、その方が保育所の手伝いをして一緒に避難しました。地域的に避難場所が同じであるということもあり、近くの中学校まで避難しております。やはりこちらも避難先へ行くまでの手はずも、子どもたち共々、見慣れた道順をきちんと押さえているということです。

そして、この方は避難所にキッズコーナーを設けまして、保育をなさったわけです。500、600人もの大きな高校の体育館が避難場所になっていくわけですけれども、そちらの大勢の大人たちの中で、子どもたち、乳幼児をどういうふうに保育するかという点で、非常に心強いかかわり方をしていただいたのではないかと思います。

そして、そういった資料を基に私なりに、何がここで問題だったのかというのを項目3という形で、5、6ページに4つに分けて示しました。最初に申し上げましたように、まず子どもを見ていく場合の視点として、子どもの生きる権利や、子どもの最善の利益がどういうふうに保障されているのかという点。これはマクロシステムの視点になっていくわけです。一つはそういうところから問題点を探ってみるということです。ここでは日常性がどういうふうに保障されていくのかというところに、また関係付いていくわけですけれども、この点は、園舎、人とのかかわり、保育者の配置等が問題になってくるかと思います。

二番目もその関連ですが、親しい家族や知人が亡くなっていく中で、自分たちの生活の基盤、基地というか、居場所をどういうふうに用意されていたのかということです。建物等がすっかりなくなってしまった保育所の子どもたち、幼稚園の子どもさんたちにとっての自分たちの居場所づくり。物理的な問題と同時に親しい方を亡くされているということでは、気持ち、心の居場所にもかかわってくるわけです。そういう点の崩壊があったと見られます。

それからもう一つは、マスコミ等として非常にデマが流れたということがあります。これは福島のほうになると放射能が入ってきますので、もっとその風潮というのが大きく人々の暮らしに影響しているとも思います。その点については次の方からお話しいただけるのではないかと思います。

そういうふうに子どもそのものの様子ということでは、大変不安定な中に暮らしているということがありますので、できるだけ早急に、安心安定した生活の場を用意していくこと。それは同時に親たちの生活が、雇用関係等が確保される事です。東北地方は農水業ですね。農業、水産業が主ですから、そうするとそういう親たちの働き場所も保障しながら、子どもたちの保育とのかかわりというものも見ていかなければいけないだろうと思っております。

それから保育の中で具体的に今後いろいろな話題になるであろう死とか生ですね。生きる問題。死とめぐり会うこと。そういう点を子どもたちが分かるようなとか、それを受け止めていくやり取り、関係づくりをどのように進めていくかということも課題になっていくのではないかと思います。

それから今回感じたのは、保育所の子どもたちというのは本当に無事だということです。亡くなっていないということ宮城県の場合、身近に感じます。ところが、幼稚園のほう結構帰りの時刻とのぶつかりで亡くなった方が残念ながらおりま

した。その辺の防災意識というか、どういうふう子どもたちを守るかという点では、ちょっと幼稚園のほうが油断されたのか、そこら辺のとらえ方にズレがあるのか。そういう点では、やはり緊急事態になってもなかなか対応しきれない部分なので、日常的なところで震災・防災にどう取り組んでいくかということが問われている問題だろうと見ております。

ということで最後、私なりに、保育者としての専門性が問われている中で一つは、命を守る、育むという営みをもっともっと充実させていく上で、全般的な保育界の状況を含めてもっと国民的なバックアップ、あるいは意識改革というか、もっとみんなの問題にしていくということで事情を知り合って、これは単にある部分的な地域の問題ではなく、将来にわたる国民的な課題として今回、緊急に対処してほしいということをお願いしております。

そういう点では設置基準の問題がいろいろ問われ出している中で、そこが地域任せになってしまうと非常にまた歪みや格差が生じる危険性もあります。そうではなくて、やはり国が、きちんと乳幼児の保育に関して設置基準を公的責任で実施していく方向で対応してほしいと願っております。自治体もそういう形で支援を進めていくことが必要だと思っております。そんなところでちょっと端折りましたが、終わりにさせていただきます。

司会： ありがとうございます。根本的な問題として、日本の社会自体が子どもの権利を守るとか、子どもの生存権をきちっと保障するという意識が非常に曖昧だったのではないか、という問題提起であったかと思えます。今回の事態はこれを露呈したということになるのでしょうか。この辺の問題を根本的ベースに考えながら、また次のお話を伺わせていただきたいと思います。では、よろしく願いいたします。

○東北地方の子どもたちの保育に求められるもの 生駒 恭子 ほうとく幼稚園

生駒： 大変失礼しました。福島県から参りました、ほうとく幼稚園の生駒と申します。

このたびの震災では本当に全国から福島にたくさんの支援をいただきました。それから、きょう私が与えていただきましたテーマは「東北地方の子どもたちの保育に求められるもの」ということで、この場をいただきました。振り返って3月11日からこうやって見ると、このときに、「子どもの保育」というテーマをお電話で関口先生からいただいてよかったなと思っています。

私たちの問題は3月11日の2時46分から発生しました。その直後の問題、それから1週間の問題、1カ月の問題ということがいろいろございますけれども、まずは今の直面しているのはこの東京電力第一原発事故で、私たちの大きな問題となっています。3月11日の発生直後、先ほど幼稚園がちょっと災害に対して気を抜いてしまったかしら、というご指摘をいただきました。命を落とした子どもたちが多かったこと、東北に幼稚園の管理下で命を落としたことについては本当に考えなければならぬところだと思います。もちろん私たちの園でも子どもたちはバスに乗っておいりましたし、園にも残っておりました。発生直後、園舎にもおいりましたし、園庭

にもおりました。バスにも乗っていました。私の地域は津波の場所がありますので、バスで何か起こったときにはすぐに園に戻るという約束事がありました。

それでも、一番に電話ができなくなりました。外からの最初の電話は、なんと大阪の先生から、「大丈夫か」でした。メールで「大丈夫」というだけを入れました。その後、この一報がなぜ外から入ってくるのかと。やっぱり渦の中にいる人間たちは見えないこと、動けないことがたくさんあるので、こういう場で皆さんに今お知恵をいただければいいのではないかと思います。

私をご用意させていただきました資料は3枚ありまして、いわき市私立幼稚園協会災害対策本部という資料を用意させていただいております。おそらくこの会場の下にも、先ほどビデオとかを写しますよとおっしゃられていますので、くどい話になってしまいましたら恐れ入ります。ただ、下の方にも分かっていたかのようにと思ひまして、バタバタと今朝パワーポイントで作ってきました。

このいわき市私立幼稚園協会対策本部というものは、実は私の園に今ございます。地震が発生いたしました、もちろんもう大変です。私のところは私立幼稚園ですけれども、公の仕事をしているということがよく分かりました。避難されてくる方がたくさんいらっしゃいました。炊き出しもしました。先生方は家に帰れません。そして怒濤の3日間を過ごしながら、そこで避難所を回り、子どもたちの安否確認ということを先生方はしました。このことは細かく話すと長くなってしまいますので割愛します。

その中でテレビの報道がいろいろ出てきました。テロップで、〇〇公立小学校、いついつまでお休み、〇〇小学校お休み、〇〇幼稚園お休み、休園ということが出るのですが、私立は何も動けなかったのです。そのときに私立幼稚園の先生たちは不安と焦りで、どういうふうに保育を再開したらいいのか、今の何が起きているのか、分かりませんでした。2ページ目に名前がありますが、そこで私たちが市の幼稚園協会の本部長の新妻先生と何かしよう、とにかく何かしよう。

そのときに今度は、兵庫県の震災を体験された先生が、「大丈夫？」と電話をくれました。そのとき、こう言いました。「何していいか分かんない」。そうしたら、「まず園長先生たち、集めなあかんよ」って言われました。集めました。全員、来ました。そこで現状報告を、園長先生たちと顔を合わせて。そして何が困っているのかを話し合い、何をすべきなのかを考えました。

また、兵庫県と大阪の先生に電話しました。「何したらいい？」って。「データ集め、データ集め」って言われました。データを集めたものがこの被災状況です。福島第一原発と言われると福島なんです、東京電力福島第一原発なんですね。ぜひとも東京と入れて全部放送してほしいと思っているぐらいなんです。13日に爆発いたしました、それからやはりいろいろなことが出てきました。

あっという間に町は静かになりました。ガソリンは入ってきません。お店は開きません。子どもたちはいなくなります。もう本当にひっそりしていました。残っているのはおじいちゃん、おばあちゃんと、男の人ですね。ところが、うちはお寺でしたので、父と私が残って、そのおじいちゃん、おばあちゃんに水を運び、本当にガスも出ませんから、炊き出しした切り干し大根とかを作って、お配りするなんて

いうことをしていました。その中で感じたことは、こうしてみんなが去っていく怖さ。そして、いわきには物が入ってこない、みんな怖くて来ないという現実があった、事実があったということなのです。それを今ちょっと心の隅に置いておいて、私のお話をもう少し聞いてください。

現実にはこのようなことで、いわき市だけでも3,250名の園児のはずだったものが、1,184名が4月の時点で登園できない状態です。これは本当にお金の問題で言いますと後ろにありますように、このような状態で、先ほど運営費がもらえなくなるのではないかとというようなことを野呂先生からもお話がございましたが、いわきの先生も同じようなことを考えました。保育実態がないにもかかわらず（※保育実態がなければ）、保育料がもらえないのではないかとという心配があるわけです。これから先もずっとこれが続くのではないかとという不安です。

そして4月11日に、また大きな余震がございました。そのときには震源がいわきでしたので、やっぱり非常に大きいものがあって、お母さんたちはガクンと本当に心がなえるというか。頑張ろうと思っていたのに、もうガクンとなりました。

そのときに私たち私立幼稚園みんな、とにかく幼稚園をスタートしようと。うちも水が出ませんでした。水をかき集めて、保育をスタートしました。それに当たっては本当にリスクを伴うものがたくさんあって、お手紙を普段以上にたくさん、たくさん出していきました。そのときに福島県の私立幼稚園協会は一生懸命動いて、理事長をはじめ、本当にあちこちに要望は出すわ、何は出すわということを持続しながら保育をしておられたわけです。

その中で、後ろにございますのが、現在の福島県の子どもたちがどのくらい出ているかというものです。ちょっと不鮮明ですけれども、これはランダムに福島県全体をピックアップいたしました。福島県は全部で6地区に分けておりますが、大きく被害が出ています。殊にこれは、全て東京電力福島第一原発による園児の退園、停園、休園という実態です。非常な数が出ているという事態があります。これは、いわきばかりではありません。最初はいわきの問題でした。ところが、やっぱりみんな空気はつながっていますので、放射能というものはあちこちに飛んでいくわけですね。そうすると、すべての県の子どもたち、それからすべての県の幼稚園・小学校・中学校に派生している問題です。このことを踏まえて現在、私たちが保育をしているということを皆さまにお話ししてまいりたいと思います。

まずは、この東京電力福島第一原発によって私たちが一番問題にしているのは、幼稚園の目的が保障されていないではないかということです。幼稚園は本当に環境で育てるのです。幼稚園は、義務教育、およびその後の教育の基礎を養うものとして幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とすると、国は言っています。ところが、私たちの環境は、今、大変適切な状況ではありません。それから心身の助長といいますが、心身が助長されない状態なのです。このことを保育という観点で考えたときに、どのような視点で国に対して、市に対して、県に対して、そしてすべての国民に対して、それをご理解いただいていくということは急務なのではないかと思っています。

それから、東京電力福島第一原発による子どもの安全・安心のための環境の整備

にかかわる出費。先ほど申しました、この心身の助長と、環境を適切な環境に戻そう、もしくは戻せないことをなるべく安全に確保しようと思えば、かなりの出費がかかります。例えば皆さまも報道でご存じのとおり、表土の問題が出ています。土を取れば、かなりの率で放射線量が抑えられる。でも、その土はどこに持っていったらいいか、分からない。ただシートをかぶせておく。うちの庭を取ってお隣に持っていったら、幼稚園に通っていないお隣の2歳児や0歳児はそれでいいの？子どもと暮らすことを選んだ私たちに、そんなことを国はしろと言いますか、ということを実は突きつけたいのです。

そして、やはり放射線量が非常に高い幼稚園は全部閉め切っています。これから夏です。締め切って、子どもたち、暑い中でどうしましょう。クーラー、入れましょう。あ、電気ないんです。冗談じゃないですよ。そんな話の中で今、もたもたとお金をくださいと言って、待っている保育者がいるのでしょうか。私たちは、本当に必死で、笑顔で若い先生たちが現場に向かっているということを皆さんに知ってほしいと思います。

いわき市の対策本部では、まず幼稚園の先生たちと、放射能と上手につき合う方法ということでちょっとアイデア交換会をいたしました。まず現場の先生たちから出てきたのが、園児への保育充実の保障をしたいんだ、それができるのかが不安だと。本当にここで幼稚園をやっているの？という疑問さえ持っているわけです。それから、それに伴って保護者への説明責任。育児不安を普通だっただけ抱えているお母さんたちに、この状況下なんですね。この状況下での保育、育児不安への寄り添いということが出ております。園児の心のケア。体の心身の健康の保障。保育の充実、発達は本当に保障されるのか。カウンセリングなどの専門家に来ていただくのはどうだろうか。そういったことがたくさん出ておりました。ここにもハード面の充実であるとか、浄水器の導入。水も危ないと言われた時期があるわけですね。それから砂の入れ替え。プール遊びはだめだと言われるわけですね。本当にこんな状態で、外で遊べないということは子どもにとって、ここでは暮らせないよと言っていることそのものなのですね。そういったことを先生たちが問題に挙げているということがございます。

そして、やっぱり大事なのは、保育者に新たな負担がかかっているということですね。皆さんに同じリュックを一緒に背負っていただくことができないだろうかという場が、きょうこのスタートラインではないかと思って、お話をさせていただいています。それから、そのためには新たな研修体制も必要だと思っています。そして新たな保育システムということ。これは前に戻さうということではなくて、本当はもっと今、子どもたちに必要な、これから必要なことをしなくちゃいけないと思っています。現状を踏まえて私が個人的に思っていること、今、皆さまに知っていただきたいことです。

まずは、いわき、福島、東北の子どもは、本当に懸命に今の状態を生きています。亡くなった子どもたちのこともみんな心にありながら、今、生きている命ということを実は懸命に生きているなと思います。このガラス張りの締め切った状態で子どもたちを保育しています。でも、本当にこれは不幸せなことなのでしょうか。こ

の状態でも友だちと語ったり、一緒に食べたり、遊んだり、笑ったり、けんかしたり、その場を与えられるのだとしたら、これをまず保育者は充実させなければいけないと思っています。

子どもたちはマスクをして、今、本当に限られた時間だけお散歩に出ることがうちの園はできていますけれども、できない園もあります。一步も出せないという園もあります。これも実情です。でも、子どもたちはこの中でも、本当にちょっとした時間、お庭に出るだけでも、すごく、すごく、いとおしむように生活をしています。もしかしたら、私たちの見方が変わったのかもしれませんが。ちょっとした時間で子どもたちがその姿を見せることに、私がすごく感じられるようになったのかもしれませんが。それは分からないです。子どもたちの目が変わったのか、私たちの感じ方が変わったのか、それは私にも分かりません。

それからもう一つです。いわきの、福島の、東北のお母さんたちは忍耐強く冷静に、そして沈着に悩んでいます。そして問題に向き合っています。頑張ろうとか、それから復興なんていう問題はまだ出てきません。瓦礫は積んであります。その瓦礫が、これから台風によって本当に放射能を含んだ塵が舞ってくるだろう。そんなことも、いっぱい、いっぱい心配しています。

たくさんのお母さんがお手紙をくださいます。きょう、後で映る時間があればご紹介したいと思いますが、お母さんたちはすごくそういう悩みに向かいながら支え合って生きています。そして本当のことを知りたい。だめならだめ。そうしたら次の手、考えるよねということをしています。ですから、放射能の問題で、この3.8シーベルトというのがふさわしいとは思えないという発言をした東大の先生が辞任されたことに関しても、本当はもっと声高らかに……。本当にいいのか悪いのか。安全だと言っている文科省の指針で本当に私たちがうなずけないことを、きちんと私たちもうなずいてないよというふうにお母さんと一緒に寄り添っています。

これが一緒に向き合っている問題です。現在の不安・悩み・心配というのは、体の心配、精神的な心配、社会的な不安です。やはり子どもたちが、「え、いわきから来たの？」とか「福島から来たの？」って言われるんじゃない？って。それからお庭にも出られないというような状態で、本当に子どもたちは心が豊かに育っていくのか。今育っているのかという今の育ちの問題です。

そして、将来的にもこれはずっとつきまとう問題です。いや、私も独身なんですけど、「いわきから来たら、お嫁にももらえないよ。だって、放射能は浴びてるし、それからずっと部屋でしか生活してないでしょう。体、悪いんじゃない？」なんて言われると、私は今だって嫁に行けてないのに、もっとハンディーを抱えるとなると非常に問題になるのではないかと思います。でも、これは子どもたちが思っていることではない。親が思うこと。誰しもが思うことではないかと思います。

そして、これらの不安は一体何かと整理していけば、人間的な育ちの不安なんです。子どもたちが人間的に育っていくのかということが、私たち東北の保育の重大課題です。心と体というのは心身と書いて、別々にあるものでも、二つ並んであるものでも決してないと思います。そんなことはみんな知っているはずなんです。それなのに部屋で体力増進だけすればいいような保育って、ずっとは、続けられない。

そういうふうに思っています。

東京電力福島第一原発事故、くどいほど言いますが。心と体の問題でもう一つ、子どもたちはそんなにバカではありません。社会の中で生きています。生活と常に一緒です。だから、普通に戻しましょう、早く普通に戻しましょうとおっしゃいますが、と思うことがたくさんあります。今ここで子どもたちにいつも、何が育っているのかな、何が育ちつつあるのかなと思って、私たちは保育をしています。悲しみに堪える心が養われているのかな。喜びを敏感に感じ取る心が育っているのかな。先ほど、子どもがちょっとの外の時間で敏感になっているように思える私たちがいたり、それから喜びに向かって伸びようとしていると思える私たちがいたりすることも事実です。

室内で体力を増進させることで子どもは育つのか。子どもは社会に生きているのに、本当に発散させるだけで、発散遊びをさせるだけで育つのか。原子力のことも大人の影響を非常に受けています。ほうとく幼稚園は、実はわんぱくお山の幼稚園といって、外中心の保育です。いつでも虫でも何でも捕まえている子どもたちでした。ところが、お散歩に行っても、私たちが採取しないでねということを行わなくても、摘んだり、捕まえたりということが本当に減りました。なぜですか。お母さんたちに言われているのです。社会で見ているのです。聞いているのです。感じているのです。だから、摘むことも減っています。積極的に自然にかかるとか能動的にかかわるといふ、子どもの主体性ってどうしてあげたらいいのでしょうか。でも、捕ったらよくないですよ。本当かなと思いつつながら……。

そして、そうは言っても、やっぱりこうやって頭を寄り添って子どもたちは、「小さい虫1個にしておくべー」って言います。うちの子どもたち、なまっているのです。カエルとかも、「1個にしておくべー。俺も捕ったけど、おめえのにしておくべー」って言って、ちっちゃいカエルを一個にして。本当は10匹も20匹も捕っていた子どもたちが、1匹にしたら、少し被ばく量が少ないとか感じているのか何だかは知らないですよ。でも、「1匹にしておくべ」って言いながら、こうやって学んだり、語り合ったり、刺激し合ったり、共感し合っている時間。そして、そのことを保障するために、「ねえ、君たち、帰ってきたら、手洗い、うがい、お顔も洗ってね」って。「髪の毛、洗ってね」とは言えませんが、お母さんに、「お家に帰ってから、お外へ行ったときには洗ってください」と申し上げますが、そんなことをしてきます。懸命に子どもたちはこういうことをして暮らしています。

それで願っていることです。命の問題だと思うんです。日本の国がこの国の子どもを人間としてどう育てたいのかということ、国ということではなくて、国という組織をつくっている一人一人の大人が誠実に本気で考えてほしいと思います。それは、きっと保育なのだと思います。今、震災があってこういうことがあると、心のケア、心のケア、心のケア、心のケアと聞きます。でも、保育はケアだけなのでしょう。教育も養護も暮らしも、生活の全てがあるのが保育だと思います。ケアも必要です。でも、やっぱり今、東北の子には保育が必要なのです。なぜかという、子どもに責任を持ってほしいのです。自分の命に責任を持つことで、やっぱり子どもは自分の自由というものの翼を広げることができるのだと、私たちは子ども

たちから教えてもらっている気がします。

そして最後の三つ目です。東北の子どもたちに求められる保育で、私たちが考えている三つです。人間として生きるための「知」だと思ふんです。暮らしや遊びの中の「知」を深く考えること。それから子どもとつくる保育。誰でもないのです。子どもの、子どものための子どもによる保育なんです。ガラス管の中にいる子どもたちに何かを与えてあげようだけでは、子どもたちは育っていかないと思います。

それから十分に愛されて守られているという感情に満ちた心地よい感覚。これは言葉や物ではないのです。子どもたちは本当に感覚で持つていくのだと思います。大人にちゃんと愛されているという実感です。

ここにいるのは、保育者ではなくて、お母さんです。被災されて津波でお家がなくなってしまうました。そして原発でそこにも戻れません。そのお母さんがここに来て、私がいわきの端っこで受け入れたお母さんです。そのお母さんが一生懸命、自分の子どもではない子どもたちと話してくれたりします。こういう姿がとて多くなりました。お母さんが自分の子どもではなくて、周りの子どもに声をかけ、手を触れ、頭をなで、「あなた、すごいね」って。「あら、何とかちゃん、こんなにボンをつけてきたの？」って、そんなちっちゃいことにも声をかけてくれるようになりました。それはお母さんたちが震災で経験したことです。

私たちの園でバスが出ていて、最後のバス停でお子さんを降ろそうとしたときに、ぐらぐらと来ました。そのときに、そのお母さんはマンションの中に2歳の弟を置いてありました。なので、お母さんは2歳の弟のところに行きました。バナナをくわえて、2歳は立っていたそうです。キャーとも言えないんですよ。そしてバスのところでは兄ちゃんを先生が預かりました。

それからお母さんたちが、「幼稚園にいるのは安心。夜地震が来るのが怖いのだって、1人で守らなきゃいけないということが怖いんです」って言います。だから、お母さんたちはみんな子どもを守りたいと、ネットワークで、一人一人が自分から人に心の橋をかけていって機能させていくということを今求めています。

そして最後です。クリエイティブでユーモアのある暮らしを、私たちはつくり上げることを努力しなければならないと思っています。それは1人ではできなくて、みんなでやること。それは何が必要かという誠実で勇気ある実行力と、その仲間を大人が持つことだと思ふます。悩むこと、判断すること、意思決定すること、対処すること。1人ではできないのです。私が関西の先生たちに、「何していいか分からない。何したらいい？」って言ったときに、一緒に悩むこと、その材料をくれること。それは判断する、意思決定する、対処する私たちにとても大事なことでした。

ここにあるものは、実は全部支援物資でした。1個上のところに大きなバームクーヘンがありますが、兵庫県の私立幼稚園の先生方があんなものを持ってきてくれました。そして、「トイレットペーパーをもらったよ、みんな」って言ったら、「いいにおいのするトイレットペーパーだね、先生」って。バームクーヘンをみんなで分け合って食べました。そのことを子どもがお母さんに持ち帰ったときに、またお母さんからお手紙が来ます。「こうやって、いろんな先生が子どもたちのことを考

えて、楽しいこと、心を揺さぶることをしてくれているということがうれしいです。だから、先生たちが笑顔でやられるんですね」っておっしゃいます。そして常に、本当にもう先生たちは明るい色を着て、笑って、笑って、笑って、「いいんだよ。先生が守るわよ。大丈夫。先生、守ってあげるわよ」って言い続けています。

それから、ここの絵本のところ。段ボール絵本箱ですが、これは全国私立幼稚園連合会(※全日本私立幼稚園連合会)と書いてある段ボールです。それで本棚を作って、その中に入っているのは皆さんからいただいた絵本です。そういうようなくだらない本を持ってきて、関西弁で絵本を読んでもくれる先生がいたりして、そういうことで子どもたちは面白いなって、そして育っております。

「僕たち、結構タフガイやで」って書いていますが、これは4歳児です。ロボットになって拳銃を持っているんですが、「先生、守ってあげるからね。だって、いつも守ってくれてるから、大きくなったら守ってあげるからね」って言うんですね。「ああ、リクちゃん、ありがとう。リクちゃん、タフガイやね」って言ったら、「リクはタフガイやでー」って関西弁で話してくれたんです。私たちは東北弁なんですよ、本当は。でも、関西弁の本をやたらと送ってくれる先生がいらっしゃって、おかげで関西弁上手になっています。でも、おそらく子どもたちは心の架け橋を関西に向けたと思います。

そういうことが今の福島の子どもの現状です。このタフガイの子どもに、私たちはおそらくあと10年後、20年後、もしかしたらもっとひどい震災のときに助けられるのではないかなと願って保育をしています。

司会： ありがとうございます。今は戦争だという認識がだんだん私は出てきたような気がしますけれども、全国の先生方の一人一人が子どものために何をしなければいけないかということ、もうちょっと自覚しなければいけないというようなことが、本当にひしひしと伝わってきたかと思っております。今のほうとく幼稚園の園長先生のお話と似たようなお話が、また展示のところでもいろいろな園から寄せられております。どうぞ皆さん、共通の認識を持ちながら、この子どもたちのために我々保育学会として、あるいは学会員として何をどう行動を起こさなければいけないのかということ、またここで皆さんとご一緒に決意を新たにすることができればいいなと思っております。

それでは、共通の問題がたぶん阪神の経験の中にあっただろうと思います。また、現場の先生方が、いかに苦勞しながら保育実践をなさったかというお話を伺いながら、現場は非常によく頑張っていますが、それを社会がどれだけサポートしてきたのだろうか、正しく評価してきたのだろうかという辺りを、私たちはもう一度今後に向けてご一緒に考えていただければいいかと思っております。では、米田先生、お願いいたします。

○阪神・淡路大震災の経験談と提言 米田 芳恵 北須磨保育園

米田： 失礼いたします。神戸から参りました米田と申します。私は16年も前になるのだなと思っておりますが、阪神・淡路大震災のときに神戸市立の保育所に勤務してござい

た。そのときの経験を皆さんにお話ししたいと思っています。今、東北のお二人の先生から本当に今まさに大変な状況をお聴きして、なんか言葉がなくなるような思いで居ます。座ってお話をさせていただきます。

私は先ほど申しましたように大震災のとき長田区の保育所におりました。長田区という所は地図を見ていただきましたら本当に海沿いです。家の地域は小さな郡です。震災のときに揺れと、その後すぐに火災が発生したものですから、津波とはちがいで、生きて命はあったけれど、家も何もなくなって何も取り出すことができませんでした。そんな家族がたくさんいました。震災の後に保護者と一緒に、記憶を何かの形で残しておきたいと思って作った冊子の中にある、保護者が書いてくれた手記です。

*パワーポイントでの映像

明け方ゴーツという音と共に自身が来ました。主人と二人子どもの上にかぶさりました。

あちこちで物が倒れ、壊れる音がしました。一分足らずの時間がすごく長く感じられました。地震がおさまった後も停電で何も見えませんでした。おばあちゃんは箆の下敷きになり、おじいちゃんはおばあちゃんを助けようとして背骨を折って動けなくなっていました。

みんなを助け出し、外に出てみると周りは火の海になっていました。一生で一番怖いおもいをしたと思います。

私は垂水に住んでおまして、その日、交通機関が全て遮断されているということを知りましたので、原付バイクで長田の職場まで向かいました。道路が寸断されていて、もう瓦礫が道路にかぶさっていて通れない道もたくさんありましたけれども、どうにか長田に着いたら、私の職場は無事でした。

けれども、保育所の中にも、それから園庭にも、隣に小さな公園がありましたけれども、その公園にも避難の人があふれていました。といいますのは、保育所の周りは8階、9階建ての高い市営住宅がたくさんありました。もう高いところは怖くて居られないということで、朝、本当に寒い暗いときでしたけれども、着の身着のまま子どもたちを連れて、外に出ていたというのが現状だったようです。

近くの小学校・中学校・高等学校や、それから区役所・公民館、行政の機関はほとんど避難所になっていました。保育所も避難所になっていたところがたくさんありました。その当日、私が保育所へ行きましたときに会った子どもが、「朝から何も食べてなくて、おなかが空いた」って話に来ました。私は保育所にストックしてあったおやつを子どもたちに配りました。でも、実際その長田の辺りで避難していた方に救援の物資が渡ったのは、翌日のお昼を過ぎたころだったと聞きました。

あまりの町の変わり様に私ももう体が震えて止まらなかったのですけれども、その中で本当に何をしたらいいのだろうか、何ができるのだろうか、一生懸命回らない頭で考えていたような気がします。でも、とにかく子ども。子どもがどうしている

か、どこにいるか、どんな状態にいるのだろうかということをつかまないと。ということで保育園の中に大きなガラス戸がありましたので、そこに紙を貼って、安否の確認ができた子どもの名前をここに書き入れていこうと。そして、どこにいるかということも同時に書き入れていこうと思って、その日、会った子は本当に数人だったんですけれども、書き入れて帰りました。「電気もついてないのに、先生、早く帰らないと、家、帰られへんようになるよ」って、避難していた人たちが言うてくれます。「もう日が落ちるから早う帰り、先生。こんなところにおったらあかんでー」と言っ。その声にもう押されるようにして、私はその日、とりあえず家に帰って、頭をまとめて翌朝、行きました。

神戸市からは、安全な保育が再開できるまで休園するというような指示が出ていたようなんですけれども、その指示も私のところには届きませんでした。もう職員は翌日から、交通が遮断された中をとりあえず家にある自転車で1時間以上かけて、その瓦礫の道を漕ぎながら職場に出てきました。徒歩で来た者もあります。とりあえず自力で出勤できた職員と一緒に手分けをして、子どもの安否確認をして回りました。私のところは規模も小さかったですし、近隣から来る子どもが多かったのです。毎年、家庭訪問をしていましたから、子どもがどこにいるかということはおおよそ見当がついて、あの辺りならこの避難所にいるだろうという当たりを付けながら回っていきました。そのときは52名がおりましたが、それでも52名の子どもの安否を確認できたのは6日目でした。よそから、「へー、6日目で安否が確認できたの？早かったね」って言われましたけれども、家庭訪問をしていたからということがあったと思います。

3日目でした。園児が1人亡くなったということが分かりました。六畳一間に家族が5人、並んで休んでいたんですね。タンスの上に置いていたテレビがその子のおなかの上に落ちて、もう即死、圧死だったということで本当につらい知らせを聞きました。神戸市内では在園児童の内、17名の子どもたちが亡くなっています。

私たちが何をしたかということ、きょうお話をするんですけれども、保育現場の職員として何をしたかは、保育ができない間と、それから再開できた後のことと分けてお話をしようと思っています。今、挙げておりますのは、再開までの職員の活動です。

*パワーポイントでの映像

<保育再開まで>

- ・子どもの安否確認
- ・避難先の見回り
 - 5 小学校 1 高等学校 1 公民館 他 講演のテント
- ・救援物資集配所での整理と物資配給
- ・災害復旧事務の応援
- ・入浴サービス

子どもたちの安否確認と併せて、あそこにいるということが分かった後は、避難所をずっと職員が回りました。子どもたちの状況や保護者の方の話を聴きながら、「ふん、ふん」と聴くだけで、保護者の方は泣きながらも頑張ろうという声が聞こえたり、講堂、体育館の奥にいる子どもが、「あ、先生が来た」って言って飛び出してきたり抱きついたり。「行くだけやけど、子どもたちも保護者も少しは励みになって役に立っているんだな」ということで、毎日回りました。本当に住宅が密集した地域でしたので、避難先はいろいろなところに分かれていました。

その後保育所には、避難の方もいらっしゃいましたので、一緒に掃除をしたり、片づけをしたりしました。それから救援物資です。近くに公民館と文化会館がありました。救援物資の集配所が一緒になっておりましたので、避難所の子どもたちに、寒いからというので何かコートになったり、毛布があったりすればいいな、それを届けてあげたいと思って、その救援物資の集配所に行きました。物資が来るようになったら、朝となく昼となく物資が回ってきます。トラックいっぱい。その職員も、とりあえずそれを館内に納めるだけでもう手一杯で、どこに何があるかということを知りやすく分類して置くというようなことができなくなっていました。それを見て、うちの職員が行って、「救援物資をちょっと片づけます」って言って、館の男性の職員さんと一緒に、少し通り道を空けて片づけていたりしていました。そうしているうちにお弁当の時間になって、お弁当にも長い行列ができて大変だったので、それもお手伝いするようになってということで、救援物資のお手伝いをしました。これはもう4月に保育が再開されてもなお、まだ避難所が続いている間、職員は、「あ、お弁当の時間」と言って走って、そのお手伝いに出かけたりしました。

区役所の災害復旧事務の応援です。区役所も避難所になりながら災害復旧の事務をたくさんしていました。本当にもう必死の状態でした。当座必要な生活資金の貸付とか。罹災証明をもらって、それについて全壊の家、半壊の家ということで少し補助の額が違ったりするので、家の状態を見てもらって罹災証明を交付してもらわないとあかんとか。そのことでもう本当に毎日長い行列ができていて、それを整理するだけでも大変だったので、それは区からの要請があって、それぞれのところから職員を派遣しました。行列を整理したり、「何がいるの？」という高齢の方に声をかけたり、「ここにはこういうふうに書いたらいいですよ」とか聞き取りしながら、「じゃあ、ここを書いておきますね」みたいなことを保育士がすると、うまく事務が流れるというようなことだとか。

最後は、避難所の個別面談調査とか避難所の個別相談です。これは仮設住宅に入居が始まったときに、どこに行きたいというようなことを避難所にいらっしゃる方に一人一人希望をお聞きしたり、家族のことを聞いたり。それを区役所の中でまとめながら、どこにどれだけの入居希望があるかといった調査も保育所の職員がしました。これは区役所の職員も一緒でしたけれども、そういうことをしました。

保育士は話を丁寧に聞いたり、相手の気持ちに寄り添うことができたりして、事務的ではないということだったのでしょうか。「保育所の先生、何人か来てもらえませんか」ということで、夏辺りぐらいまで行きました。

それから入浴サービスですけれども、これはもう本当に勝手に私たちが始めたこ

とです。ライフラインがなかったので、お風呂には誰も入れません。寒さをしのぐために焚き火をどこでもやっていました。その煙とススで、子どもも大人もですが、真っ黒の顔をしていました。お風呂に入れられたらいいのになと思って、それを話していたときに、保育所には家庭の浴槽よりも少し大きい浴槽があって、「あそこにお湯を入れたら、お風呂できるよね」という話になりました。本当に無謀にも、無謀にもです。園庭にかまどを造って、そこにドラム缶を乗せて、水を毎日毎日いっぱい運んで、お湯を沸かして、バケツリレーをして、お風呂をしました。かまどは、たまたま歩いていた自衛隊の方をお願いして、「ここでお風呂したいの。」って言ったら、「先生たちが造っているようなのでは無理」と言われて、「じゃあ、僕たちが造ってあげます」って、かまどを造ってくれました。そんな話をしていたらボランティアの方が、「先生、ドラム缶1個じゃ足りないね」といって、三つもくださったりしました。火を焚くのは、近所にたくさん倒壊した住宅がありましたので、そこからごめんなさいと言いながら薪にさせてもらって、火を焚いて、お湯を沸かしました。

そんなことでお風呂屋さんが再開するまでですから、ガスと水道が出るまで、3月の中ぐらいまで週に2回ぐらい続けました。本当にもう職員は大変だったと思います。それでも、おじいちゃん、おばあちゃんが入れば、「ありがとう」って手を合わせてくださったり、子どもが、「ぽかぽかになった」って言いながら、喜んでくれる顔を見るのが私たちの喜びでした。

保護者の方も、自衛隊のお風呂があって入ることができますけれども、寒いときに行列をつくって、時間制で何分から何分までの切符をもらって待たないといけなかったのです。ですから、お年寄りとか小さい子ども連れのところは入れません。ゆっくり自分が入ることができません。だから、「子どもたちを保育所でお風呂に入れられたら、本当に助かる」と言ってくださって、お風呂は続けました。そういうふうな仕事というのか、活動をしていました。

保育再開ですけれども、横の連絡も縦の連絡も本当にない状態で、私たちは、もう自分たちはこれが必要とか、これができると思ったことを、本当にがむしゃらに仕事をしていました。1週間経った1月23日ぐらいでしたかね。私たちがいる長田区の中には公立の保育所が17カ所あって、そのの所長が集まりました。お互いの保育所の状況とか、どんなことしているかということ話を合ったり、それから神戸市の状況というのも、市のほうから来ていただいたので、聞いたりしました。そのときに、避難をして県外に出られた方がたくさんいらっしゃることや、西区、北区、それから垂水の一部なんかは本当に被害が少なかったので、もう震災があった翌々日ぐらいからは保育を再開していたところもあるという状況を聞きました。これは緊急仮入所ということで、本当に全国の北海道から沖縄まで、たくさんのところで神戸の町の子どもたちはお世話になっていたということも知りました。

こういうことを知って、また避難所の保護者の方と話をすると1週間たったころぐらいから、「地震後すぐはもう呆然として何をする気力も湧かなかったし、子どもも本当に自分の傍に置いておかないと不安で仕方がなかった。離せなかった。だけど、しばらくすると自分の生活、これからのことを考えていかないといけなし、

職場との連絡もしないといけないし、役所へ手続きに行かないといけないこともある。それは子どもを連れて行きにくい。やりたいことがある。保育所で預かってくれるとちょっと助かるかな」というのと、余震が本当にそのころから少しずつ減ってきていまして、そういうこともあったと思うですけれども、保育再開を望む声が少しずつ増えてきました。それで私たちも保育を再開したいということで準備をしました。

2月に入ってから保育所の避難者はそのころだんだん少なくなって、6世帯の方が8名から10名ぐらい、いらっしゃいましたけれども、保育所で子どもたちを受け入れたいと。2階の三つの保育室でそれぞれ生活されていましたが、「夜はどこでも今までどおり使ってもらっていいんだけど、子どもたちが来る時間になったら、ここのお部屋にお荷物を寄せて、そこにみんなで一緒にいてもらえると助かるな」という話を一家族ずつお願いして、お話をし回りました。そうしたら避難されている、だいぶ高齢な方でしたけれども、こんなふうに言っていただきました。「今までようしてもらった。わしらに遠慮することはいらんで。子どもを預かって遊ばせるのが先生たちの本当の仕事や。親の助けになったらそれが復興に一步全身ちゅうこっちゃ。がんばってな。」その言葉に力を得て、私たちは保育を再開することにしました。

2月6日、やっと保育が再開できました。保育所に子どもたちが戻ってきたということで一番うれしくて喜んだのは保育士だったと思います。小さい子どもは、長いこと保育所が閉まっていたから、はじめは泣いて嫌がったりする子もいましたけれども、先生が抱き留めて、「ほーら、ほーら」と言って一緒に遊んでもらうことで少しずつ笑顔が戻ったり、落ち着いてきたりしました。大きな子どもたちは、お互いに名前を呼び合いながら抱き合ったり、それから、「あの子はどうしてる?」、「誰々君はどこにいるの? きょうは来てないね」ということで、顔を見せないお友だちを心配したりもしていました。保護者の方も初めは心配で昼間にちょろっと顔を見せて、「大丈夫かな」みたいにおっしゃっていましたが、だんだん日がたつにつれて、「お迎えの時間に保育所に来ると昔の生活が戻ったみたいで、ほっとしてうれしい」と、そんな話をたくさん聴きました。

緊急仮入所は神戸市の中でも行いました。避難所になっている保育所がまだたくさんありました。それから私の職場の近くにも、民間の保育園さんで三カ所が倒壊して、保育ができない保育園があったので、緊急仮入所ということでその子どもさんを受け入れました。震災で保育に欠けるということが分かれば、その場で所長の責任で仮決定をしていいということでしたので、手続きは本当に簡単に、お預かりをしました。「ここのお部屋で、あと何人受けられる?」みたいなことを毎日聞きながら、「2人いけます、あと0人いけます」といったことで、いっぱい、いっぱい受けました。52人、(1人亡くなって51人)を受けていた小さな保育所で、1歳から5歳までで、0歳はいなかったんですけれども、ピーク的时候は0歳児も含め95名ぐらい。倍ぐらいの子どもがいっぱいいました。

倒壊した民間の園の先生にも「先生のところのお子さん、うちに来てるよ」と話をして、一緒に保育ができるようになりました。それまで公立と民間には少し距離

があって、公民で出会って何かをするということはそんなにたくさんありませんでしたけれども、公民で保育をすることができて、本当にそのときから仲よくなって、それはもう、うれしい出来事の一つです。

緊急仮入所は一応3月末までということで、3月末に、このままここで保育を受けますかということを知ったり、それから民間でも仮設の園舎を建てられて、保育を始められたところもたくさんありました。避難所でお部屋が空けられない保育所は、園庭に保育室を建てたり、少し離れた公園に仮設の園舎を建てたりして、そこでできるだけ保育を始めていこうということで、神戸市も全体で随時進めていきました。避難所になっていた保育所がこのくらいありました。避難しておられた方が仮設住宅に入られたりして解消できたのは、最後の8月ぐらいだったと思います。

保育を再開した後の子どもたちの様子ですけれども、子どもたちは本当に経験したことをそのまま遊びにしていました。ですから自衛隊のお風呂ごっこ。「はい、並んで、並んで。切符配るからね」みたいなことを遊びにしたり、「お弁当を、一つよ、一つ」と言って配ったりということも遊びにしていました。地震ごっこを書いていますけれども、積み木やブロックを高く積んでは、「震度7！」とか言いながら、ガーッと崩すような地震ごっこの遊びは本当にどこの保育所でも見られたみたいです。でも、子どもたちが経験してきたことだということで、つらかったですけれども、それは子どもたちの様子を見守りました。うちの園ではなかったですが、お葬式ごっことか、砂場に山を作って、小枝を挿して挿んだりするようなことも子どもたちがしていて、つらいということをお話していたところもありました。

そうですね、甘えの退行があったり、排泄の退行があったり、吃音が出てきたり。子どもたちの言葉の中に、震災のいろいろな言葉が出てきたということがありました。私たちは緊急仮入所でたくさんの子どもを受けていた中で、なかなか一人一人にしっかり向き合えなかったと思うのですけれども、それでも朝、子どもたちが来るときは職員がそれぞれみんな、一人一人子どもを抱き取って、「おはよう」、「また来てよかったね」といって受け入れをしました。それから、お話をするときもみんなということではなく、「誰々ちゃん」と声をかけながら一人一人に話しかける。そういうことは職員みんなが気をつけてやっておりました。

泣いていないから大丈夫とか、笑い、笑顔を見せているから平気じゃないんだねって。いろいろな口に出せない、つらい経験や重い経験をしてきた子どもが、心の中でどんなふうに思っているかというのは保育者である私たちもなかなか分からない。その心のちょっとしたシグナルをしっかり受け止められるようにということで、それを心の中に置きながら毎日保育をしてきました。

4月を越えて新しい年度になって、今までの生活が少しずつ本当に戻ってできるようになったころから、子どもたちも少しずつ落ち着いてきて、地震も影を潜めるようになったのではないかなというふうに思っています。それでも市からは、子どもの心のケアということで研修やケース検討が実施されており、引き続き子どもたちの様子には気を留めて見ていきました。

最後に課題です。私たちは、震災時はもう本当に誰もが何かに突き動かされるようにというのか、そんな思いで動いていたような気がします。その中でうちの職員

が1人、「先生、休みが欲しいです。1日だけ、お休みが欲しい」と言ってきました。その人のご主人は神戸市の職員で、神戸市の男性職員はもうほとんど泊まり込みで仕事をしていました。「子どもが2人、家にいるのです。帰ってから、あり合わせのもので、ずっとご飯を作ってきました。毎日お弁当を置いてこないといけなけれど、もう食料がなくなりそう。だから、家に帰って買い物をして、何日分かの食料を作って仕込んでおきたいから、お休みが欲しい」と。私はもう女性ばかりの職員だったし、毎日を本当によく動いていた職員の生活に思いが至らなかったということで、本当に私自身も愕然として、「ごめんね。そこまで気が回らなかったわ」という話をしました。

東北の先生方は、今まさにもう、へとへとになりながらお仕事をされているだろうと思います。そういう職員、保育士への支援。子どもたちに対して笑顔で向き合ったり、受け止めたりということをするためにも、職員一人一人が、保育士一人一人が心も体も元気でなければと思います。そういう支援の態勢をどんなふうにつくっていくかということも大きな課題だなと思っています。

それから保育は一日も早く始めたかった。それは子どもたちに一時でも避難所ではないところで思う存分、友だちと遊べる時間をつくってあげたかったということで、保育再開はできるだけ早くしました。保護者の方もそれで復興したり、自分たちの生活を立てていくのに元気も出たし、動きも、進み出せたと思うんですね。そのことは、私たちは間違っていなかったと思います。保育中にも小さな余震がありました。「もう震度4では、お尻が、こそばゆいぐらいだ」って、きのうお話ししていて聴いて、そうだったと思いました。でもやっぱり大きな余震が来ると、子どもたちを全員守ってやれるのかなって。守るつもりではいますが、安全に避難させて、保護者の下に帰せるだろうかということはずっと心配、不安でした。

ライフラインは、保育を再開した直後に電気がつきました。寒さはそれで何とかりましたが、水道もガスもまだ止まったままでした。子どもたちと生活するのにガスよりも水。手を洗ったり、トイレに行ったり、毎日毎日の生活で水がたくさん必要でした。私たちは子どもを受け入れ始めたときに、2日で給食を始めました。救援物資の大きな冷たいお弁当をみんなが持ってきたので、何とかしたいということで、カセットコンロを5台も6台もずらっと並べて、ボランティアセンターから食材を分けてもらうこととお話ししました。初日のメニューを覚えていた職員が、野菜のかき揚げと煮込み、温かいご飯とみそ汁だったと。それは本当に今と少しも遜色がないメニューだったなと話していました。カセットコンロ5、6台で、こんなメニューを作っていた調理師さんもすごいなと思います。それは私たちの自慢です。そういうことでも水がたくさん要りました。

せつかく助かった子どもたちを健康に過ごさせたいと思うけれども、こういう状態で子どもたちの保健・衛生・安全を守っていけるのか、ここで病気をさせてしまったら本当に申しわけないという思いがあって、保育は再開したくて再開しました。けれども、どういう時期に再開するのがよかったのか、必要最低の条件みたいなものは何だろう、それを整えて、子どもたちをしっかりと受け入れたほうがよかったのか。それが阪神・淡路大震災を経験して、落ち着いたところで私たちはどうだった

のだろうと考えた上での課題となることです。

災害の大きさとか被害の様子はもういつの場合も同じではないですけども、少し災害の状態をいろいろなところで知っておくことで、突然のときの対応にも心強いものがあるのではないかと思います。いわきの先生が兵庫県の先生に、「何したらいい？」と尋ねて、「まずこれをしなさい」と言ってもらえたように、まずこれをするんだということが心にあると、第一歩が踏み出せるのかなというふうに思っています。私からは以上です。(拍手)

司会： ありがとうございます。かなり共通の重要な問題が提起されていたかと思えます。いかにして、子どもと向き合う保育者を誰が支えるのかという問題。先ほど生駒先生から出された、健全で健康な環境でない劣悪な環境で、それでも保育をしなければならぬ、でも最低守られるべき条件は何なのだろうか。というような問題も、ここであらためて問い直されてきているように思います。

それでは最後の話題提供の先生でございます。少し角度を変えた形で、長期的に子どもの育ちをごらんになっている先生から、今後に向けてのご提言をお願いしたいと思います。

○長期にわたる子どもの心のケアについて 井出 浩 関西学院大学

井出： 関西学院大学の井出と申します。今日はこういう機会を与您いただきありがとうございます。もうお話を伺ってきて、そこに何を付け加えるという、付け加えるなんていうのはおこがましい話で、皆さん、重要な経験をしてこられたとに思いました。3月11日の地震の後、報道で関西に画面映像が流れましたが、私たちの周りには人間たちはみんな、しばらくの間は仕事にならなかったと言っています。どうしても16年前のことが、何か心の中でうごめいて、落ち着いて仕事ができてなかったと感じていました。

少し視点を変えてというお話ですが、実はお話を聴いていて、もう既に心のケアということに関連しても、ほかの先生方から重要なお指摘があったと思っています。どんなことがあって、子どもたちはどんな様子を示したか。そういったことをさらっと、おさらいをしておきたいなと思います。

この写真は、十何年たった後に震災の話をするときには忘れていたろうということで、こんな写真を入れましたけれども、今はこの写真が、むしろ余計いやなことを思い出させてしまうかなという気もしています。火災の写真は、長田区の様子を撮った写真だったと思います。

事例ですね。もう全部読んでいる時間がないので、重要どころだけをお示します。3歳男の子。これは私の記憶に非常に強く残っている相談ですが、自宅そのものは被害がありませんでした。地域の被害もほとんどない地域の子でもあります。この子はその日は一日学校が休みだったので、お兄ちゃんと一緒に外で遊んでいたけれども、夕方になってテレビの報道を見た後に、口を尖らせて、「火事だ」とか「地震だ」とか言いながら、うろうろし始める。その夜も眠れなくなったし、親の顔の区別もつかないようで、ご飯を与えても噛んで呑むこともできない。何とか気を紛らわそうと、好きなおもちゃを与えたんだけど、それでも遊ばない。

というようなことが始まっていたという子どもさんです。

私のところに相談があったときはもう既に1週間、10日ぐらいたっていました。近くの小児科のドクターに相談していたけれども、ゆっくりしっかりつき合っただけなさいということで、お父さんも仕事を休んで、家にいてくれたと記憶しています。5日目ぐらいから今お話ししたようなことが消えていって、私たちへの相談は過食、食べ過ぎるといふのと、しょっちゅうおしっこに行くということが残っているけれども、どうなのでしょうかとこの相談です。

次の事例は自宅が全壊したお家の子どもさんですけれども、6歳だったので、サイレンの音、当時は、救急車も消防車もサイレンを鳴らして走り回っていましたので、その音を聞くとパニックになってしまって、食事も摂れないし、夜寝ようとしない。「死なない？」ということをお繰り返して、繰り返して尋ねて、死ということをお非常に強く意識していたというお話です。

もう一つ、2歳6カ月。これも女の子のものです。お母さんが少しケガをしたんです。先ほどつらいご報告がありましたけれども、テレビが落ちてきて、お母さんがケガをされた。子どもは何ともなかったんです。1月に震災があつて、4月の末から保育所に通いました。被害の甚大であった地域を通過して通園しているけれども、5月の連休明けから、通い始めて1週間ぐらいでしょうか、暗いところをお怖がるようになった。それ以後6カ月ぐらいたつて、その年の秋になるわけですが、親から離れられないというご相談でした。

そういうさまざまな訴えがあつたわけですがけれども、震災の後、5カ月目に保育所で聞き取り調査をさせていただきました。98人の子どもさんがおられて、その親御さんに直接お話を聞いた結果です。これはお手元に数字が出ていますので、またゆっくり見ていただけたらと思います。ポイントは睡眠の問題です。地震のことをよく思い出して話をする。悪夢を見るというのが睡眠に関わる話ですが、怖い夢を見て、目を覚ましてしまう。地震に出遭つた場所、あるいは思い出させる場所を避けようとする。それから、それまでできていたことができなくなっている。些細なことで、すぐに痛癢を起す。ちょっとした物音にも大げさに驚く。こういったことが聞かれています。

それよりも少し先に、これは数の多い調査でしたがけれども、保育所でアンケート調査をさせてもらいました。これは震災後4カ月以上たつてのことでした。親と一緒にできなかったり、明るくないと寝床に入れないという子が半数近くいました。それからひどく甘えたり、わがままを言うことがあるというのが5分の1以上はいるという結果です。ちょっとした物音や揺れにも極端に反応する。今までできていたことでも、親にしてほしがる。おもらしや、おねしょがある。親にしがみついて離れられなかったり、後追いが激しくなる。1,834人の調査、3歳児から5歳児の調査です。

すごく乱暴なまとめ方になりますけれども、子どもたちが震災直後からしばらくの時間の流れの中で示してきた反応を、これも手元にありますけれども、整理しておきました。緘黙（かんもく）というのはしゃべらなくなるということです。これは私が直感的に付け加えたところですが、多くの子どもたちが、地震の直後はなん

か黙りこくってしまっていたといいます。ほとんど何もしゃべらなかつた。お父さんやお母さんと一緒にいてもしゃべらなかつた。ある子どもさんは、避難に行って、避難所でお友だちに会ったときになって、初めて声が聞けたという、そんなご報告もありました。

それから親から離れられない。家に帰りたがらない。家にとというのは、要するに震災に遭った場所に帰りたがらない。PTSDについて、今日はあまりご説明する時間がないですけれども、その症状に、怖いことに出遭った場面を避けるということがある。それから夜泣き、指しゃぶり、夜尿、頻尿。要するに赤ちゃん返りと呼ばれるようなものであるとか、見られなくなっていた癖がまた出てきたということですね。先ほどもありました睡眠のこと。寝るのを怖がる。寝ると死んでしまうんじゃないか、起きられないんじゃないかというようなことであつたり、過食であつたり。それから、振動に過敏で集中できない。イライラする。乱暴な遊び。

この最後のスライドは、保育所、幼稚園の小さい幼児さんではなくて、むしろ年齢の高い子どもさんたちについての反応です。小学校高学年ぐらいから上の子どもさんたちですけれども、震災のあと半年以上、1月に震災がありましたけれども、秋になってこういうことが出てきたということでご相談を受けました。それから不登校です。

災害後の反応を年齢別に分けてみると、小さい子どもさんというのは分離の不安であつたり、赤ちゃん返りと言われるような退行というのがよくあつた。それから睡眠の問題があつた。それから地震に出遭ったときのことについての恐怖、恐れを表現していたというように思います。

それから年齢が上がってくると、そういう恐怖をあまりはっきり出さずに、あるいは甘えということを示さずに、いら立ちであつたり、集中できないということであつたり、気分が落ち込んでいたり、それから体の症状を通して、さまざまな訴えをするということがあつたと思います。今のものも、たぶんお手元に入っていると思います。

5年後の調査。これは先ほど申し上げた保育所とは離れて、地震の年の4月からということですが、3歳児健診を受診された方たちに子どもさんに何か心配事はありますかという問いかけをして、ご相談に応じていたわけですが。その5年後に3歳児健診の記録を基にアンケートというか、お手紙を送らせていただいて状況を確かめさせてもらいました。1万3,000人近くが平成7年度の3歳児健診を受け、その内、501の方が、平成7年度の3歳児健診でこころの相談をしたいというご希望のあつた方の数になります。アンケートを発送して返ってきたのが118人ということでした。

これはお手元にこの表が入っていると思いますけれども、スライドでは赤字で示したのが多いところです。親から離れたがらなかつたり、ひとりになるのを嫌がる。それから甘えやわがまま、注意を引くような行動が目立つ。そわそわして落ち着きがなかつたり、集中力がない。できることでも手助けをしてもらいたがる。トイレや風呂に行くけれども、戸を開けたままでないと入れない。ちょっとしたことでイライラしたり、腹が立ったりする。これは調査時に最近あつた様子ということですが

から、5年後にもまだこういう様子があったということです。

そのときに自由記述で書いていただいたものがあります。これは全てご紹介できませんけれども、ある子どもさんは地震のことを覚えていなかったのに、学校で勉強して震災のことを聞いてから怖がるようになったということがありました。

それから小学校5年のお姉ちゃんも同じだけれど、ひとりで2階に上がれないままだ。でも、家でも学校でも元気にしているということです。

ある子どもさん。3歳児健診の子どもさんは何も覚えてないけれども、お兄ちゃんをよく覚えていて、「僕のことは全部後回しだった」と文句を言っている。

これはたくさん該当項目が並んでいます、これは被害をほとんど受けなかったけれども、お母さんが、主人の帰宅が遅くなって、子どもと自分だけになってしまうと、とても怖いと書いておられます。お母さんが非常に怖さを引きずっておられます。次のスライドは5年たっても震災時に燃えた家の近くには近寄らないといったことです。

PTSDとは何か。PTSDということは今、心のケアということで言われていますけれども、要は非常に恐ろしい体験をしたときに、そのことを繰り返し思い出してしまっ、そのために社会生活が難しくなる、みんなの中に出ていけなくなる、常に身構えているために疲弊していつてしまうというようなことだと考えていただければいいと思います。その発生要因についてはいろんな過去の調査があつて、どんな災害に遭つたか、それから災害の支援態勢がどうなのか、それからその子どもさん、その人自身が抱えている要因もあると言われてます。支援体制についてまず家族がどんなふうに機能できているか。要するに、子どもを育てる家族として機能できているかどうか。それから大人がどんなふうに反応するか。社会状況というのは大人を含めて、これも最初に野呂先生からお話があつたことに関連しますけれども、子ども、社会そのものがどんな状況にあるのか。それからどんな教育・知識が与えられているか。というふうなことになると言われてます。治療と予防については、時間がありませんので、省きます。

災害は子どもに何を残したか。既にほかの先生方が話されたとおりのことです。安全な場所がない。生きる価値がない。生きていていいのか。それから自分には対処する力がない。少し言葉を替えると安全基盤。子どもたちにとって非常に重要な安全基盤というものはなくなったこと。無力感を感じたこと。それから自尊感情。自分自身が生きていていいという感覚をなくしてしまった。

そういうふうに考えると、回復に必要なことは、もう安全と感ずることであり、自分が受け入れられていると感ずることであり、自分が異常だというふうに思わないことであり、自己評価を、自分はだめだ、何もできない子だというふうに思わないことであるし、同じような意味ですが、自分にできることがあると感ずることになってきます。

これは今まで既にお話しいただいたように、心のケアだから特別に何をするというよりも、ごくごく当たり前の子育て。当たり前の保育。当たり前の子どもへの支援。何も変わりがない。ただ、やはり丁寧にする必要はある。先生方が既におつしやつたようなこと、全くそのとおりだと思います。心のケア、心のケアというか

ら何をするんだと思われるかもしれませんが、結局必要なことは、子どもが安心と思い、安全と思い、いろいろなことを経験し、できることを増やしていく。それしかない。その中で、怖い思い、怖い体験というのを少しずつ整理することができる。

どうしても整理できないことに関しては特別な治療が必要になってきますけれども、多くの子どもたちに関しては、ごく普通に、ただ丁寧にということを考えていただけたらと思います。10分ぐらいでと思ったら、ちょっと時間が過ぎてしまって申しわけないです。

あと一つだけ、どうしてもお伝えしたかったのは、先ほども米田先生のお話にありましたけれども、子どもたちは災害の後に災害を遊びにします。ポストトラウマティックプレイ (post traumatic play) という表現をよくされます。これについて二つあるということをご理解いただきたいです。一つは、先ほど米田先生のお話にあったように、子どもが自ら積極的に遊びとしてやる。これは子どもたちがその災害を乗り越えるために役に立ちます。自分が災害をつくり、それを乗り越えていく。ブロックを壊して、「地震だ」と言い、もう1回作って、さあ直ったぞと言う。これは乗り越えることになります。

ただ、病的な遊びもある。それは、遊びに見えるけれども、実際にそのときの感情に巻き込まれて茫然自失として、遊びとして自分の力でやめることができないときがあります。このことをぜひお伝えしたかったのは、先日テレビで報道を見ていて、そういう遊びがあるんですよというときに、ある保育所で子どもが小さな滑り台の上の台に乗って、「カンカンカン、カンカンカン、消防車、消防車」と言っている場面が映りました。それをポストトラウマティックプレイというという表現がありました。そのときの顔が私は忘れられません。その子は、自分が消防車になったつもりで「カンカンカン」って言って遊んでいるのではなくて、そのときに体験した怖かったことをまさに思い出して、そのときのイメージが頭にいっぱいになりながら、「カンカンカン、カンカンカン」と言っている。それは顔を見たら分かると思います。災害後の遊びであって、子どもたちに必要だとは思わないでほしいのです。そのときには声をかけて、寄り添って大丈夫だというふうに安心させてあげてほしいのです。

子どもは本当に元気に好き勝手に遊んでいる状況ということが分かれば、無理にとめる必要はもろくないです。「わー、すごいね。よかったね。怖いけど、また戻ったね」でいいと思います。ちょっと短いので、誤解があるといけませんが、ポストトラウマティックプレイ、災害後の遊びについては二種類あるということをよくご理解いただけたらと思います。

これももうお話がありましたけれども、保護者の被災体験の援助。先ほど例に挙げたように、子どもを取り巻く大人がしんどい状態が続くと、子どもはしんどさを引きずります。周りの大人がどれだけ元気でいられるか。心の中には、先ほどからお話のあった保育所の皆さんも、保育士の皆さんも、どれだけ元気を保つことができるのかというようなことが重要なことだと思います。結局、長くなってしまって申しわけありませんでした。

司会： ありがとうございます。とても短い時間では語り尽くせない、重たいお話を4人の話題提供の先生からいただきました。今のお話のように、大人が、社会が子どもに対してどう対応するかが基本だと言われつつ、先ほどの生駒先生のお話では、原発の問題を抱えている地域では大人自身が自分の生活をどうするかということで、おそらく精いっぱい状況であろうということも含めて、大変重い課題がたくさんあったように思います。

○フロアからのコメント

司会： これから首藤先生にちょっとコメントをいただきますが、その前に時間のこともありますので、ぜひ、このことについて話題提供の先生にもうちょっとお話をいただきたいということがありましたら、お一人、お二人に出していただきまして、それを含めて首藤先生からコメントをいただきまして、また補足のお話をちょうだいしようかと思えます。よろしくお願ひします。

フロアA(澤井洋子)：

私、東京福祉大学の澤井と申します。実は私、このたびの災害で、5月はじめに新幹線が開通して間もなく、陸前高田の保育所にインタビューに行かせていただきました。それで、そのときに陸前高田の市立、公立の高田保育園の園長先生から、ぜひ会場でメッセージを口頭で皆さまに伝えてほしいという申し出がありましたので、皆さまにお伝えしたいと思ひまして手を挙げた次第です。

この高田保育所というところでは、園児10名を保護者に引き渡した後、死亡させてしまったということで園長先生も大変心を痛めておりました。地震直後に98名の園児を、余震の中、帰宅させたのですが、お迎えに来た保護者の方はおばあちゃん、もうかなり高齢でした。そのおばあちゃんに子どもを引き渡して、おばあちゃんと子どもはもろともに津波に吞まれてしまいました。保護者の方から、「そんな高齢のおばあちゃんに、なんで園児を引き渡したんだ。危険だということで園児に待っていてもらいたかった。待たせてもらいたかった。元気な若い保護者が迎えに来るまで、なんでそれが判断できなかったんだ」というふうに、すごく責められているというお話でした。

もう一件は、おじいちゃんがやはりお迎えに行つて、内孫を連れて帰るときに、自分の娘の子ども、つまり外孫がそこにいたので、一緒に連れて帰りますということで連れて帰つたところ、車の中で津波に遭遇して三人とも死亡してしまいました。外孫の一家からは、頼んでもいないのに保護者以外の人に引き渡したということで、やはり担任と園長が、その家族に毎日のように責められているという厳しい現状をお話になりました。

やはり雪が当日は降っていて、とても寒く、園庭の第一避難所で子どもを待たせて、保護者に引き渡しているという状況の中で、どうすれば私たちはよかつたんだろうかと。なるべく早く保護者に引き渡すというのが今までのマニュアルだったので、そうしたけれども、その判断が問われているということです。

この責めは、私たち全員に責任がないという問題ではなくて、子どもたちのご家族がその苦しみや悲しみから立ち直るまで、癒えるまで、受け止め続けていか

なければならぬと今は考えています。私たち保育者は、平時にはこの保育者という職業を「子どもを育てていく明るい希望に満ちた職業である」というふうに認識していました。でも、今はこの災害を通して保育者という仕事を、「子どもの命を守り育てる、育んでいく職業である」ということを常に、第一に肝に銘じていかなければならないと思っています。それが前提であるということ、会場の皆さんにお伝えしてほしいというふうにおっしゃっていました。

それで、子どもの命を守るためには保育定数の改善ですね。特に乳児を抱えている保育所においては避難するときに、子どもの命を守るために、ぜひ定数の改善をお願いしたいということです。この会場の皆さんの力を借りて、ぜひそういう問題にも取り組んでほしいということです。

それからあと、津波に対する保育所・幼稚園向けのマニュアルというものがなかったので、ぜひそういうことも皆さんで議題に乗せてほしいというふうにおっしゃってありました。

それからもう一つは、今までは「心豊かな子どもを育てる」というようなことで、心をテーマにした保育を自分たちは実践してきたけれども、この震災によって「強い心を育てる」ということがとても大切だと感じています。そして、この災害を乗り越えてほしいと思っています。そのために、やはり保育の中に皆さんでカリキュラム作りを考えてほしいということです。

このように現場の園長先生からの要望がありましたので、私はそのメッセージをこの会場の皆さんにお伝えしたいと思ひまして、この場を借りてご報告させていただきます。ありがとうございました。

司会： ありがとうございます。

フロアB(新井孝昭)：

筑波技術大学の新井といいます。私は実は日本物理学会というところにおりまして、今は保育学会ですが。そしてスリーマイル島の原発事故が起こったときに、物理学会で原発の問題を討議する社会的責任というものを立ち上げました。そのときに原子力発電の放射能というのは常に問題があるということをやってきました。

今回の災害のことで阪神の地震から学ぶというのではなくて、今一番、緊急事態は福島で起こっていることを日本全国の問題としてもう緊急に学ばなければいけない。学ぶという意味は福島の方には申しわけないけれども、起こってしまって、実は子どもたちはもう被ばくをしてしまっているんです。体内にも被ばくをしています。だけど、今これから何ができるかという問題をきちっと見なければいけない。これはすごく緊急の問題で、福島で原子力発電所の事故が起こったときに何も知らされなかったから、子どもたちはたぶん一番被ばくをしたと思います。大人以上に。地面のところから来るものも含めてですが、体内に受けたはずです。このことは、もう化学的に20年、30年後に統計として現れてしまう。これはもう致し方がない。しかし、これからどうやって生きていくかという問題をやらなければならない。

そして、いわき、福島県は、各学校とか保育園・幼稚園に放射性的カウンターを

配るということが新聞に載っていましたが、今そちらには配られていますか。

生駒： はい。公立には配られました。でも、私立には全部ではありません。公立には配られております。

フロアB(新井孝昭)：

分かりました。それで、保育学会で今回このシンポジウムを開いて、今いわきの方から話がありました。今、つくばの日常の放射線量は、いわきと結構近いのです。つくばは離れています。しかし、実はどこに落ちてくるかと言えば、風の向きで落ちる位置も変わり、スポットで落ちてきます。だから、被ばくということ言うならば、もう福島、周りの各県、東京も含めて神奈川もですが、そういうところも含めてスポット的には被ばく量が多いという状況があるわけです。保育学会がまさに社会的責任を果たす意味で、私は各保育所に放射線のカウンター測定器を置くことを提言してほしいのです。

それはどういうことかということ、先生方が、土をいじる子どもたちの放射線量がどうであるかということキャッチする必要があります。同じ市の中で大丈夫ですと言われても、実はそういう問題ではありません。被ばくは本当に個々の問題として請け負わざるを得ないのです。ですから、もし、この保育学会が将来にわたって、これからの日常活動として子どもを守るということをしていくために、今回の事例は、まさにその一点を特別な事例としてでも提言するぐらいの意気込みがないと、まずいだらうと思います。これは目に見えないのです。

そして、もう一つです。これから今ここに見えている保育園・幼稚園の先生方は、自分のところに置いてほしいのです。何が言いたいのか。地震は必ず起きる、起きて絶対に事故が起こると、前から言っていました。これは物理学会で常に言われています。しかも、そういう中で起こってしまいました。一番の置き去りは子どもたちです。福島県は皆さんもご存じだと思いますが、普通だったら放射線のカウンターを持って仕事をしなければいけないようなところをOKだよという形で、みんなが生活をしているという状況があるわけです。しかも、子どもは1メートル背が低い。地面から来るものをもろに一番吸う子どもたちです。しかも、毎日、体は傷つけられていますけれども、修復能力を持っているから何とか治る、問題ないと言っています。しかし、確率的にはもう必ず出ます。このことは化学的事実です。

それを踏まえて保育学会が、福島のローカルの問題としてとらえてはだめです。「福島で大変だ」ではないのです。ほかのところで、まさに今、地震が起こっていますねと言っていますが、もう全部、皆さんの保育園の問題と直結しています。各所には火災報知器がありますよね。火事が起こったら対応ができます。小学校にもありますよね。今、電気を使って生活して、原発にこんなに依存している私たちは本来、放射線の計測器をいろいろなところに置いて、事が起こったときには自分の目で自分の周りにどれだけのものが飛んできたかを見て、逃げることを判断する。国がやってくれるわけがありません。その事例が今回です。

ですから、ぜひ保育学会で。今回すごくもう緊急テーマなので、このことはぜひ

福島県だけではなく茨城も含めて保育所・幼稚園に。しかも、これから起こるであろう原子力発電所事故の周辺も含めて日本全部、そうです。たまたま今回福島で、実はある人がよかったと。なぜか。風がどんどん海のほうに流れています。もし、これが日本海側で起こったらという問題まであります。

これは、本当に保育学会が子どもの将来を考えたときに、ものすごく重要な問題だと思います。今回の事故から、ほかに学ぶことはもっとあります。やらなきゃいけないことはあると思います。でも、この一点を外したら、また日常がそのままです。これは東京に住む私たちが一種の加害者であるという責任を持って、各所にちゃんと置いてくれと声を上げなければなりません。保育学会はやっぱりそういう全国組織として一番やるべきでしょう。もし、智恵がないのであれば保育学会と例えば物理学会とか、いわゆる原子力関係者でそういうことを注意してきた人たちがいます。その人たちとタイアップしてでも、それを公に出して、ぜひやってほしいのです。一人一人の人が、きょう学んで帰りますではなくて、学会の一つの組織してやってほしいのです。それが学会の社会的使命だろうと思います。個人が頑張らましよう。では済まないだろうと私は思っています。ちょっと長くなってすみません。(拍手)

司会： ありがとうございます。最も重要なポイントをはっきりおっしゃっていただき、大変ありがたかったと思います。

フロアC(岩倉政城)：

私、実は歯科医師ですけれども、放射線の安全域というのは本来存在しないのです。放射線には安全域という概念がもともとありませんから、そういう意味で、ぜひこの問題を取り上げていただきたいと思います。特に、子どもの甲状腺がんは、このくらいでは起こりませんでしたという識者の発表がありますけれども、一番の問題は、内部被ばくを起こしますと、精母細胞とか卵母細胞がDNAのすぐそばで放射線被ばくを起こすものですから、どんどんDNAが傷つきます。そうしますと奇形とか流産とか死産とか、そういう形で起こります。あるいは障害とか。しかし、それを甲状腺がんの統計だけで、まるでの安全かのごとき統計を識者と称する人たちが出しているわけです。本当なら今言った4つの問題も全部点検すべきものであるにもかかわらず、それは伏せたままで今の放射線の量ならば心配ないというキャンペーンが張っております。そういう意味で今の方の発言に対して医学的な補充を少ししておきたいと思います。

それから私がちょっと気になっているのは、今回の地震を通じて公的な保育園や幼稚園の廃園を、自治体がこの期を狙って便乗してくる危険性があります。特に海岸線のところはもういらないということでやってくる。

それからもう一つは解雇の問題です。保育士、幼稚園の先生方は大量に解雇されております。また自宅待機。そして最後には失業保険で何とか生きていこうということになっているわけです。もしできたら保育学会が、こういう人たちを再雇用するための仲介役を果たすということも、非常に大事な問題の一つではないかと考え

ております。

それから今、幼稚園とか保育園では復興の補助費が5割ですが、私は5割では本当に大変で、何とか7割までにしてほしいと思っています。私は尚絅学院大学の附属幼稚園の園長もしているものですから、その点では切実な思いをしております。

最後に、今回、私は非常に早い時期に幼稚園の再開をすることで、日常を取り戻すことがどんなにお母さん、子どもたちにとって役割を果たしたかという意味では、災害復旧のボランティアよりも何よりも幼稚園の復旧のために最大限の努力をしました。こういう幼稚園・保育園が果たしている社会的な役割の大きさに、あらためて気づかされた思いでした。ありがとうございました。(拍手)

司会： 貴重なご意見、ありがとうございました。今のお二人のご発言、その他、しっかりと記録に留めて、今後学会としての活動の方向を定めてもらいたいと思っています。ここまででフロアのご意見を一応切らせていただいてよろしいでしょうか。

フロアD(木村 徹)：

すみません。仙台市の向山幼稚園の木村と申します。少しだけお時間をいただければと思っております。今、私たちの向山幼稚園はそこまで被害はありませんでしたけれども、地域の幼稚園・保育園のために何かできることはないかということでやっていました。

その中で、宮城学院女子大学の磯部（磯部裕子）先生という方が中心になって、「わらすっこプロジェクト」というのを立ち上げております。ユニセフだったり、赤十字だったり、あとNPOの方とかも本当にいろんな方が動いてくださっていて、本当に心強いところはすごくあって、ありがたい気持ちはたくさんありますけれども、細かいニーズの把握というのが実はどこでもされてないというのが最初の1カ月の現状でした。避難所のところに子どもが何人いるのか、どこにどのくらいの子どものがいて、何が必要なのかということを誰も把握をしていないという状況でした。宮城県の幼稚園連合会だったり、保育所の集まりだったりというのもありますけれども、どうしても幼稚園は幼稚園、保育園は保育園というふうに何か縦割りのようなことがあって、なかなかニーズが上がってこなくて、何をすればいいのかというのが、皆さん、ばらばらになってしまうというようなことがありました。

そこで磯部先生が、もう幼稚園とか保育園とか関係なく、子どものために動こうということでプロジェクトを立ち上げて、今、全国からいろいろな物資を送っていただいたり、義援金をいただいたりしております。この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございます。

ただ、すべて流されてしまった保育園さんでは、今イスと布団がないんですね。一つの児童館に3園ほどの100人ぐらいの子どもが入っていて、毛布を敷いて寝ていたりというのがまだ現状でもあります。布団とかを業者さんなども寄付して下さったりして送っていますけれども、机とかイスも錆びたままになってしまって、海水に浸かってしまったので錆びて使えないというような現状もあります。もう保育園とか幼稚園とかそういう括りではなくて、子どものためにそれぞれできることが特に地域で私たちにもあるのではないかとということで、支援物資の仕分けなどを

させていただいています。

少しですけれども、冊子を作りました。ちょっと全員の分はないかなと思っていますが、向井山幼稚園のホームページ内のブログでも、情報をできるだけ公開していきたいなと思っています。ぜひ見ていただいて今後ともご支援をいただければ、ダイレクトに地域の沿岸部の子どもたちのためにすべて使わせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

司会： ありがとうございます。今のお話のような、さまざまな情報公開、情報交換の媒介を学会活動としてもやらなければいけないとは思っております。また、この辺もどういうことができるのか、至急に検討してもらいたいと思っております。

それでは、首藤の先生のお話に行ってもよろしいでしょうか。どうしてもこのことだけはという方いらっしゃいますでしょうか。一言どうぞお願いいたします。

フロアE（天野珠路）：

日本女子体育大学の天野と申します。今、私も青森、八戸からずっと回って、それで数十カ所の園の聞き取りと申しますか、いろいろお話を聴かせていただいています。その中で岩波映像というところと一緒に、今回の震災にまつわる保育の記録というDVDの製作準備をしているところです。

撮影するという事は、ズケズケと入って勝手に撮るわけにはまいりませんので、非常に細かないろいろな、おもんばからなければならぬことが多々あると思います。しかし、現場の先生方、またさまざまな保育団体、関係者の皆様方、ぜひ撮っていただきたい。ぜひ記録として残していただきたいとおっしゃいます。

特に保育園は、保育中の子どもの犠牲はゼロでした。あんなに大変な本当に厳しい状況の中でどうして全員が0歳から6歳まで助かったのだろう、助けられたのだろうと、もう現地を回るたびに本当に感服と申しますか、驚いてしまいます。功を奏した事例も多々あります。厳しい大変なつらい出来事もたくさんございます。けれども、そうした保育者の皆さまの頑張り、そして保育者としての自覚と、迅速かつ適切な行動というものが、保育中の子どもたち全員の命を守ったという事実もしっかりと伝えていきたい、保育現場にエールを送りたいという気持ちがとても強いわけです。

早急にまず1本目を作って、何本か継続して時間の経過を追って、記録を撮りたいと思っております。そうしたDVDを作製しておりますので、どうかご協力いただいて、またできた暁にはぜひ見ていただきたいというお願いでございます。以上でございます。

司会： ありがとうございます。それでは首藤先生からコメントをいただきまして、それぞれの先生方から最後のまとめの言葉をいただきたいと思います。

○＜指定討論＞ 首藤美香子 白梅学園大学

首藤： 白梅学園大学の首藤と申します。よろしく申し上げます。短い時間でしたが非常に内容の濃いご報告でした。私からは、先生方のお話を伺った感想を三点ほどに

整理してみたいと思います。

まず一つ目として、全体を通しての印象ですが、今のお話から「組織としての保育学会の社会的な使命」が強く問われていると受け止めました。野呂先生が冒頭でおっしゃられたように、平時において関係者内部では認識されてきた課題が、緊急時においてくっきりと浮き彫りになったと思われます。いろいろ事例を挙げてご紹介いただいたように、幼稚園、保育所の制度の違いによって子どものケアと教育、生活のあり方が分断されているという現況が、子どもの命運を分けてしまっているということが改めて明るみになったのではないのでしょうか。例えば、保育内容や保育方法によって子どもが施設にいる時間が異なること、つまり幼稚園に行っているのか、保育所に行っているのか、公的な支援を受けているのか、民間のサービスに委ねられているか、子どもの年齢が乳児か幼児か、家庭にいたか、保護者のもとにいたか、保育者と一緒だったか、誰がお迎えしていたのか、通園バスに乗っていたのか、障害や病気など困難を抱えていたかによって、被災状況やその後の生活が異なってきているように見えます。その意味で、震災によって、保育という制度の弱いところを突かれてしまったのではないかと感じました。

それはなぜでしょうか。国にお金がないからというところでやり過ぎざるを得なかった面もありますけれど、今こそ子どもは「保育の本質」を認識し、保育には公的な資金を投入し国が責任をもって制度を整備していく必要があることを社会に訴えていくべきなのだろうと感じました。少子化対策という名目で、国際的な競争力に打ち勝ち、さらなる経済発展を遂げるべき日本の国にとって女性の労働力が重要だからとして、女性が仕事と家庭・子育てを両立できるように、子どもを幼いうちから保育所や幼稚園に長時間預ける待機児童対策にお金を使いましょう、規制を緩やかにしましょう、という流れがこの何年かきています。でも、保育の基本というのは、先生方からも何度も繰り返し強調されましたけれども、「子どもの命を育み守ること」、「子どもの心身の健全な成長を支えるために環境を整えていくこと」で、非常に重い責任を伴うものですよね。この「保育の本質」を、私たち保育学会の一人ひとりが、今こそ危機感を持ってタイミングを逃さず社会に訴えていくこと、「子どもの声なき声」を保育者が代弁し、「保育ってこんなに大事な営みなのですよ」と社会に発信していくことに対して、保育学会はもっと積極的に取り組まないといけないのではないかと感じました。

その意味でも、保育学会の役割としては、①専門家チームによる保育所・幼稚園の被災状況の実態把握と保育再開過程の追跡調査、②災害時における子どもと保育者、施設に対する支援体制の組織化と整備、③政策提言、の三つに整理できるのではないかと考えています。すなわち、多角的な視点から情報を整理し実態はどうだったのか正確に把握していくこと、時間をかけてそれを丁寧に分析し検証し、何が課題かを考察していくことです。次に、物資の支援や心のケアといった支援は様々な形でなされてきているかと思いますが、保育学会が仲介となって、例えば緊急時の保育者・施設の支援や保育の再開に向けて組織的な協力体制を構築していくことも必要ではないかと感じます。また、先ほども申し上げましたが、公的に保育制度を充実させるための政策提言をしていくことも、保育学会の社会的役割なので

はないか、とお話を伺いながら感じました次第です。

二つ目の感想ですが、「保育の公的責任」について学会員の間で共通認識を高めるためにも、生駒先生のお話をもっともっとお聞かせいただきたかったと思いました。原発の被害は現在進行中でもあり先行き不透明ななかで、非常にクリアに、当事者でありながら冷静に、時系列的な状況分析と論点整理をされていて敬服いたしました。副園長先生として、組織を上手に束ねていらっしゃるんですよね。福島の問題はまさしく日本の問題だとおっしゃいましたけれども、失礼ながら私たちは福島の困難な実情を聞くにつれ、子どもを生んで育てていくことが怖くなりました。けれども、生駒先生のような保育者が中心にいて地域の保育をリードしてくださっていただければ、「大丈夫だ」「本当に心強いなあ」と。子どもにとっても、親御さんにとっても、ものすごく力強い味方だなあと感じました。教育とケアと養護と生活が一体化した一貫性のある保育の意義と可能性を、非常に包括的な視点から、ご自分の言葉で現場に即してこれほどまでに強く語られていて、ものすごく説得力があると感じました。まだまだ通常の保育再開に向けて見通しが見えないところで、本当に一生懸命に努力をされてることでと思います。体験と実感に裏打ちされた保育の社会的ニーズをもっともっと声高にお伝え下さることによって、福島の子育て支援、ひいては日本の子育て支援のあり方の根本を考え直すために、私たち保育学会が調査と支援に動き出すきっかけになるのでは、と感じました。

また、神戸のお話も伺いましたが、今回、神戸と東日本大震災では、皆さんご存じの通り、地震発生時、神戸は早朝で保育をしてない時間帯で子どもの大部分は家庭にいたわけですが、東日本の場合には、保育中に起きていますよね。しかも、東北地方は三世代、四世代の同居が多く、地域や家族の中で大切に守られてきた子育ての伝統がもろくも崩れそうになっています。都市型の災害だった神戸との置かれている状況の違いを科学的に整理していきながら、神戸の教訓がどのように活かされるのかを考えていかななくてはならないのではないかと思います。

今、神戸のご報告を聞いて、「なるほど神戸もこんなに大変だったのか」と未だに記憶のあせない生々しい体験談に、驚き感心している場合ではない気がしました。これはもしかしたら保育学会の怠慢だったのではないのでしょうか。神戸で16年前にこういう事態が起きたときから学会が継続的に、震災によってどういう課題がつけられていて、保育学会として何をしなくてはならないのか対策を考え、みんなが知見や経験を共有していれば、東日本震災の直後から、もっともっと迅速に的確に対応できていたのではないかと思います、とても残念な気がいたします。

でも、お二人の報告を聴きながら、「子どもってこんなにも育つ力があるのか」「たくましく成長していくものなのだな」と改めて感じました。先に歩いてきた方々から、「深い傷を持った子どもたちの自ら育つ力を信じて支援していくためには何か必要か」、客観的なデータをもとに具体的なご助言をいただいているわけですから、これをしっかりと引き継いで研究していかななくてはならないですよ。ここで、三つ目として私が特に強調したいのは、過去の知見や経験をこれからの保育にどう活かすかということ、自覚しなくてはならないということです。

ちょっと気になったので、倉橋惣三が、関東大震災のあとに、どんなメッセージを

保育関係者に送っていたかというのを調べてみました。大正 12 年、1923 年 9 月 1 日に関東大震災は起こりましたが、『幼児の教育』第 23 巻第 12 月号には、早くも『大災と幼児教育』というタイトルで寄稿しています。まさしく今現在、私たちが抱えている課題を、倉橋はこんなに明確に提示されていたのかと驚きました。(旧字・旧かなづかいは改めた)

斯うした事実を目の前に置いて、どうしても私たちの胸に浮んで来なければならぬのは、将来の問題であります。すなわち、(一)、斯くも打撃を受けた幼稚園教育を、どうして復旧させようかということ。(二)、ただに復旧ばかりでなく、従前からの希望を遂行して、新しい拡張と充実を実現するためにはどうしたらいいかということ、(三)それからまた、今度の事変が生んだ多くの幼児保護施設を、単に臨時のものとして終らせないで、我国の幼児保護施設の一般的発達の方へ導いてゆくにはどうしたらいいかということ。などの問題であります。而して之れ皆幼児問題関係者のために、困難ではあるが、併し、元気を振り起させる問題ではありませんか。

また、倉橋はお金の問題についてもふれていて、

(前略)財政上の点からは、非常の困難のあることは、何人も諒することではあります。しかも亦、罹災地に於ける目下の家庭状態、社会状態が学齡前幼児の幸福と正しい生活とを脅かして居ることは、実に甚しいものでありまして、現在としては幼児の問題ですが、其の結果としては、国民生活上の大きな憂慮とすべきことなのであります。生活の不規律、親の不注意、情操教育の欠陥、栄養の不足という様なことは、挙げて数えれば数える程、吾人の心を暗くするものが多いのです。すなわち、教育上の点からは、今日こそ、社会が幼児教育のために、特に力をつくすべき必要に迫って居るのであります。

と書いています。このほか『幼児の教育』には、東京市の視学官が、「財政上は非常に厳しいけれども、幼児教育にお金を使いますよ」、という主旨の記事を載せています(田中三郎「東京市幼稚園復興問題」『幼児の教育』第 24 巻第 1 号)。また、倉橋は大阪の池田で「家なき幼稚園」を試みていた橋詰良一からの訪問を受けて、「ぜひこの機会に何もない露天で幼稚園をやりなさい」と言われて、わざわざ「家なき幼稚園」の視察に行っていたりするわけです。(倉橋惣三「『家なき幼稚園』を訪ふ」『幼児の教育』第 24 巻第 1 号) つまり、「何もないところでどんな保育ができるか」倉橋はスピーディーに考え動くわけです。

さらに、倉橋の『育ての心』もちょっと気になって開いてみました。これも初版は昭和 11 年ですが、昭和 20 年の秋、本当に戦後すぐに「硬く信じ、切に祈る。新生日本の子どものために。」として復刊されています。「よい子どものために」と題された序を、読んでみましょう。

国敗れて、いちばん気の毒なのは子どもである。がまた、いちばん希望をもたせるのも子どもである。済まんねといった心苦しさと、たのみますよといった頼もしさと、それが一つにこみあげてくる心もちで、じっと見まもりもし、抱きあげたくもなる。

悲しみも、憂いも、まだ知らない。しかも、彼等の成長がだんだんに彼等にわからせてゆくものを、彼等はどう受けとり、どう担ってゆくだろうか。思えば、彼等の父母も祖先も、仮にも経験しなかった苦難の成長である。

しかし、わたしたちは忘れてはならぬ。如何に苦難でも成長は成長である。

否むしろ、苦難の裡うちにこそその逞しさを発揮せずにはいないのが成長である。わ

たしたちは、この成長の真義いさきを聊かも疑ってはならぬ。なおまた、苦難とはいいいながら、再生日本の新しい生活には、子どもらの真実の進展のために、新しい道程が企画されている筈である。わたしたちおとながどんな急転回に困惑することであろうとも、幼きものの行路を塞ぐような荒徑にまかせておいてはならぬ。わたしたちは決してそれを怠ってはならない。

教育は育つものに対する信仰である。信仰は如何なる時にも、世界を明るくし、励まし、活気づける。わたしたちが此の今日、子どもらと共に笑い、歌い、遊び得るのも、此の信仰が与える光明によってである。

というふうに続きまして、最後にこの復刊をすることになった理由として、

(前略)此の書の内容が、時に即しての所論所説ではなく、育つものへの久遠の信仰による光明の伝達に他ならぬからである。更に、おこがましくもいうことを許されるならば、眼前に暗さがまつわり勝ちなときにこそ、光明のどんな小さな発見でも、その伝達の理由と必要とが認容せられると思うからである。

と結んでいます。

最後になりましたが、組織として保育学会が何をすべきか繰り返させていただくならば、私たちはまず、子どもたちと保育者に何が起きたのか、実態調査をし分析をし考察をしていきながら、実践と理論を結ぶという学術研究機関としての課題を遂行しなければならないこと、次に、保育の公的責任・社会的使命を今こそきちんと根拠を挙げて理論的に立証し社会に訴え、財源もしっかりと確保するということ、さらに、震災と子どもの保育に関する過去の知見や経験を現在そして将来に生かし備えること、緊急時における支援の仕組みを作ること、そういう形で動いていくしかないのかな、というふうに思っています。(拍手)

司会： ありがとうございます。ちょっと時間が押しておりますけれども、今の放射能

問題は第二次世界大戦の敗れた後の問題と比較したときに、比較にもならないほどの大きな問題を投げかけているのだろうと思いますけれども、やはりこの問題に対して保育学会として、もう少し早く、素早く行動を取らなければいけないということは、きょう、ひしひしと自覚されたと思います。

○話題提供者から一言

司会： それでは最後に、きょうご発言の先生方から一言ずつ、締めくくりのお言葉をいただきまして終わらせていただきたいと思います。

野呂： 非常に大事なご意見をいろいろ伺えてよかったですと思います。私は先ほどの話の続きで申し上げますと、今、避難している子どもたちで、保育園や幼稚園がもう全部解体になってなくなってしまったお子さんたちは、近くの保育園や幼稚園にそれぞれ分散して受け入れていただいているという形です。保育士さんも同時に、そこに分かれて異動しているということがあります。その動きからして、例えば今何十人か保育している保育所に、分散されたお子さんたちが入っているわけですが、設置基準上からいったら、もう狭いところに大勢が加わっていく、お子さんが増えていくという形になっているわけです。

ですから、そういうのが当たり前にならないような……。やはりちょっと今無理して一時的にそれこそやらざるを得なくて、そういう対応をしているというところでは、やはりこれは、もともと設置基準そのものが非常に課題を持っているにもかかわらず、さらに今の事態の中でそれを無理に重ねてまたやろうとしているところがあります。

先ほど岩倉先生もお話しくださったように、もうなくなったら、そのままなくした状態にならないように、やはりもう一度再建していけるような……。そういう形での幼稚園や保育園という場の設置を、やはり皆さんの力で進めて実現していけるような動きを取る必要があるだろうと一つは思っております。

それから今回の災害の中でいろいろな関係の形系、環境システムと言っていますが、それが壊れていくというのは目の当たりになってきたわけです。一方では、現在の保育界の子どもたちの置かれた状況は、かつて私たちが過ごしてきたような人間関係を再現しているというか、そういうよさがちらちら見えています。と言いますのは、例えば避難所にはいろいろな年代の方が集まってきます。ですから、東北地方は比較的三世代で暮らしている方たちが多いですけれども、避難所ではさらにその世代を通してのつき合いの中で、知らない近所の大人たちとのつき合いがいろいろ生まれてきます。そして、そういう大人たちがその中で組織化されて、役割分担をお互いにし合って、どういうふうにこの集団生活を営んでいくかというのをやり始めています。そういう姿を子どもたちは目の当たりで見えています。

例えば会社人間の親たちの普段見られないエクソ化された現状を、今度は避難所で目の当りにします。みんながいろいろできることに力を合わせて取り組まなければいけないということです。そういう点では、大人の力をすごいなと直接受け止め

られるという体験を子どもたちはしています。そこら辺の前向きな視点もとらえながら、本当に今、子どもたちの周りで失いかけている人間関係の弱さとかを、もう一度こういう危機的な状況の中で再現できているのかなというところに、私は一縷（いちる）の将来の希望を持っています。

子どもたち自身も例えば避難所の中で、今はもう学校が始まりましたけれども、3月の休み中だと小学生が中心になりながら集団づくりをやっているわけですね。集団生活の運営としてニュースを発行して広報活動をやったり、そして大きい子と小さい子どもたちが一緒に生活をつくり出しています。そういう新しい関係ができています。異年齢の子どもたちの生活がだんだん失われていくような地域社会の中で、逆に今度はもう一度、避難所の中でそれが再現されたり、実現されたりしています。そういうすごいたくましさは子どもたちにはあるんだというところに、私は希望を持ちました。

ということで、そういうプラスマイナスの状況をやはり子どもの現実として受け止めながら、今後の私たちの担う課題に取り組めたらいいなと思ったところです。ありがとうございます。

司会： それでは、生駒先生、お願いいたします。

生駒： ありがとうございます。まずフロアからのことについて何点かお答えをしたいと思います。先ほど原子力放射能についてのガイガーカウンターのことがありましたが、これは、いわき市、福島県に全部配付されることになっています。

先ほどここを立って歩いていたのが、うちの県のリーダーです。そういうリーダーに、私たちはきちんと声を聴いて吸い上げてもらえているということがとても大きいです。おそらくこれからそういうことがとても大事になってくると思います。要望書を出し、そしてこれを必要だと思って、出す。それから保育園の廃園について、幼稚園の廃園について、保育者の雇用の問題についても、さまざまな要望も出しております。

そしてもう一つ。これは全日私幼の組織の中で、その先生たちを1年間違う園で雇用したらどうだろうとか、そういうアイデアを出し合っています。どうか皆さんもそういったことを吸い上げていただいて、いろいろな知恵をお貸しいただければと思っています。

福島県のリーダーの関（関 章信）先生は、ひよこひよこ海外に出て、ひよこひよこ今もあちこちの県に行き動いてくださって、国にも顔を出しということで組織にも顔を出しています。そういうふうに通っているリーダーを見ると私たちが元気になるんです。そのリーダーに元気をもらって、今度は子どもたちが子どもたちのために動く大人を見て元気になります。だから、本当に先ほど保育学会が、こういう組織をつくってということで動いていただけることがとてもありがたいと思います。

それから先ほど出ました、親、保護者にどうやって渡せばいいのか。私は、マニュアルなんて本当はいらなと思っています。マニュアルはマニュアルでしかなかったということを私たちは知っています。ただ、そこで何の知恵をつくるかですが、災害に備えることも大事だけれども、災害に対することではなくて、それ以上にク

リエイティブに何かを考え行動し、敏感に適切に温かく行動できるかということ育てていくことだと思います。

もちろん園長・副園長としては、危機管理の問題で引き渡しカードなんていうものを作っています。うちも作って、誰に渡すか、第一、第二、第三を書いてくださいと。そして幼稚園に持っていくものとご家庭であるものがあって、その方以外にはお渡ししません。それは当然のことです。民間としてやっている私たちは、公の仕事ですが、その責任は持っています。その危機管理をやはり突き付けられているのがリーダーです。そうだとしたら、やはりそこは真摯に反省し、我々が進まなければならない道だと思います。

先ほど、保育園は死者がいなかった、幼稚園はいたという乱暴な発言に、私はちょっと心が痛くなりました。それは場所も時間も状態も違っていたのだと思います。ですから、今そこで声を上げることはいかなものかと思うのです。もうちょっとどんな状況がそれを起こしたのかを……。いわき市も管轄内での子どもたちの死者はありませんでした。先生たちは必死に守りました。けれども、そのことについて学ぶという言葉で言うのであれば、幼稚園だった、保育園だっただけではないことを、先ほど保育学会でとごさいましたが、やはりきちんと調査し、それをきちんと早急にまとめるために我々も仕事をしなければならないと思います。

これが最後です。結局何か。やっぱり保育者がきちんと哲学を持っていないといけないということを、私たちは思います。そうすればいろいろなことが子どもたちに……。物がなくても、机がなくても、保育はできます。物がなくてもできます。先生の哲学があつたら、保育はできるのではないかと考えています。以上です。

(拍手)

司会： ありがとうございます。

米田： 阪神・淡路大震災の経験をお話しさせていただきました。東北の先生方からもお話を聴きました。災害の大きさや状況や、子どもたちの置かれている環境というのは、その時々になんか異なっているということ強く感じました。ですので、これが大事、これが必要というようなことを、一律に言い切ってしまうことはできないのではないかなと感じています。

ただ、共通していると思われる問題を探って申し上げられることは、先ほどお話ししたことと重なるかもしれないですけども、避難している子どもたちの状況や保護者の様子は毎日変わっていきました。それから必要なもの、必要なことというの刻々と変わっていきます。そういう中で震災を経験した子どもたちを保育者として、いかに包み込んで受け入れることができるか、その子どもたちを受け入れる保育士の支援がどんなふうに行うことができるかということが大事だろうと思います。

それと、保育を再開するために必要な条件って何だろうと。これは今、話を聴いてくださっている皆さんと一緒に、これからも考えて続けていかないけないことかなと思っています。最後のまとめにはなりませんが、そういうことを感じました。ありがとうございます。(拍手)

司会： では、井出先生お願いいたします。

井出： 先ほどは非常に乱暴に話してしまいましたけれども、一つ、二つだけ付け加えさせていただきますとしたら、これはもう既にどなたかからお話があったんですけれども、子どもたちが自分のしんどさを語れるときというのは、その話を聞いてもらえるということをつかったときだということ、もう一回お伝えしておきたいと思います。大人の生活が落ち着いて、大人が聞く耳を持ち始めるまでは子どもたちは決してしゃべりません。私が一番心配しているのは、「子どもたちは元気だ」という、あの報道をどう受け取るか。あれを真に受けるのか。それとも彼らは必死になって頑張っていると受け取るのか。その点を非常に考えていただきたいなと思います。

もう一つは、先ほど心のケアについては、もう普通の保育で、普通のかかわりでもいいと言いました。けれども、これについてもこれまででいいということではなくて、もっと子どもたちが示す、わずかな、わずかな行動の変化であるとか、そういったことにしっかり目を向けて、それをどう理解していくか。そういうことについては、これまでではない、もっと新しい見方、新しい保育の考え方——新しい保育の考え方は違うかもしれませんけれども、少なくとも子どもの心の問題に対する感受性とか、感覚を磨いていただきたいと思います。それに対する答えの返し方ということについて、これまで以上に、口幅ったい言い方ですけれども、研鑽に励んでいただければと思っています。以上です。(拍手)

○閉会

司会： ありがとうございます。保育現場が何をすべきか、ということと同時に、日本の社会全体に対して、もっと子どもに対する責任が持てる社会をどうやってつくっていくかということへの、もっともっと積極的な働きかけを我々がしなければいけないということが、今回のシンポジウムの中で浮き彫りになってきたと思います。現場の先生は本当によくやっている、専門の先生がやっている、そこに任せておけばいいんだ、私たちが頑張ればいいんだ、ということでは最早解決がつかないところまで行っているという共通認識をしながら、全国的に今後の問題をどう展開するか、また皆さんの知恵を集めながら頑張っていきたいと私も心で思いました。

短時間ではありましたが、本当に重要なお話をお聴かせいただきまして、どうもありがとうございます。(拍手)

第 64 回大会 学会企画緊急シンポジウム

災害における子どもと保育

話題提供 資料

「災害における子どもと保育」

—東北地方の子どもたちの現状—

野呂 アイ

はじめに

- ・地震発生：2011年3月11日(金)14時46分 「東北地方太平洋沖地震」(気象庁)
三陸沖を震源とする M8.8 (13日に M9に修正) 宮城県北部で震度7
観測史上世界最大級
 - ・大津波警報発令：14；49→15；50 相馬市で 7.3 ㍎以上、大船渡市で 23.6 ㍎の津波
 - ・福島原発について「原子力緊急事態宣言」(政府：19；03)
 - ・死者：9,080人、行方不明：13,561人 (全国 3・22 現在 警視庁)
 - 「東日本大震災」(閣議決定：4・1)
 - ・余震発生：4月7日(木)23時32分 宮城県北部と中部で震度6強
 - ・死者：15,093人、(行方不明：9,093人)、避難者：115,433人

宮城	9,014人	(5,524人)	31,878人
岩手	4,445人	(3,009人)	36,494人
福島	1,570人	(556人)	23,894人

(全国 5・17 現在 警視庁)
- ・がれき処理状況 (宮城：31%～4%、岩手：28%～5%、福島：7%～1%)
進行率 全体で14% 各自治体により差が出ている
- ・地盤沈下 平均海面以下面積：宮城県仙台平野で地震前の5.3倍 (3k ㎡→16k ㎡)
- ・ライフラインの復旧 (仙台市の一部の場合)
水道 (3/28) 電気 (3/14)、通信 (3/15)、都市ガス(4/5)、バス (3/14 休日ダイヤ)
- ・建物、道路の亀裂・破損・・・修復の遅れ (約1ヵ月間)

<問題を捉える視点>

- ・子どもを取り巻く環境システム (U. プロンフェンブレンナー) の崩壊
- ・「いのちを守り、育む」保育という営みの重要性
- ・現状 (主として宮城県及び岩手県) と今後の課題

資料：岩手県児童家庭課、岩手県社会福祉協議会、宮城県保育協議会より被災状況

『保育情報』2011、4および5 No. 413およびNo. 414

河北新報、毎日新聞、朝日新聞、岩手日日

インターネット (宮城県私立幼稚園被災状況、文部科学省関係被害状況、他)

現地訪問・面談

1、保育所および幼稚園の被災状況

表1 岩手県内保育所の被災 (認可保育所、へき地保育所) 5・9現在

建物等被害保育所数	67ヶ所(%) 内訳	被災保育所数	71ヶ所
全壊	11 (16.4)	本震被災	37
破損	45 (67.2)	余震被災	34
浸水	8 (11.9)	沿岸地域保育所	64ヶ所
備品損傷	3 (4.5)	開所	48
死亡・行方不明者数	40人(12ヶ所)	代替開所	12
死亡者(児童のみ)	22	休止	4
行方不明者(保育士1名含む)	18		

表2 宮城県沿岸部保育所の被災(仙台市を除く) 4・18現在

保育状況	保育所数 118ヶ所 (%)
通常保育	69 (58.5)
ライフライン整備、安全確保後再開	10 (8.5)
代替保育、必要最小限受入れ	3 (2.5)
休止、閉鎖、再開未定	33 (28.0)
避難所転用	3 (2.5)

表3 宮城県私立幼稚園被災状況 4・25現在

施設の被災	園数 176園(%)
全壊・流出	7 (4.0)
破損	116 (65.9)
浸水	5 (2.8)
備品損傷	19 (10.8)

人的被害(学校管理下)

人的被害(学校管理外)

人

人的被害(学校管理下)			人的被害(学校管理外)		
死亡	行方不明	ケガ	死亡	行方不明	ケガ
園児 教職員	園児 教職員	園児 教職員	園児 教職員	園児 教職員	園児 教職員
13 1		1	44 1	4	

園児の死亡：仙台市(5名)、石巻市(22名)、山元町(11名)、名取市(6名)多賀城市(3名)、東松島市(3名)、気仙沼市(2名)、塩釜市・角田市・利府町(各1名)陸前高田市(2名)、宮古市(1名)、いわき市(1名) (文科省：4・7)

2、地震・津波発生時の保育所の状況（事例から）

(1) 石巻市私立保育園（定員 60 名）（園長からの情報提供）（5/16）

地震の揺れは園児たちのお昼寝中に起こった。

0 歳児は眠ったまま、担任が布団を真ん中によせた。

1 歳児 11 人のうち、起きた子どもはトイレ中、着替え中、眠ったままの子あり、担任 2 人で 1 ヶ所へ集めて、動きをストップさせた。

2 歳児は目を覚ますか、眠っている中で、担任のそばへ寄せた。

3 歳児、4 歳児は混合クラスで一緒に午睡中、目覚めており担任のそばへ寄せた。揺れが強く長かったので、不安がり外へ出ようとした子もいたが、抱きとめて「先生と一緒にね、もう少しで終わるからね。」を繰り返し言ってなだめた。

5 歳児は折り紙を担任とやっている時だったので、揺れを直に感じて不安がり、泣いた子もいた。強い揺れと時間的に長く揺れていたため、不安がいっぱいだったと思われる。年齢が上がるほど状況の急変に不安を掻き立てられたようだった。

揺れが収まってから、パジャマを着替えさせた。間もなくお迎えの保護者たちが見え、おやつを出す間もなかった。

園舎は比較的無傷で落下物もなく、怪我人もなく安心した一用具の置き場所は配慮していた。ただ、事務室内は事物散乱した。給食室の食器が少量落下し割れた程度。

津波による浸水

地震直後電気・水道・ガスが止まり、情報をトランジスタラジオで得ていたが、雑音がひどく聞き取れないながら、仙台荒浜でスゴイ事態になっていることがわかった。お迎えの保護者から「信号が止まった」「道路が冠水している」「津波が来ている」などの情報を得た。午後 4 時ごろから道路が冠水、黒い水だった。

5 時 10 分でお迎えのない子どもは 4 世帯 5 人おった。暗く、寒くなったので、一番狭い保育室に移動し石油ストーブをつけ、ろうそくを灯して明るくし、遅いおやつを食べ合った。（近所の方が避難を求めてきた。）水の状況を見て、園舎内にも浸水しそうだ判断し、2 階へ布団や子どもたちの用品などの殆どを上げた。7 時ごろで浸水の水位上昇は止まったようだったが、床上 90 cm、畳が浮かんでいた。その晩は、2 階の子育て支援センター室で休んだ。子どもたちも静かだった。夜半に東北放送の災害放送へメールし、放送を依頼した。お迎えに来れない保護者と帰宅できない職員の家族へ無事を伝えるため、放送が流れた。

翌日土曜日と日曜日まで全員のお迎えがあるまで孤立状態になったが、子どもたちが怖い思いをしないこととさびしい思いをしないように心がけた。先生たちも明るく対応してくれた。胴長をはいて胸まで水につかりながらお迎え来たお父さん、ボートに乗ってお迎えに来たお母さんと、感動的な対面があった。園児全員が帰宅後、職員を帰した。水が引いたのは 4 日目の昼。何もかもが一変したが、園児、保護者、職員全員無事で、お迎え後の安否確認でも無事を確認している。

(2) 塩釜市私立保育園 (定員 90 名) (園長からの情報提供) (5/6)

塩釜市は沿岸部に位置しているが、多くの外湾の島々に守られたため、保育園の被害は比較的軽微。

港から 2 km 離れた当園では、駐車場と園庭の一部に浸水したが、園舎は無事であった。津波の浸水は、普通の水ではなく、ヘドロを伴う真っ黒な水で、また下水管の汚水が混入する。浸水を受けたところは、ヘドロのかき出しや園庭の土の消毒・土の入れ替えなどの他、室内の消毒、清掃、暖房器具や洗濯機などの電気設備から遊具の買い替えなどの多くの問題を抱えることになる。

津波による甚大な被害はないものの、建物の一部損壊や電気・水道・ガスというライフライン復旧までの期間は、休園あるいは部分保育を実施せざるをえない。塩釜市の場合、公立・私立の各保育所全 10 ヶ所が 3 月中に通常保育に入っている。

保育園における保育中の死亡者は皆無、保護者が迎えてから帰宅までの間に津波に遭遇して亡くなった園児がいた。また、自宅に帰る途中、車ごと津波に流され、奇跡的に生還した親子もいた。保育所の職員の中には、帰宅する親子に安全な場所への避難を十分に促せなかったことへの後悔・自責の思いで悩み、心を痛めている人もいる。

震災後の子どもたちの中には、頻繁に起こる余震におびえ、大人のそばを離れない、夜ぐっすり眠れない子ども、また津波を実際経験した子どもはお風呂を怖がり大人に体を寄せて震えている。一見元気に見える子どもたちが急に興奮し不安定な気持ちを見せたりする。家族や親しい人たちを亡くした子どもたちは、保育園での安心した生活、仲間との遊びで心を和ませているようだ。

保護者の中には職場が流失したり解雇されたり、震災の後片付けに通っているが会社再開の見通しが立たないという家族も多い。自宅や自分の会社あるいは店舗が全壊・半壊の方もいる。途方にくれながらも、全国の支援に励まされて、生活の再建に向かっているのが最近の現状。

保育園職員の中にも、家を流失し、家族を失った人が多い。生活基盤の崩壊の厳しさが訴えられている。

(3) 名取市閑上保育所 (定員 60 名) (所長からの情報提供) (5/11)

津波の到来は経験が無いだけに想定できなかった。しかし、海拔 0 m のこの地区でかつての経験者たちの話から、床上浸水なら先ず“逃げる”こと。避難場所は近くの公民館と 3 階建ての市営住宅という指定はあったが、大きな揺れが長く続いたので直観的に急いで保育所内の約束通りに「車で閑上小へ」の避難を園児と職員へ指示。子どもたちは午睡中だったが、パジャマのまま園庭に一時避難、その間に海寄りの駐車場から 6 台の車を持ちより、子ども 54 人と職員 13 人が分乗した。所長は防寒用に所内のコート全員分をかき集めて車に運び、また食料・飲料も積んだ。保育所から約 3 km 離れた小学校に着いて 30 分後（地震発生から 1 時間後）に、大津波が襲来。子

どもには見せないように閉めたカーテンのすき間から目撃した黒い水をした津波のすさまじい光景が、2ヶ月经って思い出される。・・・保育所は流失したが、障害児4名を含めて全員無事に、3日かけて家族の元へ帰すことができた。

危機的状況において日頃の避難の手順、経路の熟知と素早い判断・行動によって難を逃れたが、基本的には「いのちの大切さ」と「一人ではない、支えがある」という信念・信頼感の強さによるのであろう。

関連地域の住民は4カ所他で避難生活を過ごしているが、園児は職員と共に市内の保育所に分散して通所している。所長は4月より役所の所属となり、避難所を時折見回っている。

(4) 亘理町荒浜保育所（定員90名）（近所の住民・元保育園長から）(5/11)

三歳未満児の20人を含む園児と地域の住民が近くの指定避難場所の中学校3階へ逃れた。お昼寝中だったが、着替えをバックに詰めて徒歩で急いだ。徒歩の不十分な子どもたちは散歩用の箱車に乗り、歩き慣れた散歩道を中学校へ向かった。海岸の海水浴場付近なので高い建物は学校の他にない。幸いに当日は中学校の卒業式だったので、2時間分くらいの湯沸かしやおやつ、ミルクの利用ができた。

2日目に避難していた住民が屋上からヘリコプターで救助され、次々と大人と子ども1回に15人ずつ全体で600人程が岩沼市民会館のグラウンドへ移動した。その後、亘理高校へと避難先が移動するが、ここではキッズコーナーを設け、保育ボランティアを展開された。

避難所では保育士の活躍が大事であった。子どもたちを無事にどう避難させるか、津波の襲来からどう守るかという課題と共に、長引く避難所生活では日頃の集団生活のルールが活かされた。日常生活とは違って、いわばキャンプ経験が生かされたが、水くみや掃除等々、役割活動の組織化の推進力となった。無事に避難へと誘導する際の判断力や行動性、機敏性は然ることながら、非日常的な避難生活、しかも新たな人間関係づくりへの役割が期待されることになる。

亘理町では町立4保育所のうち2保育所が消失してしまった子どもたちと保護者は、残りの2保育所へ分散して利用している。

3、大震災は子どもと保育へ何をもたらしたか

(1) 人間として生きる権利・最善の利益の侵害―「子どもの権利条約」との関連で

- ・ 基本的な日常生活の崩壊（家族の団らん・食事・排泄・清潔・睡眠・衣服等）
- ・ 人間の子どものとして生きていく道具の消失
- ・ 仲間との遊びや学習、移動の自由、夢・希望の崩壊
- ・ 差別を受けない―健康の保障の不安定

(2) 生活の基地・居場所の崩壊

- ・家、幼稚園、保育所、学校、遊び場の崩壊
- ・親、親族、知人との分離・死
- ・不安定で定着できない生活の場
- ・地域・近隣の崩壊

(3) 政策やマスコミ・風潮の不安定さ・危うさ

- ・経済の不安定さ—農・水・林（第一次、第二次）産業への対策
- ・デマの横行
- ・励ましと押しつけ—ことば狩りの危険性
- ・保育所運営費のあり方と地方の権限

(4) 子どもにとっての「避難所」の選択の危うさ

- ・園舎の基準は適正か
- ・懸命に生きる親たち・大人たちの姿に学ぶ
- ・遊び内容の変化—地震がテーマ？
- ・共同・協力・思いやりと自己主張の抑制
- ・新しい環境システムへの適応の困難さ
- ・余震と自然への恐怖・脅威
- ・死との出会い経験をどう受け止めるか
- ・幼稚園における防災意識

4、防災をめぐる保育上の課題—まとめにかえて

- ・保育者の専門性・「いのちを守る、育む」営みの充実
- ・環境上の物的・人的・自然的条件の再考

東日本大震災に係わる現状報告 No.1

平成23年4月16日

このたびの、東北地方太平洋沖地震（2011年3月11日14時46分ごろ、三陸沖を震源に国内観測史上最大のM9.0の地震が発生）では津波や火災で多数の死傷、行方不明者、を含め甚大な被害に見舞われた。この、地震・津波・原発における現在の状況は、私達の体験や考えが到底及ぶものでもなく、また、試練と言うにはあまりにも過酷な状況下である。いわき市内の幼稚園1園が津波により全壊、また建物には大きな被害がなかったものの交通、電気、ガス、水道などが遮断、物資、ガソリン等のライフラインのマヒ、在園児家族、職員も被災する状況下となっている。そればかりか、東京電力福島第1原発の事故の影響により半径20キロ以上60キロ圏内に入る園が31園という事態となり、自主的避難をやむなくしている園児が延べ1,184名の状態である。いわき市の公教育を担っている私たち私立幼稚園も、早期の再開を目指している。しかし、幼稚園・並びに保護者の不安はぬぐえないものがある。いわき市のすべての子どもが安心安全で希望に満ちた未来を描くためにも、いわき市私立幼稚園が一丸となり迅速に対応することが急務である。

1. 被災状況

平成23年3月31日現在

地震発生直後の安否	園児 1名	家族 5名	行方不明 2名
津波による家屋流失	園児 51件	職員 3件	
園舎被害	津波による全壊 1園		

※平成23年4月11日・12日のマグニチュード6弱の余震による、各園の被害状況は除く
 ※別紙 参考資料1「被害状況写真」参照

2. 就学状況

平成23年4月15日集計

私立幼稚園就学予定園児数		4,131名 (平成23年2月1日調べ)		
調査未提出園9園の園児数(881名)を省いた人数		3,250名		
	理由	人数	合計	%
休園	原発安定後に登園を希望	623	1054	32.4 ※25.5
	原発による不安から休園	401		
	ライフラインの不安 ※原発による影響含む	18		
	保護者の転勤・転職・職業喪失 ※震災・原発による影響による	12		
転園・退園	原発による不安から転園・退園	89	130	4.0 ※3.1
	ライフライン不安定 ※原発の影響含む	4		
	保護者の転勤・転職・職業喪失 ※震災・原発による影響による	37		
	いわき市私立幼稚園において4月に保育を受けない園児		1184	36.4 ※28.6

注) ※印は、2/1 調べの就学予定園児数に対するパーセンテージ

3. まとめ

今回の災害における「被害」のもっとも大きいものは「原発」による被害と言わざるを得ません。

自然災害である、地震・津波に関する直接的な被害は、1で示したとおりですが、東京電力福島第1原発における被害は以下実害として私立幼稚園の経営を直接的に圧迫し、私立幼稚園の使命すら奪いかねない非常な事態となっています。東北地区の甚大な被害に心を痛めながらも、東京電力第1原発事故の収束する見通しが立たないまわき市の復興が立ち遅れ、しいては、子ども達の未来・私立幼稚園の未来への不安は増幅しています。この問題は、長期間にわたる問題であり重大な問題です。

そのような、苦境の中でリスクを抱えながら4月の保育を再開しようとしています。

① 原発事故に係わる保育料減の概算

福島県私立幼稚園年間保育料の平均額 209,565円 を基に概算
(※平成22年度 全日本私立幼稚園連合会調べ)

A) 4月から3ヶ月の減収の見込み

	休園者分の保育料	退園者分の保育料	合計
4月	1,054名×17,464=18,407,056	130名×17,464=2,270,320	20,677,376 減
5月	1,054名×17,464=18,407,056	130名×17,464=2,270,320	20,677,376 減
6月	1,054名×17,464=18,407,056	130名×17,464=2,270,320	20,677,376 減
3ヶ月合計	55,221,168	※1 6,810,960	62,032,128 減

B) 退園・転園による減収

130名×209,565=27,243,450円 (上記Aの※1 3ヶ月分を含む)

- 被災園などにおいては、園児より保育料等の収入は望めません
被災園児に対する減免を行っている園においても、同等のことが発生しています。
- 福島第1原発の問題は現在進行形であり、将来的な不安も増幅しています。
それに伴う、今後の、園児休園・転園・退園の増加も大きな問題となります。
- 放射能との長い長い戦いが、幼稚園教育に及ぼす影響は大きく、様々なハード面にかかわる出費が考えられます。
- 原発事故が最悪の道筋をたどった場合の園児の安全確保のための準備資金が必要となります。
- 今後、第1原発が廃炉になるまでに10年以上を要するとの見解が示されています。長期的な運営への不安が大きな問題となり、良質な保育の担保が危ぶまれる事態です。

② 大型余震の連続

- 余震による、精神的打撃・・・1ヵ月後の4月11日・12日の余震により気持ちの落ち込み精神的ダメージは大きく、地域に元気がなくなっています・・・。
- いわき地区を震源とする余震が頻繁に続き、園児・保護者の不安・ストレスの増大が深刻化しています。
- 園舎等の耐震・安全管理資金の増幅が必要です。
- 度重なる余震において、断続的に断水・停電・道路の寸断が発生し、通常の保育が担保されません。休園措置や自由登園、親子登園など様々な工夫をし、子どもと保護者の心のケア、精神的な問題への対応や遊びの空間・時間・仲間を提供しようと各園で懸命な努力をしています。しかし、通常の保育が展開されないことから、正常な保育料等の収入が見込めません。

以上

[資料作成]

いわき市私立幼稚園協会 災害対策本部

本部長 新妻 英昭

副本部長 生駒 恭子

阪神・淡路大震災の経験談と提言

社会福祉法人 北須磨保育センター
北須磨保育園 園長 米田 芳恵

平成23年5月22日(日)

目次

- 1 神戸市(長田区)の位置図
- 2 1. 17 保護者の手記
- 3 保育所(園)の被災状況
- 4 入所(園)児童の死亡
- 5 震災後保育再開までの保育所職員の活動
- 6 保育再開の状況
- 7 緊急仮入所措置児の状況
- 8 保育再開 ~避難者のことば~
- 9 神戸市内緊急仮入所
- 10 避難所になった保育所
- 11 震災後の子どもたちの様子

神戸市(長田区)の位置図

1



1. 17 保護者の手記

2

明け方、ゴーツという音と共に地震がきました。主人と二人、子どもの上にかぶさりました。あちこちで物が倒れ、壊れる音がしました。1分足らずの時間が、すごく長く感じられました。地震がおさまった後も停電で何も見えませんでした。おばあちゃんは筆筒の下敷きになり、おじいちゃんはおばあちゃんを助けようとして、背骨を折って動けなくなっていました。みんなを助け出し、外へ出てみると周りは火の海になっていました。一生で一番怖いおもいをした、と思います。

保育所(園)の被災状況

3

保育所(園) 158施設中 全壊:5 半壊:4 一部損壊:123

所在区	施設名	被災状況	損壊の具体的な状況	平成8年1月の状況
灘	石屋川保育所(公)	全壊	併設の市営住宅全壊	9年1月末復旧予定
中央	生田川保育所(公)	全壊	併設の市営住宅全壊	再開時期未定
兵庫	瀬川保育所(民)	全壊	園舎全壊	仮設保育所で開所 8年4月本設開所予定
長田	天降乳児保育園(民)	全壊	園舎全壊	仮設保育所で開所 8年度中本設開所予定
長田	神保保育園(民)	全壊	園舎全壊	仮設保育所で開所 8年度中本設開所予定
中央	みのり保育園(民)	半壊	地震面隆起による一階床面の変形、1階トイレ内部破損、内外壁亀裂破損等	補修済 7年4月1日再開
長田	新生寮保育所(民)	半壊	地震の状況により基礎及び床破損、建物全体が傾斜	8年度中再開予定
長田	美都保育園(民)	半壊	基礎及び床の損壊・傾斜化、内外壁の破損・剥落、屋根天井の損壊等	補修済 7年2月15日再開
長田	ひばり保育所(民)	半壊	地震の崩壊により上部建物崩壊、残る建物も傾斜化	再開時期未定
中央	牛田保育所(公)	一部損壊	内外壁に亀裂、給排水設備に破損、外溝・土間・庭等に破損	8年1月復旧予定 仮設保育所(大倉山仮設保育所)で開所
垂水	本多園保育所(公)	一部損壊	内外壁に亀裂、給排水・空調設備に破損、柱・梁・外溝・土間等に破損	補修中

入所(園)児童の死亡

4

	東灘区	灘区	中央区	兵庫区	長田区	須磨区	垂水区	北区	西区	計
公立	4名	2名	-	-	3名	1名	-	-	-	10名
民間	-	2名	-	1名	4名	-	-	-	-	7名
計	4名	4名	-	1名	7名	1名	-	-	-	17名

震災後保育再開までの保育所職員の活動

5

- 子どもたちの安否確認
- 避難先の見まわり(家族や子どもの状況把握とはげまし)
 避難所 5小学校 1高等学校 (講堂・体育館・教室・校庭のテント)
 公民館
 その他 公園のテント 幹線道路に駐車する自家用車
- 保育所清掃、片づけ
- 救援物資集配所での整理と物資配給
- 入浴サービス
- 区役所での災害復旧事務の応援(平成7年9月1日現在)

主な復旧事務	応援期間
小口生活資金貸付の受付	1/27 ~ 2/9
罹災証明書交付	2/6 ~ 4/20
義捐金第1次配分受付事務	2/6 ~ 4/20
第1次要援護者実態把握調査	2/16 ~ (2/20)
義捐金第2次配分受付事務	4/1 ~ (8/30)
避難所個別面談調査	5/10 ~ 5/16
避難所個別相談	7/1 ~ 7/6

保育再開の状況

6

神戸市内保育所(園)の開所状況(一部開所及び仮設保育所対応を含む)

		保育所数	平成7年 2月1日	平成7年 2月15日	平成7年 3月1日	平成7年 4月1日	平成7年 5月1日	平成7年 6月1日	未開所保育所 (10月1日)
全市	公立	88	34	65	73	82	82	84	4 灘・中央・長田・ 垂水
	民間	70	52	63	64	66	66	68	2 長田
計		158	86	128	137	148	148	152	6

緊急仮入所措置児の状況

7

緊急仮入所措置された児童は、北海道から沖縄まで全国の保育所(園)に及んだ。

平成7年3月31日現在 緊急仮入所児童

全	国	3,149人	
	県	内	1,913人
	神戸市内		1,478人
		神戸市外	435人
	県	外	1,236人

保育再開 ~避難者のことば~

8

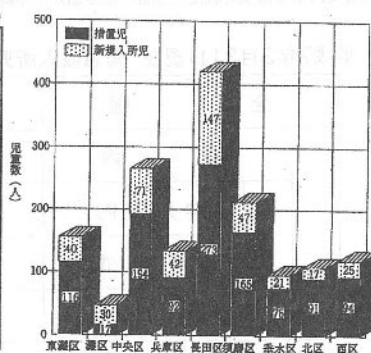
今までようしてもらった。
 わしらは、遠慮 することは いらんで。
 子どもを預かって遊ばせるのが、先生たちの本当の仕事や。
 親の助けになったら、それが 復興に一步前進 ちゆうこつちや。
 がんばってな。

神戸市内緊急仮入所

9

神戸市内緊急仮入所児

	平成7年3月現在(単位:人)		計
	措置児	新規入所児	
東灘区	116	40	156
灘区	17	30	47
中央区	194	71	265
兵庫区	92	42	134
長田区	273	147	420
須磨区	165	47	212
垂水区	75	21	96
北区	91	17	108
西区	94	25	119
合計	1,117	440	1,557



避難所になった保育所

10

	東灘区	灘区	中央区	兵庫区	長田区	須磨区	垂水区	北区	西区	計
公立	瀬田 田中 浜御影 本山北町	灘 西八 倉石 榎ヶ丘 中原	森合 神若		長田 田原 駒ヶ林 榮 駒王 寺長 田東 真野	※須磨 いなば				22カ所
民間		青谷 光 城大 岡 ゆりか	めぐみ	ちびくろ	みすまる					9カ所
計	4カ所	12カ所	3カ所	1カ所	9カ所	2カ所				31カ所

避難所となった保育所は、一部分でも保育ができる状態となつたところから、順次保育を再開していった。
 (避難所最終解消日:平成7年8月20日)

※須磨保育所は仮設病院として使用

- ・ 表情がない 時々ぼーっとしている
- ・ 排せつの退行、頻尿、一人でトイレにいけない
- ・ 物音におびえる
- ・ あそび 積木やブロックを積んでは崩す 地震ごっこ
- ・ 絵本や紙芝居を集中して楽しめない イライラしている
- ・ 「救援物資」「震度 7」「避難」などの言葉を使う

災害と子ども

(阪神淡路大震災の経験から)

関西学院大学 人間福祉学部

井出 浩

日本保育学会
2011年5月22日

1

Post traumatic playということ

- 病的な遊びと健康な遊び
- 病的な遊びへの介入(テレビ報道を見て)

3歳の男子の事例

- 自宅は被害が少なかった地域にあり、建物は壁にヒビが入った程度であった。地震時に本児は既に起きていて激しく泣いた。日中は普通に遊んでいた。地震のテレビ報道を見た後、夜になって、口をホースの様にとがらして、火を消すまねをしたり、「火事が～」「地震が～」と呟きながら、部屋の中を歩き回り、その後不眠となる。親の顔の区別もつかない様子で、食事を与えても嘔むことをしない。好きな玩具を与えても遊ばず、部屋の中を歩き回っていた。多くの反応は、被災後5日目から急速に改善し、以後、過食、頻尿が見られるのみである。

6歳の女子の事例

- 両親、兄、弟の5人家族。自宅は全壊した。火災の中を母が子ども3人を連れて避難し、今は母方祖母宅に身を寄せている。余震、テレビの地震場面の放映、サイレンの音によってパニックを起こす。食欲の低下があり体重も減少している。外に出たがらず、腹痛を訴えたり、不安なときには唇の色をなくす。深夜2時頃まで眠れぬことが多く、途中目覚めては母を起こす。繰り返し「死なない？」と質問する。

2歳6ヶ月の女子の事例

- 自宅は一部損壊。5日目から約2ヶ月、県外の親戚の家に避難した。母親は落ちてきたテレビで負傷した。本児はケガはないが、ダンスとテレビに挟まれていた。6ヵ月後も親から離れられない。寝ていた部屋に入らない。「ドンドン怖かったね」と地震のことを語る。4月末から、損壊の激しい所を通って保育所に通っているが、5月連休明けから、暗いところを怖がるようになった。「男の子になりたい、男の子は強いから」と言う。大型トラックが走ったり、テレビに臨時ニュースのテロップが流れると暴れ出す。母自身、体調があまりすぐれず、物音にも過敏なところがある。

保育所聞き取り調査から①

(平成7年6月実施)

- 寝つけない、すぐ目覚める 30.6%
- 繰り返し地震のことを思い出す 28.6%
- 悪夢を見る 22.4%
- 地震を思い出させる場所、状況を避けようとする 17.3%

保育所聞き取り調査から②

(平成7年6月実施)

- できていたことができなくなる 17.3%
- ちょっとした事に癩癢を起こす 14.3%
- ちょっとした物音にも大げさに驚く 14.3%

□ 0歳児から5歳児 98人の調査

保育所アンケート調査①

(平成7年5月)

- 親と一緒にできなかったり、明りがないと寝床に入れない 47.8%
- ひどく甘えたり、わがママを言うことがある 22.6%
- 家族や友達と一緒にないと不安そうである 18.8%

保育所アンケート調査②

(平成7年5月)

- ちょっとした物音や揺れにも極端に反応することがある 11.9%
- 今までできていたことを親にしてほしがることがある 11.7%
- おもらしやおねしょがある 10.8%
- 親にしがみついて離れなかったり、後追いが激しいことがある 9.0%

□ 3歳児から5歳児 1834人の調査

子どもたちが

震災後に示した反応①

- 緘黙
- 親から離れられない
- 家に(避難所から)帰りたがらない
- 夜驚、夜泣き
- 指しゃぶり、爪噛み、夜尿、頻尿

子どもたちが

震災後に示した反応②

- 眠れない、暗くすると怖がる
- 寝ることを怖がる
- 過食
- 音や振動に過敏、集中できない
- 攻撃的、イライラ、乱暴な遊び

子どもたちが

震災後に示した反応③

- 孤立
- 円形脱毛
- チック
- 腹痛
- 不登校

災害後の反応と年齢

- 年少
 - 分離不安、赤ちゃん返りなど退行
 - 睡眠障害
 - 恐れの実現
- 年長
 - いらだち、集中困難
 - 抑うつ気分
 - 身体化症状

5年後の調査から

質問項目と該当者数

	質問項目	男	女	計
問1	頭痛、腹痛、吐き気など身体の不調をよく訴える	3	6	9
問2	喘息やアトピーがひどく、なかなか治らない	4	0	4
問3	食欲のない時が多い	3	3	6
問4	親から離れたがらなかつたり、ひとりになるのをいやがる	14	16	30
問5	震災後に始まったおもしろい、おもしろいがある	7	3	10
問6	地震を思い出させるような場所や物を怖がる	8	8	16
問7	なかなか寝つけなかつたり、うなされたり、夜中によく目をさます	4	5	9
問8	必要以上におびえたり、小さい物音にもびびりしたりする	4	6	10

質問項目

	質問項目	男	女	計
問9	トイレや風呂に、戸を開けたままでないと入れない	8	16	24
問10	そわそわして落ち着きがなかつたり、集中力がな	14	6	20
問11	甘えや、わがままなど、注意をひくような行動が目立つ	15	10	25
問12	自分でできることでも、なにかと手助けをしてもらいたがる	14	18	32
問13	表情の動きが乏しくボーンとしている	3	2	5
問14	学校でもひとりであることが多い	2	0	2
問15	友達関係のトラブルが多い	5	5	10
問16	ちょっとしたことでイライラしたり、腹をたてたりする	20	16	36
問17	乱暴な行動が目立つ	8	4	12
問18	学校に行きたがらない	3	3	6

S.M. 女子

被災度：一部損壊

該当項目：地震を思い出させるような場所や物を怖がる

自由記述：

子供は、当時の事は覚えていませんが、1年の時に学校で震災の勉強をしたらしく、私にいろいろ聞きますので、震災の事について教えました。それ以来少し怖がるようになりました。私は当時のことは思い出したくないし、震災関連のテレビは見ないようにしていました。時々、テレビで地震に関するテロップがながれると、娘は心配して、「どこ？」「遠い？」「大丈夫？」と聞くようになりました。

N.Y. 男子

被災度：全壊

該当項目：4親から離れたがらない、ひとりになるのをいやがる
6地震を思い出させるような場所や物を怖がる
9トイレや風呂に、戸を開けたままでないと入れない

自由記述：

小学5年の姉もですが、一人で2階にあがりません。昼間は平気ですが、夕方からは絶対といっていいほどで、電気をつけても怖がっています。つぶれた2階のインパクトが強いのかもかもしれません。

でも家でも学校でも元気です。

心配なことは、学校とかで震災とかの話の時間、自分の記録を消そうとしている所が多少あります。

H.A. 女子

被災度：損壊なし

該当項目：11甘えや、わがまま、注意をひくような行動が目立つ
16ちょっとしたことでイライラしたり、腹をたてたりする

自由記述：

当時一歳半だったのと、このあたりは被害も少なかった
ので、子供は全く覚えていません。小学校で1月17日の事
を学習する機会があり、知ったようです。子供は大丈夫で
すが、私の方がいつまでも引きずっています。

N.Y. 女子

被災度：損壊なし

該当項目：12自分でできることでも、手助けをしてもらいたがる

自由記述：

ほとんど震災の記憶もなく、反対に学校で勉強してきた
震災のことを、人ごとのように話をします。当時一年生の
兄は、記憶がはっきりしていて、いろいろその当時の事な
ど、「僕は後まわしだった」と話します。

Y.Y. 男子

被災度：損壊なし

該当項目：10そわそわして落ち着きがなかったり、集中力がない
11甘えや、わがままなど、注意をひくような行動が目立つ
15友達関係のトラブルが多い
16ちょっとしたことでイライラしたり、腹をたてたりする
17乱暴な行動が目立つ
18学校に行きたがらない

自由記述：

家屋、家具、けがなど、被害はほとんど受けなかったの
ですが、時々TVなどで見る震災の時の映像や、震災関連
の読み物を読むと、胸が苦しくつまるような感じになります。
夜一人きりになったり、主人の帰宅が遅くなって、子供と
自分だけになるととても怖い。不安になる。震災のことあ
まり思い出したり、人に話したくない。

F.H. 女子

被災度：全壊(焼失)

該当項目：6地震を思い出させるような場所や物を怖がる

自由記述：

震災時、火につつまれ、あたり一面まっかでした。子供
本人は見えていないが、そのあと、自分の家がまっくらこげ
になっているところを見た。まだ震災時にもえた前の家(マ
ンション)にははいらない。近くにはよれても、入ろうとしな
い。
火事や、コンロの火など、少し火に対してびんかんに反応
する。

N.K. 男子

被災度：半壊

該当項目：6地震を思い出させるような場所や物を怖がる
7なかなか寝つけなかったり、うなされたり、夜中
よく目をさます

自由記述：

震災の特集の番組や予告が画面に出るとすぐ消す。毎
日元気でよく遊び、友達とも楽しくつきあっているし、学校
でも勉強も態度も何も問題はないと言われますが、時折、
夜、「今日悪い子だったから、夢の中で黒い人たちが追
かけてくる。又地震がおこるの？何もかも悪いことは僕の
せいなの？」と泣き出して起きてしまうことがあります。毎
日、表面上何も心配なことはないのに、こんな事を言うな
んとどがくぜんとします。

結果

- 全壊群の平均該当項目数は他の群に比べ多
かった。
- 項目該当率は、「イライラしている」(32.1%)、
「手助けを求める」(28.6%)「一人になるのを
嫌がる」(26.8%)の順に多く見られた。
- 「地震を思い出させる場を避ける」は14.3%が
該当すると答えた。全壊群に限ると、その該
当率は31.3%であった。
- 「小さな物音にも驚く」は全例では8.9%、全壊
群では25%の該当率であった。

PTSDは

- 存在を否定されるような恐ろしい体験が
- 様々な形で思い出されてしまい
- 恐ろしい体験をした場所、感情、社会、人間関係を避けるとともに
- 常に緊張し身構え続けるために
- 通常の生活が妨げられるようになった状態

発生の要因

- 災害の性質
- 災害後の支援体制
- 個人的要因

災害の性質

- 人的災害(犯罪被害)⇔自然災害
 - 予期された⇔突発的
 - 繰り返される⇔単発
 - 喪失体験
 - 身体的外傷
 - 生命的危険度
- 災害発生の時間帯

災害後の支援体制

- 家族機能
- 大人の反応
- 社会状況
- 教育

個人的要因

- 年齢
- 性
- 自己評価
- 災害前の適応
- 災害前の外傷体験

発生の要因

- Loniganらは、同じハリケーンの被災者の調査から、PTSDの兆候の出現の要因として、被災の大きさに加え、被災後の生活状況の悪さ、親の庇護の乏しさを挙げている。

年齢性差

- Shannon: 1989年のハリケーンの被害から、5年生から11年生6000人の5.42%が3つのカテゴリーすべてを満たしたという。(広域の調査のため、被災程度にばらつきがありすぎる)この年齢幅の中で、低年齢、女子の占める率が高かった。
- Burkeら: ブリザードとその後の洪水の被害者である6・7歳の児童の調査では、不安のレベルは男子に高い。
- 性差に関しては、少なくとも低年齢になれば性差は目立たなくなると考えて良いだろう。
- 低年齢の方が、反応を示しやすいとも言える。

PTSDの治療と予防

- 安全の確保
- 教育
 - 災害に対する反応を知る
- 保護者に対する心理的援助
 - 子どもの安全、安心を支える役割
- 子どもに対する心理治療
 - 安全な場での感情の表出

災害はこどもの心に何を残すか

- 受け容れてくれる安全な場所がない
- 生きる価値がないと宣告された
- 自分には対処する力がない
- 生きる意味を揺るがす
 - 安全基盤の喪失
 - 無力感
 - 自尊感情の揺らぎ

回復に必要なこと

- 安全と感ずること
- 受け容れられていると感ずること
- 自分が異常だと思わないこと
- 自己評価を低めないこと
- 自分に出来ることがあると感ずること
- 復興の道のりを共にたどること

災害後の援助

- 保護者への援助
 - 災害への反応の理解
 - 保護者自身の被災体験への援助
 - 生活への援助
- こども達への援助
 - 安全感の回復
 - 存在価値の回復
 - 日常の回復
 - 遊び場の提供

長期にわたる精神保健

- 子どもたちの示す反応は、地震との関係が不鮮明になり、日常生活の問題として取り扱われることが多くなる

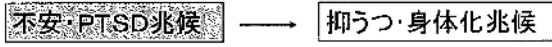
■ 災害後の精神保健



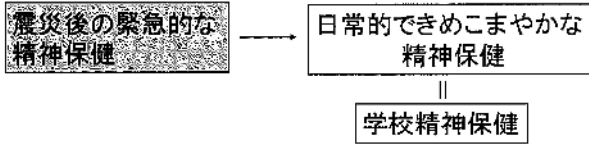
- 子どもたちの成長を支える、精神保健の視点

長期にわたる精神保健

兆候の変化



精神保健の視点



東日本大震災下における
保育にかかわる日本保育学会役員の見解

東日本大震災下における保育に関わる日本保育学会役員の見解

(五十音順)

アンケート質問内容

(平成 23 年 4 月 24 日実施)

- 1 災害時、災害後の保育の経過と課題
 - ・ 地域全体の保育状況と課題
 - ・ 地域保護者からの要望等
- 2 日頃の防災教育・保育訓練の有効性、また非常時に現れる日常的保育の重要性など
- 3 放射能問題への保育現場の取り組みと課題
- 4 現在及び今後の、保育関係への災害支援に関する意見、要望
- 5 保育施設や保育の在り方、保育者の専門性、保育行政、地域連携等に対する、この度の災害体験に基づく提言
- 6 その他

意見 1

(日本保育学会名誉会員 阿部明子氏)

時宜に適した調査を有難く存じます。

新潟地震のあと、保育現場の方々と問題点を話し合ったこと思い出しました。津波については全く話題にはなりませんでした。

1 防災非難訓練の時、子どもたちは身近にいる保育者ではなく担任を探してそのもとに集まるので、日常から保育者のチームワークをとると共に数名の保育者との関わりを密にとっておかななくてはならない。

2 地震の時、机の下に入れ、その上からコタツ蒲団を1-2枚かけると落ちてくる物やガラスの破片を防げるし、多少の空気が保持できるので保育室近くに用意したい。

この2点が特に印象深く記憶されていますが、実際的な行動を話し合っていきたいとつくづく思います。子どもの習性をよく把握して…。

意見 2

(日本保育学会名誉会員 岡田正章氏)

まず第一に、今回の大震災により亡くなられた多くの方々のご冥福をお祈り致し、また残されたご家族の方々にお悔やみを申し上げます。

以下、今回の「東日本大震災」ではなく、今から47年前（昭和39年）、私が厚生省児

童家庭局に初代の保育指導専門官に就任し、その時、保育指導専門官と併せて東京宝仙学園短期大学保育課の教員を兼ねていましたが、その年に日本海東縁変動帯で発生した地震がありました。その地震は、私が宝仙学園短期大学の校舎の2階の教室で授業していた時で大分揺れました。学生を校舎から外へ出そうかと思った程でしたが、まもなくおさまったのでそのまま授業を続けました。

地震のあった日からまもなく、この日に東京と同じく地震のあった新潟市内にある保育園を訪問する機会があり、地震のあった日の様子を保育園の先生から伺いました。その時の印象が非常に強く、また貴重なことと想っていたことがありましたので、以下、その時のことをただ記憶によるものですが思い出して書くこととします。

その時の地震は震度5でのかなりの揺れでした。先生方はそれぞれ担任の子どもたちを安全な場所に誘導することを予め園として打ち合わせをしておられました。今回は園から歩いてすぐの丘に向かって秩序正しく歩いていった。このことを担任の先生たちは、子ども達の保護者もなさって下さることでしょうが、園から遠方の住居の場合は、所要時間的に困難であるそうした状況のなかで、園に近隣の園児外の方の方が、子どもたちの安全のために献身して下さることには感謝されました。しかも、これも平素の保育園の子ども達・先生達登降園また保育園の諸行事などのとき、日常적으로ご挨拶し、また必要に応じて話し合われ、あたたかい人間関係ができていることによるものと思われる。子ども達にとって貴重なプレゼントであり先生方に敬意を表したい。

ここに考察した園・その先生達と園に近隣する居住する方々とのよい関係は、正に地域に支えられる園として高く評価したい。

意見 3

(日本保育学会名誉会員 小川博久氏)

東日本大震災が日本や世界に与えた衝撃は計り知れない。

ここから考えねばならない問題は大きく二つある。

一つは、今、幼児のために考えなければならないこと、もう一つは近未来にかけて、この震災がわれわれに提起している問題である。

前者では、今、日本全体がこの災害から立ち上がろうと必死である。何よりも大人の生活をどう維持するか、経済活動をどう建て直すか、そんな状況の中で弱者である老人や子どもへの、目の向け方は薄くなることも十分にありえるであろう。それゆえこの非常時において、弱者である幼児の生存やその条件に対し、できるかぎり目を向けていくにはどうすべきか、という現点から被災地の幼児の生存条件をどう守るべきかを考えること、特に放射能の被害に子どもほど受けやすいと聞く。それをどうしたら防げるかを心身両面から考えること、

後者は、この度の震災がもたらした長期的な影響についてである。

その第一は、われわれの高度に発展した科学技術に依存した文明と社会の在り方はこのままでいいのか、大古から不変なものとして続く自然の摂理（地震や津波を含めて）に対する見直しの必要はないのか。日本人が伝統的に持ってきた自然と折り合いをつける生き方や知恵は、地域の伝承として残って行く。その知恵を守った人が生き残ることができた（例：津波がきた山へ逃げろ）、今改めて、教育や保育の面でそうした知恵を学び直す必要はないかという点である。

第二は、このたびの震災で、人々が助け合い秩序を守って生きるすべを考えるという日本人の良さが世界に認められた、そうした連帯の教育、人と人との絆の教育を幼児期からとらえなおすべきである。しかし他方には、東電や原子力保安院など日本の指導層の官僚主義的無責任体質を温存する日本人の批判精神の無さも露呈した。連帯しつつ、しっかりと批判しあう民主主義的資質養成を幼児期から始めなければならない！！

意見 4

（日本保育学会評議員 児島雅典氏）

震災地の現状として保育所や幼稚園が運営できなくなっている所も少なくないと聞く。建物そのものが流されてしまった、子どもが少なくて、先生方の給料が払えない、保育者がいない、再就職先がないなどさまざまな問題があるはずなので、その対応が急がれる。学会として支援できることはないか検討の必要性がある。

放射線に関しては分からないことが多すぎる。大人のレベルで生活に支障がないとされているが、乳幼児にはあると思われる。現状では症状に表れていないとしても、長期的には発癌率が高まったり、甲状腺やリンパ系に問題が潜在する可能性も高い。実際、イラクやオーストラリア、ウイグル地区では放射線の問題があり、癌の発生率が高いことが知られている。したがって、保育学会としてもできるだけ放射線量と乳幼児への健康被害との関係を明らかにするよう国に要請するべきだと考える。

義援金に関しては現在、多くの個人団体が努力している。早速、保養協も保育学会も行動を起こしているが、少し時期をずらして継続的な支援を考えてはどうだろうか。打ち上げ花火的に一次的に実施して終わりではなく、継続的な支援を考えていただきたい。

義援金に限らず衣服などの生活物資の支援も考えたい。服、下着、靴、紙、おむつ、ペン、おもちゃ、イス、テーブル、はし、食器、布団、毛布、座布団などもひとつようであると考え。

意見 5

（日本保育学会名誉会員 小林美実氏）

現在、新潟市の郊外、高齢者が多く住む地域に居住していますため（家の事情もあり）

現場との接触も殆どできず、このアンケートも、あまりお役に立つ様な意見も書けません。悪しからずお許しください。昭和 39 年（だったと思います。）の新潟市地震の時のことなどを思い出して少し書いてみます。

今回、関東でも液状化現象が起きている。新潟市は信濃川の三角州地帯にあり、又、周辺は稲作のしかも水の多い田だったので、地震の時、噴水のように水が地割れから吹き上り、私の知る私立幼稚園では、子どもたちをどこに避難させるかパニック状態になったときいた。普段から保・幼ではよく訓練しているが、どこも同じやり方でしている。（外に出る、避難場所へ行く）実際には、訓練の通りいかない。その土地がどの様な所だったのか。どの様に造成された所なのか。行政にはその資料があるはずですが、知っておく必要があるのでは。

新潟でも相当遠い距離をバスが走って子どもを集めている。東京では自家用車で園に子どもを送り、そのまま出かける親も多い。保育園では、働きに出る親が多い。今回の様な災害時どうするのか。連絡網をつかって親を集めることも不可能に近いし、道が混雑して迎えにも来られない最悪の場面を想定外とは、もう言えないだろう。小規模園は何とか出来ても、何百人も園児のいる園はどの様な対策を平素から考えておけるのか。普段から地域の人との交流が密であれば、手助けを頼むことも可能だろうが、日本の園（特に私立園）は、地域から離れている様に感じる。園児の親でないまわりの人との関係をどう築いておくか。（海外では、まわりの人、特に老人などが、普段遊びに来ていたりする。自由に出入りしていたりする）

余震が多く、その度に子どもたちが不安になっている、とある保育者からきいた。心のケアと言うけれど、幼児の場合、専門家よりもいつも身近にいる保育者が子どもに寄り添って安心させることだろう。ただどの子どもも同じことに怯え、同じような恐怖感をもち、同じ反応をするわけではない。それを一番よく受けとめられるのが母親と保育者だろう。私の経験ですが、未だに私は、ボーイングの飛行機のエンジン音と、蒸気機関車の汽笛が恐い思い出の一つになっています。同じ災害にあっても、人それぞれトラウマになるものは違うことを知ってほしい。それはなかなか喋れません。原爆にあった人と同じです。察してあげてほしいです。

保育者養成にも、災害の多い国の幼児教育の一環としてカリキュラムにおいてほしいです。但し、基本的なことは、災害、防災に対する知識（原発、地震）は勿論ですが、体力、判断力等も、保育者をめざす学生たちですから、当然人に対する思いやり、やさしさなどはあると思いますが。

地震直後からの水不足。乳児保育をしている園では、水の確保が大変だったようだ。新潟のこの辺りも、一時スーパーからも水が消えた。保・幼でも水の問題は重要。行政まかせには出来ない様に思う。

意見 6

(日本保育学会名誉会員 角尾 稔氏)

(1) 施設・設備の安全点検と補強・修理、園舎の安全点検・補修

専門家の意見を聞き、必要事項を衆知徹底しておく。

土地の安全性 地形ならびに 地表の土砂の安全を検討しておく。

避難方法、避難場所等、園内で共通理解しておく。

必要な範囲で、保護者と共通理解をはかりつつ、保護者に連絡がとれなくなった場合の連絡先(第二 保護者)を明らかにしておく。

(2) 日頃の防災訓練に関して

平素から園児たちが安心して保育者の指示に従うようにしておくことが大切である。緊急の場合 担任保育者以外の教職員の指示にも従える様に幼児を含め平素から園内親和関係にも配慮しておきたい。

(3) 放射能問題の保育における課題・対策について

放射能に対して、乳幼児は敏感に反応する。現在政府の示している基準は、その正否が疑われている状況である。今後の学問的根拠の成果を期待している。早急に納得のゆく研究成果をあげて欲しいと、切に願うものである。

乳幼児に対しては、原子力災害が確実に防げる見通しがたたない所では 保育施設による保育活動は避けるべきと考える。

(4) 今後の課題

保育・教育に関連して保育者に対しては乳幼児のいのちを預かっている事の重要性を認識し時に応じて自らの命も共に護り通す持続的な意志と力を養っておきたい。

保育者の専門性の拡大について

状況判断刹那の決断など緊急時の対応の力の錬磨も専門性のスキルのひとつとして平素から磨いておく方策を考えておきたい。

行政や地域連携については、平時からの備えが肝要であるが、この際は、これら連携の絆を見直し、強固にする機会でもある。

また今回の災害に際しては TV・ラジオ からの情報が役立ったと思われるが今後は IT 情報機器を自分達流に使う事も考えよう。

例えば 保育・教育施設から災害情報を得たい時その体勢に IT 機器検討の余地はないか? 例えば、検索のマトをひとつに絞る事も考えられるだろう。容易く自園の状況(例、援助を求めたい等)を書き込めるシカケや他園の状況を一目で分るシカケ等も、状況によって必要であろう。伴って、情報機器操作に堪能な保育者が求められる。

(5) 災害時の反省を教訓として

今回の災害がもたらした数々の被害はこれまで想像もしなかった内容に及んでいる。東京文京区に住み比較的災害の少ない所でメールで知った事だけでも次の様である。

「11 日地震の際は未だ園児在園中であつた。園舎の揺れの激しさに驚き慌て園舎内の倒壊が心配で園庭に誘導し集め地震がおさまるのを早く終われと祈りながら待った。平生地震の際は机の下に---との誘導はそれだけでは不足と思つた」

保育園の保育士から。「11 日当日地震がおさまってから保護者との連絡がつかない幼児がいた。最後は夜 10 時過ぎにお迎えの保護者が園に到着した。所謂 帰宅難民になってしまったのである」各園夫々で災害を教訓に変えて見直しを始めてもいる。

震災対策 各園での検討の一例

『勤務している保育園では備蓄品や必要な物資なども話しあっています。食料品、オムツ、飲料水、すでに備蓄しているものもありますが、今回のような大震災を想定していないので、見直さなければなりません。また、連携機関、保護者への連絡方法など、電話などの回線が断絶した際どうするか、など。私自身、東北のような状況に陥った際、どう動くべきか、何をすべきか判断できるか不安です。』

今回の東日本大地震の経験から、できる限りたくさんのことを学び、将来に対する準備、いざという時の的確な判断、そして実行力を身につけておくべきだと思う。

意見 7

(日本保育学会名誉会員 田代高英氏)

福島原発事故は保育者に何を教えたか

私は福島原発事故は日本人が経験した「第3の原爆」と考える。

原発事故で最も恐ろしいのは「放射線被ばく」の問題である。

放射線被ばくによる健康障害は、すでに広島・長崎の被爆によって明らかである。原爆症と呼ばれる「骨髄性白血病」をはじめとする種々のガン、そして必ずしも原因が不明確な体調不良等々、原爆被爆者たちの多くは戦後60年経った現在も「放射線被ばく」の後遺症に苦しんでいる。この事実はわれわれに何を教えるのだろうか。

一つは放射線障害の恐ろしさ、とくに抵抗力の弱い乳幼児の影響の問題である。そして、もう一つは原発事故とは比較にならない大爆発力と莫大な放射性物質の発生する「原水爆」を現に多くの国が保有しているという事実である。

保育とは、先ず第一に子どもの健康と安全を守ることである。われわれは子どもを守るために今何をすべきかを問われているのではないだろうか。

意見 8

(日本保育学会評議員 西本 望氏)

1. 災害時、災害後の保育の経過と課題：これらについては現被災地当事者ではないので割愛。

・ 地域保護者からの要望等 ※かつての阪神・淡路の被災者の記憶としては記述可能。

2. 日ごろの防災教育・保育訓練の有効性、また非常時に現れる日常的保育の重要性など防災教育・保育訓練は、被災地からの放送では有効であったこととして視聴している。それを実施していた幼稚園や保育所、小学校などの学校では被害を少なくすることができたことが報告されている。

3. 放射能問題への保育現場の取り組みと課題

放射能に関する報道が、その代表例とも言えるが、しばしば放送関係者にとって都合のよい情報が、流されている傾向にある。したがって「想定外」などと科学者としては、あってはならない発言をする者・見解を排除し、確固たる信念を所持した誠実な研究者から、真実を示した情報を得られるようにすること。放射能の影響が残ってはならない子どもたちをその影響のないところに速やかに避難させること。

4. 現在及び今後の、保育関係への災害支援に関する意見、要望

災害支援も種々あるが、子どもについてはすでに実施されているのでその他については、①施設の災害：仮の施設での対応、運営可能なところへの委託など。②保育者の被災：保育者の一時的あるいは長期の派遣、保育可能な他園への委託・協力等。③休職中の教員免許状・保育士資格所持者の一時的な職務の実施：教員免許所更新講習受講者と各自治体での保育士登録者が原則であるが、人材が不足するときには、それらの受講や登録がなくても、何らかの一時的な認定措置をして職務を行ってもらう。

5. 保育施設や保育のあり方、保育者の専門性、保育行政、地域連携等に対する、この度の災害体験に基づく提言

保育施設は、地域の防災センターとしての機能を有すること。機能が果たせなくとも各保育機関は上記の防災教育・保育訓練を実施すること。保育者の専門性としては災害及び防災、さらには被災したときの対処が可能となる知識を有する高度な専門性を有すること。保育行政は、左記のことが可能なように、施設・機器・備品を準備でき高度な専門性を有する人材を採用できるよう潤沢な予算を準備することとそれを実施するための保育・教育課程を立案実施すること。地域連携では、幼稚園、保育所、こども園と医療機関、小暴騰防災機関、警察との連携を行って、日ごろからの保育・教育訓練に協力を願うとともに、非常時には救済要請の有無いかんにかかわらず、それらの機関が連携し救助・援助に当たるような制度にしておく。

〔I〕 具体的・見辺的な問題

1. 災害時の保育状況と関連する課題

①無事に避難し終えた保育所と犠牲者の出た保育所間の差異と今後の課題

イ. 宮城県名取市の保育所情報。

名取市ゆりあげ地区は、多大の犠牲者を出した地域であるが、海岸地区の保育所で、収容児・保育者全員が避難し終えた保育所と、隣接した保育所で犠牲者の出た保育所があったという（仄間情報）

後者は、乳児を多く預かっていたため、避難が遅れ、また、避難途中で、襲いかかる津波に抗しきれずに乳児を波に攫われた例もあるという。

ロ. 問題

乳児3名に保育者1名という現行基準は、平時は別として緊急時には対応し得ない。乳児保育の今後を考えると、設置基準の再検討が必要かと思う。保育者の増員が困難ならば、用務員その他の人手を増やし、あるいは近隣住民の手を借りる方法など、従来の危機管理対策を越えた施策を要求する必要があるだろう。

ハ. 避難所内での死亡

津波でぬれた衣服のまま、避難所の一晩を過ごした乳児のうち、体温低下による死亡事故が発生している。保育者は、肌をさらして抱きかかえ、自身の体温で温めることを試みたが、懸命な努力にもかかわらず生命を守り得なかったという。

このことは、避難所の備蓄物の在り方に関する新たな課題と思われる。

ニ. 学会としての今後の課題

・調査研究と個々に即した実態の解明

各保育施設における被災状況を、詳細かつ具体的に把握するための調査研究の実施。現場保育者を対象とした詳細な聞き取り調査などが望ましいが、それは、現場に対する協力姿勢で実施されねばならない。

・被災地保育への協力とそのため組織体制の策定

可能ならば、時を置かず現地入りして救援保育に協力しつつ、臨場感溢れる調査研究が実施されることが肝要かと思うが、そのための人材や資金が確保されて、保育NPO的組織が作られていくことが必要かと思う。

②避難所内での保育活動展開の可能性

避難所に逃れ得た保育者は、二三日は、命永らえた安堵感、あるいは犠牲者に対する痛恨の情によって、恐らくは呆然自失の状態であろう。

しかし、自己を取り戻した後は、避難所に様々な子どもが存在することに気付かれよう。例えば、恐怖に脅える子ども、感情を抑えきれずに活によって不安定になる子ども、自己を閉ざしてしまう子ども、など。

そんな彼らに、癒しの手を差し伸べ、ふさわしい援助の営みを展開することは、避難所内の保育者たちに可能な活動であろう。その機会を活用するためには、保育者の中に何が育っていればよいのかは、一つの検討事項であろう。

2. 防災訓練について

上記のように、緊急時には、保育施設の人手は十分ではない。日頃の防災訓練も自施設だけで行わず、近隣住民を巻き込む工夫が必要であろう。

3. 放射能関連事項

①正確な情報の伝達と共有

正確な情報の迅速な伝達の必要性は、改めて云々するまでもない。とりわけ、放射能汚染に対してもっとも無防備な乳幼児関連施設には、正確かつ具体的対策を伴った情報が迅速に伝えられる必要がある。ただし、徒に不安感に脅えたり、疑心暗鬼にかられたりすることのないよう、正確な知識を保持し、蓄積していることが重要となる。

情報は、施設の保育者内に限られず、保育児の父母、あるいは近隣住民との共有も必要となる。地域住民とともに、子どもを守るための対策が講じられることが望ましい。

親たちの間に流通する不確かな情報によって、日常に対する信頼感・安心感を失い、とかく不安定になりがちな子どもに対して、保育者自身が正確な情報を持ち、子どもに対する伝え手の役割を取ることは重要であろう。

②危険地域への対応と財政出動

危険地域と指定された地域に関しては、諸種の事情はあるにせよ、先ず、何よりも、乳幼児の心身の保全を中心に考える必要がある。「地域に止まりたい」「父祖の地の資産を手放したくない」など、大人の心情に左右されず、子どもの保護を第一に生活の方針を定めるべきであり、それに対する公的支援が必要となる。

「子ども手当の増額分を復興支援に当てる」とされているが、子ども向けに支出される予定だった資金は「子どもに焦点を当てた施策のための予算」として用いられるべきと考える。

〔Ⅱ〕長期的・巨視的展望

1. 今回の震災を契機としての展望

①国際化する復興支援と曖昧化する国境線

国境を越えた各国からの復興支援の現状を見ても、今や、日本の災害も日本国という閉じられた地域の問題ではないと知らされる。また、原発事故に象徴されるように、もはや一国だけで問題を処理しえなくなっているという現実を直視すべきである。とりわけ、狭隘な国家意識や地域意識に染められていない乳幼児の生活の場だからこそ、保育施設は、国境を越えた人間の生き方を模索する場となり得ることが期待される。

②狭隘化し不毛化する国土と人口問題

海底プレートの移動と地盤沈下により、国土の狭隘化と原発事故による不毛化が予

測される。こうした実情を踏まえ、資源の窮乏に対して、現在の「少子化に歯止めをかけ」「人力（労働資源としての子ども数の増大）」でカバーすべきとする見解が散見される。

しかし、国土の狭隘化と不毛を視野に入れるなら、徒に人口増を考えることの不毛さに気付くべきではないか。「日本の子ども＝国力の源泉」とする問題把握を、今回の震災を契機に一端停止することが必要かもしれない。労働力の問題なら、「女性・高齢者・外国人」でカバー可能であり、むしろ「少なく産まれた子ども」をいかにによりよく育て上げるかが問われるべきであろう。

2. 定住型からの脱却へ

住民の集団移動が懸案とされている。海岸近くの低地や放射能汚染地域から住民の安全を守るために、市町村単位の移住が話題とされ、その困難性も指摘されているのが現状である。こうした現状から見て、我が国が伝統的に保持してきた農耕型定住生活の限界を視野に入れてみるべきかも知れない。

こうした生活基盤の流動性を踏まえて、子どもたちにも「流動型生活スタイル」が要求されてくるかも知れない。彼らもまた、住み慣れた地域や慣れ親しんだ施設への徒な執着心を捨てて、新しい地域や新しい隣人とのよい関係を構築し得る柔軟な心性を獲得しておく必要があるだろう。

子どもは、「保護され用意された安全な環境」と「身近な親しい人々（例えば家族・慣れ親しんだ保育者・友人）」のなかでのみ、「健全に育ち得る」とされてきた「保育のあるべき姿」も更改の時を迎えているのかも知れない。

復興支援とは、単に「旧来の暮らしを取り戻す」ことだけではなく、今回の出来事を踏まえて、いかに「新しい暮らしを作り出すか」ということに他ならない。このことは、子どもの保育・教育に関しても、同様に重要な課題となる筈である。先ず、「子どもの生活から」、そのための設計図が描かれるよう切望する。

家屋が流出し、あるいは、家族の誰かを失うという今回の災害は、子どもにとっても大人の場合にしても、最大の悲劇であることは疑うべくもない。しかし、この悲劇を、「安全な囲いとしての家」「親密な人間関係の原型としての家族」を保育環境の当為とする従来の幻想からからの解体に機能させ、より多様でより新しい方向への脱皮の契機となし得るならばと期待している。

〔Ⅲ〕日本保育学会への要望

今年度の学会で「東日本大震災」が俎上に挙げられることを歓迎する。しかし、五月下旬という対応は、いささか「遅い」との感もあり、今後、このような状況にすばやく対応可能な「組織」の存在が必要とされるのではないか。今後の検討事項の一つであろう。

意見 10

(日本保育学会理事 山崎 晃氏)

1. 災害時、災害後の保育の経過と課題

・地域全体の保育状況と課題 ・地域保護者からの要望等

→広島は今回の災害地とは距離的に離れているために、ほとんど動きはありません。日常会話では話題になりますが、それ以外ではなかなか深まった議論はできていません。従いまして、震災前後で保育状況や課題、保護者からの要望は上がっていない（拾い上げられていない）状況にあります。しかし、災害はいつどこで発生するかわからないことを考えると、具体的に災害の種類とそれに対する対策を少しずつでも検討し対応する心構えが必要だと痛感しています。

2. 日頃の防災教育・保育訓練の有効性、また、非常時に現れる日常的保育の重要性など

→防災教育や避難訓練は有効だと考えます。幼い子どもであればあるほど、経験が少ないので繰り返し教育や訓練を行うことが必要だと思います。実際に行われている訓練は火災などに対する避難訓練ですが、保護者を巻き込んだ災害対策マニュアルなどを整備し、機会あるごとに幼児や保護者に対する訓練をすることが大切だと思います。

3. 放射能問題への保育現場の取り組みと課題

→保育者として正確な情報を得、それを適切に評価し、乳幼児の保育を考えていく教育を保育者養成カリキュラムに位置づけると共に保育者の教育（研修）がきわめて大切だと思います。放射能については、広島においても過去のことで、現実に今それについての対策はほとんど考えられていないようです。「原爆」との関連で考えられることはあっても、今これからのことについての取り組みをしているところは少ないように思います。

4. 現在及び今後の、保育関係への災害支援に関する意見、要望

→情報の提供や研修会の開催、災害時の時系列的支援の仕方など、今回の大震災及び津波による被害を教訓にした保育者ができる乳幼児保育支援プログラム、保護者支援プログラムなど、情報を様々な方法で提供する機関がある良いのではないかと思います。

意見 11

(第64回大会事務局長 若月芳浩氏)

1. 預かり保育の子どもと課外活動の園児30名程度が在園しており、震災時は防災頭巾を身に付けて全員が園庭に避難。けが人は無し、園児は比較的落ち着いた状況で避難。

課題 園児が少なかったから混乱は無かったが、教職員も揺れの凄さに驚き、かなり困惑した。特に長かったために、地震が止まってからどのタイミングで入室するか、残る子どもの保護者への伝達が電話が使えないため混乱した。全員の親が無事に迎えに来たため、帰宅は出来た。防災訓練はしていたものの、引き取り訓練を実施していなかったため、年

に1～2回は実施すべき事項。また、電話が使えないため、連絡が取れなくなることを想定した対応が課題となった。

地域保護者からの要望

・災害時のマニュアル等を徹底して欲しい。 ・連絡にメールを導入して欲しい。(23年度～導入)

・園舎の耐震が不安(平成17年に耐震補強済) ・園での備蓄は大丈夫か (23年度から3日程度の備蓄を開始、水と食料、毛布など)

2. 防災教育は特に実施していないが、防災訓練の効果は明か。とても落ち着いて避難することが出来た。

通常遊びを重視した保育を展開している中、保育者主導の場面は多く無い保育を展開している。しかし、訓練と称する非日常的には、サイレンやベル、笛など、こどもの注意を喚起することが可能となる。日常と非日常のメリハリが子どもに危機を伝えるために非常に重要であると感じる。

3. 放射能については、保護者の心配が第1である。当園では、4月の始業時から水に関しては水筒を持参してもらっている。水の心配がある地域では無いが、一応園の配慮として考え、実施している。

幼稚園の管轄部署からの通達や配信される文書に、保護者に伝達する必要性のあるものについては出来るだけ配信している。また、HPに文書が見られるように工夫している。

4. 具体的な要望をどの窓口で受けて、どの窓口が発信しているのかが理解し辛い。知人などを通しての情報しか得られないので、全体の状況が把握できないため、支援にもかなりの温度差がある。支援したい気持ちがあっても、それが実現できないジレンマがある。

5. 命を守る責任と日常の意識がとても大切である。幼稚園は地域の災害拠点の一部を担う可能性があるため、財政的な支援が欠かせない。しかし、この点については改革が求められる。

その他のご意見

その1

1. 被爆による被害は想像もつきません。長期の健康診断・治療体制などが必要でしょう。また、外出禁止・制限により、子どもたちの遊びが長期にわたって厳しく制限されます。どうすればよいかは全くわかりませんし、対応が難しい問題でしょうが、子どもたちの心身の健康がとても気になります。
2. 保育関係の情報収集(安否、被害状況)が行える体制をもっと迅速に立ち上げる必要があるのではないのでしょうか。また、何かできることはないかと思いつつ何をしたらよいかわからないのでとりあえず義捐金を送りましたが、保育再開に向けて緊急に必要な

物資などについての情報収集と有効な提供体制があれば、そういう支援もできるかと思われます。親・親族・知人・友達を亡くした子どもたちの多面的なケアが切実な課題です。それを行いうる専門家（チーム）、ボランティア組織の養成が求められると思われます。

3. ①今回は津波による被害が甚大であったと聞きます。海岸に隣接する保育園・幼稚園の立地を、安全かつ迅速な避難が可能という観点から考える必要があるように思われます。また、避難時の人的援助体制（地域の中に）を確保し、園内だけでなく地域の方たちと合同で日常的な避難訓練を行うことも必要かと思われます。

②多様なケースの「保育に欠ける子」の受け入れ、保育の継続が可能になるよう、運営費の弾力的交付、職員の雇用継続、臨時的職員雇用などが求められます。今回、その人的余裕がないため被災地支援に職員を派遣することが難しかったという声を聞きました。その実態を調査し、いざというとき被災地への広域的職員配置も可能になるような職員の雇用が必要ではないかと思われます。この件について、阪神淡路大震災の時は1週間後に、事務連絡があったと聞きます。それに比べると、今回の政府の対応は遅れているのではないのでしょうか。大きな不安を抱えて復興に取り組む住民を支え励ますためにも、もっと迅速な対応が求められます。

その2

対策について

各園でもういちど対策をたてなおす。そのうえで訓練など定期的に行う。

親との連絡など実際にやって練習を定期的に行う。

被害のあった園のようすから参考になる点を学ぶ。

被害が出なかった園から、なぜ被害にあわなかったのかを聞いて参考になる点を取り入れる。

学会員からの報告事例・報告・意見等

被災3県の概要

1. 岩手県・宮城県

2. 福島県

1 岩手県・宮城県

1. 事例報告の概要

本調査において寄せられた回答の中には、岩手県および宮城県内における具体的な保育事例が10例含まれていた。岩手県については（事例1～6）、3例が幼稚園であり、3例が保育所であり、うち2園が沿岸部の保育所であった。宮城県については（事例7～10）、3例が仙台市および近郊の幼稚園および保育所であり、1例が沿岸部にある障がい児施設であった。

本節ではこれらの事例を概観する（表1）。

①本震までの状況

多くの園では、お帰りの時間または午睡中の時間であった。事例7、事例8はいずれも幼稚園のお帰りの時間。第1のバスが発車し、次のバスが発車する直前もしくは乗車を待っているところであった。事例4、6、9では午睡中。事例6では年長児は卒園記念の製作活動中、年中児以下は午睡中であった。事例9では、子どもはほとんど眠っていた状況であった。事例10では子どもたちの下校後、おやつ準備中であった。事例2のみが全ての園児の降園後であり、この園では職員のみ避難で済むこととなった。

②本震時の状況、被害の程度

本調査において寄せられた回答の中には、建物等に大きな被害が生じたという報告は得られなかった。事例6では、地震対策をしていたはずの暖飯器が落下し、天井の換気扇が外れ、壁や天井などに亀裂が生じた。事例9では天井の照明が落下した。他には特に被害の記述がみられないが、「園舎がきしみ、左右に揺れ動く（事例2）」、「ミシミシと大きな音で建物全体が揺れ（事例6）」、「地響きがしたり、建物がきしむ音が大きく声が聞き取れないほどであった（事例7、8）」といった記述から、相当大きな揺れであったことが想像できる。

沿岸部では、本震後の津波の被害がきわめて大きいものであった。岩手県の実例（事例4、5）では、一部の園児と職員とが津波を避け高台などに避難したものの、避難前に家族とともに帰った一部の園児が津波に吞まれ、命を失っている。宮城県の施設（事例10）では、その施設の人的被害、施設の被害は少なかったものの、当該地域の津波被害が大きかったため、2晩にわたる車中避難を余儀なくされた。いずれの例も、保育の状況としてはきわめて厳しい、前例をみない事態であったことが示されている。

③本震後の対応と、子どもの様子

起きていた子どもたちは、机やテーブルの下へ避難した。事例6では、製作活動をしていた年長児は保育者の指示によりテーブルの下へ避難した。揺れが落ち着いたのを確認してから、園庭に全員を避難んさせている。寒さが厳しく、雪が降ってきたので、送迎バスと職員の自家用車に園児を乗せて待機させた。事例10では、机の下に避難させた後、同様に揺れが落ちてきたところで外に避難している。テラスで待機し、雪が降ってきて寒かったので毛布やジャンパーなど重ね着させたという。

お帰りの時間の最中であった園では、園庭にいた子どもと保護者に対して、建物から離れて園庭中央に集まるように指示しながら、職員が園舎の見回りをしたと報告されている（事例7）。お迎えの保護者がいて、保護者が子どもを探しに園舎に入るなどしたため、避難訓練どおりには行かず、大声で指示

を出すなど統制に苦労した様子が示されている。

宮城県では以前から、近い将来に大規模な地震が生じるとの予測がなされており、大地震を想定した訓練などもしばしば行われてきた。そのためか、園によっては子どもにも心構えができており「あ、これが来る、来ると言っていた宮城沖地震」などと、落ち着いて行動できたとか（事例8）、防災頭巾をかぶることに抵抗がなかった（事例9）、といった記述もみられる。

午睡中であった園では、布団などをかぶせ揺れが収まるのを待った。事例4では、布団をかぶりじっとして揺れがおさまるのを待ち、その後に園庭の第1避難所に移動した。事例6では、保育室の中心へ子どもたちを集め保育者が囲み、布団を頭からかぶせた。事例9では、1階のそれぞれのクラスの部屋で寝ていた0～2才児については子どもを集めて布団をかぶせ、テーブルの下に隠れた。子どもたちは比較的落ち着いていて、嫌がる様子はなかったという。2階のホールで寝ていた3～5才児は全体に落ち着いており、うち3才児2名が不安で泣き出したという。いずれも本震が収まった後で、園児のパジャマを着替えさせて、避難公園へ誘導している。

④避難状況と、子どもの様子

岩手県沿岸部の2園（事例4、6）では、津波を避けて高台などに避難したが、保育者とともに避難した園児は全員が無事であったものの、避難前に家族とともに帰った一部の園児が津波の被害を受け、命を失う事態となった。

事例4では、迎えに来た家族に園児を引き渡した後、職員が津波の土煙を発見し、残った一部の園児と職員とで高台に走って避難した。津波が迫ったが、近所の方の励ましと援助で何とか逃れることができたという。園舎は津波により壊滅し、瓦礫の山となった。保育者と共に避難した園児は無事であったが、避難前に家族に引き渡した園児のうち、10名が家族とともに津波の被害を受け、命を失ったという。

事例6では、「津波が来るぞ～！」の叫び声により、残った園児30名と園舎よりさらに高い場所に避難した。保育者とともに避難した園児は全員無事であったが、避難前に引き渡した園児1名が家族とともに津波の被害を受け、命を失ったという。

津波の被害を受けなかった園においても、家族のお迎えを待つ間、子どもにとって厳しい状況が続いたことが読み取れる。

送迎バスなど、車のなかに2次避難した例は4例あった。事例6では、揺れが落ち着いたのを確認後、園庭へ全員を避難させた。寒さが厳しく、雪が降ってきたので、送迎バスと職員の自家用車に園児を乗せて、午後のおやつを食べたり、絵本を見たりしながらお迎えを待った。子どもたちは多くの余震に怯え、0～1歳児はその都度泣きだす子どももいたという。その間、保育者は出来るだけ子どもらが心落ち着いて過ごせるように、子どもの側について一緒に過ごした。

他には、雪が降ってきて寒かったため、車中で暖をとったという記述もみられる。電気などは止まったので、車のライトやラジオを活用したという例もあった。食料や水は、園で備蓄されたものや、職員が避難所からもらってきたものでしのいでいたようだ。

事例10では、避難所への避難は（自閉症の児童）無理と判断し、当日は保護者が迎えに来られなかった2名の児童とともに、送迎用ワゴン車で当日の夜を過ごした。児童は比較的落ち着いていたという。

全ての園児の降園後であった事例2では、職員のみ避難であった。保育中であつたらと考えると、避難訓練の大切さ、職員一人一人の危機意識と共に、瞬時に対応する判断力が大切なのではないかと思つたという。

⑤保護者との連絡、お迎えの状況等

ほとんどの施設において電話は携帯も含め不通で、保護者など外部との連絡が取れなかつたとみられる。災害伝言ダイヤルも全く繋がらなかつたという。従つて、電話が通じることを前提とした連絡網も機能しなかつた。

一方、携帯などのメール機能の一部は、早い段階から使えたこともうかがえる。事例6では、災害時の緊急メールのシステムを導入していたため、すぐに園児の無事と迎えの連絡を保護者にすることが出来た。緊急メールが送れない保護者数名へは、職員携帯電話により連絡を試みるが、つながらず、最終的にショートメールの送信などにより全保護者へ連絡が取れたという。事例7では、保護者同士のメールのみが使用できていたということで、安否情報を保護者にチェーンメールのように回してもらうようにしたという。電話が携帯を含めて不通であっても、メールは利用できていたという報告は福島県内にもみられる。これは、今回の震災における特徴のひとつであると思われる。

保護者との連絡が取れなかつた園では、保護者の迎えがあるまで園児とともに待ち続けるほかなかつた。当日のうちには、保護者が迎えに来ることが出来ないという例もみられた。事例4では、避難した34名中20名が当日中にお迎えがなく、近くの老人施設で一夜を過ごした。事例5、7、10でも当日は迎えに来ることができなかつた保護者がいた。事例10では、地元FMラジオで子どもが無事の旨放送してもらつたうえで、保護者の到着を待ち続けたという。保護者が到着したのは3日目であつた。交通手段も途絶えていたために、FMラジオ局への安否の連絡や放送、支所庁舎との連絡などすべて徒歩で行い、施設が孤立することを防いだという。

以上をふまえ、今後はこのような状況では園のなかで自立して生活しながら保護者との連絡が取れるのを待つことができるよう、ふだんから態勢の整備をしておく必要があるとの感想も寄せられている。

⑥復旧までの状況

調査時点においては、まだ復旧と呼べる状態ではなかつた園もあることが伺える。仮の園舎で保育を受けている例(事例4)や、仮設トイレの使用が続いている例(事例1)、電話などライフラインがまだ復旧していない(事例2、6)が報告されている。

また、園児を預かるという本来の機能以外にも、地域の避難拠点の一つとして、園舎や園内の物資が活用されたり、園の職員も避難所の手伝いをするなど活躍した例もみられた。事例1では、津波で園舎が流された他の公立幼稚園と同居し、園内1室には特別支援を要する子どもたちの教室も設置されている。このため来園者、関係者、ボランティア等、人の出入りが大変多く、対応に迫られたという報告が得られている。事例2では、園内にあるマットや布団類、電池や懐中電灯などの物資を避難所に運び出したり、避難所の手伝いを行っている。他にも、6日間、園を避難所として保護者に開放、食事を提供するなどした例(事例7)や、障がい者対象の避難施設として使用した例(事例10)もみられた。

ある報告では、「たとえ法人立の職員であっても、保育園を出れば、避難所などでは准公務員のように見られる。職場で働いた後、避難所に帰りプライバシーのない生活を強いられる中、さらに公共に奉

仕する役割も受け持たなければならない。私たちの保育園は、現地域に支えられて運営できている状態なので、保育者も時に地域を支える側に立たなければならない場合がある。その役割を果たすためには強い精神力が必要となる。災害時にはそのような精神力が保育士に求められると考える（事例5）」と述べられている。このような思いは、おそらく今回被災した園の保育者にとっては、共通して実感されたことではないだろうか。他にも今回は、震災翌日から炊き出しに出たり、自分の家の片付けもままならない状態で、遅くまで園に残って片付けを続けた、などという報告がいくつかみられる。自分の園、自分の家だけに目を向けるのではなく、地域と一体となって、強い人道的な使命感を持って困難を乗り越えようとした様子が伝わってくる。

こうした状況は、子どもにとっても、そして保護者や保育者にとっても過酷であり、大きなストレスであったことは想像に難くない。

事例2、4、5では他県の児童相談所やユニセフから派遣されたスタッフの協力により、子どもたちや職員に対する心のケアが行われた。事例7では、臨床心理士を招いて、子どもの予想される行動や対応など、心のケアについての職員研修を行なうとともに、保護者向けの講演会も企画し、園と家庭双方で子どもの心のケアに当たっている。

保育者の心の負担感や、保育者に対する心のケアの必要性についての記述もみられる。「日々の保育、日々の生活だけで精一杯（事例1）」、「職員も精神的に参ってきたが、現在は少しずつ落ち着いてきている。保育者に対する心のケアも大切だと思う（事例2）」、「多くの職員は、仕事に没頭することで悲しみから逃れようとしている（事例4）」、「職員も同じで、家族や親族に犠牲者がいたり、家をなくしたりしている方が多い（事例5）」など、いずれも控えめな表現ながらも、保育者の心の重さが伝わってくるようにも思われる。「（臨床心理士などの）専門家が近くにいることの力強さを実感している」という記述もあった。早い段階での専門家の介入が求められていることを示していると言えるだろう。

一方、事例3には、ブログを活用して保護者との心のつながりを保った例が示されている。保護者宅への2度の家庭訪問の他には、ブログに記事をアップする方法をとった。記事の内容は、連絡事項以外にも、誰もいない園の様子や保育者の仕事ぶり、つまらないプライベートな内容など様々であった。1日千件を超えるアクセスがあり、保護者が何度か閲覧し、後に「励まされた」「子どもと一緒に見ました」などの感想が寄せられたという。緊急時だからこそ、普段通りの感覚を取り戻すことの大切さを強く感じたと報告している。

⑦保護者の要望、対応

宮城県の事例では、保護者から園に寄せられた要望や、その対応に関する記述がいくつか見られた。

保護者からの要望のなかでは、被災により保育料が払えない、給食を出して欲しい、職種に関係なく保育を受けさせて欲しい（職種が医師、看護師、保健師の仕事に従事している子どもを受け入れた）などのほか、放射能関連についての要望や質問も寄せられていたことが示されている。放射能関連については、子どもを外に出さないで欲しい、花の蜜を吸わせない欲しい、水筒を持たせたいといった要望や、園独自に放射能の計測を求める内容などがあり、園医と協力したり、放射能値のResearchを進めるなどの対応が取られている。

⑧現在の状況

調査時点における、現在の状況についての記述である。

子どもたちについては、次第に日常を取り戻しつつあるものの、依然として不安が強い子どももいることが伺われる。最近では「地震ごっこ」や「津波ごっこ」などがみられる（事例1、2）という報告や、「昨日地震あったよね」「震度6強だった？」「津波きた？」「じゃあ、遊びに行けないね」「大丈夫、ママが守ってくれるから」などの会話も聞かれるという報告もある（事例2）。事例4では、園舎を失い仮園舎で保育を受けている子どもたちには、「ここは自分たちの園ではない。」という思いがあり、元気がないようであり、また、死亡した男子年長児への思いが強く、「〇〇ちゃん（死亡児童の名前）のようにはなれない」と泣きながら不安を口にする子どもがいて報告されている。事例6では、ドアや窓の揺れる音や揺れに敏感になり、職員が急いで立ち上がる姿だけでも泣きだす子どももいたという。

宮城県においては、放射能に関して、毎日2か所の放射線量を測定し、県庁・園医・業者とも連携してできる限りの情報を集めているという例があった（事例7）。園独自の判断でなく、外部機関の見解と合わせて園の対応を決めるようにしているという。また、外遊びに関しては、余震が続いているので、0～3才児の外遊びは園庭のみにし、4才、5才児は保育園の近くの公園を遊び場として保育を行っているという例もあった（事例9）。

⑨これまでの対応を振り返って

日頃の訓練や、準備の重要性を指摘する意見がいくつかあった。

園児の名簿を常に携帯しておくことが指摘された（事例7）。場所を移動する度に、子どもの人数を確認することも必要とされている。事例4では津波の避難の際、出席簿を持ち出せたのは9クラス中4クラスのみであったことが報告されている。常に持ち歩ける携帯端末等に保存するとか、即座に持ち出すことができるよう、工夫が必要であろう。

次に、車から電源を取れるようAC/DCアダプターを用意したり、避難用具や毛布、水なども車に載せておくという指摘もあった（事例7）。本報告の事例のなかでは、自動車の活用シーンがしばしば報告された。避難場所として、代替照明として自家用車のライトで照らしたり、備え付けのラジオから情報を得ていた例もあった。こうした活用が可能であったのは、ガソリンが十分にあったことにもよるであろう。日頃からガソリンの残量をチェックして余裕を見ておくことも、防災上のポイントのひとつとなるかも知れない。

また、施設については、2階以上の施設にはすべり台が不可欠、0～2才児は1階に配置すると避難がスムーズであること、天井の照明は落下することがあり、壁付の照明などの方がよいのではないかと、給食のためのガスボンベの確保、棚の固定、金魚等の水槽の固定が不可欠、という指摘もみられた（事例9）。特に大きな被害がなかった理由として、本棚からピアノにまで転倒防止装置を付け、山の斜面に泥を吹き付け、芝を植えて崩落防止をしたことなどがあったとされた報告もあった。天井の照明については、福島県の事例のなかでも触れられており、落下することはなかったものの激しく音を立てて揺れたため、その直下での避難が怖かったと報告されている。万が一の場合でも十分に安心が確保できるよう、一次避難場所や避難経路の再確認などが求められていると言えるだろう。

「明確な判断を素早くすること（事例3）」のように、リーダーシップの大切さを指摘する記述もあ

った。事例7では、「司令塔になる人が必要」と表現されている。その場で大声を出して保育者や保護者に指示することで、普段の訓練通りには行かない状況でも適切に動くことができたという。自分で判断する姿勢が大切。指示待ちだったらスムーズな避難はできなかったという記述もみられた。

避難訓練においては、毎月の訓練の成果があったという報告（事例6）の一方で、津波に対する避難は想定しておらず、役立たなかったという報告もみられた。今後、基本マニュアルや地域共通のガイドラインを作ったり（事例5、6）、避難訓練を実施するにあたって、災害の程度や状況などの想定を変え、避難方法のバリエーションを数多く用意しておく必要がある（事例4）という指摘もみられた。

日々の保育においては、話を聞ける子どもに育てることを心がけていたので、避難時に生かされたとの感想もあった。直接火を炊いて（ガス器具ではなく）、料理をすることができるということを教えることも重要であるとの指摘もあった（事例9）。

津波の被害が深刻であった事例4では、次のように書かれている。

今まで「豊かでやさしい心を持った子どもを育てる」という保育を行ってきた。しかしこれからは、この悲惨な状況を生き抜くための「強い心を持った子どもを育てる」ことがテーマとなった。「子どもたちの生命の保持と安全を守る保育を大切にす保育」を実践し、後輩にも引き継いでいきたい。10名の園児を亡くした私たちだからこそ命の大切さを訴え、保育に活かさなければと思う

⑩要望、今後の課題

復興や防災のための補助金があると助かるという指摘があった（事例6、7）。震災後の建物の復旧だけで200万以上かかった例もあり、復旧にあたっての経済的状況も厳しい事情がうかがわれる。

また、園にもスクールカウンセラーのような制度が欲しいという要望もあった（事例7）。

保育士定数についての指摘もみられた（事例4）。同規模の災害がかりに都市部で発生した場合、職場の遠い保護者の災害直後の迎えは期待できず、多数の園児の避難を少人数の保育士で実行することになりかねない。特に未満児を多く抱える保育所では、避難中の安全確保が困難であり、保育士定数改善の問題は、安全な避難実行のためにも改めて強く訴えていきたいという。

2. 事例以外の報告・意見等の概要

岩手県・宮城県においては、具体的事例の報告の他、3件の報告・意見等が寄せられた。

第1は、岩手県内の避難所や居住地区での訪問活動を行った「こころのケアチーム」による介入の報告である。この中で、①被災体験による心的外傷体験（PTSD）の治療や後遺症の縮小のために、保育士、幼稚園教諭など専門職が災害時に直ちに派遣される制度が確立されること、②保健師などが、行政の立場で子ども対応をどのように考えたらよいか、地域住民が周囲の子どもに配慮すべきことはどういったことかなどについて、平常時または被災後早期に心理教育を行うことができるシステムを構築すること、の2点について提言が行われている。

第2は、岩手県内における、被災家族への物資支援の実際に関する報告である。子ども向けの支援物

資を持って行ったが、避難所には赤ちゃんがほとんどいなかったり、避難所を去って行ったりして、物資を適切に届けられない場合があること、元の生活に戻るための生活物資にはいろいろなものが必要になること、使う人を把握し、順次提供できる体制があれば、物資がたぶついたりすることもなくなると思われることなどが指摘されている。

第3は、仙台市の保育所の状況に関する報告を含むものである。保護者が園と連絡が取れず、交通機関もマヒしているため、園に迎えに行くことができなかった親がかなり多くいたことなどが記されている。また、震災後の余震で、子どもも不安定になっているなかで、落ち着いた状態を保っている子は、親たちの対応が「いつもそばにいるから」「大丈夫」というものであったとし、子供の不安を取り除くためには、やはり安心をもたらす言葉がけが必要であるとしている。さらに避難所に行かずに済んだ子どもたちも、通常の生活とは異なる事態に不安を抱えていて、日本公共広告機構のアニメを伴うCMすらわずかな楽しみだったとし、「癒し・楽しみ」をもたらす番組が必要なのではないかと指摘している。

宮城県では、日本保育学会に対しては、避難所や地元の子どもたちの様子を見て、疑問が生じたときにすぐに助けを求めたかったが、どこに相談したらよいか分からず、一本化した窓口があるとよいという要望が記されている。

(以上)

2 福島県

1. 事例報告の概要

本調査において寄せられた回答のなかには、福島県内における具体的な保育事例が19件含まれていた（幼稚園3例、保育所16例）。うち17例は県中地域（郡山市およびその周辺地域。いずれの園も避難対象地域外）、2例が浜通り（いわき市）の事例であった。本節ではこれら事例を概観する（表2）。

①本震までの状況

午睡時間帯であり、多くの園では午睡中か午睡が終わって、園児が起き出す頃であった。年長児は卒園を控え、午睡していない園もあった。また、県内の文化施設を訪問しその帰りの電車の中で被災した例、帰りのバス送迎中の例もあった。

②本震時の状況、被害の程度

屋内では時計が落ちた、棚が倒れた、ピアノや機材ラック、保管庫が動いた、壁紙が破れたなどのほか、天井備付のエアコンの留め具が外れ室内機が宙吊りになったり、天井の照明や扇風機が激しく揺れたりした園もあった。部屋と廊下を仕切る窓枠が外れガラスが割れた例もあった。

屋外の状況は園により差がみられた。大きな被害はなかったという園がある一方で、建物の土台が損壊し地盤が沈下、水道管も破損したという園もあった。

いずれの事例においても、人的被害の報告はみられなかった。電車で移動中の例、バスで送迎中の例についても、それぞれ停車し安全が確保され、人的被害はなかった。浜通りの2例のうち、1例は津波のため園舎は損壊、1例は津波の被害はなかった。

以上のように、福島県の県中地域、および本調査対象の浜通りの2事例のうち1例については、人的被害や建物等の被害はそれほど甚大なものではないと言えるだろう。むしろ原発事故による放射能の問題のほうが深刻であり、調査時点においても終息しておらず、先行きが見えない状況であった。

③本震直後から余震時の状況

当日は本震直後に荒天となり、雪が降り、風も強くなった。このため、午睡中でパジャマ姿であった園児をただちに避難させることは難しかったという報告がみられる。また、夕方にかけて何度も大きな余震があり、立ったり歩いたりすることもままならなかったこともあった。電信柱も激しく揺れ、「外に出たら危険だ」と思ったという報告もみられる。悪天候と繰り返しの余震が重なり、2次避難の判断を難しくさせたことが示されている。

また、天井に設置されているエアコンの留め具が外れたり、天井の照明や扇風機が音を立てて激しく揺れた例においては、もしかしたら落下してくるのではないかと不安が高まり、室内にありながら部屋のどこに身を寄せればいいのか分からなかったという報告や、そうした室内を通過して園児を連れて避難するのは難しかったという報告もみられた。室内で揺れが収まるのを待っていた例では、部屋の中央に子どもを集める例と、柱のそばや壁側に子どもを集める例とに分かれていた。たとえ建物や装置などが耐震設計で、揺れに耐えられると分かっていたとしても、現実には大きな音を立てて激しく揺れる光景

を目の当たりにしたとき、不安になり避難行動に迷いが生じるということは想像がつくことであろう。日ごろの訓練ではこうした音や揺れの状況までを想定することは難しいかも知れず、今回の経験は避難計画や経路の検証の上での示唆のひとつとなりうるものと思われる。

地震や被害の状況は、携帯電話の緊急地震警報や、ワンセグ映像で確認した例がみられた。電話については通じている例と、携帯を含めて不通であった例とがみられる。園に緊急連絡用の回線が敷かれており、その電話のみ通じたという例もあった。

また、地域との関連においては、本震直後から近隣の人々や消防署や市の職員などが園の様子を見に来てくれたり、片付けを手伝ってくれたという報告もあった。

④本震から余震時にかけての子どもへの対応

午睡中の園では、その場にあった毛布やふとん、タオルケットを子どもたちにかぶせ、落下物に気を付けながら様子を見ていたという報告が多かった。職員が子どもたちを囲うようにして守ったという報告もみられる。毛布がその場にあって助かったという記述もある。なかには、身体を覆うようにかぶせられ、暗く暑くて、そのことが子どもの心に残って後々影響するのではないかと心配する記述もみられた。年長児など午睡をしていなかった例では、机の下にもぐらせて揺れが収まるのを待っていたようだ。

職員が子ども寄り添い、励ます姿が報告されている。「大丈夫だよ」の声かけと同時に一人ひとりに手で触れたり、子どもと一緒に歌をうたった例もみられた。所長がメガホンを手に「大丈夫だよ」「がんばれ、もうちょっと」と声がけして励ましていた例もあった。

本震が収まった後は、2次避難のため、上着を着せて机の下にもぐって待機させたり、園庭に誘導したりしている。乳児はおんぶや抱っこ、避難車に載せるなどして外に出している。午睡から起こした子どもたちを、着替えずパジャマのまま近所の避難所まで誘導し、その後で職員が園に上着や毛布を取りに戻るなどした例もあった。雪が降り風も強かったため、屋外への避難ではブルーシートで子どもたちを囲ったり、ござを敷いたり毛布をかぶせたりするなどして寒さをしのいでいた。

状況によってさまざまな対応がみられた。電車で帰園途中の例では、まず園長が先に電車を降り最寄駅まで走って状況を確認し、避難場所を調べた上で、子どもたちを連れ、他の乗客と一緒に2キロ先の避難場所に向かっている。バスで送迎中の例では、空き地に車を停めて、揺れが収まるのを待っていたという。室内の窓枠が外れガラスが割れた例では、子どもにつく係りと、窓枠を外したり片付ける係りとに分かれ、全ての窓枠を外す作業を行っている。津波の被害が大きかった浜通りの例では、避難のため、子どもたちを起こし、ジャンパーを着せ、リュックを背負わせて裏の神社へ向かっている。

揺れている最中、揺れがひどかったためテレビや戸棚の戸を職員が手で押さえていたという報告もみられた。テレビが倒れ戸棚の中のもの飛び出すのを防ごうとしたことだが、あらかじめ落下防止や飛び出し防止の対策が整っていたならば、揺れている最中に職員が押さえなくても済み、その職員も子どもへの対応へと回ることができたものと考えられる。室内環境の地震対策についても、今回のような大きく、かつ長時間にわたる揺れを想定したうえで、再確認する必要があることが示唆されていると言えるであろう。

⑤本震から余震時にかけての子どもの様子

泣き出す子、大人しく指示に従う子、状況をよく把握できない子など、反応はさまざまであったこと

が示されている。

午睡中の子どものなかには、毛布やタオルケットを掛けられて、怖さや自由を奪われたことで泣き出す子もいた。園によっては、とにかくずっと泣いていたという報告もみられる。怖がって床にはいつくばったまま、起き上がろうとしない子がいたり、不安や怖さ、寒さで泣き出す子もいた。

一方、大人たちの緊迫感が伝わったのか、大人しく指示に従っていたという例もみられる。最初は泣いた子どももいたが、やがて静かに待っていたという例や、ふだんはふざけているような子が真剣な表情で指示に従っている例、緊張した結果であろう、おやつの際に普段嫌いな牛乳をごくごくと飲んだ子もいたという例もあった。

0歳児の避難がスムーズにできたという園では、子どもたちは興奮する様子もなかったという。もしかしたら地震があったことに気づいていないのかもしれないと話している。

⑥当日のお迎えまでの状況と子どもの様子

本震後も、夕方まで大きな余震が続いたため、子どもたちから目を離さないように配慮をした例が多くみられた。子どもをおゆうぎ室など1か所に集めたり、子どもがトイレに行く時も職員が目を離さないようにしたり、全員おむつを着用させた例もあった。駐車場に停めたスクールバス等に子どもを乗せて、お迎えを待った例もみられた。余震のためストーブをつけられず寒かったという報告もあった。

揺れが落ち着いてきたところで、おやつを食べさせたという報告もいくつかあった。特に不調を訴える子の例などはみられず、どの園でもおやつはふつうに食べていたようだ。おやつの際でも、揺れに備えて、そばに毛布を置き、すぐにかぶれるようにしていたり、食べ終えた後は、子どもを1か所に集めてそこになるべく多くの職員がいるようにした例もあった。

いつ保護者がお迎えに来るか分からないので、いつもは閉じている門のチェーンも外し、お迎えのたびに頻繁に子どもの人数を確認している例もあった。

津波による避難をした浜通りの例では、小学校の体育館に移動し保護者のお迎えを待った。体育館は停電と断水。外は吹雪いてきて寒く、夕方になっても停電のため真っ暗であった。電話も携帯も不通。体育館のマットを敷き詰め、窓のカーテンを外し、マットの上に子ども達を集め、カーテンにくるまって寒さをしのいだという。

⑦保護者との連絡、お迎え時の様子

本震後すぐに園に駆けつけお迎えに来た保護者がいた一方、すぐには迎えに来れない保護者の例も多く報告された。「保育所の方が安全だ」と言う保護者も多くみられた。「子どもは大丈夫ですか？」と園に駆けつけたものの、子どもが無事なことが分かり「安全でいるなら、もう一度戻ります」と言って、仕事や家の片付けに戻った保護者も多い。親が帰ってしまったので、その場で泣き出した子もいたという。

ようやくお迎えに来て「来たくても来れませんでした」と涙ぐむ保護者もいた。「保育所に居てよかった、家に帰ってきていたら大変だった」という保護者や、「一旦帰るからもう少し預かってもらっていいか」「帰ってもかえって危ないから」という保護者もいたという。園のほうが安全であり信頼して子どもを預けている保護者の心情がうかがえる。

お迎えの時間は普段よりも早めであったという例がいくつかみられたが、最後のお迎えが来たのは夜

7時半を過ぎたという例や、保護者との連絡がなかなかとれず、道路の渋滞と重なって、お迎えは深夜に及んだという例も報告されている。

子どもも保護者も、お互いにその姿をみてやはり安心したようだ。お迎えの時、お母さんの顔を見て泣き出した子どもや、職員が「お母さん無事ですよ、大丈夫ですよ」と言った途端、「よかったー」と泣き崩れる保護者もいたという。「命を守ってもらった」と感謝された例もあった。

保育者としては、正直なところ早くお迎えに来て欲しかったという声も聞かれた。子どもにけががないようにと必死で、無事に最後の子まで帰せたときは、ほっとしたという報告が多かった。

電車で帰園中の例では、園との連絡が十分に取れなかったことによる行き違いがみられた。避難場所へ移動中、場所が変更されたが、変更したという情報が園に素早く伝わらず、園から古い情報を聞いた数名の親が変更前の場所に向かったというものである。変更前の場所にも連絡要員として職員を待機させていたので、新たな避難場所に誘導でき、子どもを連れて帰ってもらうことができた。特に園外に出ている時などは、少なくとも園との間で連絡が取れるよう緊急時でも優先される携帯の回線の確保が望まれるところであろう。

⑧当日および休園中の園と職員の状況、対応

職員の献身的、精力的な働きが目立った。当日は園児を帰した後、午後6時頃から少しずつ職員を帰宅させた園もあれば、夜遅くまで残っていた園もあった。保護者へ夜9時半ころまで電話を掛け続けた園もあった。職員にも家庭があるにもかかわらず、園での仕事を優先させていたことが窺われる。ある園の所長は当日の深夜2時頃、市から電話があり、翌朝5時から炊き出しの指示があったという。本調査の対象のなかでは、翌日以降2週間程度休園した園が多かったが、通勤可能な状況下では職員を出勤させ、保護者との連絡にあたらせるなどしていたようである。

保護者との連絡がなかなか取れなかった例も報告されている。ある例では、携帯電話は通じないものの、電源が切れた状態ではなかったことから、何回も連絡を試みたという。結局、サークル活動を共にする他の保護者を通して連絡を取ることができた。日頃から、一つだけではなく複数の連絡網、連絡手段を用意しておく必要があると言えるだろう。その際、仲良しグループのまとまりの中だけの連絡にとどまることのないように、全体に情報が行きわたるよう配慮することが大切であろう。

震災後の行動、子どもの様子、電話のやり取りや、保護者あての文書など、詳しく記録を残してファイルにまとめている園もあった。これは今回の経験を活かし今後の備えとする上で、大切なポイントであると思われる。できればこのように園ごとにまとめられた記録や資料は広く共有し、多角的に検討を加えながら、今後の防災対策や保育実践に反映させていくことが期待される。

⑨翌日以降、休園を経て保育再開後、もしくは避難先での状況

郡山市の保育所では本震後2週間ほど休園し、おおむね24日から再開、他園でも3月下旬から再開したところが多かった。再開当初の出席率には地域差がみられた。出席率が高い園もあれば、かなりの子どもが県外などに避難するなどして欠席した園もあった。出席率が高かった地域では県外などに避難する世帯が少なかったとみられる。理由には建物の損壊の程度などの被害が比較的軽かったことと、遠方に避難するだけの余裕がないことなどが挙げられる。

自宅待機中、子どもたちは園の再開を待ち望んでいた様子であったようだ。保護者からは「いつから

開所ですか？」「2週間も家にいたから、子どもがうるさくて仕方ない、早く保育所を開けて欲しい」などの声があったことが報告されている。

⑩保育再開後、もしくは避難先での保育、子どもの様子

登園した子どもたちはいつも通り、元気な様子で見た目には変わらないという報告がいくつかみられた。休園中は家庭で保護者と一緒にいたことで、心の安定が図れたのかも知れない。「元気過ぎて困っています」という保護者もいたという。特に心のケアが必要な子どもはいないようだとする報告もある。

一方、夜に目が覚めたり、音に敏感になったりするようになったという例もいくつか報告された。特に余震が来たときには、「怖い、怖い」と言う子や、泣き出す子、しきりに抱っこを求める子など、不安を感じる子もいるようである。地震ごっこが流行っているという報告もみられた。

津波の被害をうけた例では、保育士の元を離れたがらず、少しでも離れると泣き出すなど、不安定な状態が続いている様子であった。

⑪地震後のこれまでの対応を振り返って

午睡中でよかったという記述がいくつかあった。子どもを見渡しやすく、毛布やふとんがそばにあり、すぐに子どもにかぶせて揺れが収まるのを待つことができたからである。「散歩に行っていたら大変だった」という感想もあった。実際に、電車での貴園中に被災した園長は「子どもを外に連れて行くのは慎重にしなければならないと思った」と語っている。

日頃の避難訓練が生かされたという指摘も多くみられた。毎回同じ時間や状況で訓練をするのではなく、時間や状況を変えて訓練し、もし地震が来たらどうするかということを考えておかなければいけないと思ったという感想もあった。本震の時は気が付かなかったが、振り返ってみると別の避難経路もあったと思うという指摘もあった。実際に大きな地震を経験してみて、日ごろの保育や訓練だけでは見過ごしていた点に、改めて気づいたということもあると思われる。そうした知見は風化させることなく、広く共有し、今後の訓練などに生かしていくことが期待される。

保育者の職責を強く感じている感想も多くみられた。子どもを親に帰せるかどうかとても「重く」感じ、預かった子を返すという根本的なことが、実は大変なことだったのだと感じたといったものである。震災当日、「園のほうが安全」と感じ、自宅の片付けや仕事が終わるまで園で子どもを預かって欲しいといった親がいた一方、保育者の側では早く無事に子どもを親元へ返したいという感想が少なくなかった。

保護者から「地震や津波から子どもを助けてくれて有難う」とお礼を言われるが、保育者はその時逃げるのに必死で、果たして子どもにきちんと関わられたか分からないと自分を責め続けているという報告もあった。

⑫現在の状況（県外等への避難に関して）

園によっては、県外への避難などによって休退園の数が増えているという報告がみられた。特に本調査時点は、福島県の放射能被害がきわめて不確定であり、先の見通しがまったく立たない状況にあった。保護者の不安に対応できるだけの情報もなく、県外などへ避難しようとする保護者を引き留めることは実質的には難しかったであろう。

⑬現在の状況（放射能対策に関して）

本調査時点では、郡山市の認可保育所では原則として子どもを外に出さず、屋内で保育させる方針を取っていた。保護者の不安も高く、保護者によっては自ら放射線の測定器を持って園の敷地内の放射線量を測定したり、園が使用する水道の浄水場での放射線量をチェックして、園の水を子どもに飲ませるのではなく自宅から持ってきた水を飲ませるように言ったり、自宅保育にした保護者もいたという。市でも定期的に放射線量のモニタリングをしており、園によっては園独自で測定したうえで、対応のガイドラインを作ろうとしている園もみられた。敷地の表土を除去したところ、放射線値が大幅に低下したという報告もみられた。

いずれにしても今回のような低線量の被ばくの影響やその対策については不明な点も多く、調査時点では放射線の測定器も数が不足しておりどの園でも用意できる状況にもなかったことから、全体に情報が不足している中であって、保護者、保育者ともに増大する不安を解決する手段を見つけあぐねているといった状況であった。

保護者の考えも分かれており、子どもを外で遊ばせないで欲しいという保護者がいる一方、外で遊ばせて欲しいという保護者もいる。マスクや長袖を着せ、雨の日は長靴やカッパを着せている保護者もいれば、それほど気にしていない保護者もいる。現在はまだ静観している保護者も多いが、秋頃になったら保護者の間に温度差が生じ、「そろそろ外に出そう」という保護者と「まだまだダメだ」という保護者とに分かれるであろうという指摘もあった。

外遊びができないことに対して、子どもたちからは嫌がっている様子は見て取れないようだ。子どもたちは特に何も言っていないという報告がいくつかあった。すでに保護者から外に出ないように指示されているのかも知れないという。

⑭現在の状況（室内保育に関して）

屋外遊びを制限している園では、室内での代替保育を行うのか課題となっている。

普段の運動については、おゆうぎ室などの使い方を工夫し、身体活動を多く取り入れているという報告が多くみられた。お花見、運動会などの行事も外ではできないことから、室内で壁面装飾を作ったり、室内での活動に代えたりしている。調査時点では、これから夏になり暑くなる時期であり、水遊びができない点をどう工夫したらいいかという不安が多く挙げられた。子どもたちのストレスもたまっていることから、市内の複合施設などを借りるなど、どこかで親子の活動を実現させたいと考えているという記述もあった。

散歩ができないことがつらいとする意見もあった。日々の何気ない歩きが子どもの身体を作ると思われ、散歩ができなくなって、どう影響するのか分からないという。

土に触れることになる芋掘りなども見送る例がみられた。植えた野菜も食べることはできず、買った野菜の代用にするしかないと言う。

⑮要望、今後の課題

職員のケアが欲しいという指摘があった。今回はいずれの園においても、職員の献身的な働きが示されている。震災直後の対応だけでなく、当日や夜遅くまで保護者と電話連絡をとっていたり、翌日以降

の休園が決まったにも関わらず、職員は出勤して保護者対応にあたるなどの例がいくつかみられた。職員にも家庭があり、家族がある。震災後に職員が経験したストレスはきわめて大きいものであると推測される。「夜中に余震が来ると涙が出てくる」という報告もみられた。また、「子どもにきちんと関われたか」と自責する保育者もいた。保育士は子どもにとって保育士はかけがえのない存在であり、今回のような不測の事態が起きた時こそ、本当に子どもを守って上げるのが保育士の仕事である、という指摘があった。子どもに寄り添い、子どもを支え続けることができるよう、職員の身体的、精神的なフォローも必要であることが示されていると言えるだろう。

次に、連絡方法や避難場所についての指摘もみられた。今回は、携帯を含め電話が使えなかった例もみられたが、電話が不通であってもパソコン等は使えていたという。今後は保護者への連絡手段の一つとしてメールを活用することも考えられるであろう。

悪天候時、および電話等連絡手段がない場合を想定した避難場所も必要ではないかとの指摘もあった。今回は本震直後に荒天となり、寒さのため屋外への避難が見送られた例もいくつかあった。また、余震が続いたため、多くの例では避難場所に長時間とどまり、毛布や段ボールで寒さを防ぎながら様子を見ていたことが報告されている。

放射能の問題については、本来なら園ごとに放射線量を計測し、今日の測定結果は大丈夫だから外遊びをしまししょう、というようにしないと保護者の理解は得られないという指摘があった。また、具体的な保育や対応についての具体的なガイドラインを検討している例もあった。調査時点においては、放射線量の数値情報だけでなく、今回のような低線量の被ばくの影響や対応法についての情報が不足しており、保護者の不安はそうした十分な情報が共有されていないことに基づいているものと考えられる。市町村や地域においては、除染活動とともに、十分な情報提供と、基本的な保育や対応についてのガイドラインの策定が求められていると言えるであろう。

2. 事例以外の情報の概要

保育園・幼稚園等における具体的な事例の報告の他に、3件の報告・意見等が寄せられた。

第1は、福島県を中心とする関係諸所に対して主に電話による聞き取り調査を行ない、被害の状況等についてまとめた資料である。第2は、大学体育館における避難児4名を対象に保育を行った大学院生の実践報告である。

第3は福島県内施設で働く卒業生や関係者への聞き取りをもとに、県内の保育現場の状況の概要をまとめたものである。これについては、前段で取り上げた本調査における事例報告とほぼ同様の傾向が示されていた。

(以上)

学会員からの報告事例・報告・意見等
資 料

- ①. 岩手県・宮城県
- ②. 福島県
- ③. その他
- ④. 事例の概要
- ⑤. 保育関係団体による状況調査結果等

① 岩手県・宮城県

岩手県

事例1 幼稚園

建物が無事であったため、地震の後、津波で園舎が流された他の公立幼稚園が同居することとなった。また、園内1室には特別支援を要する子どもたちの教室が設置されている。

3つの機関が同居しているため、それぞれへの来園者、関係者、ボランティア等、人の出入りが大変多く、その方たちへの対応に追われ、本来もっと子どもにじっくり関わりたいのだが、十分にできない歯がゆさを感じているそうです。

子どもたちは最近になってようやく、地震ごっこ、津波ごっこなどができるようになってきましたが、不安定な子どもは多いようです。

上下水道が復旧せず、仮設トイレを使用する生活が続いていますが、仮設トイレは幼児向けでもなく、また、生活スペースから離れた場所に設置されているので、子どもの不安、また安全を考慮すると、トイレには保育者が必ず付き添わなくてはならない状況が続きました。しかし、それでは保育が行える状況とは言えず、現在は、やむを得ず、小用に限ってバケツで水を流すようにして園内のトイレを使用させるようにしている。それでも、仮設トイレは使わざるを得ない。

この幼稚園は、自治体から、今年度をもって閉園という決定が震災以前にされていました。現在の状況から、周囲では存続させるべきであるとの声も少なくないが、行政上の決定は現時点では変更なしとの回答を得ている。

職員は、閉園までの最後の一年の保育、現在の状況、そしてご自身の生活の状況など、整理して考えることは困難な現実と直面しているが、日々の保育、日々の生活だけで精一杯という状態であるそうです。

(ジャーナリスト 安藤央)

事例2 幼稚園

1 地震発生時は幸い園児の降園後でしたので、職員のための避難となりました。

保育中であつたらと考えると、避難訓練の大切さ、職員一人一人の危機意識と共に、瞬時に対応する判断力が大切なのではないかと思います。

2 震災の次の日から園児の安否確認に歩いたが、電話もつながらない中で広範囲に避難している園児の居所を探すのに大変時間を要しました。

15日に行う予定だった卒園式は全員が揃うことは難しいと判断し、道路が確保できた頃(2週間過ぎて)に3日間にわたり都合のいい時間に来てもらい、卒園証書を渡しました。園児や保護者にとっても心待ちにしているのではないかと考え、例年のように保育室を飾りつけ、職員全員で心を込めた一人一人の卒園式になるよう心がけました。

始業式も例年より2週間遅く行いました。ライフラインの電話(現在は仮設の電話で対応している)

ガス（ストーブがガスを使用）の復旧がまだですが、被災し避難所生活をしている園児、外遊びもままならない現状の中で過ごしている園児等のことを考えると、1日でも早い保育再開が子ども達にとっては大事ではないかと考えました。

- 3 様々な団体から支援物資をいただいているが、家や仕事を失った保護者に保育料や諸会費の心配をしないで通園させられる支援がほしいと思いました。
- 4 子ども達の心のケアを1番に考え保育をしていますが、保育者に対する心のケアも大切であると思います。

保育施設のことではありませんが、避難所で子ども達が騒いだりすると周りからいろいろ言われ、嫌な思いをした人たちもいたと聞きます。子どもは騒ぐものですので、避難所には子ども達が遊べる場所をつくるべきだと思います。

[震災直後]

直後は、園舎がきしみ、左右に揺れ動く様子をながめながら、園庭中央にしゃがみ込む。

「大津波警報発令」の放送に戸惑うが、市内の状態が全くわからず不安だった。

幸い、園児は全員降園しており皆の無事を祈るだけだった。

ライフラインが不通となり、唯一、車のワンセグで仙台の状況を見、啞然としK市はどうなっているのか？家族は大丈夫か？心配するもなすすべもなく、職員としての業務につく。

(園舎・園児の安全確認及び避難所対応)

1. 安全確認できるまで園舎内への侵入禁止とししばらくお休みのお知らせと園児名簿の貼り出し（避難所・園舎）
2. 園舎の片付け・避難所の手伝い・園児の安否確認（家庭訪問・知り合いや保護者からの情報）
3. 避難所に園内にある必要物資を運び出す（マット・布団類・電池・懐中電灯・ラジカセ・筆記用具等）

(教育委員会と打ち合わせ・状況説明・情報交換)

1. 自園の修了式の準備と実施
2. 専門機関の検査を受け、園舎の安全を確認後、修了式・卒園式を同日に行う
余震が続く中、式次第は変更したものの園児・保護者は、みんな揃って式ができたことを大変喜んでくれた。（園児1名の祖父母が亡くなっていた事を後日知らされた。）
3. 被災し、職員4名を失った鶴住居幼稚園の園児の安否確認・園舎からの備品や用品等の搜索と収拾
バスや徒歩で市内全域の避難所を探す→教育委員会に報告→情報をまとめる
遺品整理と修了式・卒園式の準備作業（卒園のしおり・アルバム等）→連絡事項・予定などをポスターにして各避難所に掲示する
4. 電話が通じるO幼稚園が窓口となり、A幼稚園・関係機関・他園の職員との連絡を取り合う。
5. 保育所がなくなり、避難所にいる子の一時保育の実施

[災害後の保育]

A幼稚園の園児は、各避難所から希望する幼稚園に入園することになる。保育料や入園料の免除等の配慮がなされる。また、支援物資がたくさん届き、保護者の皆さんは感謝していた。余震の影響で戸外での遊びを自粛していた子ども達だが、本年は4月13日から新学期を開始した。楽しそうに友達と遊ぶ姿にほっとするも、様々な体験をした子、被災した子、家族構成の変化等で、内心は大きく揺れているような子も見られた。

1. 余震に留意しながら保育を進める
2. 危険箇所のチェックを徹底し、安全に生活できる環境を整える
3. 園児だけでなく、保護者の変容にも留意して受け入れをする

- ・被災した園児の受け入れ：以前鶴住居幼稚園に勤務したことで、保護者が知っている先生がいることで安心しているように見られた。園児だけでなく保護者の不安を軽くしてあげる必要性を実感する。
- ・余震に怯えて教師にすがる子：「大丈夫だよ」「頭を守って、テーブルの下に！」と安心できる対応を心がけて実施している。
- ・防災無線の音に怯える子：「大丈夫、これは連絡の放送だよ」などと、教師と触れながら具体的に知らせ不安を取り除くように対応

いつもよりハイテンションで落ち着かなくなった子、おばあちゃんの家で津波から山越えで避難を経験した子、時々じっと動かなくなる子など普通に遊んでいたかと思うと時々様々な表情をみせている。

1ヶ月以上たってから普段の遊びの中で、

子「大津波警報発令！大事なものを一つ持って避難してください！」 子「先生津波をやっつけてください」 子「ぶりぶり怪獣でやっつけます。先生お願いします」 教師が、窓口に立ち「3、2、1、ぶりぶり！」とお尻を大きく揺らすと大きな笑い声で部屋がいっぱいになる。

おやつ前の会話で、「昨日地震あったよね」「震度6強だった？」「津波きた？」「じゃあ、遊びに行けないね」「大丈夫、ママが守ってくれるから」などの会話も聞かれる。

教師は、それぞれの変化に注意しながら、神経質にならないように心がけ、明るく接し友達の遊びの誘いや個々の対応を丁寧に行っている。

職員も震災後のあわただしさと疲労、業務の多様化で心身ともに落ち込み、精神的に参ってきたが、臨床心理士、ユニセフのカウンセリング等で、職員の心のケアもしていただき現在は、少しずつ落ち着いてきている。

被災した家族が集まり、家族構成が増え、子育て・嫁姑関係等に不安を抱え、泣いて教師に訴えていた母親に、臨床心理士の定期的な相談が可能となり親子とも落ち着きを見せている。専門家が近くにいることの心強さを実感している。

あつてはならない大きな災害を体験し、教師として・人間として 今、自分たちがやらなければなら

ないことは何か？できることは何か？ 判断し、行動することで、いろいろなことを学んだ。信頼できる仲間のつながり、本当の優しさも知ることができた。

(秋田大学 奥山順子)

事例3 幼稚園

《被災状況》

当園は岩手の内陸に位置しておりますので、沿岸部に比べれば甚大な被害とは言えないのかも知れません。2日間の停電、断水、ガソリン不足程度のものでした。

本震では終了式を、大きな余震では入園式を、それぞれ一週間遅らせ、4月いっぱい午前保育とした措置が主なところでございます。

園長として、震災で学んだこと2点

一つは、明確な判断を素早くすること。

二つは、いつも通りの幼稚園を保護者に発信し続けること。

特に通信手段が不通になる中、weblog が思いの外効果があったようでした。確実に連絡をとるために職員を2度家庭訪問に出向かせ、その他はブログに記事をupする方法をとりました。

記事の内容は、連絡事項以外にも誰もいない園の様子や保育者の仕事ぶり、つまらないプライベートな内容、様々です。ですが1日1,000件を超えるアクセスを頂き、保護者が数回閲覧して下さっているのが分かります。後も「励まされた」「子どもと一緒に見ていました」などの感想が寄せられました。緊急時だからこそ、普段通りの感覚を取り戻すことの大切さを強く感じた次第です。

僭越ながら、その期間のブログ記事を送らせていただきます。今、読みかえすだけでも非常に中身の濃い時を過ごしたんだなあと感じます。

ご覧いただければ幸いです。

(盛岡大学文学部児童教育学科・盛岡大学附属松園幼稚園 石川悟司)

事例4 保育所

岩手県陸前高田市の被害状況

市内全保育所における建物の被害状況

公立5ヶ所、法人立の5ヶ所の内、建物流失は2ヶ所（公立）、瓦礫の流入1ヶ所（法人立）、床上浸水1ヶ所（法人立）。（現地保育所にての聞き取りによる）

市内全保育所における人的被害

全保育所10か所のうち、1か所で10名、3か所で各1名、合計13名の園児が帰宅後に津波に吞まれ

て死亡した。内1名は午前中の早退、残り12名は地震のための緊急引渡し後に帰宅途中か、あるいはそれぞれの自宅で被災した。(現地保育所にての聞き取りによる)

市内保育所の保育の現状

建物を流失した市立の保育所は、別の旧園舎を仮園舎として保育を再開した。同じく建物を流失した別の市立の保育所は、園児を他の保育所と保育園に分散して保育を行っている。5月9日現在、電気は復旧したが、水道は保育を再開した8ヶ所中、6ヶ所で未だ断水状態である。給水車により給水を受けているため、給食は家庭よりおにぎり持参し、非常時メニューの牛乳やバナナなどで対応している。(現地保育所にての聞き取りによる)

保育所の概要と被災状況

所在地は、海岸からおおよそ1.6キロの距離に位置し、海岸から続く平坦な地形の端で、ここから北に向かってなだらかな傾斜が始まる場所でもある。

地震発生時は出席園児132名、職員14名が園舎内にいた。地震発生後、迎えに来た家族に園児98名を、雪の降る園庭(第1避難所)で引き渡した。やがて職員が津波の出す土煙を発見し、残った34名の園児と職員で高台に走って逃げた。緊急時に持ち出すはずの出席簿を持ち出せたのは、9クラス中4クラスのみだった。所長は園舎内の残留児の有無を確認し、最後に避難した。そこへ津波が迫ったが、近所の方の励ましと援助で何とか逃れることができた。園舎は津波により壊滅し、瓦礫の山に変わってしまった。

保育者と共に避難した34名の園児は無事だったが、引き渡した98名の園児の内10名が家族とともに津波に呑まれ、命を失った。(保育所にての聞き取りによる)

(以下、所長ヒアリング)

今どのような支援を必要としているか。

今まで年間12回以上、毎月避難訓練を行ってきた。しかし、想定は地震、火災などであり、津波に対する避難訓練を行っていなかった。保育所まで津波が来るとは誰も考えていなかったためである。現在も強い余震が続く中、津波に対する避難訓練を行うことは急務であるが、正しい避難手順や方法が分からない。特に0~1歳児の避難においては、保育士がまごつくとそれが子どもたちの死に直結するため、津波に対する避難の基本マニュアルが欲しい。保育学会において大勢の方々に検討していただき、保育所・幼稚園向けのマニュアルを現場に早急に提示して欲しい。

また、避難した34名中、20名がその日の内にお迎えがなく、近くの老人施設で一夜を明かした。避難先を保護者に発信したかったが、固定電話も携帯電話も繋がらず情報を発信できなかったため、さらに引渡しが遅れた。このような非常時でも正確な情報を保護者に発信できるシステムがあれば是非教えて欲しい。

今まで行われた避難訓練は実際の地震に対してどの程度訓練の効果があつたか。

子どもたちは午睡中だったが、落ち着いて布団を頭から被りじっとしていた。常に保育士の言葉がけどおりに行動し、強い地震が少し収まると園庭の第1避難所に集合した。そこまでは避難訓練どおりに

できたが、それまでの避難訓練が災害状況を軽く想定して行われていたため（当日は雪の降る悪天候であり、電気、水道、電話などのライフラインが地震発生と同時に止まった）、ここからは今までの訓練が役立たなかった。寒さへの対策や通信不能な場合の保護者への連絡方法などが考えられていなかったためである。今後避難訓練を実施するにあたって、災害の程度や状況などの想定を変え、避難方法のバリエーションを数多く用意しておく必要があると感じた。

震災を体験して感じた「今の保育の問題点」は何か。

それは保育士定数の問題である。当市は大家族家庭が多く、4世代が同居する家庭もめずらしくない。当保育所でも仕事を持たない曾おばあちゃんや保育所近くに働くおじいちゃん、おばあちゃんたちが通常の送迎を担っている。そのため地震発生から津波が押し寄せるわずか30分足らずの間に、98人の園児の家庭への引渡しが可能であった。それでも残された34名の避難は大変であった。

同規模の災害が核家族の多い都市で起これば、職場の遠い保護者の災害直後の迎えは期待できず、100人を超える園児の避難を少人数の保育士で実行することになる可能性は高い。当市では波が防波堤を超えてから街を呑みこむまで6分30秒しかかかっていない。津波災害では高台までの長距離を素早く避難することが重要であり、3歳未満児を多く抱える保育所では避難中の安全確保がかなり困難となる。

保育士定数改善の問題は、今までも保育充実のため関係者が訴え続けてはいたが、災害を体験した者として、安全な避難実行のためにも改めて強く訴えていきたい。

園児、職員の心の問題とケアについてどのような現状か

現状では、子どもたちは表面上落ち着いているように見える。しかし園舎を失い、やむなくこの仮園舎で保育を受けている子どもたちにとって、その心の中には「ここは自分たちの園ではない。」という思いがあり、いつもの元気がないと感じる。また、死亡した男子年長児への思いが強く、「〇〇ちゃん（死亡児童の名前）のようにはなれない。」と泣きながら不安を口にする年長男児がいる。

職員14名中、家族を失った人は4名。その中には家族6名中4名（夫の両親と子供2名）を失った人がある。また、今も避難所から通勤してくる職員もいる。このような中、多くの職員は、仕事に没頭することで悲しみから逃れようとしている。園児、職員の置かれたこのような問題に対して、名古屋市の子童相談所やユニセフから職員が派遣され、定期的に災害時の子どもたちへの心のケア研修や、職員へのケアも行われている。

災害後の保育のあり方への展望は

今までずっと「豊かでやさしい心を持った子どもを育てる」というテーマで保育を行ってきた。しかしこれからは、この悲惨な状況を生き抜くための「強い心を持った子どもを育てる」、このことがテーマとなった。そして、「子どもたちの生命の保持と安全を守る保育を大切に作る保育」を実践し、後輩にも引き継いでいきたい。10名の園児を亡くした私たちだからこそ命の大切さを訴え、保育に活かさなければと思う。

（東京福祉大学保育児童学科 澤井洋子）

事例5 保育所

保育園の概要と被災状況

所在地は事例1の西方向に直線で2.2キロほどに位置し、海岸からは約1.2キロと事例1より海に近いが、少し高い場所にあるため、津波は隣の小学校で止まり、建物の被災はかろうじて免れた。

地震発生時は出席園児115名、職員14名が園舎内にいた。園庭に避難中、次々に園児のお迎えが来た。

しかし、「津波が来るぞ〜！」の叫び声により、残った園児30名とともに、園舎よりさらに高い場所に避難した。避難の途中にもお迎えがあり、道路脇で名簿チェックをしながら保護者に引き渡した。保育者とともに避難した園児は全員無事であったが、避難前に引き渡した園児1名が家族とともに津波に流され亡くなっている。(保育園にての聞き取りによる)

(以下、園長ヒアリング)

この度の被災体験から全国の保育関係者に最も伝えたいことは何か。

陸前高田市は公立、法人立併せて10箇所の保育所があるが、保育中に犠牲者を出すことはなかった。しかし、13名が保護者に引き渡した後、命を落としている。このことを私たちは重く受け止めている。強い余震が続く中、今回と同規模の津波が来ることも予想されている。その時私たちはどのように対処したらよいか、ベストの対応とは何か、子どもたちの命を守るにはどのように行動すべきかの問題を抱えている。

この災害を体験して、今後の避難への課題は何か。

今度の大規模な災害において、情報の伝達の大切さを知った。地震発生と同時に情報ラインが絶たれ、上からの指示を受けることも、こちらの情報を発信することもできなくなった。避難した園児のうち2名がその日のうちに保護者のお迎えに来ることができず、そこである保護者の家の別棟を借りて、職員8名とともに一夜を過ごした。しかし、その避難場所を保護者に伝えたくても方法がない。「私たちは元気に生きているよ。」という情報をこちらから発することができなかった。どんな条件のもとでも安定した情報のやりとりが可能なシステムが早急に欲しい。

園児、職員の心の問題とケアについてどのような現状か。

園児の中には親や家族を亡くした子が多くいる。職員も同じで、家族や親族に犠牲者がいたり、家をなくしたりしている方が多い。このような事態に市やユニセフ、名古屋の児童相談所などから、研修や心理相談などの援助を受けている。我々も災害を受けた職員に対して、皆で仕事を分担し、負担を軽くする努力をしている。

保育者に必要な資質について、今どのように考えるか。

たとえ法人立の職員であっても、保育園を出れば、避難所などでは准公務員のように見られる。職場で働いた後、避難所に帰りプライバシーのない生活を強いられる中、さらに公共に奉仕する役割も受け持たなければならない。私たちの保育園は、現在地域に支えられて運営できている状態なので、保育者も時に地域を支える側に立たなければならない場合がある。その役割を果たすためには強い精神力が必

要となる。災害時においてはそのような精神力が保育士に求められると考える。

今、どのような支援を必要としているか。

園児に対する物質的援助は充実してきている。多方面の多数の方々からたくさんの援助をいただき、本当にありがたく思っている。今後は保育園を運営していくにあたっての備品や消耗品が必要である。保育者の仕事着であるとか、事務用品であるとか、保育園によってそれぞれ必要な物が違うので、きめ細かい情報のやり取りが大切になると思う。特に職員に対しては仕事着や運動靴などが不足しているので、職員に対する物心両面の支援があると職員も元気が出るのではないかと。

今まで行われていた避難訓練に対して、改善点はあるか。

今まで津波に対する避難訓練を行ってこなかった。ここまでは津波は来ないと思い込んでいた。これから津波に対する避難訓練を行うにあたって、基本マニュアルが早急に必要である。それを自分たちの園に適応させて使っていきたい。

子どもたちには、地震が起こったらまず高台に避難することをしっかり伝えていきたい。また今度の震災では、家族がお互いを探し合ったために命を落とす事例が多かった。自分の命は自分で守ることの大切さも伝えたい。

災害後の保育のあり方への展望は。

震災前までは保護者や地域の方をお願いすることばかりであったが、震災後は保育所の本来の機能に加えて、保護者の方のメンタルな部分の支援や、地域復興の手伝いなどを担うことが求められている。そのために保育者は、自身の心身の健康を保ちながら強い気持ちで働かなければならないと思う。

事例 1、事例 2 の インタビューを終えて

2 園の施設長先生には、ご本人の心の傷も未だ癒えていない状態にもかかわらず、デリケートな内容の質問にも丁寧に答えていただき、感謝に耐えない。お二人の気持ちに応えるべく、このインタビューを今後の日本の保育の中で生かしていきたい。

そのためにはお二人が望んでいた保育所向けの「地震・津波の避難マニュアル」を日本保育学会で至急作成し、現地に届けることをお願いしたい。現地では4月12日に強い余震があったばかりであり、そのため震災を過去の出来事とっていない。津波は近いうちにまたやってくると考え、その時の避難方法について悩んでいる。そのため先ず私たちがしなければならない支援は、このマニュアルづくりであるとする。どうかこの分野のご専門の先生方により、一日も早い作成をお願いしたい。

またもう一件、携帯電話や Web が使えない状況でも園児の安否を発信できる情報システムがあれば教えて欲しいという現地の要望があり、この分野のご専門の先生方による情報提供も併せてお願いしたい。

(東京福祉大学保育児童学科 澤井洋子)

事例 6 保育所

1. 地震、津波発生時の保育所、幼稚園等、保育の場の具体的事例

地域や保育の特性（地域の自然的社会的環境や保護者特性、日頃の保育等）

自然豊かな町。水田に囲まれた見晴らしの良い広い敷地。車の交通量も少なく自然探索が多く出来る。保育の特色は、仏教の慈悲の精神を取り入れ、日本の伝統文化(和太鼓・茶道)に触れる活動を取り入れていること。地域住民との交流の機会を多く持ち、子育て支援センターを併設しているのも園の特色のひとつ。

災害発生時の状況（保育活動、被害内容等）・子どもの様子・子どもへの対応

年長児は保育室で卒園記念の製作活動。地震の揺れを感じ、保育者の指示により年長児と保育者一時テーブルの下へ。ミシミシと大きな音で建物全体が揺れ、地震対策をしていたはずの暖飯器が落下し、天井の換気扇が外れる。その大きな揺れの途中で停電。

年中児以下は、午睡中であった。保育者は保育室の中心へ子どもらを集め保育者が囲み、子どもらの頭の上に布団をかぶせた。

揺れが落ち着いたのを確認後、園庭へ全員避難。人員確認をした後、管理者携帯電話から保護者へ緊急メールを送信する。子どもらが全員無事であることと、事故の安全を確保しつつ迎えに来て頂きたい旨伝えた。緊急メールが送れない保護者数名へは、職員携帯電話により連絡を試みるが、つながらない。最終的にショートメールの送信などにより全保護者へ連絡が取れた。

寒さ厳しく、雪が降ってきたので、送迎バスと職員の自家用車に園児を乗せて待機。園庭の端の一部と隣接する農道が陥没していた。

園舎内の点検も並行して行う。物が散乱し、壁や天井などに亀裂あり。PCなどの備品落下、据え置きパネルヒーターの固定がゆるんでいるなど。水道も止まる可能性がある判断し、飲み水の確保の為タンクへ貯水。途中水の色が茶色くなり断念。

多くの余震に子どもらは怯え、0・1歳児は都度泣きだす子どもがいた。午後のおやつ（パン・牛乳）を食べたり、絵本を見たりして迎えを待つ。保育者は出来るだけ子どもらが心落ち着いて過ごせるように、配慮して子どもの側について一緒に過ごす。無事に全園児が降園したのは、午後6時半ごろ。迎えが遅くなった子どもへは、軽食を準備した。

2. 災害後の保育の経過と課題

当園および地域全体の保育状況・保育上の課題と工夫

災害後、停電・断水・電話不通が続く。ガスはプロパンの為使用可能。道路など陥没箇所多数。危険箇所及び建物被害大きい住民は避難所にて避難生活。地域の自主防災組織の方々と地域住民が自宅の食材を持ち寄り、避難者へ食事提供。一般住民も避難所で給水可能。

食料品や生活用品などとガソリンの流通が途絶え、購入が難しい状態。大型量販店・大型スーパーは建物など被害大きく営業できないところ多数。

ライフライン復旧せず15日まで休園。16日から相談業務。16日に電気、17日水道がそれぞれ復旧し、業者による器具の安全点検。18日から昼食と飲み水持参で保育を再開した。22日からは白飯と飲み水持

参。食材の供給も難しい中、日頃取引をしていた地元商店街の個人商店が「保育園の子どもたちの分」と別にとりおきをしてくれたり特別の配慮をしてくれたりしたお陰で、給食提供もできるようになった。職員は車を乗り合わせるなど協力して勤務を続けた。30 kmほど離れた自宅から自転車で駆け付ける職員もいた。4月7日の大きな余震でも、建物被害大きくありライフラインの復旧と安全点検の為二日間休園。

災害後、子どもたちは、ドアや窓の揺れる音や揺れにとっても敏感になった。職員が急いで立ち上がる姿だけでも泣きだす子どももいた。保護者へ、子どもとの関わりの中で気をつけていただきたい事項など、園から資料を配布したり、保護者集会の中でも話をしたりして、こどもの心のケアについての働きかけをした。保育においても子どもらが安心して過ごせるようにいつも以上に配慮を行なった。頻尿やチック、どもりなども見られたが、今は落ち着いている。ごっこ遊びで地震再現をする子どもがいたが、最近では見られなくなった。

3. 日頃の防災教育・保育訓練の有効性、また、非常時に現れる日常保育の重要性など

毎月の避難訓練と安全指導の成果で、全園児混乱もケガもなく無事に避難し、園児の人員確認も迅速に行うことが出来た。災害時の緊急メールのシステムを導入していた為、すぐに園児の無事と迎いの連絡を保護者にすることが出来た。2年前の地震で、地震対策をしていたので、落下物が少なかった。給食の備蓄食の管理もあり活用出来た。

災害時のマニュアルを作成していたが、これほどの大きな地震災害を想定していなかったことと職員への周知が不足していた。今回の大地震での園の取り組みの改善点などを踏まえ、職員全員で内容を検討し共通理解を持って対応できるようにする。

4. 放射能問題への保育現場の取り組みと課題

戸外遊びの安全点検の一つに、放射能物質の検査を加えたい。毎日、朝・昼・夕で検査すべきでないか。

5. 現在及び今後の、保育関係への災害支援に関する意見、要望

沿岸部には全壊・半壊保育所も多く有るので、まずはそちらの復興支援を速やかにお願いしたい。多くは空き施設などで保育を再開しているようだが、見通しが立たないところもあるようだ。保育再開と再開後の人的・物的環境を整えるのが第一である。

そして内陸部の各園の修繕についても、是非、国と県から助成を出して頂きたい。(当園の被害箇所修繕の概算見積もりは、200万円以上である。)

6. 保育施設や保育の在り方、保育者の専門性、保育行政、地域連携等に対する、この度の被害体験に基づく提言

災害時に楽観的判断は命取りになる。安全確保のために出来る最大限のことをすべき。

行政窓口の固定電話が不通にならないようにして欲しい。加えて、緊急時の対応・連絡手段などについて公立に限らず、私たち法人保育園も一緒に統一してほしい。

全域で共通する「災害時対応ガイドライン」のようなものを作成し、緊急時の判断・細やかな対応についても共通理解を持つよう促すと最悪の事態を防げるのではないか。

7. その他

学会において、災害復興の御支援も頂けるとの事、ありがたく存じます。

また、今回このアンケートに答える事により、自分自身振り返りが出来ました。このような機会を頂けたことに感謝します。

最後に、この大きな災害被害から出来るだけ多くを学び、災害発生時に出来るだけ多く大切な命が守られるよう、活動を進めて頂きたいと願っております。

(社会福祉法人花泉福祉会 花泉保育園 宇津野泉)

宮城県

事例7 幼稚園

《本震時の状況》

まず、当幼稚園の概略ですが、仙台市太白区にあり、仙台駅から直線で3~4キロといったところにあります。園児数は約200名です。丘の上にあり、海岸部からは離れているので津波の被害はありませんでしたが、地割れや古い建物の損傷はありました。住宅地の中にありますが、森や畑などがあったり、小学校と児童公園が近くにあります。日ごろの保育は、キリスト教を土台とし、自然の中で自由に遊べるよう配慮しています。

震災発生は2時46分でしたので、2コースバスが出発する直前でした（うち1台は出発して3分ほど経っていました）。子どもたちはバスの中に乗り込んだり、クラスから出たり、迎いの保護者と会ったりしたところでしたので、少し散っていました。しかし、1コースの子が帰っていたことと、2コースバスが発車前だったということもあり、子どもが半分、保育者がほぼ全員そろっているという状態でした。

私は、バスの運転を臨時でしていたので、すぐにバスから降り、園庭の子どもと保護者を建物から離れて園庭中央に集まるように叫びながら、園舎の見回りに行きました。子どもは保育者と逃げていたのですが、保護者が子どもを探しに園舎に入って来てしまったり、保育者も戻って来てしまっていたので、とにかく外に出すよう声をかけました。このときのことを振り返ると、地震のために建物がきしんだりする音なのか、ガタガタガタという音が大きく、相手の声が聴きとれず、大変でした。全員外に出すまで時間があつたのですが、その間ずっと揺れ続けていました。セオリーは「揺れているときは動くな」でしたが、いったん弱まったときに、各自の判断で脱出しました。その後は、クラスごとに分かれるよう指示を出し、訓練通り、副園長に報告をしました。

ここで感じたのは、保育者が名簿を携帯していたことのメリットです。3・11の前に数回地震があつたので、保育者で地震のマニュアルの確認と、万が一に備え、名簿で確認ができるよう、常に名簿を持っているように義務づけていました。これがあつたことで、混乱していたなかでも、誰がいないのかなどを冷静に把握できたように思います。

また、司令塔になる人がいないと、まとまるものもまとまらないことがわかりました。普段の訓練で並ぶ順番などを決めていたのですが、降園時間と重なつたことで普段通りできなかつたためその対応が

できず、その場で大声で指示を出したことで、保育者はもちろんですが保護者も適切に動いてくれました。

その後は、引き渡し方法の説明や、雪が降ってきたため、バスの中に避難させたり、テントを張ったり、夕食の準備をしました。

この時点でガス・水道・電気が止まっていたのですが、幸い貯水タンクがあったので、そこから水を汲み出したり、バスとは緊急用の無線でやり取りをすることができました。

ちなみに、伝言ダイヤルを通信手段として使用する予定でしたが、まったくつながらず、機能しませんでした。もちろん、緊急連絡網などは論外。通信で使用できたのは、保護者同士のメールだけだったので、とにかく無事だということをチェーンメールのように回してもらおうようお願いするしかありませんでした。情報を得るためと電源をとるために自家用車を園庭に入れ、そこからテレビを持ってきたり、明りのためにライトをつけたりしました。

ここからは、避難生活が始まり、6日間園を避難所として保護者に開放し、食事3食を提供したり、夜中に地震速報が出ないかを警戒したり…といろいろなことがありました。

《その後の状況》

保育の中での課題は、まずは復旧でした。

診断をしてもらったり、業者さんに来ていただいたりしました。その後、日程を再調整したりしましたが、保育としては、心のケアの問題があったので、臨床心理士の方に来ていただき、職員の研修をしました。そこで、子どもの予想される行動と、それへの対応を学びました。同時に、保護者への講演会も企画し、園と家庭双方で子どもの心のケアをするように努めています。

保護者からは、被災してしまったので保育料が払えないといった要望や、園が遠いから心配なので転園しますといったこと、放射能についての質問や対応策等など、各種問い合わせがありました。

その中で感じたことは、過剰反応したり、私たちがわかり得ないこと（とくに放射能の測定器を買わないのか？というようなこと）を質問されたりするので、園医や放射能値のリサーチなどを進めました。また、連絡網の新たな構築や対策の見直しなどに取り組んでいます。

《日頃の防災教育・訓練の有効性、日常的保育の重要性など》

訓練の重要性は非常に感じましたが、訓練通りにはいきません。

先ほども書きましたが、声が通らなかったり、足の踏み場がなくなったりすると、連絡先の書いてある名簿を探そうにも、どこにあるのか分からなかったり…。やはり、予想できないことがたくさんありました。

ここで言えるのは、保育者同士がいかに声を掛け合って普段保育をしているか、また、最後には自分で判断して子どもの命を預かっているという意識などが大切だと思いました。本園の職員が指示待ちだったとしたら、スムーズな避難はできなかったように思います。職員に感謝です。

また、子どもと保育者の信頼関係も大切だと思いました。迎えに来ることができなかった保護者の方が出て、次の日の朝にやっと来ることができたという方もいたので…

いつ何が起こっても、常に身につけているもので確認が取れたり、連絡ができるなど、名簿と携帯は

常に持っておくべきだと思います。

また、今回は、車から電源を取れたので、シガーライターのところからコンセントに返還する機械を積んでおくといいと思います。車の中に避難用具や毛布・水などを積んでおく、さまざまな対応ができてよかったです。

《放射能の影響、対策》

放射能は、毎日2か所の数値を見えています。また、県庁・園医・業者さんなどにも連絡をして、できる限りの情報を集めました。園独自の判断は難しいので、できる限り社会的に認められている外部機関の見解と合わせて園の対応を決めるようにしています。ただ、放射能のことで、半分クレーム的に園に対して要望を出す方もいます（外に出さないでくれ・水筒を持たせてくれ・花の蜜を吸わせるな等…）。

《災害支援について》

災害支援は各方面の方が本当によくしてくださっているので、本園では問題ありません。

《保育・保育施設の在り方、保育行政、地域連携等について》

外部との連絡は基本的に取れなかったもので、とにかく自立してできるように各園が準備しておくべきだと思います。行政の方は、本当によく頑張ってください。でも、震災直後は、誰だって何もできません。マスコミなどは、行政の対応のまずさばかりを追求していますが、とくに仙台の方は、同じ被災者です。だからこそ、自立して子どもを守れるようにすべきだと思います。

ただ、防災のための補助金（発電機・食糧・水・倉庫など）を出していただけると助かります。幸い、自園給食をしていたので、食糧の備蓄はありましたし、まきストーブが各部屋にあるので、薪のストックもかなりあり、暖は取れました。灯油も備蓄があったので、反射式ストーブで室内も暖められましたが、やはり、6日間の避難所生活で、園の出費なり、備蓄の消費はあったので、再備蓄をするときに多少コストがかかりました。

それから、スクールカウンセラーの制度を、園にもほしいと思います。もちろん、園の方針と心理の専門家が意見が合わない場合もあるので、制度化の難しさはあると思うのですが…。園内研修や講演会は園が企画して謝礼も払うとなると、震災後の建物の復旧だけで200万以上かかった中では、援助があると、よりやりやすいなと思います。もちろん、子どものためなので、園としては、お金は問題にせず必要なことは躊躇なく取り組む気持ちはありますが…。

（向山幼稚園 木村創）

事例8 幼稚園

《本震時の状況》

私が兼務する幼稚園は被災の激しかった宮城県名取市にあります。幸いにして園が丘陵に位置し、津波の被害はなく、園児全員が無事でした。

阪神淡路大震災が未明、中越地震は土曜の夕方園児が在園することが稀でしたが、今回は園児の半数以上が在園の時間帯でした。

年長のクラスで帰りの二番バスを待っている園児と遊んでいた午後2時46分、地響きを伴って震度6が襲ってきました。「あ、これが来る来ると言っていた宮城沖地震」と試験を受けるように落ち着いて園児と共に机の下にもぐりました。電気も消えた2分半は、まるで私達の度量をこれでもかこれでもかと試しているようでした。この時に交わした園児との言葉は、「ながいねー」「もうおわるかな」「先生が守ってあげるから心配ないよ」「うん、先生と一緒によかった」「なにも倒れないね」。狭いスペースで固まり、手を繋ぎ合っている園児はみんな勇敢で冷静でした。揺れが収まったところで園の駐車場に避難し、食料と水を配布し、毛布を被り、終には園バスで暖を取って保護者の迎えを日暮れまで待ちました。電気、ガス、水道、電話も止まり、連絡網は機能せず、あらかじめ決めてあった保護者の迎えを待つしかありませんでした。

血相を変えて迎えに来るお母さんを見つけると誰一人泣かずにいた子どもが泣いて抱きつき、職員も張り詰めた感情が破れて涙が止まりませんでした。マンションの立体駐車場が動かなくて車を出せなかったり、買い物先の駐車場の地割れで車が動けなくなりヒッチハイクで迎えに来た保護者等、最後の引き取りは夕闇迫る頃でした。

《その後の状況》

幼稚園は終園日までの4日休園とし、修了式も延期し3月30日に平服で、との通知で集まってもらいました。でも、卒園時は精一杯着飾り、私も燕尾服、先生方も晴れ着で迎えました。親族を亡くしたり床上浸水や自家用車を流されてしまった保護者もいたのですが、なけなしのガソリンをはたいて集まってくれました。卒園児たちの歌声が園舎に響いてくるとまるで日常が戻ってきたようで、それがどんなに職員、保護者に勇気を与えたことでしょう。

沿岸の幼稚園には園舎が津波で一呑みとなり園児4名、先生1名が亡くなって廃園になったところもあります。また津波や放射能汚染で休園となり採用取り消しや解雇となった保育士・幼稚園教諭が後を絶ちません。私たちも余震におびえ、ガソリンも尽き、ガスがないため3週間も風呂に入れず、バスも定期に来ない状況では新学期を5月連休明けにするしかない決めていたところでした。でも私たちには無傷の園舎があります。卒園児たちの歌声が、4月11日予定通りに園を始めることを奮い立たせてくれました。一刻も早く園という日常を取り戻そう、それが子どもを元気づけ、保護者が被災復旧に専念できる道であろうと考えたからでした。

園では地震対策として本棚からピアノにまで転倒防止装置を付け、山の斜面に泥を吹き付け芝を植えて崩落防止に取り組んできました。園舎の安全第一の備えが全員無事の成果を生んだと確信しています。

《振り返って》

しかし悔しいことに津波を配慮しないでウランを弄んだ東電の放射能が、東電の電力を使っていない東北に降り注ごうとしています。地震や津波という天変地異には非力ながら立ち向かう方策がありますが、人災である放射能汚染には対策の立てようがありません。いたいけな園児のみならず孫子の代までに負の遺産を残さない賢明さを大人である私達が持たねばならないと痛感しました。



津波で破壊された幼稚園の内部 ぬいぐるみと、倒れたピアノ（上部）



津波で破壊された幼稚園の内部



津波で破壊された保育園

(尚綱学院大学子ども学科・同附属幼稚園 岩倉政城)

事例9 保育所

《本震時の状況》

- ・地域の特性：地域は住宅街にあり近隣には川、公園が多数あり自然が多い環境である。
- ・保護者の特性：父親は常勤が殆どであり、母親は時間勤務(パート)が多い。
- ・保育の特性：園児数約90名定員。職員約25名。2階建ての園舎。0才、1才、2才は1階、2階は3才、4才、5才の部屋となっている。クラス編成は年齢ごとの保育を実施している。また、3才児、4才児、5才児クラスに2名の障害児が入園しており統合保育をおこなっている。保育内容は自然を活用した、遊びを中心にした保育を実施している。園長も保育に参加している。
- ・災害発生時の状況：1階では0才児クラス、1才児クラス、2才児クラスは各部屋で午睡中であった。2階では3才、4才、5才児クラスがホールにて午睡中であった。子ども達の様子は殆どまだ眠っていた。
- ・子ども達の様子：0才から2才クラスは起こしてから不安な様子は見られなかった。子どもを集めて布団を子どもにかぶせたり、テーブルの下に隠れたが、嫌がる子どもは見られなかった。3才から5才児クラスの子どもの起こすと全体に落ち着いていたが、3才2名が不安で泣いた。布団をかぶるように指示をした。3才の自閉症児が布団をかぶるのを嫌がるが無理にかぶせみんなの場所に連れて行く。その時、電器の照明が天井から落ちた。子どもに当たらなかった。
- ・保育者の判断：園長は相談室で面接を行っていた。保育士は子ども達と布団をかぶっていたり、テーブルの下に入っていた。園長は直ちに1階の0才から2才児クラスに行きパジャマを着替えさせ、避難公園へ誘導するように指示を出した。主任は事務室から2階のホールへ行く。子どもを集めて布団をかぶるように指示をした。その後、園長が2階のホールへ来て、3才から5才児にパジャマから服に着替えをするように指示し、次に避難公園へ移動するよう指示をした。

《その後の状況》

- ・子どもの変化：①3才児以上は保育士の側にいる、保育士から離れない不安な行動が見られた。
②避難ごっこ遊びをして楽しんでいた。
- ・課題と工夫：余震が続いているので、0才から3才児の外遊びは園庭のみにし、4才、5才児は保育園の近くの公園を遊び場として保育を行っている。また、子どもの人数の把握を保育園に入る前に確認するようにした。
- ・公園や他の場所での保育士の判断が必要であるため、色々な場所の避難の確認を行った。
- ・保護者からの要望：給食を出して欲しい。職種に関係なく保育を受けさせて欲しい(職種が医師、看護師、保健師の仕事に従事している子どもを受け入れた)。

《日頃の防災教育・訓練の有効性、日常的保育の重要性など》

- ・避難訓練を行っていたので、子ども達の同様は少なく、スムーズに避難できた。
- ・避難訓練以外に、防災頭巾をかぶり慣れさせていたので、殆ど嫌がらずにかぶっていた。
- ・日々の保育で、保育士の指示や話を聞けるようになっていたが、避難時に生かされていた。
- ・日常保育の重要性：①話を聞ける子どもに育てる。

- ②日々の保育において保育士の連携が必要であると感じた。
- ③直接火を炊いて（ガス器具ではなく）、料理をすることができることを教える。

《保育・保育施設の在り方、保育行政、地域連携等について》

- ・ 保育施設：①2階以上の施設にはすべり台が不可欠である。
 - ②1階に0才から2才児クラスにすると、避難がスムーズでできると思われた。
 - ③照明器具は、天井ではなく壁を利用した照明の方法が良いのではないかと。
 - ④給食のためのガスボンベの確保をしておく。
 - ⑤棚の固定、金魚等の水槽の固定が不可欠。
- ・ 保育の在り方：①子どもの人数を場所が移動した場合確認する。
 - ②子どもの心理、発達段階を把握して子どもに適切な関わりを行える保育士の養成が必要であると思われました。

(河合幸子)

事例10 施設

児童デイサービス施設A園における被災状況について

《地域の特性、本震時の状況》

当地域は、宮城県沿岸部の一地域である。地域の特徴としては、県内都市部に比べて住民同士のつながりは深く、普段からの人間関係が密で、お互いの生活歴や現況について情報共有や助け合いも豊富である印象がある。また、住民の人柄も穏やかで温かく、よそものの筆者もいつも温かく受け入れていただいていた。

地域は3月11日の震災において多数の死者と行方不明者を出している。またライフラインの復旧に困難をきたしているが、A園は幸い津波の被害を免れ、震災後は障がい者対象の避難施設として使用されたが、5月2日現在は新年度の園児、児童の受け入れが一部開始された。また、3月末でA園の指定管理者は変更となったため、これまでの職員は3月末で退職している。

A園の保育(療育)について

週5日(月～金)午前 就学前園児の母子通園

週5日(月～金)午後 特別支援学校の児童の下校後の児童クラブ

職員数 正職員：保育士3名(園長含む) 児童クラブ指導員 1名

パート職員：3名

被災当日の児童 特別支援学校の児童約5名(2年生 1名 3年生 1名 5年生 3名)

被災当日の職員 正職員4名 パート職員 2名

- ・ 当日の状況

当日、特別支援学校卒業式のため、児童 5 名はいつもより早く下校してきた。地震が起きた時は、おやつ準備中だった。強い揺れが来たので机の下に避難させたが、揺れは長く続き、落ち着いてきたところで、外に出た。テラスで待機したが、雪が降ってきて寒く、毛布やジャンパーなど重ね着させた。

その間、保護者との電話連絡等不可能であったが、30 分以内に沿岸部以外の保護者 3 名は駆けつけて、児童と共に自宅へ向かった。沿岸部の児童 2 名(2 年生・3 年生)の保護者は到着しないまま時間がたった。施設内は物が散乱し、危険だったので送迎用ワゴン車に職員 4 名と児童 2 名が避難した(パート職員は帰宅)。

児童 2 名は比較的落ち着いていたが、日が暮れてきて保護者が到着しないので、園長が地元 FM ラジオ局に駆けつけて職員と児童全員の無事について放送してもらった。後日、保護者から放送を聞いて安心したとの話があった。また、施設のある地域には浸水していないという情報も保護者には伝わっていた。

職員の家族や自宅とも 1 日目は連絡の取れないまま眠れぬ夜を過ごした。地区の避難所にて飲料水やおにぎりを配布しているとの情報があり、職員がもらってきたものや、園にあった菓子類を出してきてその日はしのいだ。ガソリンは十分あったので、車内で暖房もかけ、ラジオも聞くことができた。避難所へ一般の人と一緒に避難することは(自閉症の児童)無理だと判断した。

・ 2 日目の状況

朝になり、職員 4 人はそれぞれ交代で自宅へ歩いて安否の確認に出かけた。幸い全職員の家族は無事であったが、自宅に浸水した職員もおり、園長の家族が確認できたのは、3 日目だった。その間、園長が市役所の支部庁舎へ出向き、児童 2 名と職員が施設駐車場に避難していることを伝えると、支援学校体育館への避難を勧められた。明るいうちに体育館へ入り、児童を良く知る教員も避難所運営に参加していたが、結局体育館には一般の避難者も多くおり、全く落ち着けずに走り回り、なお寒さも厳しかったので、その晩も車中で過ごした。夜になると「帰りましょう」「おうち行こうよ」などの言葉が児童から聞かれたが、なだめながらパニックにもならず過ごすことができた。

・ 3 日目の状況

避難所の運営をしていた担当者が、A 園の子どもたち専用に教室の一室を確保してくれた。この日、2 名の児童の保護者も到着し、1 名は親せき宅へ、もう 1 名は保護者と共に避難所に残った。

《保育者の判断と思い》

このような大災害は予想していなかった。また、保護者が引き取りに来られない事態についても想定していなかった。結果的に全員無事に保護者にお返しできて、本当にホッとしている。また、未就学児(当日は降園後)も学童もその家族も全員無事であったことは、何よりも幸いであった。卒園した児童や保護者の中には亡くなった人もいる。最後まで子どもたちを守ろうとした母親たちの姿が想像される。

一般の避難所に障がいのある子どもたちと一緒に避難させることには難しさがあった。ワゴン車で二晩過ごしたが、子どもたちの状態は思いのほか落ち着いていた。想定していなかった事態の中での判断であったが、結果的によかったと思っている。

指定管理が移行する時期が、この震災と重なったことは子どもたちや保護者にも大きな不安を与えている。震災の混乱の中で未だに子どもについての十分な引き継ぎができていない。職員自身のこれから

の生活や地域の復興など心配は尽きない。

《まとめ》

甚大な津波被害を受けた地域であるが、幸い利用する子どもたちや家族、保育者の人的被害、施設にも被害の少なかった事例である。しかし、地域全体への被害は大きく、震災当日から二晩を車中に避難して過ごす結果となった。避難所としては地域の避難所や障がい児を受け入れやすい支援学校もあったが、一般の避難者とともに過ごすことには困難があった。車中への避難は想定外の事態の中での保育者の判断であったが、結果的には適切な判断であったことと考えられる。

震災時には停電による連絡の遮断、津波による交通の遮断があったが、FM ラジオ局への安否の連絡や放送、支所庁舎との連絡などすべて徒歩で行い、施設が孤立することを防いだ保育者の判断は適切であった。これらは、普段からの地域の中で人間関係やコミュニティーの形成の中から生まれたものであるとも考えられた。

A園においては、この震災までともに過ごし、子どもたちと保護者を支えてきた保育者が全部交代することになった。子どもたちも保護者も不安は大きく、今後の生活を支えるためにも、是非とも子どもや家庭の実態、小集団での療育の状態についての確実な引き継ぎが望まれる。

今後、地域全体の復興の中で、障がい児の療育や保護者支援に対してもこれまで以上に地域との連携のなかでの支えが必要となることが考えられる。行政には、地域コミュニティーのよさを生かしながらも、きめ細やかな支援を望みたい。母子通園の中で、親子関係の構築や生活リズムの確立を支えてきたA園の療育について、そのままの継続は難しいが、急激な変化は避けていくことが子ども達にとっても保護者にとっても安心材料になっていくと考えられる。新たな指定管理者への継続性を行政が仲介することが一番望ましいと考えられる。

(報告者の希望により匿名)

その他の報告・意見等 1

<今回の報告についての基本情報>

- 1) 来訪日時： 平成 23 年 4 月 10 日～13 日
- 2) 場 所 岩手県M市内の避難所および居住地区（自宅）、保健所等
- 3) 目 的 医療機関による「こころのケアチーム」による介入
- 4) 職 種 臨床心理士
- 5) 報 告（以下）

上記期間にM市内の避難所および被災者の居住地区を訪問する形でかかわった、心のケアチームの活動の中で観察された、子どもたちの様子について報告する。

(1) 背景情報：

- ①この時期の避難所では、小学校以上の学校に通う子ども、仕事または自宅の復旧のために外出する大人は日中外出しており、老人や障がい・持病をもつ者、未就学児は避難所等で一日中過ごすことが多かった。
- ②保育所・幼稚園は平屋作りの建物が多く、1階部分を津波によってぶち抜かれることが多かったM市では、壊滅的被害を受けている施設が多いように見受けられた。一方、小・中・高校では、2階以上の部分が機能しており、学校の再開は予定通り進められている状況であった。
- ③未就学児は日中は親たちに連れられるか、または避難所や自宅にとどまって過ごす。この時期は、当初数百名単位を収容していた避難所でもかなり人数が減っていた頃で、複数の避難所が次第に統合されて集約されていく時期であった。世帯ごと別の避難所に移動させられることもあり、その場合、先住者となる他の住民が避難所を仕切っていることもあり（被災後 1 ヶ月の時点ではすでに避難所集団の中で自然発生的に牢名主的リーダーが存在しやすい）、避難所を移動した世帯は「後発組」として肩身の狭い思いをすることもある。

(2) 子どもや保護者、周囲の様子：

- ①特に未就学児が複数で遊んでいたり興奮して大きな声をあげたりすると、先住者から子どもや保護者らが苦情を言われ、声を立てないように気をつけたり、割り当てられた部屋（教室の 1 つ等）から子どもたちを出さないようにしたりなど、過剰に抑制的に生活していた。中には、同室に情緒不安定な方がいたり子どもに関わることがなかった成人がいたりする場合にはさらに抑制を強いられる生活状況であった。
- ②保護者が付き添う必要のある小さな子どもの場合、親が長時間、寒い室外で対応し続けることが難しく、窮屈でも室内で過ごさざるを得ない、一旦興奮させると夜にはしゃいでしまうこともあるので、日中も抑制をさせることになる、震災による心理反応として夜驚のような恐怖反応が出ることもあり、夜間迷惑をかけているという保護者の負担感から日中も抑制しがちになる、という状況が見られることがあった。
- ③親自身に余裕がなく、子どもの衣食住の確保が精一杯で、遊びやユーモアに付き合うことができない。また、悲惨な体験が自分たちや周囲の人たちにあるために、子どもが楽しそうにふるまったり遊んだりすることを「不謹慎」だと考えてしまうこともある。

④小学生が日中もいる避難所では、活発に動き回る子どもたちの方が優勢な立場にあり、老人らの方ががまんする形でやり過ごしている。

(3) 望まれる対応：

①子どもは遊びの中で被災体験を再現（津波で家族を亡くした子どもが津波ごっこをするなど）することでカタルシス（心理的浄化）を得たりストレスの発散になったりすることがあるが、遊びの機会が奪われることで、回復が遅れてしまうことにもなり得る。臨床心理学では、阪神大震災における学びから、子どもの遊びを担う大人（大学生・大学院生などで編成される「子ども遊び隊」など）を派遣することがあるが、きわめて小規模で幸運な一部の子どもに提供されるのみであること、遊びや子ども対応については専門職としてではなく個人の経験に基づいて関わらざるを得ないこともあり、必要以上に興奮させたり、十分なクールダウンを行えていなかったりすることが考えられる。豊富な選択肢から、一人ひとりの子どもの置かれた状況、特性に応じて遊ばせることのできる保育士、幼稚園教諭といった専門職は、被災体験による心的外傷体験（PTSD）の治療や後遺症の縮小には必ず貢献すると考えられ、災害時にこれらの専門職が直ちに派遣される制度が確立されることを切望する。

②保健師などの地域援助を行う職種が、行政の立場で子ども対応をどのように考えたらよいか、地域住民が周囲の子どもに配慮すべきことはどういったことかなどについて、平常時または被災後早期に心理教育を行うことができるシステムを構築することも重要である。直接的に不満や不調を訴えることが難しい未就学児やその保護者らは、特に周囲に容認してもらうなどの努力を求める発想が薄く、自分たちが我慢することで対処する傾向が強い。特にこれらの方々へ援助の手が差し伸べられることが重要であると思われる。

（聖園学園短期大学 安藤節子）

その他の報告・意見等 2

《物資支援ボランティアについて》

小さい子どもがいる被災家族への物資支援をしています。3月の末にM市近辺に支援物資を持って入りました。

子供向けのものを持って行きましたが、避難所には赤ちゃん（1歳児まで）がほとんどいませんでした。最初は避難していたけれど、集団生活にはなじめず（特に夜泣きが問題）みんな実家などを頼って、避難所を去っていました。避難所から出してしまうとオムツや生活用品の支援がほとんど届かないと思われたので、独自に在宅避難者への物資支援（子ども用の物資）を始めました。支援した総数は多くありませんが、一切合財流されてしまって、そこから元の生活に戻るには本当にいろいろなものが必要になるなど感じました。

着替え類、オムツはもちろんのこと、保育園に行く場合にはお昼寝布団から何からすべて買わなくてはならない。3人も子どもがいればかなりの負担になります。ベビーカーも流され、三輪車なども津波で壊れてしまい使えない。チャイルドシートごと車も流されています。ベビーカーやチャイルドシートは一定期間しか使わないにもかかわらず高額なものなので、購入の優先順位が低く、落ち着くまで我慢

している方々が多いのではと思います。

避難所に今もいらっしゃる方々は、ベビーカーがあっても置く場所がないと言っていました。今後仮設住宅に入居が進めば、ベビーカーやチャイルドシート、おもちゃなどの支援が必要との声ももっと上がってくるのではと思っています。

支援品目の中で、オムツの在庫がだぶついているという声もありますが、使う人を把握し、順次差し上げられる体制があれば、オムツは使用するものなのでだぶつきはしないと考えられます。だぶついているとすれば、支援の体制の問題ではないかと思われま

す。1パックオムツをもらっても何日間かの足しにしかならないのですから、だぶついているくらいならどんどん何度でも渡して使ってもらえばよいのではと思います。

(秋田大学 奥山順子)

その他の報告・意見等 3

保育学会会員です。この度、仙台市内の自宅におりますときに被災いたしました。私は保育園勤務ではないので、近所の子どもや子を持つ親御さんから直接伺った、子どもたちの様子を報告いたします。

《ある保育園の本震時の状況》

地震発生が金曜日の14時46分ということもあり、子どもたちが園にいる時間帯。親たちが、園に連絡を取りたくても、あまりの規模の災害に連絡が取れなかった。また、電車をはじめ、すべての交通機関がマヒしているため、園に迎えに行くことができなかった親が、かなり多くいた。A保育園に4歳児を預ける親は、保育園に徒歩で辿り着いたのが午後5時過ぎだったという。災害時における緊急連絡の取り方の問題は非常に大きな課題だろう。

親と子が離れ離れになっているケースが多々あった。小学2年生の子を持つ母親は、勤務先から自宅まで帰るのに3日を要した。

生後10ヶ月になる同じマンションの子は、地震発生直後からずっと泣き続けていた。その一方、母親におんぶされて避難所に逃げて来た子はあまりのショックのため、目を大きく見開いて無表情。泣くことができない状況も見られた。

被災地では、震災後、余震が多くあり、その度に子どもたちがおびえたり、泣いたり、赤ちゃんがえりをしている状態。その中で、落ち着いた状態を保っている子は、親たちの対応が「いつもそばにいるから」「大丈夫」というものであった。実際、未曾有の甚大な災害を目の前にして、大人でも不安が大きい。しかし、それをそのまま子どもに伝えてもなんの益もない。子供の不安を取り除くためには、やはり安心をもたらす言葉がけが必要であると思われる。

避難所に行かずに済んだ子どもたちも、通常的生活とは異なる事態に不安を抱えていた。長期間の停電などライフラインの切断。AC日本公共広告機構のアニメを伴うCMも、食い入るように見ていた。このCMは、一部で耳障りなどという批判・非難もあったようだが、それは被害のない地域の贅沢なクレームであり、被災地では、アニメなどの子どもを楽しませるものがなかったので、このCMすらわずかな楽しみだったのだ。むしろ、このような事態の時には、1チャンネルでも「癒し・楽しみ」をもたらす番組が必要なのではないか。

《保育学会の活動に対する意見など》

避難所や地元の子どもたちの様子を見て、疑問が生じたときに、すぐに助けを求めたかったのですが、学会のどの方々に相談したらよいのか、と戸惑ってしまいました。連絡手段もなかったので仕方がなかったのですが、一本化した窓口などがあることがわかっていたら、だいぶ助かったかと思います。

(大沼郁子)

② 福島県

事例1 幼稚園

《本震時の状況》

先生の顔色は蒼白であり、3歳の園児の瞳は、瞬きもせずに、じいっと大人の目を見て訴えているように、「ことばの通りにするよ、先生」、その顔は泣き顔ではなく真剣に「先生に命を託す」、の一瞬が届いた場であった。

4歳児は「怖い」の声で、「大丈夫だよ」の声かけと同時に一人ひとりに手で触れる。幼子を守ることの使命感を見た。5歳児は「怖い」と友だち同士で泣く、その様子を見て泣きたい園児が集まる。感情が育ってきている。「ママ」の声も聞こえたように思う。騒ぐ様子もなく静かな祈りに似ていた。

3歳児の行動、4歳児の表現、5歳児の感情表現の行動など、3月11日まで幼稚園の環境で育ったことが、突然の事態に経験として出たと思う。

園長は、突然の事態に「地震の震源地は？震度は？」と訊いた。次の判断をする。携帯を持っている職員は、津波のことだけであとは聞き取れないと言う。園長として、園児をどうするか、責任ある者の采配が大切であるということ、同時に責任を果たす役目を思う。

1週間前に避難訓練を実施。冬場は火災避難の計画だが、最近は火災も減少なので、訓練に地震を入れ、揺れが止まったら、広場の松の木場所に逃げる。それから、火災を想定して、その日の風向き、道路の混雑など判断して逃げる。実施後、反省をする。この訓練が園児にも教職員にも役に立ったと思う。

今度のM9は二度と起きて欲しくない。幸いであったことは、常に勤務している場所であり、周りの状況を把握していて采配が可能であり、教職員全員同じ気持ちになりこの場を乗り切ることが出来たことである。園長は、園児を安全な方法で親元へ帰すこと、年齢の若い教職員から家へ戻す、役職の者は、2日休みの打ち合わせをする。(次の日は自分の家を片付ける。)、理事長・園長は幼稚園を守る責任者となる。

そしてこの時は、次々と余震が来て、暗雲から吹雪となり、園児と教職員めがけて竜巻のように襲う。園児は「寒い」と声を出した。スクールバス2台に50人の園児と11名の教職員、バスを避難所にして広場の真ん中に置く。バスを暖めて、園児を安心させて保護者が迎えに来るのを待つ。この判断は電話・電気・水道のライフラインが不通になり、国道は車が走っているが脇道は判断できない。親が迎えに来て「会社は大変な被害で帰ることになった。途中のブロック塀は壊れ、瓦屋根は落ちて、道路も亀裂が入りバスは無理。」との情報が入る。園児にはおやつを配り、食べていると迎えが来る、と話す。迎えに来た親に感謝をし、園児は避難できたことを報告する。避難訓練の大切なこと。油断大敵にせず常に心の準備にも日頃の訓練が必要と思った。

《現在までの保育の経過、保護者の反応、園経営の課題》

幼稚園の被害は、園舎の外壁にひびが入った。余震の強さにひびが亀裂になり角のブロック部分は落下してきた。1週間後は修了式・卒園式がある。修繕を決断し、業者と打ち合わせで1週間後の行事は外壁なのでできるということで一安心。教職員全員、12日は自宅片付け、13日は幼稚園の本や書類、食器

片付け、午後は、保護者の1軒1軒を訪問して無事の確認をし、16日まで休みの案内を手渡す。

一日一日変化がある。ガソリンが入らない。バスも教職員の通勤も無理、保護者も車が動かない。そこに放射能関係の話題で持ちきりとなる。(でも軽く考えていた、これほど重大になろうとは。)余震の方が気持ちに余裕なく園児を危険な目に遭わせたくないので話し合う。

15日に緊急網(園独自に保護者へ連絡)利用して(携帯電話不通)在園児は春休みに入る。保護者会と卒園式は延期の連絡。この決断をすることも熟思することが大切。役職の者の声を十分に聴くことで幼稚園を支える心を一つにし乗り越えること。行事の延期で園舎内部の歪んだところも手直しを入れ、3月28日までかかる。工事代金の苦勞より安心安全にて保育が出来ることは教職員全員の願いである。

また、余震は経験している在園児と新入園児の差が大きい。4月から避難訓練をしたいが、机に潜ることが3歳児にはできない。4月中は幸いに11時帰りと12時帰りである。外遊びは無しで済んだ。幼稚園の室内遊びの内容の工夫で、園児の喜びや楽しみ、そしてマナーもルールも自然に目が届いた。担任の知恵が必要である。

3歳児は、自分の心の生活から友だちとの交わりもする。トイレも昼食も帰る時も一つひとつ意味があることを経験する4月である、外遊びが出来ない分、保育内容を考えることで集団生活の楽しさが身に付き、また、身近な同年齢の様子を見て感じることも大切な4月とする。

4歳児は、担任の言葉に反応できる時と、自分で動いて先生の表現に反応する時、幼稚園の集団生活は自由に行かないので、泣いて訴えたり、声を出してみたり、良い子にしている窮屈になったり、親と離れる時に甘えてみたり、変化が出る自分を確かめたり、担任をよく観察しているのである。外遊びが出来ないことを納得できるのか追うことも大事。

5歳児、友達との遊びを確立して、時間が短いのかとも思うが、全園児との関係で4月は年齢の小さい園児のお世話をしたり、遊んであげることで自己確立している。外遊びは出来ないことを知っているように口に出さない。体力的な遊びの消化を計画する。

大人も幼稚園全体に目をかけて動いていたのだが、今回のように室内での保育は目が届く。生活の流れも分かりクラスの位置や関係も子の接し方も理解できたと思う。担任としては良い。

保護者には、年間行事通りには行かないことを連絡するのに考慮しなければならない。幼稚園全体で行事をすることが、地震の時に避難である。1学期は、園に慣れない保護者の不安も、園からの不安もあるので、学年ごとの行事をしていく。遠足・参観日・PTA総会など学年で行う。

《放射能の保育への影響と対策》

保護者の反応、敏感になったのが放射能である。3月末に電話で確かめたところ百余名の内約1割であるが北海道から九州まで、これは両親のどちらかの実家である。幼子の配慮は2、3年どころではない、数十年後まで気にしなければならず不安と福島原発と風評の言葉で常に心が安定しない。

新入園児に対しては、4月3日に電話にて入園式の連絡を担当がする。新入園児保護者は、放射能に敏感になり、余震より幼稚園の生活を気にしている。幼稚園では、マスク・帽子・長袖・水筒・挨拶は迅速にし、出入りに気を配る。の説明と文章の両面で連絡をする。外遊びはさせない。遊具は遊べないように囲っては？話し合うが、家庭でも言葉で「ばい菌が付く」「目に見えない」「外は駄目なのだ」と言

葉にするので、外の遊具はそのままにする。

放射能の説明をテレビやラジオ、新聞から吸収していても無知に近い。世界中からも危険度について未知の数字であって結論らしき数値が出るまでは時間をかけてほしい。その間生活していかなければならず、特に乳幼児、幼稚園、小学生、中学生、若い母親の心配は必要である。

今のところ余震もあるが福島原発より 50～60 kmにある当園として、次の指示（避難）が出たら幼稚園から離れる。但し、園児が一人でも残る時は、離れられない。放射能数値は常に 2 位、3 位の福島市、郡山市で、1 位は飯館町である。

その中で保育の内容を考慮する。外遊びはしない 4 月。家から幼稚園まで、マスク着用、長袖着用、雨の日は長靴、帽子をかぶる。挨拶するのは迅速にて出入りをする。保育は幸い新学期であったこと、11 時帰りと 12 時帰りで外遊びなしで、幼稚園内で保育したことで、早目の新生活に園内の施設や遊びの約束（サッカーでなく、手で打つことや、廊下は走るのではなくスキップする。スキップの苦手な子も言葉を知り体でリズムを覚える）。

保護者にとって幼稚園に不安を持ちながら送迎するのでなく、一応安心と思ってもらいたい。行事も園全体では、いざ避難の時の命令指示が行き届くようになるのを確認するまで、一学期の行事は、年少、年中、年長の学年ごとにする。例えば参観日は土曜日ごとに実施、教職員は出勤とし園内研修とする。年齢別の発達状態と保護者と園児の関わりも知ること、避難誘導の役目もする。今までの保育と異なる幼児と大人の関係が多岐である。

5 月より 14 時帰りになった。外遊びは 1 時間位はよいと思うが、数値が決定しないので 30 分は外遊びする。これも学年ごとに午前中 3 回となる。5 月 6 日、園児は 1 時間 30 分外に出たことになる。学年は約 25 分で遊んだ。年少児は、すべり台、鉄棒、汽車と固定遊具を利用していた。走る子も表情は喜々としていた（外遊びのできない子—0 名）。年中児、集中して固定遊具へ、その 7 分後、走る子、鬼ごっこで、新入園児はバランス崩し転ぶ子が多数出る（家から外遊びは出来ません—1 名）。年長児、固定遊具よりブランコ、スクーター（年長児として出した）で順番を待ったり数えてブランコを乗ったり、昨年からの楽しみを継続できた。

約束はマスク、スモック、帽子、これを室内へ入る時は、ふるい落とし、うがい、手洗いを実行する約束をした。全園児がスムーズにしたとの反省で、一斉遊びを思い出した。自分の遊びたい時に遊び、遊びが満足した時に片付ける等は別とし、外遊びが出来る時間で遊び、合図で入室する。まだ一日だがトラブルもなく、泣く子も出ず、ただ遊びに流される様に動く、このことで人間のどろどろが出ないままに過ごしていってしまうのか心配と思った部分である。年長 2 名は外遊びはしないと連絡入る。室内と外遊びの体の動かし方が、どう変化するか観察、言葉の表現や情緒安定や忍耐力等を観察していく。

《日頃の防災教育の効果、日常保育の中の重要なこと、保育の専門性のあり方》

危機管理の中に防火訓練（火災・地震）、不審者の侵入、AED 利用、と今まで 1 年間の中で実施してきた。

3 歳児：避難訓練は 5 月～3 月まで実施。緊急時の言葉を知る。

1. 練習する 2. 全員同じ動きをする 3. 先生の言葉や動きに従う、できたら認める

4 歳児：避難訓練であること、緊急時の練習をつみ重ね、スムーズに出来ることを認める。本当と嘘を知らせる。

家でも火災を見つけたら知らせる等、一年間の中で行なう。

5歳児：避難訓練は実際に突然なので、訓練日は知らせるが時間は担任のみ。

反省は避難状況を見て伝えたり、消防署見学、話を聴く講座もある。

このM9の地震は3月であった。一週間前に避難訓練をした。この訓練は日のみ知っていて、担任も園児も時間は伝えていない事での実施、それも日頃の効果と認めている。机の下で我慢できたこと（長い揺れが続いた）、担任の判断と度胸が必要であった、命を任せる子との信頼関係が出来ていたこと。

その後の処理は、経験年数が役に立ったこと、バスを園庭の真ん中にて待機、園児を送り届けるのではなく辛抱強く待っていたこと。園児の不安を守るため、飲み物、おやつを食べて待ったこと。保護者に上手に避難でき、待っていたことを伝える園長も担任も挨拶、園児を守り、寄り添う保育が生きていること。

園児は幼稚園が好き、どの教職員の声にも聴く耳を傾け、理解していることを、この日ほど教育のあり方が理解できたことです。

《振り返って》

この度の被災について、県も市も連絡が届くまで時間がかかる。放射能について文科省から県へ、それから県全体の幼稚園への連絡はテレビやラジオの方が早いことを知る。そして幼稚園としての考えや判断は、保護者への連絡も教職員の安心にも、必ず必要な話や文章が、大切な連絡網であることを知った。

特に小学校は同じ土俵の上で地域の一員として仲間として相談できたことです。このような交流は頼りになるし、幼稚園児が入学して学校生活を安心して見守れることを保護者にも伝える。家庭の太い柱一本と、幼稚園・小学校・中学校の集団生活のもう一本の柱は、どちらも大切であることを保護者と話し合い小学校へと歩む。

園児は友達と別々の小学校に行くことを淋しいという声が聞かれたら「中学校で一緒になれるよ」「高校で一緒になれるよ」と伝えるのみで園児は納得してみせてくれます。

このような学校教育が充実してきたところなのに、今の現況は風評だけで終わらず段々と不安になる実態である。いつまで待てばよいのか、誰に訴えたら救ってもらえるのか。福島県に住めて良かったが一転して心は暗闇のまま続く。幼子を教育しているからなのだ。

《保育行政への要望》

3月11日のM9の震災と福島原発の放射能の被災で、福島県は想定外の言葉通り、一般県民は住めば都を追われて、自分の生きる道を工夫することが出来るのだろうか。一家の主は、家族のみでなく、田、畑、家畜、仕事など24時間を上手く自分の体の中に入れていて生活をしていたのが、考える余裕もなく、命令のごとく、流れに乗って避難したと思われる。

私達の幼稚園教育も卒園式・入園式が目の前で夢と希望が膨らむ月である3・4月は、一年の生活の中で忙しいが、待ちどおしい時間である。非常時である、こんな時は幼稚園の機能を回転させるため、今までの保育や行事を納得の上進めるために、教職員が全員同じ思いであることが大切である、と話し合いをする。

ここは、代々土地を守ってこの土地に住み、子育てする三世代家族が8割の地域である。正に、新入

園児が、避難はするものの全員入園式までに戻って入園式をした。3/22 から FAX が動いた。それには被災児・震災児を受け入れる人数確認のアンケート、被害状況のアンケートと一週間に2度くらい来た。

4月上旬受け入れは補助を出す、決定は3ヶ月の補助として出た。そして内容は4月10日過ぎ、内容は2分の1の補助であった。県私幼協は、3ヶ月内容は未定、福島市協会は1学期、郡山市は3ヶ月から6ヶ月と報告が入ったのは3月末である。

3名を受け入れた（双葉町、内郷）。園独自としては、制服は在庫の物、教材関係は新しく購入した。入園料・保育料は無料として1ヶ月25,000円（PTA会費と給食費半額）を約束して入園を許可した。

行政への要望として、今回に限らず、丁寧な文章が必要（保護者への伝達もある）。被災・震災児に対してのものは少ない。県の文章は私の理解力不足である。

幼稚園協会は、常に福島県教職員研究会で県が一体となっているが、今回は不親切に思う。それは、自分の園でも被害があったので他園ではどうか気になるだけで終わりにしたくない。何か出来ないだろうか、と気ばかり焦る。

放射能数値をテレビでも新聞でも伝えているが、この数値は幼稚園児に対してどう判断することが出来るのかと常に不安で、不親切で自分のこととしていらいらする。幼稚園はどんな方向性を持つべきか、地域の幼稚園で手や耳を傾けて待っていると一日一日過ぎる時間は不満になっている。

最近、余震は大きいのが来ると言葉が届く、準備する心得が少しは出来ているが、不安は大きい。でも、幼稚園児は守っていくことが第一条件である。教職員も地域も大切である。県の考えや、原発の本心はどこまで報道しているのか、末端まで伝達してほしいと望んでいる。

（田村町つつみ幼稚園 辻紀美子）

事例2 幼稚園

《本震時の状況》

3月11日（金）午後2時46分にあの地震が起こった。地域震度6強程度で信じられないような強い動きが2回にわたった。立ってられない程であった。

この間、子どもたちをバスで送っている途中でもあった。園舎には、小学校の学童クラブの子ども、1～5年生まで30名と、お預かりの園児5名がいた。先生方は、教室にいた学童の子ども達を机の下に待避させ地震が終わるのを待った。戸や窓を開け園庭にすぐ出られるようにした。泣き出す子どももいた。「大丈夫だよ」と声を掛け合った。

理事長先生と園長も一緒になって子どもたちの安全避難のために力を注いだ。遊戯室で遊んでいた子どもたちは、園庭の真ん中に避難しそこにまとまって座らせた。地震の時に先生方は手分けをして、子どもたちの安全のため、学童の子ども達は机の下に安全待避、遊戯室の子どもたちは園庭への避難に力を注いだ。教室で割れたり落ちたりする物はなかった。しばらくして、地震は収まったが、まだ余震に気を付けるように先生方全員で子どもを守った。誰一人として怪我した子どもがいなかった。

保護者全員にこのような時なので早くお迎えに来て頂くよう電話をした。電話はつながった。携帯はつながらなかった。待っていた子どもたちは5時近くに全員を送り出した。

バスに乗っていた子どもたちは、途中で地震にあった。バスも大きく揺れた。地面が地割れしたり、途中瓦が落ちたり、大きな新築の電気店スーパーのガラスも大きく割れたりした。しかし、バスを丁度よい空き地があったのでそこに停め、揺れが収まるのを待った。運転士さんも先生も興奮していた。安全に気を付けたことに感謝した。その後残りの子どもたちを安全運転で十分気を付けて送り届けた。先生もベテランの先生であり、対応が落ち着いていた。

園舎に被害がないことを確認し、先生方全員で子どもたちの安全を確認した。教室や遊戯室の落ちた書類や本の後片づけをした。その後、先生方が安全第一で帰宅する。先生方の冷静な判断と行動に感謝する。その後の余震に気を付けている。

《現在までの保育の経過、保護者の反応、園経営の課題》

幼稚園は平常どおり電気もガスも水も大丈夫であった。1階建ての良さが出た。

3月16日に予定していた卒園式は延期して、3月25日に実施できた。心配された余震もなく、無事卒園式ができました。ここまで大変でした。終業式は中止しました。入園式もいつ実施するかで予定を延期して、4月13日に入園式を無事実施することができました。

《放射能の影響、対策》

3月12日（土）福島原発の事故が起きる。第1号原子炉が水素爆発。その後続けて第3号原子炉が水素爆発をする。そのためにここも地震の後に放射能の被害にあっている。

県内の学校・幼稚園・保育所の放射線量の調査により、当園は $3.7\mu\text{Sv}$ あった。ある小学校が $3.8\mu\text{Sv}$ 以上あったので報道機関に大きく取り上げられた。そのために室内での遊びが続いている。市では園庭の表土を削る工事を2日に実施した。前よりは放射線量は少なくなってきた。園舎裏の仮置き場に砂袋が置いてある。大地震や余震の影響で地震ごっこなど結構見られた。室内の遊びでストレスがたまっている。市内の小学校、中学校、それに保育所と方向を同じくして市の幼稚園協会も進めているところである。

保護者の反応としては、早く外で遊ばせたい。放射能が元に戻ってほしい。原発事故が収束してほしい。表土の撤去は喜んでいた。

中遊びが中心となり、子どもが生き生きしていない。元気がない。これは問題である。休園者4名、退園者1名と、影響は少ない状況であるが、これが続くと県外に出て行ってしまい、大変なことになる。

10日の設置者・園長会で今後の方針が出されることになる。除染に努め、放射線量を低くしていくことである。1時間以内の外遊びから始めることにしたい。うがい、手洗い、砂ほこりのある時は外に出ない。砂を入れ替える（栃木県より手配している）。

《日頃の防災教育の効果、日常保育の中の重要なこと、保育者の専門性のあり方》

今回の対応に活かされている、放射能の除染を継続すること、震災による子どもたちの心に寄り添った保育の配慮。

《他の専門機関との連携》

市の子ども支援との協力、震災後の子どもの心のケアについて（市の医師会で立ち上げたプロジェクト

ト) 第 1 回研修会に参加する、柳田邦男先生の話、慶応大学小児科精神科の渡邊先生の講義。本の読み聞かせの重要性を訴える。

《保育行政への要望》

放射能線量計の配布、仮置き場の土の撤去

(みらい幼稚園 金澤陸夫)

事例 3 幼稚園

1. 地震発生当日の状況

時刻	状況
14:26	<p>保育終了後のバス送迎及び延長保育中に罹災 →私自身はバス添乗中で、バス内にはまだ園児が10名いた。バスの携帯が緊急地震速報を伝えた直後、大きな揺れがバスを襲う。大きな横揺れ、ガラス越しに見える電柱の揺れ…。</p> <p>「みんなしっかり手すりにつかまって！」 バスの中の子ども達にとっては、直接的な被害が見えなかったこともあり、「キャーキャー！」と言いつつも、バスの横揺れ自体は遊園地の乗り物のように不安は少ないように感じられた。</p> <p>普段の倍近く的时间をかけ、最後の園児を降ろす。家族は既に車の中で避難の準備をしていた。</p> <p>祖母：「お家壊れちゃったよ」 車から出てきてすぐに私とも、孫にともとれる口調で、言ってくる祖母。その様子に、少し前まではニコニコとしてバスの中でふざけていた R子も顔色を変え、表情がこわばる。そのまま、家に入らず避難所に向かったようである。</p> <p><延長保育> 地震発生時に残っていたのは5名。 夕闇が近づく中、大きな破損等もなく安全な延長保育の部屋の中で職員一同と待機。余震の際にすぐに製作テーブルの下にもぐれるように側にいる。電話連絡もつかず、職員一同と共に迎えを待つ子ども達。ほとんど顔を外に出すこともなく、床に伏せたような格好で、テーブルの下に常に体を半分隠している。</p>
18時頃	<p>延長保育の子ども達の帰宅が完了。 平行して進めていた保育室及び職員室の片づけ及び余震に備えての備品等の整理も少しだが進める。紙芝居棚や食器棚、職員室の仕切りなどが割れていたもので、割れたガラスの片</p>

	づけや、二段組になっていた紙芝居棚を下に降ろすなどする。暗くなってきたので、職員も自宅に帰宅。連休は在宅の状態での勤務とする。
--	---

2. 翌日以降の状況

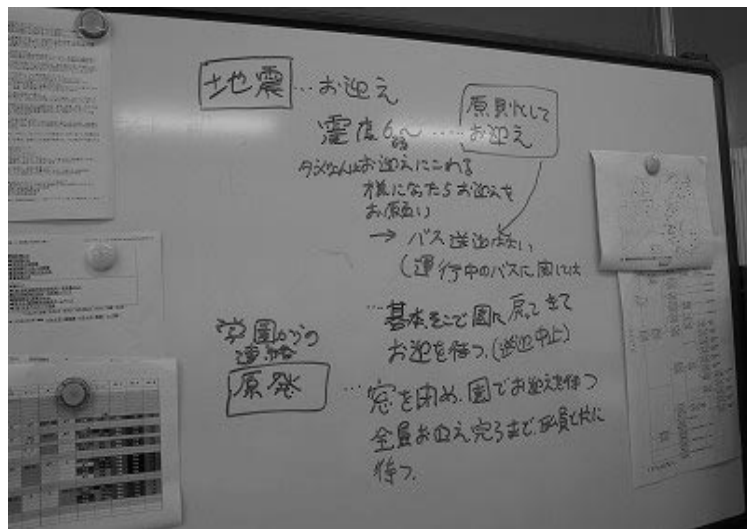
月日	状況
3/12日(土)	幼稚園の職員1名がアパートの破損及びライフライン不足により、学園避難所に入る。同様に避難してきていた学園職員数名と共に避難所の運営補助を行う。その中で避難所に避難してきていた在園児の家族の横で過ごし、話をしたりしながら園児の気持ちの安定を行う。 職員在宅のまま、園児全員の安否確認を指示。職員毎に電話及びメールで安全確認を行う。電話網の混雑と規制により、全員の確認は取れない。以後継続し安否確認を行い、全員の無事が確認できたのは翌日になる。 <16日までの休園を在園児に連絡(電話・メール・ホームページ)> <原発に関してはニュース等で現象を知るものの、安否確認・休園といった園児への連絡と学園避難所の補助を中心に対応を行う>
13日(日)	13日以降、県外避難の動きが活発化する。家屋の損壊のため避難所にいた在園児の家族も避難所を離れ、県外に避難する姿が多くなる。(逆に学園避難所には原発付近からの避難者が増加してくる) <地震及び原発の状況から休園期間を「14日から当分の間」に変更し、在園児に通知> (修了式は中止、卒園式は延期とも連絡)
15日(火)	<園HP内に「りんじ掲示板」を設置。当初は“園の再開などの連絡、在園児家庭との連絡用としての目的”であった>
16日(水)～	4月からの新入園児の“入園取り消し”の連絡が増加し始める。「放射能からの待避」「保護者の職場移転」等が主な理由。
22日(火)	<原発の小康状態をみて、卒園式を27日(日)に実施すると年長児に通知。本来参加するはずだった年中児は休園とする。この時点でも新学期再開時期は未定> <掲示板に“お子さん方の心のケアについて”を掲載>
23日(水)	郡山市豊田浄水場の水道水から、微量の放射性ヨウ素が検出 市の発表を受け、掲示板に市の発表内容を掲示(転載)。同時に園の水道水の安全について確認。
27日(日)	<卒園式>学園の講堂が破損したため使えず、園のホールで行う。県外避難していた園児数名を除きほぼ全員が参加してくれた。
28日(月)	在園児の保護者から園再開の時期の問い合わせが急増。当初30日に発表と通知したが、状況等から決定できず、31日夕方に遅れる。(その状況を見て、一時的避難や休園などを考えた様である)
31日(水)	<第1保育期の開始(始業式)を8日(金)とすることを通知>

	同時に「4月中の主な予定」「園としての方針（①放射性物質について ②飲用水(水道)について ③行事等について ④スクールバスについて)」を通知する。 (この辺りから、園独自の保育への姿勢を通知、連絡しはじめるようになる)
--	---

月日	状況
(始業式まで)	職員会議で保育内容の話し合いを何度も繰り返す。「外遊びの可否」「行事の可否」「保育の方法が変わる中での育ちの確保をどうするか」「気を付けるところ」など…内容は多岐にわたる。
4/8日(金)	<平成23年度 第1保育期始業式> <園(学園)の水道水(井戸水+市水)の放射性物質の検出分析結果公表・・・ 検出されず>
18日(月)	<18日より「放射線量計」による園内5ヶ所(園庭・中庭・通路・保育室・ホール)の計測を開始。HPなどで公表する>
28日(木)	<お便りにて「地震や原発に係る保育方針、有事の際の避難態勢など」を知らせる(別紙参照)>
5/1日(月)	<園庭の表土の削り取り作業を市で行う。ただし土の移送先は未定のため、園庭内にまだあり近寄らないように通知している>



(職員会議で保育内容の話し合いを何度も繰り返す)



(園庭の表土を削る工事)



(立ち入れない砂場と中庭)

3. 震災後の子どもの様子と職員の気づき

① 起きた現象の理解

学年	子どもの様子
年少	入園式の途中に震度 2 程度の揺れが来る。周囲の大人がざわつく。N子：「あのね、地震でね、お家がバーンってなったの、バーン！」という言葉を手振りを交えながら言う。それを三度、四度と繰り返す。母親が側に行き、座り、式を再開しても 2 度ほど言って、次第に落ち着いてくる。
年中	雷や強風の時に起こる地鳴りを感じて「地震の前ってこんなゴーって（地鳴りの音）がするんだよね」
年中	バスの中。隣に座っている友だちの T 男 に声をかけている。Y子：「ねえ昨日、地震『6』だったよねえ。『5』だったらどうする？」 Y子：「100 だったらどうする？」 こうだい：「うわあ！」
年中	バスの中にて。Y子：「Y子ね、おっきな地震が来たとき、避難所に行ってたんだ」
年中	T ₁ 男：「大津波が来た～！逃げろー！」そう言いながら大ホールから手をつないで出てくる 4 人。手をつないだまま、教室からその園庭側のベランダと、軽く走りながら移動している。軽く興奮気味であった。
年長	「幼稚園壊れなかった？」「先生の家壊れなかった？」「今日は地震こなかったよね。」と確認する姿。

② 「不安」とそれを解消するための「行為」

学年	子どもの様子
年少	いろいろな音に対して敏感に反応する。カタン…という小さい音に対しても「地震？」「雷？」「風？」と聞いてくる。
年少	お集まりの際にトイレに行ったときに、下着に少しひっかかってしまう。それを担任が履き替えさせようとするが、K男「これやだ」と、着替えで持ってきていたパンツ全てを嫌がる。結果的に全てのパンツがダメで、濡れていたパンツをきちんと拭いてはかせて返す。母親にそれを話すと、地震後に“肌さわり感”に敏感になっているとのこと。
年中	抱っこしている子を見て、「何で抱っこしてるの？」と聞いてくる子。先生の感覚的には抱っこされた子に見えた。それを我慢しているところもあるのかな…。
年中	いらいらしがち。家の中にいないといけないから？日々、母親とのいざこざがあるのではないかと推測される。そこから、いらいらになり、泣き癖（すぐ泣く）もみられる。
年中	何かにつけ（別の場所に移動したときに）、「ここで地震になったらどうしたらいいの？」とよく聞くようになった。
年中	犬の人形を持って膝抱っこされている。R子「あのね、地震が来たらね、こうやって（犬の耳を伏せさせる）逃げるんだよ。怖いから」
年中	T ₂ 男：「あのね、おっきな地震が来たら 100 円のメダル（仮面ライダーオーズのメダル？）をいっぱい集めて、（マグニチュード）『5』とかやっつけてやるんだ！原発に負けないぞっ！ってね」
年長	今まで恥ずかしくて手をつないだりしなかったのが、風や雷が鳴ったときに先生と手をつなぐようになった。
年長	他の子が地震の話をしていても、全く地震について触れない、そこに入ろうとしない子もいる。
年長	何となく、ベタベタしてくる。担任のそばにすることが多い。今まではあまりそばにいるような子でなかった子もそういう姿が多い。
年長	入園式中に余震がきた。その後に遊びの中で入園した妹にプレゼントの絵を描いたが、その中で描いた雲とか顔がギザギザに揺れていた。暗い色を使ったりすることはないが、動揺がみられた。

年長	始業式の日、余震の時の逃げ方の話を一回だけしたら、家の中で「先生は、地震の話ばかりする。前は楽しい話をいっぱいしてくれたのに…」と家でつぶやいていた。
年長	だっこやおんぶを求めてくる子が多くなった気がする。一人の子をだっこかをしていると、「だっこしてって言ってもいいんだ」という感覚からか、連鎖的にくっついてくる。肌の感覚を求めているような感じ。時間的にも長い。今はそれでもいいかな、と思って対応している。
年長	余震がない時期が続いてきた最近になってようやく「地震なんてだいきらい！」というようになってきた。「地震をやっつけてやるんだ」と言う。先生：「どうやってやっつけるの」こども：「土を掘るんだ！土の中に地震がいるからそこに金槌でたたいてやる！」
年長	トイレに行けない。バスの中でお漏らしをしてしまった。
年長	大ホールの中で遊んでいるときに、ある女兒と地震が起きたらどうするかと言う会話になったときに、先生「(グランド) ピアノの下があるよ」ほかの男児が「この下には全員は隠れられないべ」と言った。

③ 長期間の震災報道・・・メディアからの影響、遊びの変質

学年	子どもの様子
年少	ブロックで鉄砲ごっこをしながら「震度5！」と言って大きい声でバーンバーンと言う。「震度3」のときは小さい声でバーンバーンという。
年少	「地震速報です。プルルルルー」と言いながら、重ねた積み木を動かして遊ぶ。
年少	積み木を自分の背の高さほどに積み上げる。りさ。積み上がると、それを手で軽く揺する。R子：「りーんりーんりーん、地震です、地震です。避難して下さい！」自分だけではあるが地震ごっこをしている。
年少	ACのCMや、猪苗代湖ズの歌を口ずさむ子どもが多い。
年中	「緊急地震速報です。強い揺れにご注意ください」とそのまま言う。何度か繰り返してふざける。そこから次(津波とか)につながるというわけではなく、言ってお終いに感じる。
年中	部屋遊びが自然と多かった始業式後。先生が「大ホールに行ってもいいんだよ」と言うと、「行ってもいいの？」という反応が多い。去年までは自然に大ホールに行っていたのだが。それは家の中にいるという習慣から来ているのか？
年中	「ウィンウィンウィン。地震です！」といった、地震警報ごっこがみられ、そこから誰かが積み木を揺らして、子ども：「今のは震度何かな？」「2かな？」といった会話を普通に行っている。
年中	以前は部屋遊びをしなかった子が、新年度になり、折り紙をしたり、お絵かきをあまりしなかった子がするようになった気がする。(春休みの間、家でもそうだったからではないか)
年中	子ども：「△△ちゃん、どうしていないの？」先生：「茨城にお家があるから行ったんだよ」子ども：「え～、茨城にも地震があるのに～！」
年中	お帰りの際に外に出て遊ぼうとする。たけとを止めようとする母親。その母親に、T3男：「放射能出てない！放射能出てない！」と言い、外で遊ぼうとする。
年中	保育室内でブロックを救急車に見立てて、ままごとの中で使って遊ぶ。ちひろ：「ピーポーピーポー…救急車です、救急車です」担任：「どこか病気になってしまったんですか？」ちひろ：「放射能がのどに入ってしまったんです」
年長	エレベーターから降りた瞬間に地震が起きたので、そのときにエレベーターが揺れて、すごく怖い感覚を覚えた。遊びの中でエレベーターという言葉が出た時点で、表情もこわばり「エレベーターはやめて！」と言い、拒絶する。
年長	ニュースの中の話から、給食の時に「宮城県ではね、パンと牛乳だけなんだって」と避難所の生活のことを話す。
年長	ブルーシートを広げて、その上にブロックで「車」を作ってシートの上に置く。「先生ほら、津波だよ。ざぷーん、ざぷーん！」と津波ごっこ。周りの子はそれに乗ってこない。担任が「じゃあ車を助けてあげましょう」といい「おお、ありがとう」と答え、その遊びは終わり、その後二度と出ることはなかった。

年長	「放射能に当たらないようにバスに乗ろう」とバスに乗ることもある。
年長	年度末の卒園アルバムのために桜の木の下で集合写真。保育室を出て、靴を履き替えて園庭に出る子ども達。表情は満面の笑顔。担任：「写真を撮るから、マスクとっていいからね」 子ども：「放射能、大丈夫？」 担任：「少しの時間だったら大丈夫だよ」 ホットした表情で写真撮影に向かっていった。

<（家庭・幼稚園）生活の変化への危惧>

- ・部屋遊びが自然と多かった始業式後。先生が「大ホールに行ってもいいんだよ」と言うと、「行ってもいいの？」という反応が多い。去年までは自然に大ホールに行っていたのだが。それは家の中にいるという習慣から来ているのか？
- ・自然に触れられないことがかわいそう。窓から桜吹雪が見えて「きれい！」と言っても、それに触れられない。テレビを見ているように部屋の中からみるしかない。
- ・以前は部屋遊びをしなかった子が、新年度になり、折り紙をしたり、お絵かきをあまりしなかった子がするようになった気がする。（春休みの間、家でもそうだったからではないか）
- ・“放射能”についての言葉が多い。そして、インフルエンザの時はあごとか額にふざけてつけることもあったマスクだが、今回のマスク着用は外そうとする子がいない。きちんと口に当てている。親やテレビからの影響もあるのか…？

<メディアなどからの影響への危惧>

- ・実体験の再現としてのごっことは違い、メディアからは視覚的に入った物の再現としてのごっこなので、ほかのこのイメージが入る余地が無く、そうした遊びは端的に終わりがち。
- ・積み木を不安定な状態において、瓦礫のようなイメージで津波ごっこをしているときもある。
- ・こういった「遊び」への影響は薄まるのか・・・不安。

<「幼稚園」という場が持つ意味の再考>

- ・登園を地震でいやがる子ども、来てしまえば大丈夫な子どももいる。先生やみんながいることでの安心。不安を忘れることが出来る場所なのかな？と思う。
- ・幼稚園に来るという意味・・・友だちがいるから、「普段通りの生活」「以前の生活」という、当たり前前ことができても不安を忘れることが出来ているのでは…？
- ・外遊びが出来なくても、仲良しのお友だちと一緒に遊ぶことが出来る楽しさ。友だち通しのつながりを大切にしていきたい。

<子ども達の不安の受容>

- ・抱っこしている子をみて、「何で抱っこしてるの？」と聞いてくる子。先生の感覚的には抱っこされた子に見えた。それを我慢しているところもあるのかな…。
- ・とにかく不安。遊び切れてない。安心できないまま過ごしている。一回その怖さを知ってるから、揺れたら物が倒れる、壊れると言うことを「予測」してしまうので、不安が残り、遊び切れていないように感じる。
- ・何となく、ベタベタしてくる。担任のそばにすることが多い。今まではあまりそばにいるような子でなかった子どももそういう姿が多い。

- ・製作遊びの中でも、出来るところをさせるのではなく、出来るだけ要求に応えるようにしている。
- ・以前より「先生の動き」をみている。目で追っている子が多いように感じる。
- ・だっこやおんぶを求めてくる子が多くなった気がする。一人の子をだっこしていると、「だっこして言ってもいいんだ」という感覚からか、連鎖的にくっついてくる。肌の感覚を求めているような感じ。時間的にも長い。今はそれでもいいかな、と想着て対応している。
- ・遊びも大切だけど、その時の子どもの気持ちを受け止めてあげることの方が先決に思う。

4. 現在の対応

市内の私立幼稚園協会の研修会において、「〇〇市子どもの心のケアプロジェクト」として以下のケアが提案された。子どもとは本来「自ら育つ」もの。その本来あるべき姿を取り戻すために、多方面との連携を取りつつ、“幼稚園でできる事とは何か”を考え、現在は次のような対応を行っている。

(以下資料抜粋)

■気持ちの問題（精神面）

「地震に対しての不安」と「放射線に対しての不安」それらが年齢による程度の差こそあれ、一人ひとりの子ども達が心に持っているのは確かです。

育ちを求める前にその子が今どんな気持ちでいるのかを保育の中の「観察」という視点を研ぎ澄ませることでしっかりと見つけ、職員間で話し合える環境作りに留意しています。基本的なことではありますが、それを以前より意識し、深く掘り下げることで子ども達の小さなサインに気付いて、寄り添うことで「幼稚園にいても大丈夫なんだ」と思える安心を与えることが出来たらと思っています。今まで地震について語らなかった子どもが、その気持ちをふと言葉にしても漏らすようになったことは、その良い傾向の一つではないかと考えます。

また、地震に対しては職員が話し合い、落下物の危険を減らしたり、避難場所やルートの確認をし合い、“想定外”ということ子ども達の安全が守れないという事態にならないように気を付けることが大前提です。

また、放射線(放射線物質)に対しては、決定的な除染は出来ないというのが正直なところです「保育室内や保育室のこまめな清掃」や「園庭の土の表土の削り取り」といった対策はするものの、通常値を大きく上回る中での保育を強いられています。放射線に関しての情報も錯綜しており、何が正しいのか、そして何を芯にすればいい情報なのかも分からない中での生活。その根本にあるのは「目に見えない恐怖」としての放射線です。故に、新入児が溢れ、幼稚園の一年の中でも一番忙しい4～5月に、子どもへかけるべき時間を割いてまで園内5ヶ所の線量測定を一日三回行っています。これだけで子どものために使うべき時間を20分以上失っていますが、「目に見えない放射線を数字という形で可視化する」事で少しでも保護者に安心してもらい、その安心が子ども達に繋がって欲しい…そのための対応と考えています。

また、家でも園でもどうしても体を動かす機会が少なくなる傾向にあるので、従来は自由に行き来し遊ぶ場であったホールを、学年毎に使用の曜日や時間で区切り、そこに担任の意図的なカリキュラムを適宜入れることで、全ての園児が均等に心と体を広い場所で動かせる機会を設け、精神的な健康に繋が

るようにと考えています。

■身体の問題（身体面）

先に書いたように園内の線量を図っていると、年長児が「先生、息してもいい？」と真剣な表情で言ってきました。先に書いた精神的な不安とも関連しますが、20年、30年後のこの子ども達の健康を誰が保証してくれるのか…だれも保証できません。故に空気・水・土の状況を随時確認しつつ、外遊びを控える(実質禁止)という形での対応を取らざるを得ません。そうしたことから、外で思いっきり走る、跳ぶ、登る…という「当たり前の運動」が減少しています。鬼ごっこ一つすれば、その中に含まれる複雑な運動も、現状の保育の中で十分に出来ているかどうかといわれると疑問符が付かざるを得ません。この辺りは従来から言われている子ども達の運動能力の低下への対応を一層踏み込んだ形で保育に入れ、構造的な対応をすることで体力の低下を少しでも食い止める事が出来ればと思います。しかし、本当は、外で思いっきり元気に遊べる様に一日でも早くなることを祈ることしかできないのが現状です。

■社会的な問題（生活する環境面）

放射線被害による社会的な被害…現時点では直接子ども達からはでてきていないように感じます。避難していった友だちの事を聞き「え～！〇〇でも地震あるのに！」とむしろ相手の方を心配する様子もあります。ただし、通常の転園と同じで、それまで仲良くいつもいたり、心の支えであった友だちが急にいなくなった子は、一時的に活動が後退している様子も見受けられます。長期的に見るならば「ふくしま」と言う土地に対する思いが過剰にマイナスになり、そこから自分自身も否定するようなことにならないように、自分がいる社会である「ふくしま」を愛せるような内容の関わりも意図的に必要になるのではないかな…と考えています。当たり前のことではありますが、その当たり前を十分に意図して関わらないといけないのが、他の2点とも共通する現状です。

また、避難していった園児が、急に変わった新しい環境や園に対応できているかなどが気がかりにもなっています。“退園”“休園”“一時避難”等…その避難形態も様々で避難期間もそれぞれです。そうした中で子ども達がどう言った気持ちでいるのか…子どものことを中心に考えるなら、一時入園などした園との連携もこれまでより必要になってくるのではないかと考えています。

「今、ここにいて保育をして良いのか？」「ここで生活をしている子ども達がいる以上、保育をする意味はある」そうした矛盾した気持ちを常に抱えながら行っています。

心の問題、健康の問題、そして園の修復といったお金の問題…問題は山積しています。

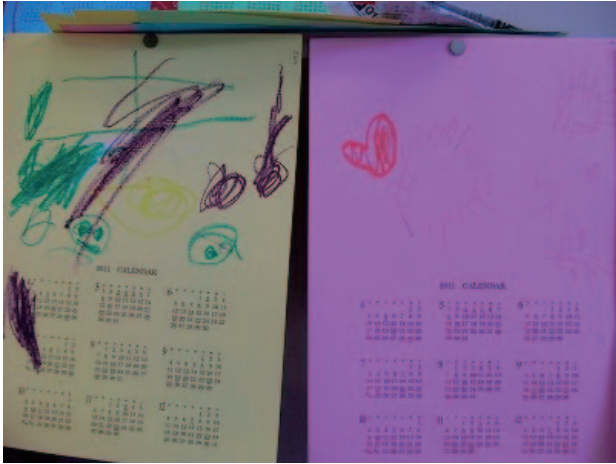
しかし、まず今必要なのは集団としての意味と共に「自分をみてくれる、あたたかい眼差しと触れあい」と感じます。

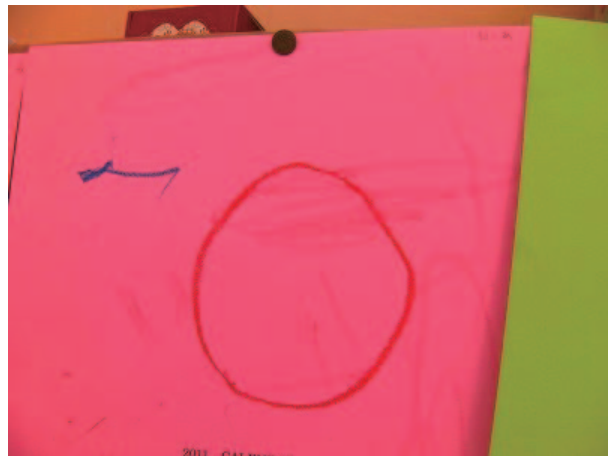
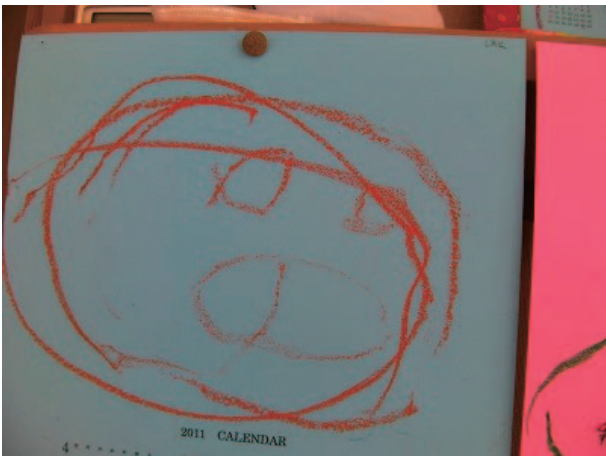
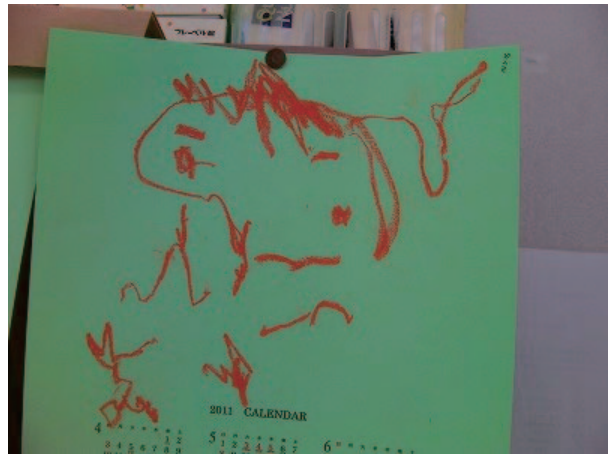
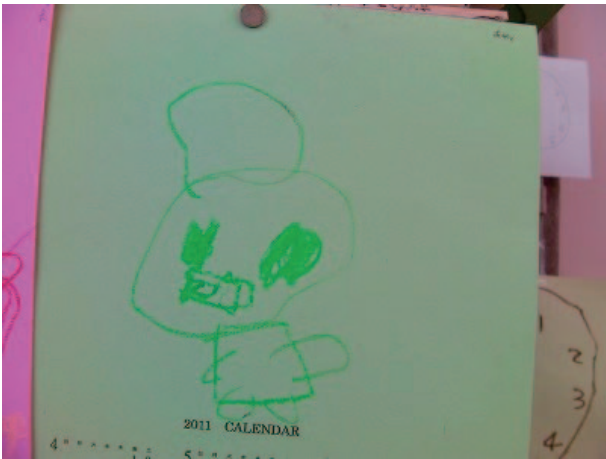
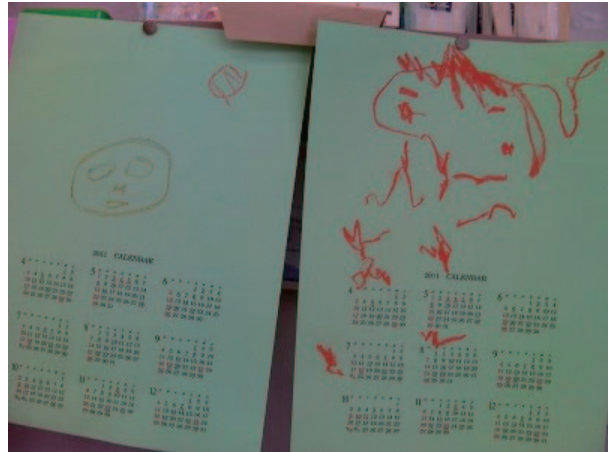
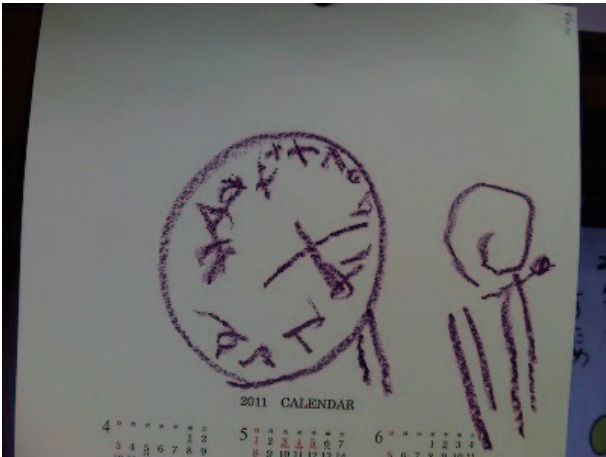
それが“親”なのか、“保育者”なのか、“友だち”なのか…それぞれのお子さんの安心の度合いや発達の段階で細かく変わってくるもの。小手先の保育技術や園経営のための保育ではない「まごころの保育」を大切にしていかなければと感じています。

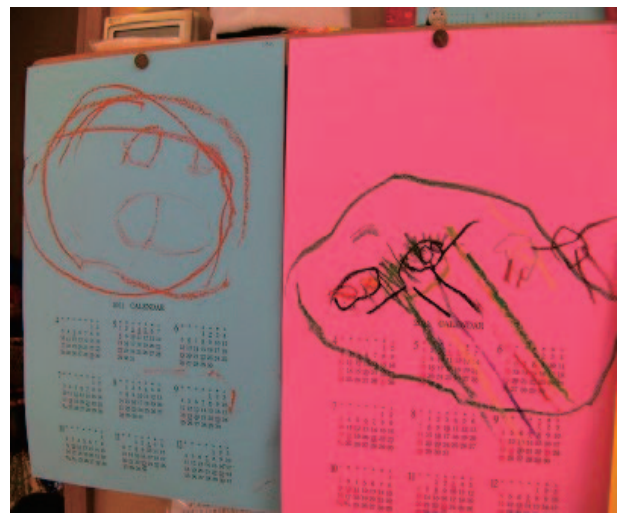
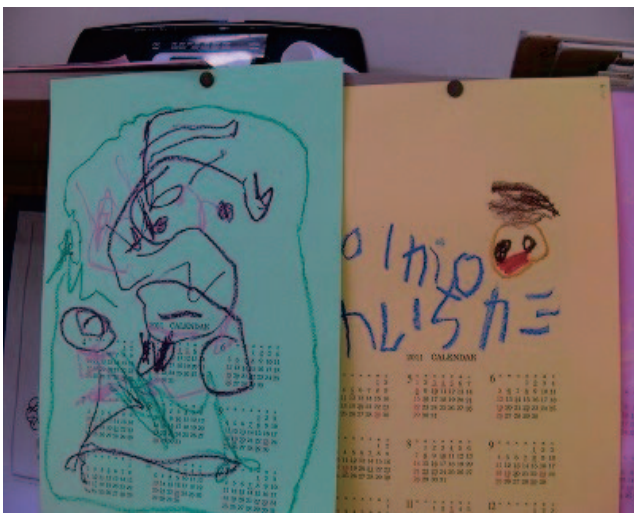
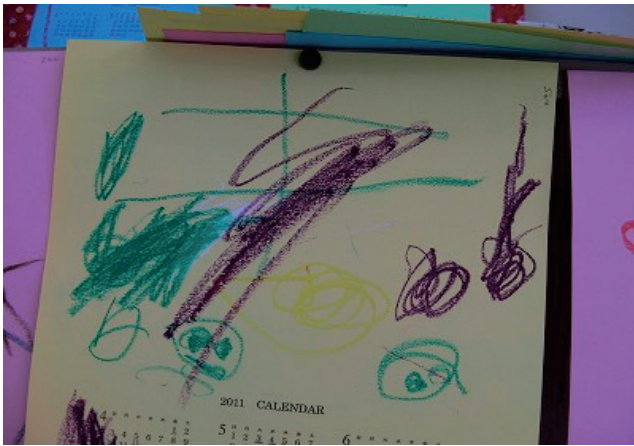
(参考資料)

子どもたちの絵 (年少組で母の日のプレゼント用に描いた絵)

暗い色への傾倒等、いわゆる“震災時の絵”ではないと思われる







(参考資料)

父母へのお便りの抜粋

<基本的な考え方>

原発については、現在も非常に不安定な状態が続いております。また、空気、水、そして食べ物などへの影響もあり、それがこの先どのような形で影響し、どのような形で収束するのか、未だ持って予断を許さない状態です。そうした中で保育環境としての「空気」「水」「土壌」「食べ物」についての“現時点で”以下の様に考えます。

(2011/04/20 8:19) (文部科学省発表より)

児童生徒等の受ける線量を考慮する上で、16時間の屋内（木造）、8時間の屋外活動の生活パターンを想定すると、20mSv/年に到達する空間線量率は、屋外 3.8 μ Sv/時間、屋内（木造）1.52 μ Sv/時間である。したがって、これを下回る学校では、児童生徒等が平常どおりの活動によって受ける線量が20mSv/年を超えることはないと考えられる。さらに、学校での生活は校舎・園舎内で過ごす割合が相当を占めるため、学校の校庭・園庭において 3.8 μ Sv/時間以上を示した場合においても、校舎・園舎内での活動を中心とする生活を確保することなどにより、児童生徒等の受ける線量が20mSv/年を超えることはないと考えられる。

以上の発表をもとに、現時点で休園や屋外の移動制限といった対応は必要ないと考えられます。

しかし、お子様方の年齢と医師の方からの助言を基にお子さまの体への影響(ここでは甲状腺への放射性物質の取り込み)を一般薬と同様に大人の3倍と考え、1.2 μ Sv/hを本園における外遊びの指標とし、屋外での活動は、放射線の状況を見ながら判断していきます。

保育室内の空間線量は平均して0.2 μ Sv/h前後で安全と考えられます。保育室間、学園内の移動につきましても短時間ですので、総被曝量への影響は小さいと考えられます。

福島県災害対策本部原子力班の広報内容(福島県放射線健康リスクアドバイザー山下俊一氏監修)も参考にし、外から入るときに服を払う、手を洗うといった基本的な生活習慣を行う様にしていきたいと考えます。

今後も園内の放射線量を時間を決めて計測しながら、保育を進めていきたいと思っております。

【土壌】 県などによる検査はまだ行われておらず、国としての基準も出ておりませんが、県内各所の土壌で放射性物質が検出されているのが現状です。県から国に対して、教育活動を行う上での基準を提示するように求めているところです。

本園としては、本学の放射能専門の教授による独自の調査を行い、適宜対応していく予定です。

【水】 本学では井戸水と市水を合わせて使用しております。次にありますように4月8日付けで検査しましたところ、放射性物質は検出されませんでしたので、ご安心下さい。なお、この調査は適宜行っていく予定です。

1. 本園独自で行っている大気中の放射性物質の濃度の状況に注意しつつ保育を行います。保育内容としましては、外遊びを抑えた室内での活動を重視してまいります。また、学園の施設(体育館など)を利用し、運動遊びなども含め、お子さまの発達に則した保育内容を進めていきたいと思っております。
2. 外での移動などを考え、当面は肌を出来るだけ出さないように、長袖・長ズボンを基本とします。帽子(紅白帽子)をかぶり、マスクをします。(服装、マスクはご家庭でご準備下さい)
3. 砂場での泥遊びを当面控え、外から保育室に帰ってきたときは、入口で上着のホコリを払うようにし、手をよく洗うように指導します。
また、上靴に泥などが付いた場合は、入室前に水で洗い落とし室内に入るように配慮していきたいと思っております。
4. 雨も多少濡れた程度では全く問題無いとのことですが、できるだけあたらないように留意します。

【大規模余震発生時等のお迎えなどについて】

①地震(余震)発生時の対応について

本園においては耐震工事を行っており、余震などについても十分な対応を行っておりますが、避難を要する地震が起きた場合は以下の様な対応を取ってまいります。

◇保育中 落下物の危険もありますので、保育室内の机の下にもぐり、地震が収まるのを待ちます。地震が落ち着いたところで室内で園庭もしくは北門ロータリー内(杜の広場)に避難をし、安全確認を取った後に大ホールもしくは保育室に待機し、お迎えを待ちます。よって、降園は「全員お迎え」とさせていただきます。余震や道路状況の悪化等の危険もありますので、スクールバスによる送迎は行いません。お迎えに関しての連絡は原則として行いませんので、震度5～6以上の報道がありましたら、お迎えをお願い致します。

お迎えが来るまで幼稚園で待機しておりますので、お迎えが出来る状況になり次第、お越し頂きますよう、お願いします。

◇スクールバスでの降園中 道路状況の悪化、送迎の行き違い等も考えられますので、安全を考え、原則として送りが完了している時点でバスの運行を中断し園に戻ります。帰宅がまだのお子さんにつきましては、幼稚園までお迎えして頂きますよう、お願いいたします。

②原発で有事があった場合の対応

◇保育中 連絡網(今後、メールでの一斉配信も計画しております)も回しますが、それを待たずに出来るだけ早く園までお迎えをお願いします。お迎えが来るまでは、窓を閉め、保育室で待機しております。なお、スクールバスはその時点で出発し、家までお送りします。

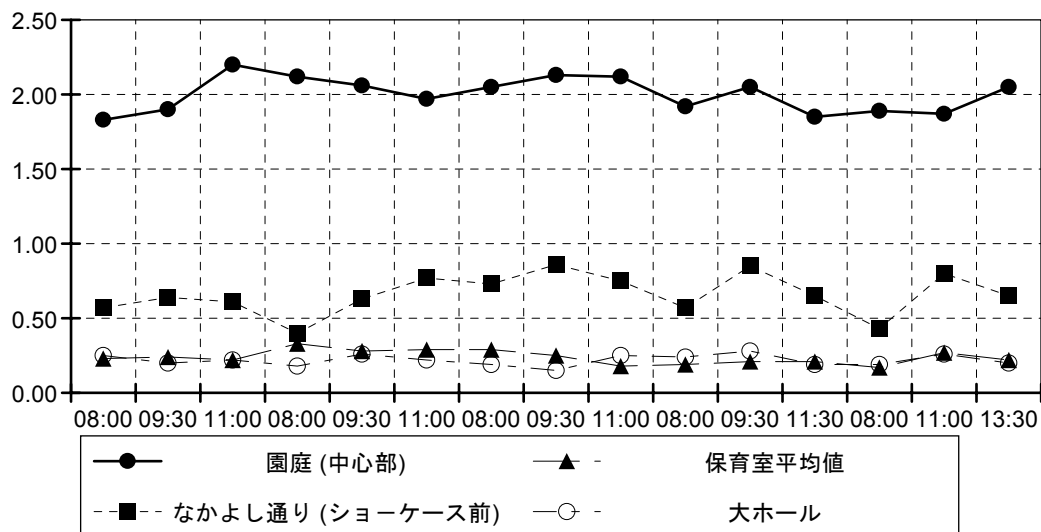
◇スクールバスでの降園中 最後までお子さん達を送ります。家でお待ち下さい。

【質問集～皆さまのご心配な気持ちにおこたえします～】

(1) 幼稚園の放射能測定値を知りたい。また、PCが無いため、携帯で見られるとありがたい。
→学園で準備した放射線量計(ウクライナ ECOTEST 社製ガイガーカウンター(TERRA MKS-05))を用い、園内5カ所を毎日3回測定しております。測定結果はホームページ及び園内の万代塀入口に付近に掲示しておりますので、どうぞご覧下さい。

放射能測定値推移(時間単位)

4月20日～26日



(2) 空調設備は外気を取り込むタイプか？

→家庭で一般的な外気を取り込む方式ではなく、室内の空気を循環させて空調を行う方式のエアコンです。(車のエアコンにおいての内気循環を想像して頂けると良いかと思います)

4月20日から26日までの測定値結果のグラフにありますように、屋外の測定値やエアコンの作動時においても数値の変化がほぼ無いことから、外気を取り込んでいないことがお分かりかと存じます。(通路移動等からの出入りによる保育室内の計測数値の変化も見られませんので、ご安心下さい)

(3) 外遊びが心配。また、子どもの運動不足が心配なので、保育の中で学園の施設を色々利用させてもらえないか？

→空間線量の測定値などから、当面の間外遊びはお休みとさせて頂いております。その運動活動を補うために「大ホールでの活動」及び、学園側と利用時間を相談しながら「学園体育館を利用しての活動」を考えております。

(4) 土や砂場などの土壌検査は今後も行われるか？また、園庭などの除染・表土入替はあるのか？

→土壌の汚染は懸念されておりますので、今後学園独自の調査を行い、必要な対応を取る予定です。

(5) 雨の日が不安

→福島県災害対策本部原子力班の広報内容にもありますように、多少濡れた程度では問題無いと考えられますが、園内においても外に出て濡れないように指導して参りますので、ご家庭におかれましても「雨の日は雨に濡れない様に気をつける」とお子さまにご指導頂けると幸いです。

保育自体は先に述べましたように、基本的に室内活動が中心となっておりますので登降園及び保育中においても出来るだけ濡れないように配慮してまいります。(先のグラフにありますように、雨の日も雨上がりの日も室内の空間線量は安定しております)

(6) 水洗い、水拭き等で放射能値が下がると聞いたが、保育室・通路・なかよし広場などを水洗い等してもらうことは出来るか？

→保育室に関しては以前より毎日保育後の掃除の中で水拭きをしております。また、通路や広場に関しては保育中随時行うことは難しいので、コンクリート部分を随時掃き掃除をして、放射性物質をはらうように対応し、保育室に入る放射性物質を少なくしてまいりたいと思います。

(7) 給食の食材はどここの物を使用しているのか？また牛乳の産地は？

→各取引業者に問い合わせましたところ、給食(業者：〇〇給食)については以下の文書が届きましたので、次項に掲載致します。また牛乳(〇〇牛乳) (業者：〇〇〇)については口頭にて「『関東地方(神奈川県・埼玉・栃木・茨城)』産の源乳を仙台で処理及び製品化したものです。」との回答を頂きました。

(8) 心配な場合、お弁当などを持たせる等の対応は可能か？

→各業者とも安全に対しての配慮はしておりますので、安全と考えられますが、もしご心配な場合はお弁当持参とすることが出来ます。ただし集金の都合もありますので、一ヶ月単位での申し込みとさせて頂きます。事前に担任までお申し出下さい。

(9) ホームページだけでなく、その内容をお便りなどでも知らせて欲しい。

→今回のように、必要に応じてお知らせしたいと思います。放射線測定値などについては毎日お知らせするのは難しいので、先の携帯用サイト及び、万代堀側入口の掲示板をご覧くださいよう、お願いいたします。

※：(5月6日追記)(10) スクールバス内の放射線量はどうなっているのか…一時間乗せるのは心配。
→計測後、HPにて通知。コンクリート上における通常の空気中の線量と大きな差はなかった(0.7 μ Sv/h前後)

(参考資料)

平成 23 年 4 月

〇〇〇〇 幼稚園 御中

(株) 〇〇給食
社長 〇〇〇〇

放射性物質により汚染された農水産物等の取扱いについて

平素は格段のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。また、この度の東日本大震災で被災された皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

今般、福島県産及び近県産の農水産物、原乳等から基準値を上回る放射性物質が検出され、出荷制限や摂取制限等の措置が取られております。

基本的に、出荷制限対象の商品は、市場等への流通ルートから除外され、一般へは出回りません。

また農水産物に関して弊社では、郡山卸売市場での入荷・取引時の産地選別、弊社納入業者が市場より仕入れる際の産地確認、弊社への業者納入時の産地確認及び鮮度確認という三重のチェックで厳しく選別された食材しか使用しておりません。その他の食材に関しましても、メーカー業者共々いままでも以上に産地等の選別を徹底して参る所存です。

今後、制限品目等が増える可能性もあり、食材等の選択肢が狭まり、メニュー内容やメニュー変更等で、ご迷惑をお掛けする場合もあるかとは存じますが、ご理解いただきます様、お願い申し上げます。

関係業者共々、行政指導を遵守し、安心安全な「食」をお届けすることで、皆様方の元気な笑顔に貢献できればと、社員一同願っております。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。



(参考資料)

No.11X04161-7
平成23年4月8日

放射能測定結果報告書

〇〇〇〇 殿

(検査機関所在地)

(検査機関名)

平成23年4月7日 ご依頼の以下の試料の測定結果についてご報告いたします。

1. 試料

試料名	専用水道
採取場所	専用水道浄水蛇口
採取日時	平成23年4月6日 12時20分
採取者	—

2. 測定日時

平成23年4月8日 11時26分

3. 測定結果

測定項目		測定結果	暫定規制値
放射性ヨウ素	I-131	検出されず	300Bq/kg*
	Cs-134	検出されず	200Bq/kg
放射性セシウム	Cs-137	検出されず	
	Cs-136	検出されず	

注記)*食安発0317第3号において100Bq/kgを超えるものは、乳幼児調整粉乳及び直接飲用に供する乳に使用しないよう指導されています。

検出下限値:I-131<11Bq/kg、Cs-134<8Bq/kg、Cs-137<7Bq/kg、Cs-136<10Bq/kg

- ・暫定規制値:平成23年3月17日 厚生労働省医薬食品局食品安全部長発 食安発0317第3号「放射能汚染された食品の取り扱いについて」
- ・測定方法:平成14年3月 厚生労働省医薬局食品保健部監視安全課発 「緊急時における食品の放射能測定マニュアル」に準拠
- ・前処理方法:平成23年3月18日 厚生労働省医薬食品局食品安全部監視安全課発 「緊急時における食品の放射能測定マニュアルに基づく検査における留意事項について」

(郡山女子大学附属幼稚園 賀門 康博)

事例4 保育所

《地震当日・直後の状況》

また普通の地震かな？と思ったが、玄関に飾ってある植木鉢などが落ちたのを見て「これは普通の地震ではないな」と思った。「地震だよ」と各部屋に避難するように言った。ちょうどお昼寝の「起きましよう」の時間帯で、眠っている子もいた。

たまたま携帯を持っている先生が携帯の警報が鳴ったので見て気づき、「地震が来る！」と知らせ、揺れが来る前に準備できた。子どもたちみんなを部屋の中心に集めて、ふとんを上からかぶせた。「がちゃーん！ ばーん！」と音がして、時計が落ちた。

揺れがなかなか収まらなかったので次の動きができなかった。ちょっと収まったかな、と思うと、また次の揺れが来るような感じだった。子どもも大人も歩けないほどの揺れだった。「また来る？ また来る？」、とにかく移動もできない揺れだった。

0歳児は15人（職員6人）。子どもたちを集めて、タオルケットをかけて、職員が囲むようにして守った。りすさん（1歳）の子たちは寝ていたので、ふとんをかぶせた。2歳クラスは22人、職員は4人。お昼寝中で、布団のところにいた。

あまりにも揺れが長いし、倒れるんじゃないか、潰れるんじゃないか、と思った。「どうする？ 外に出る？ まだ大丈夫？」。外に出るのも怖い、上から何か落ちてくるのも怖いという感じで、子どもたちも怖いのが半分、タオルケットをかけられて自由を奪われているのが半分で、泣き出す子もいた。先生たちの緊迫感を、子どもたちも感じていたのかもしれない。

雪が降り、強く風が吹いた。「地震と関係しているよね」と言い合うほど急に天気が荒れ始めた。戸を開けると雪や、庭の芝生の草が吹き込んできて、子どもたちはパジャマを着ているし、上からジャンパーを着せはしたが、外には出せそうになかった。外では電信柱が激しく揺れていて、「外に出たら終わりだ、逆に危険だ」と思った。

所長はメガホンを手には、「大丈夫だよ、大丈夫だよ」、「がんばれ、もうちょっと、もうちょっと」という声かけを続けた。職員たちは力いっぱい子どもたちを抱えて守っていたので、強く抱えられて、子どもたちもちょっと苦しかったのかも知れない。眠ったままの子もいたが、「こわーい」と泣いている子もいた。何が起きたかわからないような感じだった。

職員たちは「ことりはとっても歌が好き・・・」と歌っていた。普段から歌をよく歌ってあげているので、歌えば普通の雰囲気に戻れるかな、子どもたちも安心するのかなと思った。余震が続いて、「もうちょっと、もうちょっと」と言い続けてはいたが、とても長い時間のように感じた。

トイレが怖いので、2歳児は全員おむつにした。「今日はオムツです。おトイレに行きません！」。とにかく子どもから目を離したくなかった。ひとりでは行かせられない。修了式の練習でもおむつにしていたので、子どもたちも抵抗はなかったと思う。

ジャンパーを着せて、すぐに外に出せるようにしていた。しばらくたってから、おやつを食べさせた。口に入れてあげた、という感じだった。牛乳が嫌いで普段は絶対飲まない子が、ごくごく飲んでいて。緊張して、のどがからからになったんだと思う。

《被害の状況》

部屋の中のもの時計くらいしか落ちなかった。テレビは職員が倒れないよう押さえていた。戸棚は観音開きの戸だったので、危ないのでこれも押さえていた（写真）。次の日が修了式の予定で、子どもに返すものなどを準備して置いておいたものが、全部ばらばらに散らばった。ピアノは倒れなかったが、前に飛び出してきた（写真）。



《お迎えまでの状況》

地震の後、はじめのうちは電話もつながっていたので、保護者からの電話が鳴りっぱなしになった。「先生、大丈夫ですか？ 行きたいけどいけないので・・・」という病院勤めの保護者もいた。「大丈夫だからお母さん、守っているから、生きているから」。お迎えも普段より早かった。すぐに保育所に来た保護

者もいた。お迎えの時は、子どもも、お母さんも泣いていた。

それぞれお迎えが来るまで、子どもをひとりにさせないように、だっこしたりおぶったりして待っていた。テーブルの下に毛布をひいた。何度も余震があつて、ストーブをつけられないので寒かった。テレビをつけていたので地震の状況が映っていた。それを子どもも見ていた。テレビの警報がなるたびに、「来た！」と言ってテーブルの下にもぐることの繰り返しだった。

《当日夜以降の状況》

当日の夜は遅くまで残った。保育課から翌日はお休みという連絡が入って、翌日の休園を決めた。修了式はできないことになった。夜9時半ころまで保護者に電話をかけてそのことを伝えていた。

職員は帰らずにみんな残っていたが、6時頃、先がちょっとずつ見えてきたので少しずつ帰した。

《再開後の状況》

保育所を再開したのは24日。休園期間が長かったからか、子どもたちは元気な様子だった。全体として、見た目には変わりなさそうだった。

保護者からは、「音に敏感になった」とか、「夜目が覚める」ということも聞いた。連絡帳にそのように書いてきた保護者もいる。ちょうど午睡中で寝ていた時間だったので、寝起きのとき、怖い思いをしたという思いがよみがえることはあるようだ。余震が来たときなど「怖い、怖い」と言う子や、家で余震があつたときのことを思い出すのか、「地震来た、お茶碗壊れた、ママだっこ」などと自身の状況を言う子もいる。地震以来、しきりにだっこしたがるようになった子もいる。

普段から職員は子どもに歌を歌って聞かせている。お昼寝のときも歌を歌っていることもあるのか、現在はそれほど怖がらず寝ているようだ。体温を測りながらだっこしたりして様子を見ている。

《振り返って》

リーダーの存在は大きいと思った。指揮命令は誰かが出さないと不安になってくる。「どうだーい？」「次に移れるのー？」「誰お迎えに来たー？」、ひとつひとつ大声で確認しながら様子を見ていた。もしたまたまその時リーダーがいなかったとしても、自分がリーダーになるという気持ちを普段から持つようなことは必要だと思う。

散歩中でなくてよかった。中にいるときはいいが、散歩に行っていたら大変だったと思う。

「重かった」。60何人かの子どもを、親に帰せるかどうか、全員を保護者のもとに帰せたときには、普段なら当たり前のことなのに、とても「重く」感じた。預かった子を返すという根本的なことが、実は大変なことだったのだと感じた。

《現在の状況》

地震も怖いが、原発の問題があつて、避難して子どもの人数が減っていくのがつらい。先の見通しが立たない。休んだままの子もいるし、東京に避難して退所した子もいる。三重、京都、山形に避難した子もいる。籍は置いたままにするとは言っていたが、戻ってくれるかどうかは分からない。

頻繁に電話連絡をして、何とか引き留めたいとは思っているが、決断は親がすることだし、内部被ばくの問題にしても、40年先、60年先になった後になって「あの時に・・・」などと悔やまれること

もあるかも知れない。保護者が真剣に考える気持ちもわかるし、引き留めることはできないと思う。

現在は子どもを外に出せない。(放射線の)数値も高くて、今日も測定に来るのだが、保護者も心配している。数値の高さはテレビでも放映された。これから先、避難するようなことになるかも知れないし、不安だ。夏になって室温が高くなると、窓も開けられない状況で、あせもにもなるだろうし、ストレスも高くなり、今後どういう保育をすればいいのかは課題だ。体育的な遊びを日々の保育の中に取り入れたりはしているが、たとえ数値が下がったとしても、当分は短時間しか外には出られないだろうと思う。

野菜なども植えても、それを食べることができないので、「みんなが作ったおいもだよ」と子どもには言ってみせても、実は代わりに買った野菜を味わうしかないだろうと思う。

特に、散歩ができないのがつらい。こつこつ毎日散歩していたので、体力づくりにもなっていたと思う。日々の何気ない歩きが子どもの身体を作っているのだと思う。でこぼこ道を歩くことで転ばないように歩くことを覚えたり、自然を眺めたり、大切な経験だと思う。散歩ができなくなって、どう影響するのか分からない。

保護者にはお便りを作って、現在の状況を説明するようにしている。

自分のケアも欲しい。夜中に余震が来ると涙が出てくる。休園中も職員は出勤して、園の安全確認のほか、炊き出しをしたり、手伝いに出かけたりした。職員のケアも欲しいと思う。

事例5・事例6 保育所

《地震当日・直後の状況》

1) 年長児・園外保育中

年長児15名、引率は園長以下3人。福島市の「こむこむ」(市の教育文化施設)に行った帰りで、電車に乗っている最中だった。

電車の中は混んでいたもので、床にブルーシートを敷いて、子どもを座らせていた。途中、ちょうど鉄橋を渡っているときに揺れが始まった。床に座っていた子どもたちには窓の外は見えなかったが、それが良かったかも知れない。鉄橋を渡り終えて、電車は止まった。

ちょうど県内でJICAの研修があり、研修の参加者が大勢同乗していて、その中に看護師や保育士の人もいて、助けられた。携帯のワンセグを見ている人から、宮城県の火災の状況などを教えてもらったりした。子どもたちの周りをJICAの人たちが囲んでいた形になっていたもので、結果的に子どもたちはうまく守られていた。みんなに助けられたと思う。ありがたいなと思った。

電話は通じなかったので、園への連絡方法がなかった。

子どもたちを何とかしたいと思った。2時間くらいは電車の中にいた。乗客の中には、「電車の外に連れて行きなさい、行けば何とかなる」という人もいたが、子どもに陸橋を渡らせるのは無理だと思った。「何とかなる」というような、あいまいなことはやりたくないと思ったので、「私ひとりでちょっと行ってきます」と言って、電車を降りて様子を見に行った。

鉄橋を渡ってその先の駅に行ってみると無人駅だった。タクシーを呼ぼうにも、電話が通じないので連絡がとれない。駅に居合わせた人たちに、「とにかく子どもたちだけでも避難させたい」と話をした。

やがて消防団の人が来てくれて、消防団の集会所に子どもを動かせることになり、その時ちょうど園とも電話が繋がったので、消防団の集会所に子どもたちを移動させると伝えた。ところがその後、その集会所ではなく別の場所が避難場所に決まったと知らされたので、集会所には一人の職員を連絡係として置き、園長ともう1人の先生と2人で子どもたちを連れて、他の乗客と一緒に避難先に向かうことにした。2キロ先くらいだった。

鉄橋を渡らせるとき、子どもたちには“下を見ないで歩きなさい”と言ったものの、どうしても下を向いてしまって泣き出し始めたので、みんなで歌を歌いながら歩いた。

避難場所は停電していて、真っ暗だった。一緒に避難した JICA の人が持っていたノートパソコンを開いて、動画を再生して子どもたちに見せてくれて助かった。これからは、出かけるときには懐中電灯やラジオを持って出ようと思う。

園には集会所に避難すると伝えたので、園との間で連絡がとれた親が5人位、集会所に迎えに来た。職員がいたので避難先に案内されて、それぞれ子どもを連れて帰った。残りの子どもたちはあらかじめ頼んであったタクシーが来てくれて園に戻ることができた。園に着いたのは大幅に遅れて夜8時頃だった。ほとんどの職員が残っていた。職員も家庭を持っているのに、残っていてくれた。

子どもたちは、とにかく泣いていた。トラウマにならなければいいなと思う。

2) 年中児・年少児 園での保育中

園には年中組以下がいたが、地震があった直後、主任が中心となって近所の避難所に全員を避難させた。子どもたちはずっと泣いていた。お昼寝の時間だったので子どもたちを起こして、着替える間もなく、パジャマのまま避難させた。突然、吹雪になった。暖房もなく、寒さに子どもたちも泣き出した。職員が園に上着や毛布を取りに戻ったり、ブルーシートで子どもたちを囲うようにして、寒さを防いだ。何回も大きな余震が来たので、避難所と園とを何度も行ったり来たりした。

大きな被害はなく、建物の壁紙が破れたり、保育室の時計が割れた程度だった。子どもたちにけがはなかった。職員室の棚は倒れたり、機材ラックがずれたりした。0歳児室には掃出し口がないが、これは今後の改善課題。おぶったり、抱っこしては避難に間に合わない。いい教訓になった。

《地震後の状況》

地震翌日からは休園。24日から再開したが、年長組で登園したのは数人。残りは自宅にいたり、実家に避難したりしていたようだ。登園した子たちは、当日の様子を話したりはしていたが、余震が来ると、不安を感じている様子で、怖くて泣く子もいた。余震のとき職員にしがみついて離れない子もいた。今はだいぶ落ち着いている。

連絡が取れない保護者もけっこういた。今回、携帯は使えなかったが、パソコンは使えるようだったので、今後は保護者のメールアドレスを登録してメールで連絡する方法も検討したい。本園では、携帯で園の状況をウェブカメラを通して見るができるようになっているので、メールの利用もしてもらえと思う。

保護者には説明の文書を出した。特に苦情は来ていない。

3名ほど休んだままの子がいる。

《振り返って》

事故もケガもなかったのがよかった。ありがたいことだと思う。子どもを連れて行くというのは、どうなるかわからないから、今後慎重にしなければならないと思った。子どもを預かっている部分は、すごい仕事をしているなど改めて思った。若い先生が本当によく動いてくれて、訓練が的確に活かされていたと思う。

昨日も避難訓練だったが、揺れたらあわてず机の下に、そして職員室に集まることを徹底した。子どもには先生の言うとおりに聞いてね、と言っている。

《現在の状況》

「どうして外で遊ばないの？」と言う子どもはいる。親にはそう指導されていると説明しているが、子どもには「もう少し待ってね」「ホールで遊ぼうね」と言いながら、ホールの中で活動している。中での活動は先生たちもストレスがたまりそうだ。

今後は大きい子どもたちには、砂に触れた後の手洗いや水の問題などを指導していくつもりだ。畑があり、今年も芋掘りくらいはさせたいが、子どもを外に出せないのも、どうしたらいいか迷っている。口にすることができなくても、成長を見る、という程度ならできるのかも知れない。何から何まで制限するのちょっとと思う。園としての方針、やり方を出せればいいのかと思う。特に、子どもたちを外に出せないのは困っている。

事例7 保育所

《地震当日・直後の状況》

午睡が終わる時間。おゆうぎ室、一時保育室、赤ちゃんのクラスと4クラス。目覚めてトイレに行く前で、職員の休憩時間も終わっていたので、全員が保育室にいるような状態だった。人数を把握し、落下物を避けて、子どもたちに毛布を掛け、2次避難をしようとしていたが、突然外が暗くなって雪が降ってきた。揺れがひどく部屋に移動するのも難しかったので、子どもたちが息苦しくならないように表情を見ながら、上から毛布を掛け、おゆうぎ室の壁側や、保育室にとどまっていた。泣く子どもも何人かいた。

掛時計が落ち、ピアノや冷蔵庫がずれた。この周辺は比較的被害は少ないほうだったとは思う。

外に退避するかどうかは、だいぶ迷った。ぎりぎりまで中にいた。自分の経験ではありえない状況だったので、判断は難しかった。

《お迎えまでの状況》

余震が続いていたので、お迎えを待っている間は、おゆうぎ室に子どもを集め、職員と共に居た。保護者のお迎えはいつもより早めだったが、中にはお迎えの遅い保護者もいた。「保育所の方が安全だ」という保護者もいた。最後は7時半まではいた。「無事でよかった」と泣き出す親も何人かいた。一時保育の子たちもそんなに早いということはなかったが、自営ですぐ来られるような親は直後に迎えに来ていた。

《当日夜以降の状況》

緊急所長会議で呼ばれたり、家に帰った夜中2時頃、市から電話が来て、翌日朝5時に炊き出しに出るように言われた。

翌12日は全職員が出勤して、休園の連絡にあたった。緊急対応の電話が備え付けられていたので、電話が使えてよかった。自宅での様子などを聞きながら休園の連絡をするのに丸1日かかった。休園中に、保護者とは3～4回電話で連絡を取った。

16日には所長会で、開所できる園は開けるように言われたが、性急に開所せずよかった。設備のメンテナンスをしているときに、ガス漏れが見つかった。目で見える被害状況は職員でも報告できるが、細かいところは分からないし、業者もなかなか来てくれない。開所の判断ができる状態ではなかった。目視くらいで大丈夫だと判断しないでよかったと思う。

群馬から来ていた実習生もいた。次の日に指導の先生から電話が来て、「そういう経験も貴重だから出勤させてください」と言われた。こちらの被害の状況が分からなかったのだろう。その子は地域の公民館などでの傾聴などもしていたようだ。

《再開後の状況》

再開時には出席率75%位。市内で2番目に出席率が高かった。地域的に出席率が高いということは、避難する人も少なかったのだと思う。東京や実家に避難するだけの余裕もないのかも知れない。必要とされていたのだと思う。避難したままの子は1組だけ。埼玉のアパートに避難している。

子どもたちも、おゆうぎ室に入りたくないとか、午睡のときに泣く子がいるかなと思ったが、意外とそういうことはなかった。余震が続いたときも、泣いて叫ぶほどの子はいなかった。揺れが来ると職員が指示するより先に、だまって机の下にもぐっている。

とりたてて特別な様子はなく、朝、泣いたり騒いだりする様子もなく、おだやかに始まった。

《現在の状況》

「うちの水は系列の水ではないので大丈夫です、制限されている食材は使っていません」ということは随時、お便りや張り紙で保護者に伝えた。1人だけは水筒で家から水を持ってきた子がいた。ダメだとは言えなかったが、「給食は水道水を使っているし、持ってきた水は飲ませてあげることは可能ですよ」と伝えた。

これからは戸外での活動が制限されている中でどうやって室内で活動していくのかとか、避難訓練など保育所の安全・安心についてももう一度確認する必要があるだろう。一から考え直していくことが必要だと思う。

土いじりや、家庭菜園の活動、「どうして食べられないのか？」についての子どもたちへの指導は、これからの課題。

一時保育の利用は少なくなった。特にリフレッシュの利用が減った。市からは子どもたちを外に出さない方針を指示されている。砂遊びなどもさせていない。

手洗いしましょう、うがいをしましょう、おくつはとんとんしましょう、ということはやっている。「ど

うして外に出られないの？」と言う子はいない。自宅待機のために訓練されているのだろう。

26日に満了式ができた。「再開ですよ、来られますか？」と、再開の電話を入れながら保護者の反応を見ていると、7割方が「明日から行きます」との返事だったので、式の練習もほとんどしていなかったが、満了式をすることにした。満了式の記念写真は、晴れ晴れとしたとてもいい表情をしていて、こういう表情を出せた式ができてよかったと思う（写真）。保護者の表情もいい表情をしている。満了式るとき余震が来たらどうするかシミュレーションもしていたが、大きな余震が来なくてよかった。

《振り返って》

地震後は休園になり、しばらく家庭で保護者と一緒にいられたことで、子どもの心の安定が図れたのかも知れない。次の日から預けられて、保育所で大きな余震を何度も経験していたとしたら不安だったろう。

子どもたちも「地震の時には、先生たちに守ってもらったんだよ」と、おうちに帰って保護者に話したようだ。「その時の様子を思い浮かべると涙がでます」、などと保護者からも感謝された。

けがもなくみんな無事で、午睡時だったということもよかったのだと思う。毎月避難訓練をしていて、いろいろな想定をして訓練していることが活かされた。若い3年目の先生は、「自分が動揺したらダメだ」と思ったという。



いま、園では地震ごっこが流行っている。赤ちゃんの人形の上にキルティングの布団をかぶせて、自分が先生役となって、赤ちゃん人形を守ろうとしている。こたつに入っている真似かと思ったが違って、「地震だよー」と言いながら遊んでいる。2歳児でもそうして真似ている。そういうことは、むやみに禁止してはいけないということも聞く。

子どもの命をどう守るか、だと思う。

事例8 保育所

《地震当日・直後の状況》

突然だったのでびっくりだった。子どもたちがお昼寝から目覚める頃。1～2歳児は1階の部屋、3～4歳児は2階で寝ていた。先生のところ子どもたちを集めて、毛布を掛けて、部屋の中心で様子を見ていた。5歳児は起きたまま部屋で勉強をしていたので、机の下にもぐらせて、ビデオを見せたりして待たせていた。最初は泣いた子どももいたが、やがて静かに待っていた。

揺れが長かったので、2階の子たちを下におろすタイミングがなかなか難しかった。揺れがおさまったのを見計らって1階に下ろし、各クラスに分かれて、身支度させて、机の下にもぐらせてお迎えを待っていた。

0歳児は寝ていたところを、先生のところを集めて、毛布をかけて守っていた。外に出すタイミングが分からなかったため、とにかく落下物に気を付けながら様子を見ていた。

クラスごとまとまっていたので、新人の先生や臨時の先生も先輩先生の指示に従って動いていた。



《被害の状況》

建物は、それほど被害はなかったが、建物の裏の敷地の土台がひどかった。コンクリートが剥がれ、道路側に10～20センチ崩れた。現在も地盤沈下して、土台がむき出しになっている。水道管もずれ、しばらく水が出なかった。いつ修復が終わるのかは今でも分からない。市の職員が被害を確認して写真にも撮って行ったが、まだ予定が立っていない。早めに直してほしい。雨が降ったりすると地割れした

ところに雨水が入ってさらに地盤がずれる恐れがあり、心配だ。

敷地の裏なのであまり見えず目立たないが、現在は立ち入り禁止にしている。物置の戸も、足元のコンクリートが隆起して戸が開かなくなったりした。玄関のタイルは、ずれてひびが入っている。「ひどいですね・・・」と保護者に言われたりもする。

室内の被害は、時計が落ちた程度。未満児の部屋では、ついたて（仕切り）がずれた。他には多少ものが落ちた程度で、職員が押さえたりしていた。職員室の戸棚のガラスは割れていた。



《お迎え時の状況》

保護者もいつもより早めに迎えに来てくれた。迎えに来た順に帰した。お迎えに来ている間も、余震が続いていた。最後に帰った子は6時半。「子どもたち無事ですか」と電話をもらったり、すぐに駆けつけて子どもを連れて帰られた保護者もいた。子どもたちは特にけがもなく、それが一番よかった。保護者からも、「命を守ってもらった」と感謝して頂いた。

《再開後の状況》

25日から再開。登園した子どもたちはいつも通りの様子だった。県外に避難している子どもも結構いて、当初は人数が少なかった。保護者の仕事も始まらず、解雇になった保護者も結構いたようで、家で過ごしますと休んでいた。日を追ってだんだん人数は増えてきて、今週に入って通常通りの人数となった。

《現在の状況》

今は、子どもたちを外に出せない。子どもたちも身体を動かしたいと思うので、おゆうぎ室の使い方を工夫しながら、体操などを毎日取り入れて、機会を作っている。

「どうしてお外に出られないの？」と訊く子はいないが、子どもたちも親からいろいろ聞いているようで、「放射能が・・・」とか、「おうちではちょっと外に出たりするけれど・・・」などと話している。 (放射能については) 保護者も関心が高く、インターネットで情報収集をしているようで、「ここは数値が高いですね」などと言っている。このあたりは風の向きの関係か、モニタリングの数値が高いようだ。

保護者からは、「いつまで外に出せないんでしょうねー」「子どもたちかわいそうですよね」などと言われたりするが、保育課から「もう少し見合わせてください」と指示が来ているので、外には出せない。

原発問題への対応について、このような状態がいつまで続くのかが分からない。保護者への理解も得ないといけない。ここの水道水は問題ないとされている。使えない食材、水の問題は、入所式の後の説明会で理解を求めたので、今のところ問題はない。

子どもたちのストレスがたまってきているのが心配。保育も工夫していかないといけないと思う。花見も中止になったし、散歩にも行けないし、運動会も秋に延期になり、いろいろなことが中止になって、これから先は芋の苗植えなども無理かなと思うし、代わり保育をどうしたらいいのか考えていかないといけない。それから、心の面。しばらく自宅にいて保育所に来たとき、不安定な子はいた。急な音でパニックのような状態になったりした子もいた。小さい子だったが音に敏感になっていた。

水は最初から大丈夫だと言われている。調乳も水道水を使っているが問題ない。昨日か一昨日の新聞に浄水場の数値が高かったと掲載され、保護者から「大丈夫ですか」と問い合わせが来たが、役所から指示は来ておらず、「ここは最初から水は大丈夫ですよー」と言われた。ただ1人だけ、家から沸かした水をポットに入れて持ってきている子がいる。

《振り返って》

ちょうど当日の午前中に避難訓練（火災訓練）だった。2月15日にも地震の訓練をしたばかりだったので、そういう日頃の訓練が活かされたのだと思う。最近では地震が多くて、地震のたびに「机の下にもぐりましょう」「先生のところに集まりましょう」ということをやってきた。それも活かされたと思う。訓練は大事だと思った。どういうときに地震が来るかはわからないので、いつも同じ時間に訓練をするのではなく、午前中かも知れないし、給食中かも知れないし、集会をやるときにも、もし地震が来たらどうするかということを考えておかなければいけないと思った。

事例9 保育所

《地震当日・直後の状況》

お昼寝中で、そろそろ起こそうかという時間帯。0歳は0歳の部屋、1歳は1歳の部屋、残り4クラスはまとめておゆうぎ室で大人数で寝ていた。

おゆうぎ室に行ってみると天井の照明（写真）が激しく揺れて、「これは大変だ」と思った。だんだんすごい揺れになってきたので、照明が落ちてきてはいけないと思って、子どもたちを全員起こして、照明の下を避けて舞台の前にぎーっと集めた。座らせて、毛布をかぶせた。外に出ようがなかった。天井の照明が揺れている下を通して避難させるのは無理だと思った。動かないほうがいいと思った。揺れが何回も来た。だいぶ長い間そこにとどまっていた。

上から落っこちて来たら大変だと思って、頭から毛布やら布団をかけたから、中でむれて暑かったと思う。舞台の上のエアコン（写真）も途中まで落ちてきてぶらぶらしていた。



舞台の上にも上がれないと思った。逃げ場がない感じだった。

0歳児クラスでは揺れた直後、外に出た。乳母車を先生方が持っていて、テラスからリレー式で乳母車に乗せ、毛布をかぶせたり、ねんねこを着せたりして、おぶったりだっこしたりして外の庭に避難した。先生方の連携が上手かった。外にいる先生方に「外に出ていて大丈夫？ 寒くない？」と聞くと、「外のほうがものが落ちてこないので安心」と言う。子どもたちに毛布をかぶせて暖かくしながら、しばらく外にいた。すぐ外に出して乳母車に乗せ、あわてず対応できたので、子どもたちは大きな地震が来たとは感じることなく、散歩にでも出掛けるのかと思ったかも知れない。

むしろ大きい子たちが室内にいたままなのはおかしいかも知れないが、とにかく室内では動きようが

なかった。1歳児クラスでは揺れが少しおさまったときにジャンパーを着せ、靴下をはかせて、外に避難しようと様子を見ながら待機していたが、結局外には出なかった。

大きい子は泣いて怖がっていた。園長にもしがみついた。1時間くらい様子を見たままでいた。すごい声で泣いていた。怖がって床にはいつくばったまま、起き上がろうとしない4歳もいた。揺れがおさまったとき「もう起きていいよ」と言っても起きなかった。部屋に戻しても泣いていた。おやつも食べなかった。お迎えに来たときも泣きそうだった。その子は開所後もしばらく休んでいた。今でも余震があると顔色を変える。

おもらした子はいなかった。怖くてトイレどころではなかったのかもしれない。インフルエンザの子がひとりいたが、その後休園だったので広まらずに済んだ。その子は「あのとき熱があったんだよね」と今でも言っている。

職員室の棚の中のものが出てきて、全部落ちた。廊下に置いてある鏡は割れずに済んだ。重かったから大丈夫だったのかも知れない。給食室の保管庫がずれた。

おやつ時間も、机は出さなかった。コップで牛乳と、シュークリーム。あぶないのですぐ避難できるように、手を消毒して、丸くなってこじんまりとして、持たせて食べさせた。そばに毛布を置き、すぐにかぶれるようにしていた。おやつは食べていた。

おやつは各教室で食べさせたが、食べ終わった後は、子どもを集めて、最終的には一か所に集めて、そこになるべく多くの職員がいるようにした。

《お迎え時の状況》

おゆうぎ室にいて様子を見ている最中、何人かの保護者が園に駆けつけた。「子どもは大丈夫ですか？」と。お迎えに来てくれたのかな、と思ったら、「安全でいるなら、もう一度戻ります」と言って、家の片付けをしに帰った。家のなかめちゃくちゃなので、片付けてからまた迎えに来ます、ということだった。保育所としては早く帰って欲しい、もし何かあったらと思った。でも、「お願いします」と言われたので、子どもには「もうちょっと待ってね」と言ったりして、親が帰ってしまって泣き出した子もいてかわいそうだったが、見た目には特に被害もなく、崩れたりしたところもなかったのだから、親にしてみれば保育所は安全だと思ったのだろう。このあたりは割と地盤は固い。

でも実は、早くお迎えに来て欲しかった。けががないようにと、先生方とはとにかく必死だったから。

その日は6時5分くらいには、子どもたちはみんな帰った。早めのお帰りだった。

《再開までの状況》

原発の問題で避難した人は3組～5組くらい。親の実家が九州や関東にあるなど。早く帰ってきた人もいるし、ずっと避難しっぱなしの人もいる。

保護者の仕事先も被害を受けて、自宅待機になったところもかなりあったようだ。

保護者からは「いつから開所ですか？」と聞かれた。待ち望んでいる感じを受けた。開所当日は出席率が高く、7割位は来た。他の保育園では十数人のところもあったようなので、かなり多いほうだと思

う。翌週にはいつもと変わらない位の出席率になった。

「2週間も家にいたから、子どもがうるさくて仕方がない、早く保育所を開けて欲しい」という声が結構あった。こんなに長く休園したことはなかった。よく苦情がなかったと思う。

保育課からは、保護者には「一応再開しますが、できるだけお家で保育してください」と声掛けするようと言われていたが、保護者に連絡してみると「もう、待ってました!」という感じだったので、おうちでどうぞとは言えなかった。

《現在の状況》

いまは午睡中もまだパジャマを着せていない。靴下もはかせたまま。なるべく上靴もはかせて、すぐ避難できるようにしている。小さいクラスの子も、職員が入れと言わなくても余震がくると、ぱっと机の下に入る子が何人もいる。われ先に机の下に入る。訓練の時、地震のときは机の下に入る訓練をしていたので、気の利く子はすぐ入ろうとする。地震に対してはかなり敏感になっていると思う。今は登園を渋る子はいなくなったが、再開してしばらくは「地震が怖くて行きたくない」と登園をいやがる子がいた。

食べられないとか戻す子はいなかったが、園に行きたくないとか、地震が怖いと言う子はいた。

現在、子どもたちを外には出せないでいる。おゆうぎ室が大きいので、おゆうぎ室で毎朝、体操を20分くらい。その後大きい子たちは、クラスごとおゆうぎ室を使う時間を分けて、飛んだり、跳ねたり、運動遊びを多く取り入れる工夫をしている。散歩にも行けないし、困っている。冷房も使えないし、これから暑くなったらどうしようかという話はしている。ここは採光の窓も多いので、直射日光も（放射線の関係で?）ダメなどと言われたら、いるところがない。

戸も（放射性物質が）入ってくると思うと、あまり開けられない。再開当初、保護者から「子どもを外には出さないでくださいね」と言われることもあった。水についても気になる保護者、おばあちゃんが出て、「浄水場でも（モニタリングの）数値が出たと新聞報道があった。水は大丈夫なのか?」などと訊かれる。「何も指示は出ていないし、安全だと言われているので使っています」と返事はしたが、納得がいかなかったようだ。水を持って来るなら、断らずにそれを飲ませる方針。数値は出ても安全の範囲だとは思いますが、とにかく不安なのだと思う。

若いお母さん方の多くは、帽子やマスクを付けてくることもしないし、気にしない人は気にしない。言ってくる人は決まっているようだ。大きなクレームは、今のところない。

子どもたちからは、「外に出たい」という言葉は聞かない。特に「出たい?」とも聞かないのだが、家では出ないように言われているのかも知れないし、余震もしょっちゅう来ているので、子どもなりに理解しているのかも知れない。今後、外に出られないような状況がずっと続くのであれば、(原発の状況も) 教えてあげる必要があるかも知れない。

まだ地震の緊張感が残っているのかも知れない。少し揺れただけでも、言わなくてもすぐ立って机の下に入る。あまり騒ぎ立ると子どもの不安をあおる恐れもあるので、今は余震があっても放送を使っていない。それでも先生方も子どもたちも、すぐに対応している。

《振り返って》

避難訓練は活かされたと思う。午睡を想定した避難訓練もやっていたので、活かされたと思う。こういう大きな被害を想定した訓練は必要だと思う。こんな大きな地震が来るとは本当に思っていなかった。子どもを守らなくちゃいけない、自分がけがをしても子どもにけがはさせられないと必死だった。あの日は帰るまで生きた心地がしなかった。

この建物は木で作ってあるので揺れるから、鉄筋に比べて危なくないとは言われている。他園に比べたら被害は少ないほうだったろう。

本震の時は子どもを一か所に寄せるだけで精一杯だったので、外に出ることは考えなかった。外に出るとしたらこっち（避難口）から出るしかないと思っていたが、いま改めて振り返ってみると、反対方向（の避難口）からも出ることができるのかなとも思うようになった。午睡中だったから、毛布がたまたまあって子どもたちに掛けることができた。午睡中でなくても、毛布は用意しておく方がいいかなと思う。頭巾をお部屋に置いておいて、揺れたらかぶるということも必要かも知れない。

子どもを安全に保育することがいかに大切で、難しいことかと感じた。命を預かっていることの責任を実感した。おゆうぎ室に子どもたちがまとまっていたから、よかったのかも知れない。ばらばらだったら避難が大変だったろう。



事例10 保育所

《地震当日・直後の状況》

当日は午睡中、おゆうぎ室と、「0ちゃんの部屋」（乳児室）で分かれて寝ていた。「0ちゃん」には2人、おゆうぎ室には6人の職員がいた。揺れたので毛布をかぶせた。天井の扇風機が落ちてきそうだったので、扇風機を外しながら、みんなでわたわたと子どもたちを避難させた。

揺れがいったん落ち着いて、また揺れが来そうだった。外に逃げなくてはいけないと思い、寒かったのでそのまま逃げて風邪をひかせては大変なので、洋服を着せた。またすぐに揺れが来た。先に小さい子をおぶったりして外に出した。とにかく外は寒かったので、毛布を運び出して、子どもたちに毛布をかぶせ、下にもシートや毛布を敷いて、外と部屋とを行ったり来たりしながら様子をみていた。

停電はしなかった。断水にはなった。ストーブは危ないから止めて、窓を開けてから外に逃げた。子どもはやっぱり怖がっていた。大きい子でいつもふざけている子も、真剣な表情で指示に従っていた。女の子で泣きだした子もいたが、「先生たちが守ってあげるから。静かにしていないと指示が聞こえないから、大丈夫。静かに待っていようね」と声掛けをして、職員が子どもたちを囲むようにしていた。

職員は真剣な表情だったから、それが子どもにも伝わったのだと思う。

近くの消防署の人も様子を見に来てくれた。保護者も2人ほど迎えに来た。

寒かったのであまり長い間、外にいるわけにもいかないと思い、保護者に電話して子どもを迎えに来てもらうことにした。保護者との連絡はなかなか取れなかった。連絡がついてもすぐには来れないという保護者もいて、お迎えが終わったのは6時半だった。お迎えに来て「守っていただいて、ありがとうございます、すぐに来たくても来れませんでした」と涙ぐむお母さんもいた。「子どもは保育所で守られていると思ったから」と、自分の家を片付けてから来たお母さんもいた。保育所は安全な場所で、何とかしてくれていると思ったのだろう。

《保護者との連絡》

連絡を取ろうとしても、なかなか連絡が取れなかった保護者もいた。他県にある祖母の実家に避難した母子家庭の子。どこに居るかが分からなかったので、避難所を回ったりしてだいぶ探した。携帯に電話すると留守電になっていたので、充電できる状況にはあるのだろうとは思った。地域の人の中かで、その祖母の連絡先を知っているという人がいて、その人を通してようやく連絡を取ることができた。

何とか全員に休園の連絡をした。休園中も、普段の開所時間中は必ず誰か職員がいて、保護者などから連絡が来たときにはすぐに対応するようにした。断水が続いたので開所することはできなかった。保護者とは何回も連絡をとった。

市の子育て支援施設で、満了児の保護者会が存在することが分かった。毎年、満了児の保護者がおゆうぎ会を出し物を企画していて、それで繋がりが出来ているのだと思う。今年は特に繋がりが強かったようで、リーダーになる人がいて、集まったり、打ち上げ会をしたりしていたようだ。お互いにメールアドレスも交換していたようで、今回保護者へ連絡するときには助けられた。グループの中でお互いに、支え合っていた面があったのかも知れない。緊急の時のための連絡網は必要だと思う。仲良しグループだけのまとまりではなく、全体に声をかけるということが大事だ。

《再開後の状況》

24日から再開。ひとは肌がかゆいと言っていたが、心のケアかなと思ひ、なるべくスキンシップをはかるようにしていたところ、数日で言わなくなった。ひとりだけだった。あとは普段通り。

《現在の状況》

今では揺れが来ると、大きい子はさっと机の下に入っている。揺れが弱いとしゃべりだしたり、にこにこしたりするが、すぐに机の下には入る。今は本震のときのような緊張感まではないように思う。どこまで（心の傷が）残っているのかは分からない。

ひとり、自宅で余震があったときにひきつけを起こした子がいて、その子は退所し避難することになった。夏、（放射線を心配して）地肌を出すような時期が過ぎたら戻ってくるつもりだという。

現在は、子どもたちを外には出していない。子どもたちは「どうして外に出られないの？」とは言わない。家で出ないように言われているのかも知れない。

保護者からは「外では遊ばせないでほしい」と言われている。（放射線の）測定器を持っている保護者がいて、近所で測定した結果を持ってきて、「まだ遊ばせるレベルではないと思う」と言ってきたりする。「安全な数値になったときには、声をかけてほしい」と伝えた。なるべく保護者の意見を聞きながら進めていきたいと思う。

「水を持ってきていいですか」という保護者もいる。「どうしても気になる方はお持ちください」と返答している。頭ごなしに押さえつけない。

外には出せないで、なるべく部屋のなかで動くようにしている。順番を決めて、おゆうぎ室を有効に使うようにしている。体操したり室内マラソンをしたりしている。新しいことを多く取り入れているので、子どもたちは今のところ楽しんでいるようだ。これから先、この状態が長く続いて、水遊びができなくなると困ると思う。泥んこ遊びはできないにしても、水遊びくらい少しはできるのではないかという話もしているが、どういう方向になるか今は分からないので、不安がある。

子どもたちには、放射線の話はしていない。それでなくてもまわりで（大人が）いろいろと言っているのを子どもも聞いていると思う。帰り際に外で遊ぶ子もなかにはいるが、保護者の方針もあるだろうし、ダメだよとは言っていない。ただ砂にはさわらないほうが良いとは言っている。

反対に、気にしている保護者は子どもにカッパを着せて、マスクをつけさせて登園させている。

送迎時も、園のテラスは解放しないことにして、玄関だけを使うようにしている。保護者には「何らかの配慮はしているんだな」と伝わるのではないかと思う。なるべく親子の接触やスキンシップを図ってくださいとも言っている。

エアコンは使うことにした。外気を入れることは控えるようにとテレビなどで報道されているので。

本来ならカッパを来て、玄関に入るまえにほこりを払って、ということまですべきなのかも知れないが、送り迎えは車で来るし、車を降りて玄関に入るまでの1分も掛からない間であるので、それほど神経質にならなくてもいいのかなと思う。

事例11 保育所

《地震当日・直後の状況》

当日は0歳児含めて161名がいた。午睡時で、いつもならパジャマを着せているのだが、翌日（12日）が満了式の予定で、「今日だけね」と言ってパジャマには着替えなかった。それがよかった。揺れが来たので、階段の入り口に子どもたちを寄せた。おゆうぎ室の天井の天板が外れてぶら下がった。「天井が落ちる！」と思った（写真）。



壁に沿ってある棚も全体に横にずれた。下の保育室でも棚がずれた。今回、ボルトで壁に留めるようにした。4歳児、5歳児室ではエアコンのふたが外れたが、その時は子どもがいなかったので大事にならずに済んだ。2階からの避難経路は階段2か所のほか、非常用の滑り台もあるが、子どもを滑らせないといけないので、そこからの避難は無理かと思った。保育所そのものは鉄骨なので倒れる心配はないとは思いますが、落下物が怖い。

揺れていて、止まらない。建物は大丈夫と思ったが、天井は落ちそうだったので、子どもたちを避難させようと思った。階段を降りて外に抜け、庭の中央に避難させた。ごさをひいた上で、子どもたちと一緒に様子を見た。職員には避難経路を確保させ、いつもは閉じている門のチェーンも外させた。いつ誰が迎えに来るか分からないので、子どもの人数も確認させた。子供たちも泣かずに避難して、頑張ったと思う。揺れが少しおさまってから中に入った。

0歳～2歳児はそれぞれの部屋で午睡中。乳児はおんぶ、だっこ、避難車に乗せて、外に出た。

避難して、職員を配置して、お母さんたちの出入り口を確保して、誰が帰ったかをチェックするようにさせた。電話は通じなかったので、保護者に迎えに来てほしいと思って連絡しようとしてもダメだった。携帯も固定も通じなかった。

雪が降ってきて、妊娠中の職員も2名いたので、毛布や布団を外に出して暖かくするようにした。ちょっとおさまってから中に入って、また揺れると外に出て、を3回位繰り返した。

近隣から火事が出て、火が見えた。ここに居てはダメなんじゃないかという職員もいたが、「火はここ

まで来ないから、ここに居るのが一番」と判断した。人数の確認はその都度、何回も大きな声を出しながら確認していた。お迎えに来るたびに、間違えないようしっかり把握しようとした。

名簿や電話は、避難時に持ち出すものとしてチェックしていたのでよかった。普段の避難訓練が活かされたのだと思う。毎月の訓練のように、持ち物をもって、リュックを持って、といつも通りにできたのでよかったと思う。そこに保護者がいたらもっと動揺して、スムーズにはいかなかったと思う。お母さんたちのほうがパニックになったのではないかと思う。満了式の日じゃなくてよかった。

《お迎え時の状況》

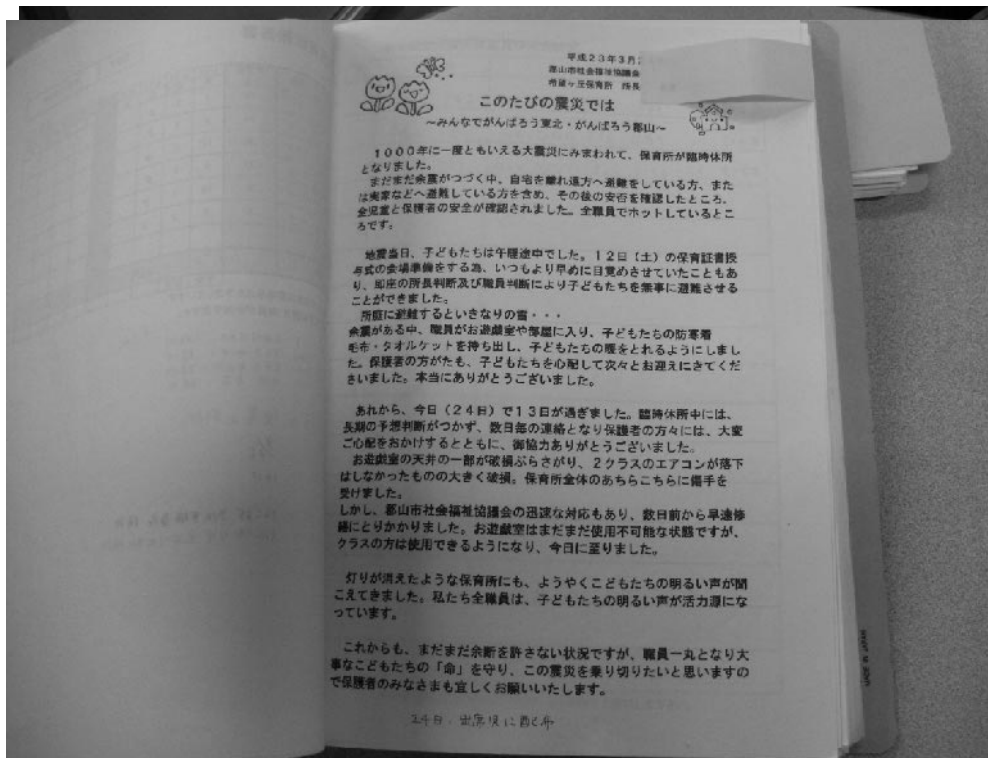
「お母さん無事ですよ、大丈夫ですよ」と言った途端、「よかったー」と泣き崩れる保護者もいた。あとは「不安だったけど、保育所だから安心していました」という保護者もいた。誰もケガもなく終わったのは本当によかったと思う。

5時ちょっと過ぎ、少し落ち着いてきて、おやつも食べていない状態だったので、少し給食の残りや牛乳を出して、長期戦になるかも知れないのでおやつも食べさせましょうということで、食べさせた。不調を訴える子はいなかった。無事に最後の子まで帰せたときは、ほっとした。

職員はみんな頑張ったと思う。職員もそれぞれ家庭があって、小さい子どもを持っていたり、家庭の心配もあったと思うが、帰らずに保育所で頑張ってくれていた。

《再開～再開後の状況》

翌日から23日までは休園。全ての保護者に休園の連絡をしながら、子どもの様子を聞いた。保護者への連絡は3回位した。震災後の行動や、子どもの様子、電話のやり取りや、保護者あての文書など、詳しく記録を残してファイルにまとめている（写真）。





放射線モニタリングの結果の新聞記事もファイルしている。保護者に電話で話す内容も、職員間で統一できるよう取り決めた。保護者にはお迎えのたびに、その日その日の緊急連絡先を毎回確認するようにした。

放射線については、何回かモニタリングにも来てもらっているが、新聞やテレビは正直なところあまり信用していない。まわりの様子を見ながら判断している。まだ子どもを外には出さないほうがいいと考えて、実際まだ出していない。水については、本園は数値が出た浄水場の水は使っていないので大丈夫だと思う。水道局にも確認しながら、保護者には安心ですよと言っている。給食も、水道水を使って大丈夫と考えている。

開園当初は水が心配で、水道局から水のペットボトルをもらおうとしたが、その水の浄水場はこの水道水と同じとのことだったので、ペットボトルではなく水道水を使うことにした。保護者からは問い合わせもあったが、説明した上で「大丈夫だ」とお話した。今のところそれ以上の問題にはなっていない。

子どもたちの心の問題もある。外に出られないことがストレスにならないように、保育を工夫している。

職員もしばらくは2階には上がりたがらなかった。本震のとき天井が落ちそうで、あれがよほど怖かったのだろう。最近はずいぶん慣れてきて、気にせず上がるようになってきた。

2歳児の子が「地震こわかったねー」といまだに言う。少しずつ忘れさせることもあっていいのかなと思う。4月から、当時とクラス担任は替わった。替わっても違和感なくスムーズにいけるように心がけた。

これからは放射能の測定値など様子をみながら、行事もしていきたい。体験保育で消防署に行く予定

でバスも借りていたが、それはキャンセルせずに、猪苗代なら放射線も少ないだろうと思ったので猪苗代に予定変更をして行った。何も経験させないまま卒園するのではなく、何かしら思い出に残ることをしてあげたいと思った。

事例 1 2 保育所

《地震当日・直後の状況》

大きい子はおゆうぎ室で勉強していた。すぐにテーブルの下に隠れた。小さい子はお部屋とお遊戯室で寝ていたので、布団をかけて守った。すごい音がして、揺れがなかなか止まないし、吹雪になってきたし、外に連れ出すのもどうかと思って判断している間に、揺れはおさまってきた。結局、外には出なかった。小さい子たちは突然お布団をかけられたので、訳が分からず泣いたという感じだった。

その後、何度か「ゴーツ」という音とともに余震がガタガタと来た。2歳児さんも机の下にさっと自分たちで入って行った。日ごろの訓練かなと思う。何名かは泣いたりしたが、保育士が守ってあげていた。3時ころまでは様子を見ていた。揺れが落ち着いたところで、それぞれの部屋に戻った。おやつの時間になった。おやつはふつうに食べていた。

《被害の状況》

見た目は大きな被害はなく、玄関から入っても分からない程度。ただ、小さい子クラスの廊下側の木製建具（窓枠）が、揺れて外れて床に落ち、3枚ほどガラスが割れた。ガラスが外れると怖いので、落ちなかった建具もみな、職員が手分けして急いですべて外した。揺れの後、15分ほどでガラスを片付け建具を外すことができた。職員は27名いる。子どもにつく係りと、建具を外したり片付ける係りとに分かれて動いた。

職員室の建具は、棚があるおかげで支えになり外れなかった。他には、おゆうぎ室の天井のエアコンが枠から外れ、落ちはしなかったものの、宙吊りになった。

《お迎えまでの状況》

地震後、すぐに園に駆けつけた保護者も数名いたが、逆に保護者の勤める職場も被害を受け、ごたごたになったので、なかなか迎えに来れない保護者もいた。最後に帰ったのは、延長保育をしていない子のほうだった。地域柄、おじいちゃん、おばあちゃんのお迎えもあった。「保育所は大丈夫でしたかー？」などと言って迎えに来られた。

あまり被害はなかったのですが、保護者が「大丈夫でしたか？」と様子を見に来ても、普段と変わりがないので「保育所に居てよかった、家に帰ってきていたら大変だった」という保護者もいた。「家の中のもののは倒れているし、一旦帰るからもう少し預かってもらっていいかい？」とか、「心配で来てはみたけど、帰っても子供らはかえって危ないから」という保護者もいた。早くに駆けつけてきた保護者は近くに住んでいて、自由業の親だった。

お迎えが来て、お母さんの顔を見ると泣き出してしまう子どももいた。普段よりは相当揺れがひどか

ったので、怖かったのだと思う。全員の子どもが帰ったのは7時半過ぎ。

《再開後の状況》

建具は今でも外している。余震が1か月～2か月は怖いという説があるようなので、外れない部分については上から段ボールをかぶせて、その上からお花を飾ったりしながらしている（写真）。建具を外したむき出しの部分が見えたままでは、子どもがそこを見て地震を思い出してしまうかも知れないから。ガラスには、フィルムを貼るなどの工夫が必要だと思う。建築業者と相談して、何とか工夫したい。この保育所は比較的丈夫だが、天井にある、光を入れるためのガラス窓は危ないと言われた。建築関係の保護者が言っていたので、後で建築家にも見てもらった。その窓の下は通らずに、別なところを通るように避難経路を変えることにした。天井の蛍光灯など、余震のたびに落ちていないかを必ず確認するようにした。

本震の2、3日前も大きな地震があったが、その時も確認できていた。「この程度だったらいい体験ができたね」などと言っていた。その直後に大きな揺れがあったので、子どもたちは休園中しばらく家にいたし、心配していたのだが、全員、元気で登園してきた。避難した家も帰ってきた。保護者に電話をしても「元気過ぎて困っています」と言っていた。特に心のケアが必要な子どもはいないようだ。現在は、安全指導や避難訓練のとき、子供たちも「津波が来ると危ない」とか、「地震のときは下にもぐる」と言い出している。

《振り返って》

怪我がなかったのがよかった。当日は急に吹雪になったので外にも出せなかったし、パジャマだったので、今のところ小さい子はパジャマにしている。大きい子は先週あたりからパジャマにした。

暖かくなってきたので、何かのときは外に出てもある程度は大丈夫かと思う。行政センターも近く、JAさんも近い。行政センターも壁が割れるような感じであったし、どこに逃げてもおっかないなと思った。すぐに逃げられる体制を取っていてよかった。

「いい経験をさせていただいた」というか、今回のことがきっかけでエコにも関心を持つようになったし、訓練はしなくちゃだめだね、と言っている。





事例13 保育所

《地震当日・直後の状況》

午睡から目覚める時、大きな揺れがあった。子どもたちと部屋の真ん中に集まり、「先生たちがみんなの命を守るからね、先生の話聞いてね」と言った。1歳の子も目をぱちっと開けて聞いていた。「泣かないでよ、先生と一緒に居ようね。」避難訓練の通りに子どもたちは移動した。「毛布を掛けるから、毛布をかぶって中に入っていてね。」職員が囲むようにして子どもたちを守った。

その後、2次非難した。「外に出ようね、準備してね。」やがて吹雪になったので、毛布を全部、外に投げて子どもたちを囲うようにした。揺れが落ち着いたところで部屋に戻った。大きい子が「お部屋に戻ったらどうするの？先生？」と聞いてきた。「担任の先生がいるから、机の下に入ればいから。大丈夫、所長先生がいるから。」「所長先生、抱っこしてくれる？」「先生がぎゅうっとして守るよ」「じゃ先生、お部屋に戻る。」

部屋に戻ってきてからも、子どもたちを離さないようにした。子どもがトイレに行く時も、職員が目を見守るようにした。

その後、おやつを食べた。おやつは大好きなシュークリーム。みんなで食べた。部屋は吊り照明があつて落ちてくると危ないので、おやつを食べたら廊下で、毛布を常に脇に置いて、「余震が来たら戸をあけて毛布をかけてこたつ（のように）しようね」と言っていた。

建物の大きな被害はなかった。未満児の部屋は蛍光灯が落ちないようにになっているし、戸棚も耐震対

応で振動があっても開かないようになっている。部屋の整理整頓もして高いところにものを置かないようにもしていた。

近所の人たちもみんな声をかけてくれた。「保育所の子ども、大丈夫かー！」。隣（地域交流センター）のおじいちゃん、おばあちゃんも飛び出してきて、手伝ってくれたりした。

余震が続いていたので、子どもをばらばらにせず、2つの部屋に集めた。保護者全員に「子どもは安全に避難しました」と電話を掛けた。やがて保護者も次から次へと迎えに来た。保護者は「保育所にいるのが一番安全でした」と言っていた。泣き出す保護者もいた。

最後のお迎えは特に遅いこともなく、6時半には全員を帰せた。

3日が毎月の避難訓練の日で、地震の訓練をした。その時に、主任と「大きな地震のときにはどうしたらいい？」と話をしていた。2次避難のときにはどうしたらいいか、落下物や避難の仕方についても考えていた。主任は子どもへの対応、所長は情報収集、と役割を決めて、子どもの避難の判断は主任に任せたとある程度避難経路なども話をしていた。そのおかげで、本震が来たときも主任と私の2人は冷静だった。「やっぱり来ましたね。」

《再開後の状況》

24日から再開。そんなに子どもたちは変わらないが、余震があった時に何人かは、泣き出したり不安定になる。家に帰っても、お母さんから離れないという子が何人かいた。ずっと休園だったし、お母さんが職場に連れて行ったりして、子どもと一緒にいることで、心のケアになっていたようだ。保育所に来るようになってからは大丈夫だった。

余震があると、寄ってきて泣きそうな声で「地震が怖かったよね、先生」。「こわいね、大丈夫だよ、先生と一緒にだよ。」声をかけると安心した表情になる。

余震のたび、主任が動き始めると、子どもたちの表情が変わる。子どもたちは大人の表情を読み取る。少し敏感になっているようだ。余震があっても、職員は表情を変えないように、おどかさずようなことをしないように、さりげなく「みんなあつまってー」と声掛けには気を配っている。避難訓練も全体ではせずに、各クラスでしている。現在は毎日が避難訓練のようなものだから。余震が来る時も、職員どうし目で合図しながらも、子どもたちを動揺させないように気を遣っている。

《原発問題に関連して》

現在もまだ、避難している人がいる。中国の方は本国に帰った。県外の実家などに避難している人もいる。この近隣は（モニタリングの）数値が高い。

二週間前くらいから、ようやく出席率が上がってきた。保護者の職場もずっと休みだったようだ。

再開時、全保護者に「戸外遊びは制限します。給食は、数値の高いものは与えません。給食は献立通りには作れません」、「承諾してもらえれば受け入れます、納得できない場合には自宅保育をお願いします」と説明した。全員に確認をとった上で受け入れを始めた。

飲み水については、保護者が「持たせたい」というなら受け入れるつもり。ミルク用の水が心配で、ミネラルウォーターを持ってきた親がいた。「ミルクはミネラルウォーターで作るが、全てにミネラルウ

オーターを使うことはできない。離乳食、手洗い、掃除、おしぼりなどはすべて水道水を使うことになるが了承してもらえるか？」と確認すると、「しばらく自宅保育にします」という保護者もいた。自営で、おばあちゃんが面倒をみている家庭だった。

水が不安だと相談してきたもう一人の親は、アレルギー症状が出ている1歳の子の親だった。園では（数値が出ていないほうの）浄水場の水を、2回フィルターに通して、沸騰させた上で飲ませていることを伝えた。「それでも納得いかないのであれば、水を持ってきてくだされば受け入れます」と伝えた。最終的には納得してもらえたようだったが、その家のおばあちゃんから、市の保育課に直接問い合わせがあったようだ。保育課も保育所と同様に答えたという。両親が納得しても、おばあちゃんなどが納得しない場合もあるようだ。ある意味で、風評被害の一つかもしれない。

給食についても、使っている食材にどうしても納得がいかない場合には、お弁当でも受け入れる考えだった。給食で発注できない食材（薬物など）は、園内に掲示し、「保育課からの指示で数値の高い薬物は省いて作ります」と周知していた。給食についてのクレームは来ていない。

外に出られない件について、子どもたちからは特に何も聞かれない。部屋の中での運動遊びを、各クラスで取り入れた。体育用具を最初から出しておいて、体操の時間を決めてスキップや行進を取り入れたり、年齢に合わせて違う遊びを取り入れている。運動会も延期になったので、「親子といっしょに遊ぼう」という、外遊びをしなくても楽しめる企画をして、保護者にも理解してもらえるよう取り組んでいる。外に出ることができなくてもできるだけ工夫して、秋の参観日にはその成果を見てもらえるように考えている。

保育者として正直、外に出ることができないいらいだちはある。お花見もできないし、お母さん方から30分だけ外に出る許可をもらって、記念写真だけでも取りに行こうか？ と話をしたこともある。でも、許可もなく勝手なことはできないし、現在は難しいと思う。

新聞紙を使って幹をつくり、手のひらで大きな紙の上に花を咲かせた作品を作って、玄関に飾っている。全員で作ったときはすごい集中力だった。改めて保育の原点を考える機会となった気がする。

夏の水遊びについては悩んでいる。外には出れないと思うので、おゆうぎ室にブルーシートをひいて体感させる程度か。その分、水彩絵の具を使った遊びを多くしようかと考えている。水との楽しみ方を感じさせたい。

先が見えないところが大変。工夫だけではどうもならない。最初はいいいけど、長くなるほど、秋ごろになったら保護者の間に温度差が出てくるだろう。「そろそろ外に出そう」という保護者と「まだまだダメだ」という保護者と。そういう状況での保育も考えていく必要があるだろう。

2日前モニタリングの測定をした。保育所独自で測定してガイドラインを作ろうとしている。洗濯物は外に出せるのかどうかなど、細かい問題は多くある。コートは中に入れてもいいのか、玄関に置いておくほうがいいのか。年長組で少し窓を開けると、子どもが「先生、放射能があるでしょ？」と言う。「えー？ そうなんだー？ 心配？」「お母さんが言っているよ」。ふだん親に言われているのだろう。

《振り返って》

休園期間中、職員同士で話をする期間がかなりあった。おかげでチームワークを固めることができた。

問い合わせに対する対応などについても、洗いざらい話し合った。保護者の要求を最初から拒絶せず、受け入れて、その上で、保育所で出来ること、できないことを考えて行こうということになった。全体の方針を確認できて、意思疎通もはかれた。新年度への移行もスムーズにできた。主任も「職員の気持ちがひとつになった」と感じたという。職員同士の信頼関係ができたようだ。保育計画の見直しをする時間もあった。

保育所ではやれることとやれないことがある。今度保護者会があるので、保護者と職員との考えを一致させたい。



事例14(本園)・事例15(分園) 保育所

《地震当日・直後の状況》

(本園)

午睡の時間帯。年長組では小学校に上がる前なので、午睡をしていない。目を覚ましていた。クラス担任が子どもたちと園庭に避難した。年少、年中組はホールで午睡中。子どもたちのもとにクラス担任が3、4人駆けつけ、とりあえず布団をかぶせて様子を見たすごい揺れだった。

避難訓練を毎月やっていたので、何かあったら子どもたちのところにすぐ集まる、その訓練の成果は大きかったかなと思う。未満児クラスも同様。従来の地震に比べると長く揺れたので、動けず、じっとしばらく様子を見ていた。

子どもたちも怖かったろうが、泣いたりさわいだりはしなかった。天井が落ちることもなかった。職員室の内部はだいぶモノが落ちたりしたが、保育室に関しては転倒防止をしていたので、落下物も特になかった。

本園では近隣の企業に勤めている保護者が多いので、保護者もすぐに駆けつけて来た。「大丈夫か?と」

心配して来られたり、早めに子どもを連れて帰った保護者もいた。子どもたちを保護者に返したのは、ふだんに比べて早かったと思う。

(分園)

分園では0～2歳児を預かっている。当日、職員のうち1名は本園に行っていた。子どもたちはお昼寝中だった。職員が打ち合わせをしようとテーブルに座ったところで、大きな揺れが来た。それぞれ担当ごと子どもたちのもとへ駆けつけ、暖房を止めた。出入り口を開けて様子を見ていたが、揺れがなかなか収まらなかった。エレベーターも止まった。子どもたちを起こして、毛布で囲んだり、防寒着を着せた。

3時過ぎ。近くにある“街づくり整備課”職員が2名、駆けつけてくれた。近所の人、ビルのオーナー、保護者も来てくれた。お迎えの保護者は3時過ぎからぼつぼつと来て、最終的に全員を帰し終えたのが5時55分。通常は8時なので、だいぶ早く帰ったことになる。街中にあり、街中で働いている人が多いので、びっくりして駆けつけたり、仕事を離れられないという人は「とにかく様子だけ見させてください」と言いながら、子どもたちの様子を確認してまた仕事に戻る保護者もいた。停電になり、真っ暗になった。懐中電灯で照らし、暖房も止まって寒いので毛布を掛けて、おやつを食べさせて様子を見ていた。

近所は老朽化した建物も多く、外の看板も落ちそうになっていたりしていた。この建物は柱がしっかりしており、あわてて外に出るよりも室内にいる方が安全だと思い、外には避難しなかった。ガラス窓からは離れて、柱のそばに子どもを寄せていた。雪が降ってきてとても寒かった。

《再開まで・再開後の状況》

(本園)

市の保育課から連絡が入り、翌12日は休むように指示があった。保護者に連絡をした。翌日に予定していた卒園式も中止した。12日の夕方、市内の所長が集められ、公立と認可園について14、15日の臨時休園が決まった。15日夜、再度所長が集められ、さらに休園が決まったが、連絡要員として職員は出勤するようにと指示が出された。結局、23日までは休園になり、24日からは再開できることから順次開園することとなった。

本園も分園も、たいした被害はなかったので24日から再開した。

郡山を離れ、東京などに避難したという家庭はいくつかあった。職員のなかにも、家族が避難するのと一緒に避難したという職員がいた。先週あたりまでは避難していたが、現在はだいたい戻ってきた。

本園・分園ともに、退所や入園辞退がかなりあった。原発の問題がかなり影響している。一時的な避難と考えていたが、このように長引いてくると生活がかかってくる。大きな問題だと思う。

外遊びは自粛。入園進級式するとき保護者に説明をして了解を得た。ホールで遊ぶばかりではストレスがたまるかも知れない。早いうちに、市として方針を出さないといけないと考えている。

(分園)

感受性の強い、不安が強い子もいる。頻繁に余震があるので、そのたびにおびえた様子をする。大きい子たちも、音に敏感にはなっていると思う。

水については保護者から問い合わせがあった。市でもこれには素早く対応した。分園は（モニタリングの数値が高かった）豊田の浄水場の水を使っているので、市からペットボトル水の配給があり、ミルク用の水はペットボトルの水を使うという掲示をすぐに出して、保護者の理解を得た。

給食についても、メニューの変更はあったが、24日から提供できた。野菜については、保育課から来た文書を拡大し掲示して、（数値の出たものは）使用しないことを保護者に伝えた。本来は地産地消の取り組みもいろいろしているところなのに、使えない状態になっている。本園では（モニタリングの数値が出た浄水場とは）別の浄水場の水を使っている。給食は本園で作ってから分園に持って来るので、問題なかった。過度な注文をつけてくる保護者もいなかった。

《現在の状況》

避難中で、一時保育を利用している保護者がいる。余所の園に預けたが、放射能に対する認識が甘いのではないかと言う。その園では園庭から室内に入るとき、靴を外に置きっぱなしにしたり、上着も外に掛けたまま放置したりしているとのこと。放射能対策がなっていないということだった。その園をやめて、当園に来たらしい。

2、3日前に市内の公立・認可保育所については市がモニタリングの計測をしている。本来なら園ごとに線量計を持っていて、今日の測定結果は大丈夫だから外遊びをしましょう、というようにしないと、保護者の理解は得られないだろう。ある程度、保護者に理解してもらえるような対策が市として必要だ。

（本園）

5月下旬に親子遠足の予定だった。行事の取りやめをする保育所が多いが、子どもたちのストレスもたまっていると思う。市内の複合施設などを借りるなど、どこかで親子の活動を実現させたいと考えている。

（事例4～15 郡山女子大学短期大学部・滝田良子／群馬大学・音山若穂）

事例16 保育所

《本震時の状況》

地震発生時は、午睡が終わり起床している時。当日はたまたま新築したばかりの部屋での午睡だったので、部屋にはTV、家具など全くない状態であった。すぐに部屋の壁側に子どもを集め、出口を確保し、頭を手や毛布で覆い丸くなっていた。揺れが長かったので、天井中央のはめ込み型エアコンが落下しそうになったため、更に布団や毛布を子どもたちの上に被せる。揺れの大きさと動きも取れず、外に出るか判断に迷っていたが、外に出る指示があったので、裸足のまま園庭の中央に集める。

天気が悪く吹雪いていたので、子ども達は揺れの怖さだけでなく、寒さで震え出したり、泣き出しそうな子の姿があった。余震の合間をみて、毛布やジャンパー、靴を持ってきて着用させたり、ダンボールで子ども達の周りを囲い、風が当たらないようにした。不安や怖さで声を出す子、泣き出す子、状況

をよく把握できない子など様々だったので、個々に応じ「大丈夫、先生いるから大丈夫」と声かけをしたり、抱っこをしたり、興奮気味の子に対しては、「今はシー」と静かにすることを動きと言葉で伝えた。子ども達の目線に合わせ、しゃがみ「大丈夫だよ」という声かけや目配りは常にしていた。

園庭避難後は村のバス、ワゴン車を保護者駐車場に駐車させ、その中に避難。保護者が迎えに来るのを待っていた。車、バスの中は初めは静かだったが、体が温まると会話する姿が出ていた。ただ、お迎えがなかなか来ないと不安になっていたため、手をつないだり、言葉をかけて安心していただけるよう配慮していた。

毎月の避難訓練があったので、地震の時は保育士の側に駆け寄ったり、保育士の話をよく聞こうとする姿があり、日頃の訓練の有効性を実感した。また、日々の保育の中で、子ども一人一人の特徴をよく把握し、緊急時の対応をよく意識しておかなければならないと思う（障がい児への対応）。

《その後の状況》

災害後は、保育所自体に大きな被害はなかった（電気、水道大丈夫。ガスはガス管の亀裂などの検査もあるため、使用不可。灯油が半量しかなく、確保難しい。村内でも停電、断水の地区もあり。）ため、月曜より保育できる（給食はできない。お弁当持参）ことを翌日（土曜）に電話で連絡。電話、携帯がつかない家は直接自宅に行き連絡する。県外避難や村外避難して連絡がつかない家もあり。

14、15日の2日間、開所するが、放射能問題があり、16日より休所。14、15日に登所した子は、保育中常に帽子着用。靴はテラスに並べておく。28日（月）より通常保育再開だったが、修了児（3歳児）は、それ以前の25日（金）修了式を実施。保育再開後も、余震が怖くて登所できない子、家から出たくない子、家族と離れたくない子も見られた。

《放射能の影響、対策》

ミルク、水分補給時のお茶は、ミネラルウォーターに切り替えた。しかし品切れ、品不足で、水の確保が大変だった。（放射能のせいばかりではないが、食材が入らないため、給食のおやつ調達も厳しかった。）通常保育再開後は、戸外に出ず室内での活動。余震が続いていたため地震時は（やむを得ず）テラスの外へ出るが、現場としては放射能の心配がある。積算放射能を考えると、半年、数十年後はどうなのか心配する。

《問題点、課題、行政への要望》

地震や火災などの訓練で、一次避難、二次避難などがあるが、悪天候の時の避難場所も必要ではないか。移動手段も。また保育所自体が被害に遭い崩壊した時、電話、携帯不通で連絡が取れない場合も想定しての避難場所も必要ではないか。その避難場所も常日頃から保護者への理解、周知徹底が必要であると思う。各保育所、地域、行政の連携をより密接にし、想定外のことも想定していく必要性を痛感した。

1つの施設、保育所の子ども数が多くなればなる程、また低年齢程、避難させること、その手段の大変さ、難しさがあると思う。待機児童をなくすために定員増で入所させている所が多いが、安全の確保を考えると、どうなのかと不安に思う。

（郡山女子大学短期大学部 三瓶令子）

事例 17 保育所

《本震による被害状況、その後の状況》

福島県内陸部に位置するこちらの保育園周辺では、地震による大きな被害はなかった。園内施設もすべて無事、直接の関係者にもけが人や死者はなかった。3月12日から23日までは市の指導で休園措置を取ったが、24日からは通常通り保育を再開させている。

園児たちの様子は、昼間は比較的安定しているが、余震の揺れにはやはり相当敏感になっている。先生にしがみついたまま離れない、寝ていても起きて泣き出してしまふ、パニックを起こす子どももいる。これまで見たところによると、こうした傾向が特に強いのが1歳から2歳児だという。理由はよく分かっていない。

園長はこれに対し「焦ってもしようがない」と言う。常に大人がそばにすることが大切。おもちゃやテレビなどでごまかすのではなく、コミュニケーションを主体とした時間を多く取る。「基本的なことだが、こんな時こそ徹底しよう」と、職員や保護者に呼び掛けている。

たとえば朝の通園時には、先生が園児を無理やり親から引き離したり、逆に親が逃げ出すように子どもを置いていっていないか、子どもに「仕事が終わったら必ず戻ってくるんだ」と納得させてから別れさせているかなどを、これまで以上に注意して見るようになった。幼稚園に行きたくないと言う子どもを持つ親には、「いまは無理に連れて来ないでください」。その代わりいつでもいい、何時でもいいから先生たちは待っているという気持ちを子どもに伝えられればそれが一番効果的だと考えている。しかしこれには保護者の仕事の都合もある。「地域や家族との協力をもっと深められないか」と思案をめぐらせている。

《放射線の影響、対策》

園庭内の放射線量に関して、郡山市は国より厳しい独自基準を採用しており、園もそれに従っている。また、市が主導する表土除去作業を受け入れたところ、園敷地内の放射線値が大幅に低下したことを明らかにした。

放射線測定機も独自に購入した。測定は毎日行う。この日（5月13日）は屋内が0.11マイクロシーベルト/時、屋外は0.38マイクロシーベルト/時だった。国の基準、市の基準どちらも大きく下回っていた。

外遊びはこれまでのところ禁止しているが、当日はちょうど市の指針が出たところで、それに基づき次の日以降0、1、2歳児は15分間、3歳児以上は30分間、外で遊ぶ許可を出そうか検討していたところだった。しかしこれに関しても保護者との連携、信頼関係を大前提にしたいという。測定値を公開しその他情報もすべて発表する。その上でたとえ線量が国や市の基準を下回っていても、親によっては「うちの子は外に出さないでくれ」とお願いされるケースも予測される。「そういう場合、われわれの判断で外に出すことは絶対ありません」。

さらにこの日、園内会議で議題となったのは食べ物についてだった。来年の米はどうなるのか。園では長らく「地産地消」を推奨し、地元の食材を多く用いてきたが、現状園児たちに食べさせたくないのが本音だ。

(ジャーナリスト 安藤央)

事例18 保育所

《本震時の状況》

震災当日(3月11日 午後2時46分)は、F幼稚園(認定子ども園)に勤務。謝恩会の最中であったが、年長児のみであったことと、保護者も同席していたため、ケガ等もなくそれぞれ無事に帰宅させた。しかしその後、津波の被害情報が入り始め、I教諭の頭を過ぎったのは、前年3月まで勤務していた公立のT保育所の子ども達の安否だった。T保育所は、海から至近距離にあったため、すぐに電話、メールで連絡を入れたが何度連絡しても不通であった。その後T保育所の保育士から、保育所が津波で流されたこと。2名の子どもが保育所登所中ではないものの津波の犠牲になり、翌日遺体で見つかったことを告げられた。

以下は、I教諭が、T保育所時代の保育士より告げられた、T保育所の震災当日の状況である。(残念ながら、I教諭自身の体験ではないため、いまひとつ曖昧な報告もある。)

その時は、丁度子ども達は午睡中(そろそろ起き出している子どももいた)であったが、保育士はすぐに子ども達を起こし、ジャンパーを着せ、リュックを背負わせて裏の神社へ向かった。この道筋は普段の避難訓練の経路であり、保護者にも周知してもらっていた。途中の道は悪路であり、子ども達も辛かったと思うがよく頑張った。また保育者も子ども達を励ましながら頑張って神社までたどり着いた。途中でT中学校の中学生と合流し、今度はT小学校の体育館へ非難し、そこで保護者のお迎えを待つこととした。しかし、いざという時の避難所であるはずの体育館が、停電と断水でライフラインが全く駄目であった。外は吹雪いてきて寒く、夕方になっても停電のため真っ暗であった。電話も携帯も不通であった。そこで保育士達は、体育館のマットを敷き詰め、窓のカーテンを外し、マットの上に子ども達を集め、カーテンにくるまって寒さをしのいだ。保護者との連絡がなかなかとれず、道路の渋滞と重なって、保護者の迎えは深夜に及んだ。(ここでの子ども達や保育士の状態は、極限状態だったと思うが、残念ながら当事者直接の聞き取りではないため、報告できない。)

《その後の状況》

I教諭は、丁度3月でF幼稚園を退職し、しばらく休職するつもりでいたが、昨年まで関わっていたT保育所の子どもたちが、市内あちこちの保育所に分散して通っていることを知り、復職を決意。なるべくT保育所の子どもがいる保育所に勤務したい旨申し出た。自分自身も余震と断水で生活が困難な状況であったが、4月15日から市内N保育所に勤務できた。N保育所は、海から2Km位の距離であったが、幸い建物の被害は少なかった。18日になってこのN保育所に、T保育所でI保育士が関わった子ども2名が登所してきた。この子ども達は、津波の犠牲になった2名の子ども達と同じクラスの年長児であり、かなりのショックを受けている様子のため、I保育士が担当となった。この子ども達の様子をI保育士は、以下のように語っている。

保育所ではI保育士の元を離れたがらず、一斉保育で少しでも離れると、ワンワン泣き出す。家に帰りたいたと叫び、他の保育士には馴染まず、I先生でないと駄目と駄々をこねる。I保育士の判断では、親しかった友達が津波の犠牲になり、それまで過ごしていたT保育所から移動してきて不安なところに、元の保育所の先生が居てくれて、今まで出せなかった思いが出せるようになってきたのだと思うが、それが他の保育士には、我儘だと映るようである。友達が亡くなったことをよく口に、「地震が来たらど

うするの?」「R先生(I保育士のこと)が連れて逃げてくれる?」等々を訴える。避難訓練では、ブザーの音を怖がるため、鳴らさないようにした。

自宅では、父親が消防団として犠牲者の捜索に当たっているため、沢山の犠牲者が出て「毎日探している」という現実を目の当たりにし、子どもながらに「探している」という現実が、恐怖となっている。しばらくは祖母が、現在登所している兄と、今も自宅にいる妹の面倒を見ていたが、妹は自宅から離れられずよく熱を出す。遠くに行きたがらず、1人になるのを怖がる。祖母は、「先生、このままだと孫達は駄目になってしまう。」とI保育士に訴えている。

一方T保育所の保育士は、保護者から「地震や津波から子どもを助けてくれて有難う。」とお礼を言われるが、その時は逃げるのに必死で、果たして子どもにきちんと関わられたか分らないと、自分を責め続けている。

《保育現場の現状、問題点、課題》

上記のT保育所の避難の様子は、筆者がI保育士から聞き取りをし、その中でT保育所の保育士が語った様子をI保育士を通じて間接的に報告している。本来であれば、直接聞き取りをしたかったが、I保育士も、T保育所の保育士も現在臨時職員であるため、状況を多く語りたがらない。

現在福島県海岸地区では、津波の他放射能の問題もあり、人口の流出が激しい。特に子どもを市外や県外に移転させる家庭が多く、子どもの数が激減している。そのような中で、保育所では子どもの数が減少し、臨時の保育士は仕事が少ない状況が続いている。

上記事例に報告のように、震災後I保育士はT保育所時代に関わった2人の子どもと、幸い現在勤務しているN保育所で関わることができ、地震や津波により動揺している子ども達にとって大きな支えとなっていることが窺える。しかし、上述のように、子どもの数の減少により、現在別の保育所への異動を余儀なくされている。本人は、今この子ども達を守ってやれるのは、自分しかいないと思うし、このまま自分がこの保育所を離れることは、子ども達にとって決して良い状態ではないと思うが、行政の都合で移動せざるを得ない。

震災後、心理学者やカウンセラーによる「子どもの心のケア」が実施され、行政も歓迎する傾向がある。しかし子どもにとって保育士はかけがえのない存在であり、今回のような不測の事態が起きた時こそ、本当に子どもを守って上げるのが保育士の仕事である。保育士と子どもとの日頃の関係、密度が深いほど、このような時に子どもにとって一番安心な存在は保育士であると思うと語っている。

しかしこの聞き取り調査を通して強く感じたことは、臨時職員の立場では、このような現実を公に話すことすら憚られ、匿名希望を強く望み、T保育所の職員からは、直接の話すら聞くことが困難であるという現実であった。いつ異動させられるか、解雇されるか分からない状態で、現実の出来事とは言え、情報漏洩にあたるかも知れないことを話すわけにはいかないと言う。特に子どもが臨時職員にばかりなつくことを快く思わない職員もおり、ベテラン保育士である程、矛盾を感じて保育している様子が窺え、胸が痛んだ。

今回の震災は、現地の子どもにとっては大きな試練であり、短期間で解決できる状況ではないであろう。そのような子ども達を救うことが出来るのは、家庭と、日々子どもに関わっている保育者、そして地域、行政が連携した取り組みであると思われる。

日頃「保育所、地域、行政が一体となって」と耳にするが、この事例では、臨時保育士の立場や待遇

がいかにか不安定かを感じさせられる。しかも彼女達は、目の前の子ども達に日々直接、真剣に関わっている。しかし本来子どもが主体であるべき保育が、行政の都合で動き、そのことはそのまま保育の質に直結していると感じる。

立場が異なっても、保育者の専門性は同じである。この震災での教訓をお互い赤裸々に語り、問題を掘り起こし、次の世代に繋げていく必要性を感じている。

(郡山女子大学短期大学部 三瓶玲子)

事例 19 保育所

《本震による被害状況、その後の状況》

「避難訓練の時、これまでは言うことを聞かない子どももいた。でもいまはみんな真剣です、ふざける子は一人もいません。」海岸からわずか1キロメートルの距離にある保育園の園長は話す。

こちらの保育園は3月11日から約2週間休園した。主な理由は断水。津波の被害はなかった。けが人も出なかった。建物内では壁にひびが入る、水道管が破れ漏水するなどの損傷があったが、4月1日までに修復を終え、現在は平常時と変わらない態勢で子どもを受け入れており、園内は一見平和を取り戻しつつある。

しかし、子どもたちの行動には確実な変化がみられる。「余震のたびに全員があっという間に机の下にもぐり込む。なんの指示もないのに2歳になったばかりの園児までがそうする。こんな光景を見るのはもちろん初めてです。」冒頭の言葉に園長は続ける。

よほど怖かったのだろう。先生に抱っこをせがむ、手を離さないといった、いわゆる「甘え」に退行する園児も多く見られるという。朝に親と別れるときにぐずったり泣き出したりする子も増えた。口に出して「怖い」と言わない分だけ、今回のことは心理的に長く、もしかしたら一生を通して子どもたちに影響を与え続けるかもしれないと、園長は見ている。

《放射能の影響、対策》

原発問題が深刻となって間もなく、保育園では市役所から計測器を借りて敷地内の放射線量を調べた。屋外は平均0.28マイクロシーベルト/時、地面は同0.3マイクロシーベルト/時、屋内では同0.08マイクロシーベルト/時だった。雨上がりにはどちらの数値も若干高くなる。また、屋外では地面より植物の葉の上が常に高い値であることも分かった。

数値はいずれも国の基準を大きく下回った。これを根拠に保護者からは「外で遊ばせてやってくれ」という意見も聞かれた。しかし園では安全を最優先に考え外遊びを中止することにした。植物に触れたり、泥だらけになって遊ぶ子どもの姿を脳裏に浮かべながら決めた。地面の放射線値が平均0.1マイクロシーベルト/時になったら再開を検討するという。

(ジャーナリスト 安藤央)

その他の報告・意見等 1

緊急報告 3.11、未曾有の複合災害と向き合う 被災地幼稚園・保育所のいま

2011年3月11日に発生した東日本大震災はマグニチュード9.0と、国内観測史上最大を記録し、それに伴う津波も合わせた死者・行方不明者の数は警視庁によると5月15日までに2万4178人を数えた。さらに福島第一原子力発電所（以降、原発）からの放射性物質漏洩（ろうえい）が重なり、事態は未曾有の複合災害の様相を呈している。被害の正確な規模と範囲、そして終息の見通しはいまだ見えてこない。被災地の現状はいったいはどうなっているのだろうか。子どもたちは無事なのか。5月13日から15日までの三日間、福島県を中心とする関係諸所に対して主に電話による聞き取り調査を行ったのでその一部を報告する。



地震と津波により崩壊した宮城県名取市の惨状（撮影・加納浩志）



戦後最大の規模となった災害、園児への直接の犠牲の報がないことは不幸中の幸いだろうか
(撮影・ryumu)

3 県 300 カ所以上で被害、保育中園児の死亡報告はゼロ

震災により被災した保育所の数は宮城、岩手、福島の 3 県で合計 315 に上り、このうち全壊や津波による流失など甚大な被害のあった保育所が 28 以上あることが、このほど読売新聞社が行った取材で明らかになった。取材では保育中だった園児や職員のなかに避難時に亡くなった例がこれまで報告されていないことも分かった。

5 月 13 日までに 3 県から厚生労働省に報告された被災保育所の件数は、宮城県で 243 件（うち全壊・津波流失は 16 件）、岩手県で 34 件（同 12 件）、福島県で 38 件。福島県については被害程度の内訳は分かっていない。

保育所は各種災害を想定した避難訓練を毎月行うことが義務づけられている。大地震が襲った 3 月 11 日午後 2 時 46 分、多くの保育所では昼寝の時間帯だった。保育士らが園児を起こして身支度させ、乳児をおんぶするなどして集団避難したとみられる。避難時の状況を保育所から聴取した宮城県子育て支援課によると、異常な揺れを感じて日頃の避難ルートをやめ、さらに高い所へ逃げたため全園児を守ることができた例もあったという。

いまだ深刻な福島沿岸部、仮設所などで保育再開の動きも

福島県教育庁教育総務課によると 5 月 13 日現在、県内でも内陸寄りの会津、中通り地域における基本的な都市機能はほぼ平常時と同じくらいまで回復している。これら地域では建物の損壊が比較的少なく、まったく被害がなかったかのように見えるところもあるという。

一方で地震と津波の被害に加え、原発の影響が大きい沿岸の浜通り地域、その他いくつかの放射線量が突出して高い地区は、いまだ深刻な状態にあるとしている。住民は相当数が避難したとみられ、その形態も自主的なものから行政の指示によるもの、一時的なもの、完全に転居してしまうものまでさまざま、さらにそれぞれが流動的に動いていることもあるため、これらの地域・区では詳細な調査が進められず正確な実態は依然つかめていない。

前述警視庁のまとめでは原発事故の影響などによる避難も含め5月13日現在、全国18都道県に設置された約2400の避難所に約11万6,000人が身を寄せている。このうち福島からは大人・子ども合わせ3万4,000人から3万5,000人が県外へ避難したという別の機関が出した統計もある（県が震災前に行った調査では、浜通り地域の人口は約54万7,000人）。

このような状況に対して、「沿岸部でも4月以降はひとびとが避難先から元の場所へ帰ってきている」という報告も聞かれた。福島県全私立幼稚園協会の調べでは、震災の被害が大きかったところでも比較的年齢の若い保護者らが仕事のために戻ってくるパターンが多い。これに伴い建物が壊れた保育施設では修繕を行ったり仮設所を建てるなどして対応し、保育を再開する動きも一部で確認されているという。

最大の問題は放射線

原発の影響は程度の差こそあれ県内全域に及んでいる。聞き取り調査を行ったほぼすべての人が「最大の問題は原発からの放射線である」と答えた。

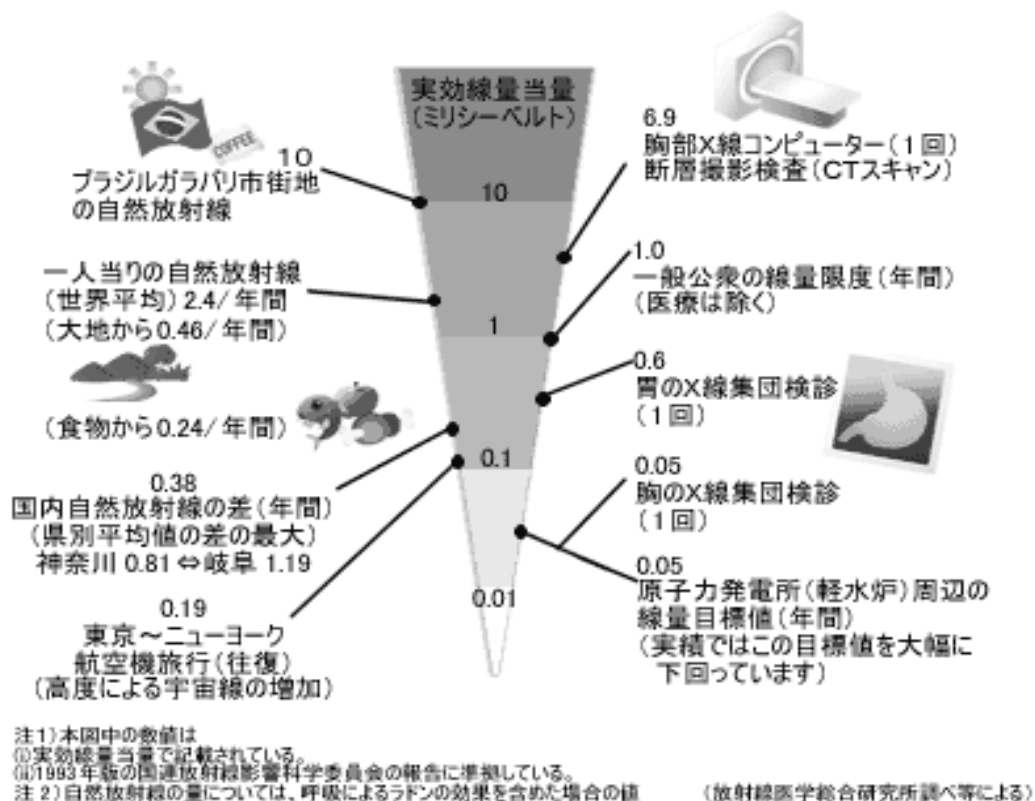
福島県教育庁学校生活健康課が確認したところによると5月13日の段階で、浜通り地域では原発問題の影響により閉園・休園となった公立幼稚園の数は合計17。別所へ移転したところは8園ある。

福島県保健福祉部子育て支援課の調べでは、同様に閉所した認可保育所（公立・私立含む）の数は合計41（いわき市28、南相馬市5、相馬市4、新地町3、飯舘村1）であった。

意見分かれる政府基準、教育現場では混乱が広がる

現在、保育を行っている保育所や幼稚園が最も苦慮していると思われるのが、文部科学省が定めた、福島県内の幼稚園や学校などでの屋外活動を制限する値を「年間20ミリシーベルト」にするという基準をめぐる問題だ。

基準は今回の原発事故に伴う放射能環境汚染に対し暫定的に定めたもので、被ばく量の上限を年間20ミリシーベルトとして1日当たりの量を求め、毎時で3.8マイクロシーベルトを超えた場合は屋外活動を1時間にするとしている。



「放射線量の目安」 出展・愛媛県県民環境部環境局環境政策

一般人の被ばく線量としてはこれまで、ICRP (国際放射線防護委員会) が1990年に勧告した内容などに基づく「年間1ミリシーベルト」が適用されていた。一方で「20ミリシーベルト」も、同じICRPが3月21日に出した「声明」によるものだ。しかし、年間でこれほどの量を被ばくすることは放射線業務従事者でも極めて少ないという実態がある。人間が自然に被ばくする量＝表＝は、世界平均で年2.4ミリシーベルトといわれる。ほとんどの専門家の意見は、被ばく量が年100ミリシーベルト以上で発がんのリスクが高まるという点で一致している。では、それ以下ではどうなのか。確実なデータは存在しない。

当然、保護者の間では不安が高まっている。県の災害対策本部には放射線に関して「ほんとうに大丈夫なのか」、「よりリスクの少ない基準を設けて欲しい」といった問い合わせや要望がこれまで累計1万件以上きた。保育所や幼稚園で職員らが直接尋ねられる場面も相次いでいる。教育の現場では混乱が広がっているようだ。「なぜこんな値を出したのか、根拠について私のほうが教えてもらいたい」(いわき市幼稚園園長)、「知識がない分だけ放射線の影響がすごく怖い」(いわき市保育士)、「(基準が) 厳しいほうがいいに決まっているが、国が決めたこと」(福島市保育士)。ナーバスな問題なのでコメントは差し控えたいとして、発言を拒否する人も多数いた。

県職員のなかには、「市町村レベルでそれぞれ専門家を招くなどして放射線に関する勉強会や説明会を随時行っている。一時期のパニックは収まった」とする向きもある。聞き取りを行った限りにおいても目立った焦りは見受けられなかった。だが、住民からは「誰が来ても一様に『安全、安全』としか言わない」、「国がおぜん立てした勉強会など無意味だ」などの不信や、「言葉でいくら説明されても感覚的に受け入れられない」、「県民をばかにしている」といった厳しい声も聞かれた。保育所・幼稚園の対応としてはこのような感情に配慮しました、園児の健康と安全を守る予防的観点から、国の基準よりさらに慎重に距離を取った基準や、適用にあたって独自のルールなどを急きょ作成するところが出ている。

(ジャーナリスト 安藤央)

その他の報告・意見等 2

学生(大学院生)という立場から、ボランティアとして、大学体育館に避難している幼児：*最大4名、3歳児男子3名、4歳児女子1名 (*出入り(避難場所の移り変わり)による変動)に対し、避難所内に設置されている「子どものスペース(遊び場)」を昼間、「保育室」に活用し、以下の視点(目的)から「保育」を行った。

《視点(目的)》

- ① 基本的な生活習慣の自立
- ② 基本的な社会性の育成
- ③ 親(保護者)からの自立
- ④ 子ども同士の活動(あそび)

視点(目的)をあてた理由は、避難所内の「環境」である。

避難所内は物資が行き届いており、子ども達においては、ハサミ、のり、絵具、自由画帳、折り紙などといった「教材」が複数提供され、自由に使うことができる。それに加え、おもちゃ(ゲーム、ぬいぐるみ、積み木など)や本なども豊富で、使い放題である。故に「使えばなし、やりっぱなし」の「片付けない(無法地帯)」状態である。

また、「駄菓子コーナー」たるものもあり、そこには「お菓子」や「ジュース」が並べられており、子ども達は四六時中「食べ・飲み放題」という状態である。それに対して、親(保護者)も特に口を出すわけでもなく(あきらめている、仕方がないなどといった様子)、それを放任していた。

さらに、「学生(大学生)ボランティア」による子どもに対するかかわりが、「遊ぶ(かまう)」ことや「DVD視聴」であった。

この状態を目の当たりにし、上記の視点(目的)と4月という時期(新年度【入・進級時期】)を考慮し、避難所内に「幼稚園」をつくることを試みた。活動時間は幼稚園の保育時間にほぼ合わせ、「10時前後～15時頃」とし、対象児は上記の通り(4名)で、1名(3歳男児)を除き、未就園である。

まず初めに、「親(保護者)からの自立」を試みた。当初は、同じ空間(避難所)に親がいても2名(3

歳男児、4歳女児)がなかなか「保育室」に入ってこれずにいたが、子ども同士の関わりや保育者(私)がおこなう手品や読書、素話から興味をひき、関係を構築していきながら少しずつ自立させていった。親(保護者)も頼り(信頼)にしてくれ、暗黙の了解のもと、空間が「幼稚園」になっていくことができた。

幸い、保護者の方が「活動」に対して理解を示し委ねてくれたこともあり、「屋外」(放射能)での活動に対しても寛容で、限られた期間ではあったものの、屋内外においてさまざまな「体験」という「経験」を子ども達に与えてあげることができたと思う。

保育者(私)が求めた「体験」の主なる「ねらい」は「失敗すること」であった。

あるものを「あたりまえ」に感じるのではなく、ないものやできないことから、自ら「思考」し、行動し、失敗を繰り返していきながら、あきらめないで「思考」していくことで、「生きる力(確かな学力、確かな知識)」の礎を築いていって欲しいと願った。子ども達は「自分に甘えることなく」、今もっている「力」を「これでもか、これでもか」と振り絞って、向かってきた。そんな「子ども達」を肌で感じ、その度に涙が込み上げてきた。「千年に一度の大地震(震災)」をたった「3年、4年」しか生きていない中で「体験」した「経験」を「強く」「たくましく」受け止め、いつしかそれを「礎」に「福島の復興」、「日本の復興」の大きな力へとになっていってくれることを心から願った。そんな「願」を込めて一緒におこなった「活動」は以下の通りである。「子どもは無力だ」と思っている保育士や教師がいるのであれば、「文化人」である前に「自然人」であることをどうかこの「震災」から振り返り、感じてほしい。

《活動内容》(年齢【発達段階】にあっていないものが多々あり)

個々の道具入れ(カラーボックス)、道具箱を用意し、教材(のり、はさみ、クレヨン、粘土一式、自由画帳)を「自分のもの」という意識を持たせ、大切に使うこと(出し方、使い方、片付け方など)から始める。また、以下の活動を通して、あいさつ(おはようございます、こんにちは、ってきます、ただいま、いただきます、ごちそうさま、ありがとう、ごめんね、さようなら)や他者との関係(いれて、かして、いいよ、だめよ、まっててなど)を教えること、規則正しい食習慣(3食、おやつ時)を心がける。

※幼児用のテーブルと椅子を使用(柏幼稚園【千葉市柏市】より借用)

※教材提供(高木幼稚園【千葉県松戸市】)

[屋内活動]

- ・製作(コイのぼり、ピョンピョンがえる、ひこうき)・・・のり、はさみの使い方、おり方
- ・粘土・・・粘土あそび、粘土べら、粘土版の使い方
- ・紙粘土製作(写真立て)・・・退所時のプレゼント
- ・絵画(自由画)
- ・積み木
- ・体操
(ポンポン体操【体の部位への理解】、手をたたきましょ【表現・表現の理解】、ディズニー体操)
- ・マット(前転、横転)【回転感覚の体験】
- ・トランポリン

- ・鬼ごっこ、かくれんぼ
- ・ボーリング（ペットボトル、ボール使用）
- ・食事指導（準備・片付け【テーブル拭き、食器・食事の運搬】、あいさつ、スプーン・箸の使い方、こぼしたときの処理のしかたなど）
- ・トイレ指導
- ・おにぎり作り（ガスコンロ・土鍋使用）
 - ①米とぎ ②観察（米～ごはん） *「はじめちよろちよろ、なかパッパ、赤子泣けどもふたとるな」
 - ③味見 ④おにぎり作り ⑤「いただきまーす」

[屋外活動]

- ・散歩（交通のルール【信号・横断歩道の渡り方、道路や歩道での歩き方】、周囲の観察、四季の草花採取）
- ・公園あそび（ブランコ、すべり台、土手すべり、鬼ごっこ、かくれんぼ）
- ・電車乗車（電車の乗り降りの仕方、駅構内の階段、エスカレーター、エレベーターの歩き方、他者への気配り・マナー、キップの買い方、改札の入り方・出方）
- ・買い物（コンビニ、ドーナツ屋） *お金のやりとり、店内でのマナー
- ・あさがおの種まき（観察、水やり）

以上の「活動」また、全体（ボランティア）を通した私の「経験」より、次のことを「提言」したい。

《提言》

「避難所における年齢別（幼児～高校生程度）教育の在り方」（計画的教育）

《理由（ねらい）》

- ・避難所を退所し、新たな生活を迎えたときの生活（学習）習慣のスムーズな移行
- ・入園（入学）、転園（転校）する幼稚園・保育園・各学校へ適応できる心身の準備
- ・避難者（保護者）の気持ちの負担を軽減（子どもからの解放【保護者自身のゆとり】）
- ・周囲の避難者（保護者以外）の気持ちのやすらぎ
（子どもが規則正しい「生活習慣（あいさつ、マナーなど）」を送ることや、子どもの「笑顔」、「笑い声」により、周囲の避難者の表情が和らいでいた）

提言したことは「具体」としてのことであるが、さらにひろくいえば「ボランティア」に対しても、「計画性」や「役割分担」が必要であると感じた。個々が幅広く動けることは大切なことではあるが、幅広く「動きすぎて」しまい「誰が・何を」という分担がなく、統一性がないように、ボランティアという立場で感じた。また、被災者に対する「かわいそう」、「哀れ」などといった決めつけた「気持ち（思い）」だけが先行してしまい、「優しさ」や「親切」の押し売りになり、ボランティアをしている者（自分自身を含め）の「自己満足」になってしまっているような気がしてならない。

全体を通して個人の思いとして言えることは、「人として、生きていくために、何が大切なのか」を一人一人が考えることであると思う。千年に一度のこの大震災は、我々に大きな「課題」と「試練」を与えてくれたものである。そして、そこに犠牲になってしまった多くの方々の「命」に心から「ご冥福」

をお祈りするとともに、その方々のためにも「日本の復興」を誓いたい。

(福島大学大学院 堺秋彦)

その他の報告・意見等 3

震災後の福島県内の保育現場の状況と課題

《震災後の状況には地域差がある》

福島県内の保育現場の状況は、その課題の特徴から大きく三つの地域に分けることができる（重複している地域がある）

①地震・津波によって甚大な被害を被った地域

幼稚園・保育所が被災し、その再建・再開と必要最低限の条件確保や物資の確保が緊急に必要な状況にある地域。

②原発事故によって長期間の避難生活を余儀なくされている地域

自治体単位で避難所に避難した人もいれば、自主的に避難した家族もあるが、長期化する避難生活の中で乳幼児の生活と遊びをどう保障するかという課題が重要。

③原発事故による放射能汚染の広がりによって不安を抱えた地域

政府による非難指示の圏外にあっても、保護者・保育者の不安は極めて大きい。その中で、日常的な保育ができないことによる質の低下の問題が広い地域で起こっている。

《聞き取りによる現場の保育者の声》

予備的な調査（県内施設で働く卒業生や関係者への聞き取り）によると、福島県内の幼稚園・保育所・保育施設などにおいては、震災後、保育の現場はこれまで経験したことのない様々な課題に直面し、その解決に苦慮している。聞き取りによって浮かび上がってきた課題の主なものとして、

ア 原発事故による放射能汚染下での保育の質の維持にかかわる悩み・課題

- ・さまざまな情報をどう読み取り評価すればいいのか、わからないことが多い
- ・屋外での遊びを禁止すべきか、実施する際の注意事項は？
- ・今後予定されている戸外での行事をどうすべきか
- ・水道水を使うことへの不安
- ・屋内だけでの生活による体力の低下やストレスへの対策をどうすべきか
- ・上記の事項に関して、保護者の不安の濃淡の差が大きく、園として一律の対応が難しい
- ・管理職は上部機関に判断をゆだねたり、自己流の意見で対処したりするようなことがあると、現場の保育者の不安が大きくなってしまう
- ・若い保育者の中には自分自身の健康への不安がある

イ 被災や震災によって心理的ショックや不安の大きい子どもにどう対応して保育すべきか

- ・親から離れない幼児、不眠や不安の強い幼児をどうケアしていけばいいのか
- ・避難生活を送っている幼児の受け入れに際して留意すべき点は何か

ウ 防災に関すること

- ・震災発生時、日頃の避難訓練が活かされた。と同時に、子どもたちはパニックになることなく、指

示に従って整然と行動できたことに驚いた

- ・いくつか反省点もある（保護者との連絡、戸外で長時間待機する時の対応、地震対策の不備など）
- ・現在も余震が続いており、安全対策が十分かどうか不安がある

エ その他

- ・避難所で生活している幼児達の日中の保育の場が確保されているのか
- ・公立園の保育者は日常業務と平行して避難所への支援業務をこなしていて疲労している
- ・さまざまな行事が中止・自粛の方向にあるが、むしろ集まって祝ったり楽しんだりする機会を積極的に設けるという視点で対応すべきではないか

《個人的コメント》

震災後の復興において、幼い子供たちの安全・健康の確保と、社会的な保育の質の確保は最優先課題の一つである。それは、乳幼児の健やかな育ちを支えることの重要性は言うまでもないが、保護者の最も大きな不安や心配の対象であり、かつ子どもたちの笑顔が、何より大きな復興の支えとなっているからである。

保育の現場は子どもを守るための賢明な努力を重ねているが、福島県の場合は原発事故の深刻化が大きな影を落としており、現場は二重三重の課題を抱えながら奮闘している。しかし現状では、政府や自治体の対応が現場のニーズに焦点を当てて動いているという印象は薄い。

放射能の問題にしても、放射能線量が現状程度なら戸外での遊びは心配ないという政府や自治体の広報もなされているが、他方で学校・幼稚園・保育所では、戸外での遊び禁止や諸行事（運動会や遠足など）が相次いで中止になっている。学校や自治体は、戸外活動等への（線量の）基準を示すことを求めているが、文科省は一律のガイドラインを示すのは難しいと言い始めている。その結果、専門家の意見では、戸外での遊びに制限を設ける必要はないということだが、保護者の不安の声に配慮して全員室内での活動という線に対応している園が多いように思われる。

子どもの健康や安全が第一であって用心に越したことはないというのが教育委員会や園長レベルの判断だが、しかし子どもが長期にわたって戸外での活動や行事を大きく制限されている状況というのもまた、子どもにとって大きなストレスになる恐れがある。ベテランの保育者達からは、過度の自粛や制限はかえって、子どもはもちろんのこと、地域全体の活力を低下させるのではないかとという声が聞こえてくる。

少し結論を急ぐと、子どもたちもまた震災の被害者であると同時に、復興の主体的な参加者であると思う。それはいかに大人たちが子どもたちから元気づけられているかを見れば明らかである。単なる安全第一の自主規制的な保育ではなく、子どもたちを元気づけられるような保育の質を保つことによって地域の再建の一翼を担うという位置づけをしっかりと持つことが必要なのではないかと思われる。

これは、放射能問題に限った話だが、やはり政府が幼稚園・保育所をどういう意味合いでその重要性を認識するかという基本のところ、大きく復興支援の規模に影響するように思われる。地域復興の鍵的存在として、政府と自治体の責任で再建し、子どもたちのニーズに対応できるだけの質を保つことが何より今求められていると思う。

（福島大学 大宮勇雄、白石昌子、原野明子）

③ その他

事例（栃木 幼稚園）

《災害時、災害後の保育の経過と課題》

地震発生時の園児の所在は、既に帰宅した者、通園バスに乗車中の者、園内でバス待ちをしていた者、預かり保育で残っていた者、課外教室（体操教室）に参加していた者、とそれぞれだった。

園内にいた園児を揺れの様子を見ながら、教職員の誘導で全員園庭中央部に避難させた。

園児たちは、緊張と恐怖で泣き出す者、顔面蒼白の者、「大丈夫！」と励ましの声を発することで落ち着きを得ようとしている者等の姿が見られた。避難の際には、教職員が臨機応変にアイコンタクトで誘導できた。

バスの無線も保護者との電話連絡も全く通じない中で、保護者はそれぞれに迎えに来てくれ、バスに乗車中の園児も（親が園に迎えに来た者もいた）全員無事に帰宅させた。

迎えが来るまでの待機場所を通園バスの中にし、明かりと暖をとっていた。

翌日から全職員で園舎内外の片付けや清掃をし、安全確認ができた保育室を使用して、徐々に通常保育を再開した。

計画停電、ガソリン不足、商店の品不足により通園バスや給食の配給等、支障を来した。

今後の課題として、園児を保護者に引き渡すまでに時間を要したことである。

電話の連絡が全くとれず、バスの無線も通じず、それぞれの場所で職員が判断して行動した。大きな問題はなかったが、普段から教職員が危機管理意識を自覚しておく重要性を感じた。

《今後の保育の在り方》

園舎への直接的な被害はなかったが、余震が続く中で避難する判断をどのように定めるか、教職員の危機管理能力は大切であると思う。

また、園児にも臨機応変に教師の指示に従えるような道徳性を身につけさせておくことも重要であると思われる。

「オール電化」を合言葉のように、便利で豊かな生活をするのが当たり前のような生活の中にあるひ弱な精神力になりつつある子どもたち・・・。

ひとたび停電となり家庭生活が立ち行かなくなったり、便利なはずの携帯電話も不通、ガソリン不足で車が自由に使えない等などの窮地に陥った今回の災害。

大人も子どもも、まさに「生きる力」「生きる術」を身につけておくことが重要であると感じた。昔の暮らしの智慧を学んでおく必要があることを痛感した。

野菜等の栽培から、食するまでのプロセスを体験する自給自足の活動。

細かい事だが、冷暖房機を当てにしない生活（もっと自然を活かす）。

歩く、走る、飛ぶなど基本的な体力をつけて、いかなる環境においても対応していける力を養っておくこと。

・・・等は、これまでの教育課程に加えて、意識して具体的に取り入れていくことが大切と考える。

（かしわ幼稚園 学校法人矢坂中央高等学校 平山廣子）

事例（埼玉 幼稚園）

震災当日の様子

《3/11（金）震災当日、14：00 降園 ～ 地震直前》

・子どもの動き

・徒歩降園

親が園に迎えに来て親子で降園。

園庭に親子で残り荷物を親にあずければ子供は遊んでいても可。

（地震直前：遊んでいる親子が庭にいる）

・バス降園

13：55 発からバス2台で3コース、計6コースで降園。

バス待ちの間、天気の場合は庭遊び、雨天の場合は学年ごとに部屋遊びをしている。

庭及び部屋には安全管理の職員が子どもを見ている。

（地震直前：最終コースの子ども達、庭で遊び片づけて、並ぶ準備）

・課外活動参加者

わらべ唄・まめっちょ：2F、1教室にて集合。年度末発表会の準備→ホールにて発表会。

絵画教室・造る会：1F、2教室にて活動。（金）は年長児対象。

英語教室：1F、1教室にて活動。（金）クラス、年中・年長児対象。

※幼稚園職員外の専門職員が部屋（保育室）を借りて行っている

地震直前

徒歩降園： 遊んでいる親子は庭にいる

バス降園： 最終コースの子ども達 庭で遊び片付けて並ぶ準備

課外活動： 各教室にて担当教師とともに活動中

14：50 地震発生

・庭中央に集まる（徒歩・バス降園の子ども、親）

・各教室、担当教師の指示で集まる その後、幼稚園職員誘導のもと庭中央へ移動

職員 14:00 降園 →徒歩降園、バス降園、あずかり、課外活動の子どもを見る

地震直前 →2分して A 徒歩降園残りあずかりの子ども

バス降園（バス待ち）の子どもを担当し庭にて安全管理

B 掃除（保育室 全てを分担）

→この日は3月誕生会を直前にし出しものの人形劇の練習を先行後、掃除をする

A 安全管理担当職員は庭にいる全員を庭中央に集め、課外活動をする者全員を避難誘導し、庭中央へ。

B 人形劇担当職員は2F避難口を開け、ホールブレーカーを落とし、揺れの様子で庭中央へ。

《地震後の帰宅について》

- ・子ども 基本通り（平常時とほぼ同じ）
 - ・バス降園…バスにて各バス停へ子どもを送り届け全員帰宅。
 - ・徒歩降園…親子で様子を見ながら庭に残るなど、各親子で判断して頂き、各自帰宅。
 - ・課外活動…予定通り活動をし、親が迎えに来て全員帰宅。
 - ・あずかり…親が来るまで職員と待機。

- ・職員
 - ・誕生会練習中止
ホールのブレーカーを上げ、窓・非常口の開放を閉め、週末の管理をして、全職員、職員室待機。
あずかりの年少児男児1名と共に様子を見る。
 - ・余震に対応しながら各自帰宅手段である電車の回復待ち。
自宅連絡するも不通なので、こちらも時々確認しながら待つ。

16:00 あずかりの男児 母から連絡。

「上石神井にて電車内に足止め、田無に回り、徒歩での帰宅を決めた。時間はかかるが園まで行く。」と確認。

17:30 園長・理事長先生方の好意で、“職員に炊き出しを”と準備。

徒歩通勤の職員は帰宅。

19:00 あずかりの子どもと共に夕食を頂く。

この頃から自宅、家族携帯と連絡がつき、帰宅手段が明確になる。

19:30 連絡のついた家族から自動車での迎えが可能となり、同方面へ帰宅する職員が便乗させて頂き帰宅できることになる。各方面、自動車が到着次第帰宅。唯一帰宅できなかった JR 川越線使用の主任先生1名は、園長宅へ宿泊。

私は志木方面の後輩同僚のお母様に保谷→大泉学園→新座→志木と回って頂き、22:00 頃帰宅。

21:00 あずかりの男児母親から、所沢駅に着いたと連絡あり。

担任と理事長先生が園者にて所沢に迎えに行き、無事母親と男児が会える。

母親と徒歩で来た年配の方も乗せ、親子を自宅に送った後、その方を入曾へ送る。

園児全員が無事帰宅終了。

その後

3/12（土）、3/13（日） 休日。各自自宅。

3/14（月） 子ども…休園。

職員…出勤可能な人のみ、職員会議参加。今後を決める。

（朝電車にうまく乗れた職員と徒歩通勤職員のみ参加。9:00～9:30 会議をし、帰宅）

西武線は不通が解除されたが、駅の混乱と10:30からまた止まるという制限がかかり、
帰宅手段がなくなるので帰宅し、出勤しないことにする。東上線・JR線は不通で通勤不可。

3/15(火) “1時間遅く開始。保育1時間延長”と決定。

出勤可能な職員のみ。西武線の職員は自転車で向かうことに各自判断。東上線・JR線の職員は休み。
年中誕生会…予定通り行う(3月生まれの親、参加)。

保育も予定通り。

3/16(水)以降

(火)は急遽保育時間の変更・延長を決めたが、

(水)～(金)は、保育開始を1時間遅れ、降園時間はいつも通りで、延長しないことにする。

((水)は元々弁当ありで、年長の誕生会、予定通り行う)

(金)は修了式、午前保育。

(土)は卒園式、予定通り。

翌週の新入園児道具私と期末残務も予定通り。月末(土)の小6同窓会も予定通り。

我が園は震災後、(月)は混乱を招かないため休園したが、その後は時間は短縮されたものの、予定された日程は全て行い、平常通り。これは園長・理事の考えで、“こういう時こそ子どものために”園は活動することになった。

保育の中では、子どもと地震や避難についての話をし、“安全な建物であること”“先生の話聞いて逃げる”ことを伝える。外遊びは、放射能の影響も考え、(火)以降は室内遊びのみ。水筒持参を願う(園は外遊びをさせたかったが、マスコミ等の情報に過敏になっていた親に対応した)

但し、登園に際しては、親の判断で欠席もやむを得ない。

職員は、1時間遅く開始という事で、混乱した交通手段しかない状況だが、全員遅刻せず、各自の判断で出勤できていた。但し、帰宅については不安定なため、子供の降園と同じ時間にしてもらおう。通勤手段があるうちに帰宅、放課後の仕事は各自自宅でこなすことに。

当日、親子でいる子どもも、バス待ちの子ども、課外活動の子どもも、職員や担当職員の指示を聞き避難したので、混乱なく安全は確保されていた。

年少・年中は“逃げる”という状況は受け止めていたが、恐怖や危機感までは理解していないようだった。

年長は、“逃げる”という動きの中で、状況が非日常であること、そして予測される不安を感じ、泣いたり不安が隠せない表情が多かった。特に2Fから逃げる際、長い廊下の窓ガラスや壁がゆがむのも見ていたので、状況が把握されていたのだと思う。

幸いにも、全員自宅に帰ることができ、私達も親元に帰せてよかった。

(火)からの保育・・・“本当にこの状況でいいのか？”というのが正直なところ。(月)に混乱した駅、電車が通勤手段でどう対応するのか等、計画停電の状況も含め、不安だらけだった。

でも、(火)に自転車で1時間半～2時間かけて行き、子どもの表情・様子を見ると、“予定通り”の平常保育は子どもにとってとても大切なことだったことを感じられた。

非日常のマスクミ、テレビの状況ばかりの家より、日常の時間を過ごせる幼稚園が子どもにとってとても良い時間となっただろう。

出勤や帰宅手段に振り回されたけれど、保育時間は私たち大人も日常の時間を過ごせ、心の安定につながった。

父兄の反応・・・“ありがたかった”という意見が多かった。中には、放射能、余震への不安から欠席・関西方面への避難の家族もいたが、登園してきた子どもの親からは、「テレビや新聞が全て震災で、不安ばかりの子どもを居させたくなかった。」「皆と会うことで家でストレスをためてイライラするより落ち着いた。」「こんな状況でせめて子どもだけでも日常通りさせてもらい、感謝。」や、卒園式では、「ちゃんと卒園させて下さって有難うございます。」という声がほとんどだった。

《今回の震災で改めて思うこと》

日頃の保育の中で、“人の話を聞く”“職員は適確に指示し、伝え、確認する”“全体の指示の中、自分はどう動くのか、聞き取り、行動する”ということを組み込んでいるので、子どもも職員も混乱せずに冷静だったと思う。この点については、非常時と言わず、当園では日常保育の中で行われている。

4月に入っても、余震のなる中、新しいクラスでも担任の指示を聞く姿があり、慌てて不安になる子どもはいなかった。また、家で不安定になっている子どももいるのだが、幼稚園は皆といるし、先生もいるから地震でもカミナリでも怖くない“と言ってくれている。

施設の安全性についても 元々断層のない所を選び、土地の固いところに建てる、ということは絶対。耐震に関しては、改築の際土台を固め、建物にはより多くの柱も入れたので、防災訓練の際に“建物は安全”と伝えている。(施設の安全性は、事前に万全を考えて建てられている。これは絶対なこと。)

防災訓練は消防署と共に行う。年1回を基本に行う。

その際、職員の中にはマニュアルを確認、人員確認や誘導担当を決める等。実際震災が起き、冷静に誘導できたと思う。

関西の震災後、防災についてのプリントを毎年4月最初の懇談会で配布。自宅や園で地震が起きた時の対応、判断、子どもの引き取りについて、のことがまとめてある(どこの教育施設も行っていると思うが…)。実際、混乱は何もなく、全員帰宅できている。また、登園した3/20までの保育でも支障はなかった。

今後について

特に改めて何かが変わるということはありません。防災訓練の必要性、窓ガラスの耐震チェック、建物の総点検は入る予定とのこと(いずれも確認。改めて…のことではない。これから順次行う予定)。

職員の中でも、通勤手段の一つとして自転車も加わったことは、今回わかったこと(2時間あれば行ける!と知った)。

被災地からの転入について

受け入れ可。現在2名（福島から年長男子1名、宇都宮から年中男子1名）。いずれも父母の実家に避難。教材道具は貸出し。福島の子は少々不安を抱えているが、宇都宮の子は下の子（乳児）のため予備避難。あまり不安なくマイペース。

この機会を頂いて

改めて、園長・理事長先生が“子ども第一主義”を貫いていると感じた。

自宅近隣の園はそのまま春休みに突入していたけれども、我が園は（月）休園以降は平常をあえて通し、卒園式、新乳児への対応をしていたことは、その主義を実行していると思います。

安全面の確保という点で自信がなければとてもできない判断だし、子どもの精神面の安定を考えればこの判断は正しかったと思いますし。自分も子どもも日常に戻る園内の時間は、日常ではない非日常なことだったけれど、非日常が日常にも値する物でした。

行事における対応（台風・雪等の自然現象の対応を含めて）

全ての判断が“子どものため”に“何がされるべきか？”に至っている。しかしそう判断することができるのは、保育の中で私達が常に子ども達と当たり前にやっている“人の話を聞く”“先生の話はわかり易く、端的に明確に”“全体の指示で自分はどう動くか、考えるかを判断する”ということや、さらには“職員の思いと子供の思いがしっかり繋がっていること”“その思いを同じ気持ちで応援してくれる父兄がいること”“職員、子ども、父兄の人間関係と、保育への理解”があるからこそだと、改めて思いました。

「〇〇幼稚園 緊急時における対応について」（資料抜粋）

園では、地震・火災・台風等の災害や事件発生等の緊急時における対応を下記のようにし、園児の安全確保に努めることにしております。

【保育時間中に発生した場合】

1. 安全な場所（園庭等）に誘導・避難・待機する。
2. 以後の対応
 - ①一過性の災害や事件等の場合は、通常の保育を続ける。
 - ②帰宅させた方が安全と考えられる場合は、
 - “緊急連絡網”で連絡、保護者に引き取りをお願いする。
 - 保護者（代理人）が来園した園児のみ、保護者（代理人）であることを確認の上、引き渡す。
 - その他の園児は引き取りまで、園で待機・保護する。

【登降園中に発生した場合】

1. 安全な場所に一時避難する。
2. 保護者の判断で、登園するか帰宅するか、避難できる場所に行く。
3. 以後の対応
 - ①登園した園児についての対応は“保育時間中”に準ずる。
 - ②他の園児については“緊急連絡網”で安全の確認をする。

【在宅時に発生した場合】

1. 家庭で待機する。
2. 以後の対応
 - ① “緊急連絡網”で連絡・確認する。
 - ②職員が出勤できず、園が対応できないこともある。

(報告者の希望により匿名)

事例 (福岡 保育所)

1. 災害時、災害後の保育の経過と課題

・地域全体の保育状況と課題

現在、北九州市における災害時要援護者支援概要は作成されているが、保育所における支援概要は作成されていない。

・地域保護者からの要望等

台風や地震などの災害はいつ起こるかわからない。いざという時のために防災訓練への参加や避難経路の確認など保護者にも徹底してほしい。

2. 日頃の防災教育・保育訓練の有効性、また、非常時に現れる日常的保育の重要性など・災害にあった人々を心にとめ毎日お祈りする。

・保育園での実施例

避難訓練2011年度		
	災害想定	避難のねらい
4月	園付近から出火	クラス別、避難場所の確認と避難方法、消火
5月	給食室から出火	基本的避難行動の徹底、消火
6月	風水害	帰宅方法・避難方法・保護者連絡・消火
7月	風水害	帰宅方法・避難方法・保護者連絡・消火
8月	園以外の火災（午睡時）	屋内外時における避難誘導、消火
9月	地震	地震時の基本的避難行動の徹底、消火
10月	給食室から出火	午睡時の避難誘導の指示方法、消火
11月	保育室から出火	重要書類搬出と避難指導、消火
12月	給食室から出火	連絡・消火・避難
1月	遊戯室から出火	広い範囲に子どもが遊んでいる避難指導、消火
2月	近辺の火災	避難場所と経路の変更、消火
3月	総合訓練	連絡・消火・避難

3. 北九州市では現在実施されていない

5. 提言

保育園では日本小児科医会発行の「子どもの心」を資料として勉強会をしている。

まず職員が理解し、保護者にも広げていきたい。

保育行政が組織的に機能するとよい（多くの募金依頼が多方面よりあるので）。

（西南女学院大学短期大学部 松隈玲子）

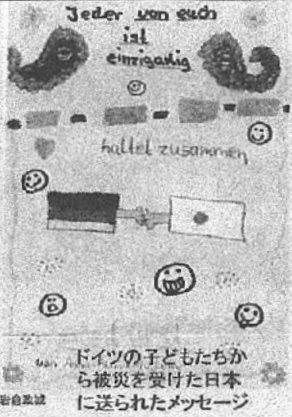
宮城県名取市にある尚綱学院大学附属幼稚園からの大震災報告

緊急報告
2011/4/28現在

**地震・津波・放射能に
翻弄された幼稚園・保育所**

失ったものと学んだもの

岩倉政城 (在仙台)
尚綱学院大学総合人間科学部
子ども学科
同附属幼稚園 (在名取市)



Jeder von euch
ial
einzigartig
hallel zusammen

ドイツの子どもたちから被災を受けた日本に送られたメッセージ

尚綱学院大学 岩倉政城

地震当日の尚綱学院大学附属幼稚園の状況

在園児90名・職員10名人的被害なし

物的被害

- ・棚等の倒壊一切無し。ファイル等が滑り出て散乱
- ・トイレタイルの割れ3カ所・園駐車場アスファルト舗装のひび割れ
- ・園舎外壁コーキングにひび割れ

反省と教訓

電気が切れラジオが視聴できないため情報が限定(カーラジオ)
津波6mと聞き三陸地方が対象であろうと注意が向かない
海岸から14Km高台で津波と園児の安全が結びついていなかった
園前バスターミナル到着運転手から情報を得て信号が止まっているが、今なら渋滞もない、との情報から2便目のバス3台を出発させる結果:バスは通常より30分遅れ・津波エリアだったら危険であった。
あずかり保育16名は午後5時には全員迎えあり、引き渡し完了

尚綱学院大学 岩倉政城

ピアノ・調度等の転倒は無し(全て固定済み)



園舎外壁
園舎外壁の拡大
コーキング舗装の
ひび割れ

園舎の安全が確保できたら、ライフライン回復次第、始園のために全力を尽くすことが幼稚園の最も大切な地域への「震災支援活動」

尚綱学院大学 岩倉政城

被災B幼稚園長からのお電話
「休園します。園児を引き受けてあげて」



被災B園(海岸1.5Km)見舞いの道すがら乗り上げた舟、異臭と土埃。被災園の近くにあった避難所に指定されていた3階建ての中学校で1階は浸水し、引かない水で孤立した避難者は屋上からヘリで救出されたという。その付近の瓦礫の山で捜索活動をする自衛隊員

尚綱学院大学 岩倉政城



仙台市隣接市の海岸から2Km、川沿いの津波被災C保育園。宮城県内保育園85/229が被災、休所27カ所、連絡不能3カ所(県調べから推計)

尚綱学院大学 岩倉政城



建物の外観は止めていたが内部は津波の泥水で一瞬にして保育環境が破壊されていた

尚綱学院大学 岩倉政城



仙台隣接市の海岸から2Km、津波被災B幼稚園園児被災宮城県内幼稚園109/182カ所に被害、34カ所復旧未定、13カ所再開目途なし。園児57名死亡・不明4名、職員2名死亡

高崎学院大学 社会福祉



津波の襲来で止まった時計

高崎学院大学 社会福祉

B園舎に漂着した自動車



残骸に残ったB園品々

泥を被り傾いたアップライトピアノ(奥)とぬいぐるみ(手前)

高崎学院大学 社会福祉



津波の直撃でB園のホールに開いた穴

高崎学院大学 社会福祉

瓦礫に埋まるメッセージポール



海岸に近いA保育所では全園児が被災を免れた

津波被災後のA保育所航空写真。土台を残し全壊

命を分けた要因
市指定避難所を保育職員で1年前に下見し、園児の安全が守れないと判断。速いがより安全な1.5Kmの小学校に変更。地震後即座に職員自家用車で園児を分乗させ避難する計画を作り、その通り実行。

高崎学院大学 社会福祉

得られた教訓

- 地震: 1.日頃から練習していれば園児は冷静沈着
2.倒壊音は恐怖を誘うが棚・ピアノ等の固定が安心を生む
3.緊急時の連絡は電話やネットでは不十分
対策: 一斉メール送信・放送局にメッセージまたはテロップ依頼
4.非常食・水・毛布・電池の備蓄が安心を生む(龍城を覚悟)
- 早期に園の再開を図る 被災家族・園児は園に来れば元気になる
津波: 1.沿岸部、河口地域は園での保護者引き渡し方式は厳禁
対策: まず山に向かって逃げる 6人乗り乳母車が有効
バス・車は地震直後以外は使わない(逃げ遅れ・渋滞)
2.地震が来たらすぐ電池式ラジオを点け津波情報を確認
3.今回の津波到達域を前提に保育者の目で避難場所を決める
対策: 今回の津波域には園舎を建てない配慮が必要
- 放射能汚染: 1.徹底した汚染モニタリングとその公開を行政に要求する
2.避難・転居による空洞化で園児が消え園の存立が脅威に
3.大量の保育士・幼稚園教諭の解雇・内定取り消し
対策: 保育全国ネットで雇用支援、園児転入支援・園の統廃合阻止を

高崎学院大学 社会福祉

④事例の概要

表1 岩手県・宮城県内施設の事例の概要(その1:岩手県)

事例	種別	①本震までの状況	②本震時の状況、被害	③本震後の対応と、子どもの様子	④避難状況と、子どもの様子	⑤保護者との連絡、お迎えの状況等	⑥復旧までの状況
1	幼稚園	(特になし)	建物は無事	(特になし)	(特になし)	(特になし)	仮設トイレの使用が続いている。幼児向けでもなく、生活スペースから離れた場所に設置されているので、保育者が必ず付き添わなくてはならない状況が続いた。現在はやむを得ず、小用に限ってバケツで水を流すようにして園内のトイレを使用させるようにしている
2	幼稚園	園児の降園後	園舎がさしきみ、左右に揺れ動く様子をながめながら、園庭中央にしゃがみ込む。「大津波警報発令」の放送に戸惑うが、市内の状況が全くわからず不安だった	園児は全員降園しており皆の無事を祈るだけだった	職員のみ避難。保育中であつたらと考えると、避難訓練の大切さ、職員一人一人の危機意識と共に、瞬時に対応する判断力が大切なのではないかと思った	(特になし)	安全確認できるまで園舎内への侵入禁止、休園のお知らせと園児名簿の貼り出し(避難所・園舎)園舎の片付け・避難所の手伝い・園児の安否確認(家庭訪問・保護者等からの情報)避難所に園内にある必要物資を運び出す(マット・布団類・電池・懐中電灯・ラジオカセット・筆記用具等)専門機関の検査を受け園舎の安全を確認後、修了式・卒園式を同日に行う被災職員4名を失った幼稚園の園児の安否確認・園舎からの備品や用品等の捜索等電話が通じる幼稚園が窓口となり、A幼稚園・関係機関・他園の職員との連絡を取り合う保育所がなくなり、避難所にいる子の一時保育の実施 電話もつながらない中で広範囲に避難している園児の居所を探すのに時間を要した 電話、ガスの復旧がまだだが、1日でも早い保育再開が子ども達にとっては大事ではないかと思った
3	幼稚園	県内陸部。沿岸部に比べれば大きな被害とは言えない	2日間の停電、断水、ガソリン不足程度	(特になし)	(特になし)	(特になし)	本震では終了式を、大きな余震では入園式を、それぞれ一週間遅らせ、4月いっぱい午前保育とした措置が主なところ
4	保育所	海岸から1.6km、平坦な地形園児約130名、職員約14名が園舎内に午睡中	雪の降る悪天候であり、電気、水道、電話などのライフラインが地震発生と同時に止まった	落ち着いて布団を頭から被りじっとしていた。常に保育士の言葉がけどおりに行動し、強い地震が少し収まると園庭の第1避難所に集合した	迎えに来た家族に園児98名を、園庭で引き渡した。職員が津波の土煙を発生し、残った34名の園児と職員で高台に走って逃げた。出席簿を持ち出せたのは、9クラス中4クラスのみ。所長は園舎内の残留児の有無を確認し、最後に避難。津波が迫ったが、近所の方の励ましと援助で何とか逃れることができた。園舎は津波により壊滅し、瓦礫の山に変わった。保育者と共に避難した34名の園児は無事だったが、引き渡した98名の園児の内10名が家族とともに津波に吞まれ、命を失った	避難した34名中、20名がその日の内にお迎えがなく、近くの老人施設で一夜を明かした。避難先を保護者に発信したかったが、固定電話も携帯電話も繋がらず情報を発信できなかったため、さらに引渡しが遅れた。	(特になし)
5	保育所	事例1の保育所の西2.2km、海岸から約1.2キロの少し高い場所にある園児約115名、職員約14名が園舎内に	津波は隣の小学校で止まり、建物の被災はかろうじて免れた 情報ラインが絶たれ、上からの指示を受けることも、こちらの情報を発信することもできなくなった	(特になし)	園庭に避難中、次々に園児のお迎えが来た。しかし「津波が来るぞ〜!」の叫び声により、残った園児30名と園舎よりさらに高い場所に避難。避難の途中にもお迎えがあり、道路脇で名簿チェックをしながら保護者に引き渡した。保育者とともに避難した園児は全員無事であったが、避難前に引き渡した園児1名が家族とともに津波に流され亡くなっている	避難した園児のうち2名がその日のうちに保護者がお迎えに来ることができず、そこである保護者の家の別棟を借りて、職員8名とともに一夜を過ごした。避難場所を保護者に伝えたくても方法がない。「私たちは元気に生きているよ。」という情報をこちらから発することができなかった	(特になし)
6	保育所	自然豊かな町。水田に囲まれた見晴らしの良い広い敷地 年長児は保育室で卒園記念の製作活動。年中児以下は、午睡中	ミシミシと大きな音で建物全体が揺れ、地震対策をしていたはずの暖飯器が落下し、天井の換気扇が外れる。その大きな揺れの途中で停電。物が散乱し、壁や天井などに亀裂あり。PCなどの備品落下、据え置きのパネルヒーターの固定がゆるんでいるなど 園庭の端の一部と隣接する農道が陥没した	保育者の指示により年長児と保育者は一時テーブルの下へ。年中児以下は、保育室の中心へ子どもを集め保育者が囲み、子どもらの頭の上に布団をかぶせた	揺れが落ち着いたのを確認後、園庭へ全員避難。人員確認。寒さが厳しく、雪が降ってきたので、送迎バスと職員の自家用車に園児を乗せて待機。 多くの余震に子どもらは怯え、0~1歳児は都度泣きだす子どももいた。午後のおやつ(パン・牛乳)を食べたり、絵本を見たりして迎えを待つ。保育者は出来るだけ子どもらが心落ち着いて過ごせるように、配慮して子どもの側について一緒に過ごす。迎えが遅くなった子どもへは、軽食を準備した	管理者携帯電話から保護者へ緊急メールを送信する。子どもが全員無事であることと、事故の安全を確認しつつ迎えに来て頂きたい旨伝えた。緊急メールが送れない保護者数名へは、職員携帯電話により連絡を試みるが、つながらない。最終的にショートメールの送信などにより全保護者へ連絡が取れた 無事に全園児が降園したのは、午後8時半ごろ	停電・断水・電話不通が続く。プロパンガスは使用可能。道路など陥没箇所多数。被害が大きい住民は避難所生活。食料品や生活用品、ガソリンの購入が難しい状態。ライフラインが復旧せず15日まで休園。16日から相談業務。16日に電気、17日水道が復旧。18日から昼食と飲み水持参で保育を再開した。22日からは白飯と飲み水持参。地元商店街の個人商店が「保育園の子どもたちの分」と特別の配慮してくれたお陰で、給食提供もできた。職員は車を乗り合わせるなど協力して勤務を続けた。30kmほど離れた自宅から自転車まで駆付けける職員もいた。4月7日の大きな余震でも、建物被害が大きくありライフラインの復旧と安全点検のため2日間休園。

表1 岩手県・宮城県内施設の事例の概要(その1:岩手県)

事例	⑦現在の状況	⑧これまでの対応を振り返って	⑨要望、今後の課題等
1	津波で園舎が流された他の公立幼稚園と同様。園内1室には特別支援を要する子どもたちの教室が設置されている。3機関が同居のため、来園者、関係者、ボランティア等、人の出入りが大変多く、対応に追われ本来もっと子どもにじっくり関わりたいのだが、十分にできない歯がゆさを感じている子どもたちは最近になってようやく、地震ごっこ、津波ごっこなどができるようになってきたが、不安定な子どもは多い今年度で閉園予定。存続させるべきであるとの声も少なくない。職員は、閉園までの保育や自身の生活など整理して考えることは困難な現実と直面しているが、日々の保育、日々の生活だけで精一杯という状態	(特になし)	(特になし)
2	A幼稚園の園児は、各避難所から希望する幼稚園に入園することになる。保育料や入園料の免除等の配慮がなされる。また、支援物資が届き、保護者は感謝していた。余震の影響で戸外での遊びを自粛していた子ども達だが、本年は4月13日から新学期を開始した。楽しそうに友達と遊ぶ姿にほっとするも、様々な体験をした子、被災した子、家族構成の変化等で、内心は大きく揺れているような子も見られた 余震に怯えて教師にすがり、防災無線の音に怯える子くいつもよりハイテンションで落ち着かなくなった子、おばあちゃんの家で津波から山越えて避難を経験した子、時々くじけたり動かない子など。普通に遊んでいたかと思うと時々様々な表情を見ている職員も震災後の疲労、業務の多様化で心身ともに落ち込み、精神的に参ってきたが、臨床心理士、ユニセフのカウンセリング等で現在は少しずつ落ち着いてきている。保育者に対する心のケアも大切だと思う	被災した家族が集まり、家族構成が増え、子育て・嫁姑関係等に不安を抱え、泣いて教師に訴えていた母親に、臨床心理士の定期的な相談が可能となり親子とも落ち着きを見せている。専門家が近くにいることの心強さを実感している あつてはならない大きな災害を体験し、教師として・人間として今、自分たちがやらなければならないことは何か?できることは何か?判断し、行動することで、いろいろなことを学んだ。信頼できる仲間とのつながり、本当の優しさも知ることができた	様々な団体から支援物資をいただいているが、家や仕事を失った保護者に保育料や諸会費の心配をしないで通園させられる支援がほしいと思った避難所で子ども達が騒いだりすると周りからいろいろ言われ、嫌な思いをした人たちがもいたと聞く。避難所には子ども達が遊べる場所をつくるべき
3	(特になし)	一つは、明確な判断を素早くすること。二つは、いつも通りの幼稚園を保護者に発信し続けること 通信手段が不通になる中、weblogが効果があった。確実に連絡をとるために職員を2度家庭訪問に向かわせ、その他はブログに記事をupした。1日1,000件を超えるアクセスを頂き、保護者が数回閲覧して下さっているのが分かった。後も「励まされた」「子どもと一緒に見ていました」などの感想が寄せられた。緊急時だからこそ、普段通りの感覚を取り戻すことの大切さを強く感じた	(特になし)
4	現状では、子どもたちは表面上落ち着いているように見える。しかし園舎を失い、やむなくこの仮園舎で保育を受けている子どもたちにとって、その心の中には「ここは自分たちの園ではない。」という思いがあり、いつもの元気がないと感じる。また、死亡した男子年長児への思いが強く、「〇〇ちゃん(死亡児童の名前)のようにはなれない。」と泣きながら不安を口にする年長男児がいる 家族を失った職員は4名。今も避難所から通勤してくる職員もいる。このような中、多くの職員は、仕事に没頭することで悲しみから逃れようとしている。名古屋市の児童相談所やユニセフから職員が派遣され、定期的に子どもや職員へのケアが行われている	毎月避難訓練を行ってきたが、想定は地震・火災で津波に対する避難訓練を行ってこなかった。今までの訓練が役立たなかった。今後避難訓練を実施するにあたって、災害の程度や状況などの想定を変え、避難方法のバリエーションを数多く用意しておく必要があると感じた 今まで「豊かでやさしい心を持った子どもを育てる」という保育を行ってきた。しかしこれからは、この悲惨な状況を生き抜くための「強い心を持った子どもを育てる」ことがテーマとなった。「子どもたちの生命の保持と安全を守る保育を大切に保育」を実践し、後輩にも引き継いでいきたい。10名の園児を亡くした私たちだからこそ命の大切さを訴え、保育に活かさなければと思う	津波に対する訓練は急務だが、正しい避難手順や方法が分からない。特に0～1歳児の避難は保育士がまごと子どもたちの死に直結するため、津波に対する避難の基本マニュアルが欲しい 非常時でも正確な情報を保護者に発信できるシステムがあれば是非教えて欲しい 保育士定数の問題。職場の遠い保護者の災害直後の迎えは期待できず、園児の避難を少人数の保育士で実行することになる可能性が高い
5	園児に対する物質的援助は充実してきている。多方面の多数の方々からたくさんのお助けをいただき、本当にありがた思っている 今後は保育園を運営していくにあたっての備品や消耗品(仕事着、事務用品など)が必要 園児の中には親や家族を亡くした子が多い。職員も同じで、家族や親族に犠牲者がいたり、家をなくしたりしている方が多い。市やユニセフ、名古屋の児童相談所などから、研修や心理相談などの援助を受けている。我々も災害を受けた職員に対して、皆で仕事を分担し、負担を軽くする努力をしている。	市内の保育所では、保育中に犠牲者を出すことはなかった。しかし13名が保護者に引き渡した後、命を落としている。強い余震が続く中、今回と同規模の津波が来ることも予想されている。その時私たちがどのように対処したらよいか問題を抱えている 情報の伝達の大切さを知った 津波に対する避難訓練を行ってこなかった。基本マニュアルが早急に必要である 子どもたちには、地震が起こったらまず高台に避難することをしっかり伝えていきたい。今度の震災では、家族がお互いを探し合ったために命を落とす事例が多かった。自分の命は自分で守ることの大切さも伝えたい 法人立の職員であっても、避難所などでは准公務員のように見られる。公共に奉仕する役割も受け持たなければならない。役割を果たすためには強い精神力が必要	どんな条件のもとでも安定した情報のやりとりが可能なシステムが早急に欲しい 保育園によってそれぞれ必要な物が違うので、きめ細かい情報のやり取りが大切になると思う。特に職員に対しては仕事着や運動靴などが不足しているため、職員に対する物心両面の支援があると職員も元気が出るのではないかと
6	子どもたちは、ドアや窓の揺れる音や揺れにとても敏感になった。職員が急いで立ち上がる姿だけでも泣きだす子どももいた。保護者へ資料を配布したり、保護者集会で話をしたりして心のケアについての働きかけをした。保育も子どもが安心して過ごせるよう配慮。顔戻やチェック、どまりなども見られたが、今は落ち着いている。ごっこ遊びで地震再現する子どもがいたが、最近では見られなくなった。	毎月の避難訓練と安全指導の成果で、全園児混乱もケガもなく無事に避難し、園児の人員確認も迅速に行うことが出来た。災害時の緊急メールのシステムを導入していたため、すぐに園児の無事と迎える連絡を保護者に行うことが出来た。2年前の地震で、地震対策をしていたので、落下物が少なかった。給食の備蓄食の管理もあり活用出来た。災害時のマニュアルを作成していたが、これほどの大きな地震災害を想定していなかったことと職員への周知が不足していた。今回の大地震での園の取り組みの改善点などを踏まえ、職員全員で内容を検討し共通理解を持って対応できるようにする。	戸外遊びの安全点検の一つに、放射能物質の検査を加えたい。毎日、朝・昼・夕で検査すべきでないか まず沿岸部の復興支援、そして内陸部の各園の修繕も国と県から助成を出して頂きたい(園の被害修繕の概算は200万円以上) 行政窓口の固定電話が不通にならないようにして欲しい。加えて、緊急時の対応・連絡は公立も法人立も統一してほしい 全域共通の「災害時対応ガイドライン」を作成し、緊急時の判断・細やかな対応についても共通理解を持つよう促すと最悪の事態を防げるのではないかと

表1 岩手県・宮城県内施設の事例の概要(その2:宮城県)

事例	種別	①本震までの状況	②本震時の状況、被害	③本震後の対応と、子どもの様子	④避難状況と、子どもの様子	⑤保護者との連絡、お迎えの状況等
7	幼稚園	丘陵地にある送迎バスの発車後、および第2コースバスの出発直前。バス乗車中の子、クラスから出た子、迎えの保護者が来ていたり、子どもたちは散っていた。	津波の被害はなかった建物できしんだ音か、ガタガタという音が大きく、声が聴きとれなかった(周辺では)地割れや古い建物の損傷があった	園庭の子どもと保護者とを建物から離れて園庭中央に集まるように指示しながら、園舎の見回りをする	雪が降ってきたため、バスの中に避難させたり、テントを張ったり、夕食の準備をした。ガス・水道・電気は止まったので、貯水タンクの水を汲み出したり、バスとは緊急用の無線で連絡を取った。自家用車を園庭に入れ、電源を取ったりライトをつけた 自園給食をしていたので食糧の備蓄があり、各部屋に薪ストーブがあり暖は取れた。灯油も備蓄があった	災害伝言ダイヤルは全く繋がらなかった。緊急連絡網も機能しなかった。保護者同士のメールのみ使用できた。無事であることは保護者にチェーンメールのように回してもらうように依頼した 当日は迎えに来ることが出来ず、翌日朝に来た保護者もいた 外部との連絡は取れなかった。園で自立してできるよう準備が必要
8	幼稚園	丘陵地にある送迎バス(帰りの2番バス)を待って園児たちは遊んでいた園児の半数以上が在園していた	津波の被害はなく、園児全員が無事 地響き 電気も消えた2分半は、まるで私達の度量をこれでもかこれでもかと試しているかのよう	「あ、これが来る来ると言っていた宮城沖地震」落ち着いて机の下にもぐった。「ながいねー」「もうおわるかな」「先生が守ってあげるから心配ないよ」「うん、先生と一緒によかった」「なにも倒れないね」狭いスペースで固まり、手を繋ぎ合っていた	揺れが収まったところで園の駐車場に避難し、食料と水を配布、毛布をかぶり、園バスで暖を取って保護者の迎えを日暮れまで待った	電気、ガス、水道、電話も止まり、連絡網は機能せず、あらかじめ決めてあった保護者の迎えを待つしかありませんでした 血相を変えて迎えに来る保護者を見ると、誰一人泣かずにいた子どもが泣いて抱きつき、職員も張り詰めた感情が破れて涙が止まらなかった 最後の引き取りは夕闇迫る頃
9	保育所	住宅街にあり近隣には川や公園 0~2才児は1階の各部屋で、3~5才は2階ホールにて午睡中。子どもはほとんど眠っていた	天井の照明が落下。子どもには当たらなかった	0~2才児クラスでは、不安な様子は見られなかった。子どもを集めて布団を子どもにかぶせたり、テーブルの下に隠れた。嫌がる子どもは見られなかった。3才~5才児クラスでは全体に落ち着いていたが、3才児2名が不安で泣いた。布団をかぶせるように指示をした。3才の自閉症児が布団をかぶるのを嫌がるが、無理にかぶせてみんなの場所に連れて行った パジャマを着替え、避難公園へ誘導するように指示	避難訓練や防災ずきんに慣れさせるなどをしていたので、子ども達の避難はスムーズだった (その後の状況) 3才児以上は保育士の側にいる、保育士から離れないなどの行動が見られた。避難ごっこ遊びをして楽しんでいた	(特になし)
10	施設	沿岸部にあるサービス施設 子ども(5名)は下校後、おやつ準備中だった	利用する子どもたちや家族、保育者の人的被害、施設の被害は比較的少なかった 地域では甚大な津波被害があり、当日から2晩を車中に避難して過ごすこととなった	机の下に避難させた。揺れは長く続いた。落ち着いてきたところで外に出た。テラスで待機したが雪が降ってきて寒く、毛布やジャンパーなど重ね着させた	施設内は物が散乱し危険だったので、送迎用ワゴン車に職員と児童が避難。児童2名は比較的落ち着いていた。当日夜は避難所で配布していた飲料水やおにぎり、園にあった菓子類でしのいだ。ガソリンは十分あったので、車内で暖房もかけ、ラジオも聞くことができた。避難所への避難は(自閉症の児童)無理と判断 2日目は職員が交代で自宅に戻る。その晩も車中で避難。夜には児童が「帰りましょう」「おうち行こうよ」などと言ったが、なだめながらパニックにもならず過ごすことができた	保護者との電話連絡等不能。職員の家族や自宅とも連絡は取れなかった 沿岸部以外の保護者3名が30分以内に駆けつけ児童を連れ自宅へ。沿岸部の保護者2名は到着しないまま地元FMラジオで無事の旨放送してもらった(後日、保護者から放送を聞いて安心したとのこと)。3日目には2名の保護者も到着し、親戚宅や避難所に避難した 交通手段も途絶えたが、FMラジオ局への安否の連絡や放送、支所庁舎との連絡などすべて徒歩で行い、施設が孤立することを防いだ

表1 岩手県・宮城県内施設の事例の概要(その2:宮城県)

事例	⑥復旧までの状況	⑦保護者の要望、対応	⑧現在の状況	⑨これまでの対応を振り返って	⑩要望、今後の課題
7	6日間、園を避難所として保護者に開放、食事を提供するなどした 保育の復旧のため、業者に来てもらうなどした 臨床心理士を招いて、子どもの予想される行動や対応など、心のケアについての職員研修を行った 保護者向け講演会も企画、園と家庭双方で子どもの心のケアにあたった 震災後の建物の復旧だけで200万以上かかった	被災により保育料が払えない、転園の希望、放射能についての質問や対応策等など問い合わせ 保護者の反応のなかには過剰反応なものや、外に出さないでくれ、水筒を持たせてくれ、花の蜜を吸わせるな、放射能の測定器を買わないのかなど、半ばクレーム的な要望もあった 園医と協力したり、放射能値のリサーチを進めたり、連絡網の新たな構築や対策の見直しなどにも取り組んでいる	毎日2か所の放射線量を測定。県庁・園医・業者とも連携してできる限りの情報を集めた 園独自の判断でなく、外部機関の見解と合わせて園の対応を決めるようにしている	常に園児の名簿を携帯するようしていたので、人数が容易に把握できた。名簿と携帯は常に持っておくべき 司令塔になる人が必要。その場で大声を出して保育者や保護者に指示することで、普段の訓練通りには行かない状況でも適切に動くことができた 訓練の重要性は非常に感じたが、訓練通りにはいかなかった 声を掛け合い、自分で判断する姿勢が大切。指示待ちだったらスムーズな避難はできなかった 車から電源を取れるよう、AC/DCアダプターや、避難器具や毛布なども車載しておくとうい	防災のための補助金(発電機・食料・水・倉庫など)があると助かる。6日間の避難所生活で園の出費や備蓄の消費があったので、再備蓄にコストが掛かったため 園にもスクールカウンセラーのような制度が欲しい
8	終園日までの4日間休園、修了式も延期 園舎は無傷	(特になし)	(特になし)	地震対策として本棚からピアノにまで転倒防止装置を付け、山の斜面に泥を吹き付け芝を植えて崩落防止に取り組んできた 園舎の安全第一の備えが全員無事の成果を生んだと確信	人災である放射能汚染には対策の立てようがない。負の遺産を残さない賢明さを大人である私達が持たねばならないと痛感した
9	(特になし)	給食を出して欲しい。 職種に関係なく保育を受けさせて欲しい(職種が医師、看護師、保健師の仕事に従事している子どもを受け入れた)	余震が続いているので、0~3才児の外遊びは園庭のみにし、4才、5才児は保育園の近くの公園を遊び場として保育を行っている 子どもの人数の把握を保育園に入る前に確認するようにした	公園や他の場所での保育士の判断が必要であるため、色々な場所の避難の確認を行った 日々の保育で、話を聞ける子どもに育てることを心がけていたので、避難時に生かされた 直接火を炊いて(ガス器具ではなく)、料理をすることができることを教える 施設について:①2階以上の施設にはすべり台が不可欠、②0~2才児は1階に配置すると避難がスムーズ、③天井より壁付の照明の方がよいのではないか、④給食のためのガスポンプの確保、⑤棚の固定、金魚などの水槽の固定が不可欠 保育について:①移動の度に子どもの人数確認、②子どもの心理、発達段階を把握して子どもに適切な関わりを行える保育士の養成が必要	(特になし)
10	障がい者対象の避難施設として使用 5月に新年度の園児、児童の受け入れ一部開始	(特になし)	(特になし)	(特になし)	指定管理が移行する時期と重なり、子どもや保護者に大きな不安を与えた。今後確実な引き継ぎが望まれる

表2 福島県内保育所・幼稚園の事例の概要

事例	種別	地域	①本震までの状況	②本震時の状況、被害	③本震直後～余震時の状況	④本震～余震時の子どもへの対応
1	幼稚園	県中	(特に記述なし)	園舎の外壁に亀裂、角のブロック部分が落下 周辺地域ではブロック塀損壊、瓦屋根が落ちた、道路も亀裂	(特に記述なし)	「大丈夫だよ」の声かけと同時に一人ひとりに手で触れる。 次々と余震、吹雪。園児は「寒い」と声を出した。
2	幼稚園	県中	保育中(預かり5名)、学童クラブ30名 他の園児はバス送迎中	園舎には被害がなかった バスも大きく揺れた。地割れ、瓦が落下、スーパーのガラスも割れた	(特に記述なし)	(園にて)子どもたちを机の下に待避させた。戸や窓を開け 園庭に出られるようにした。園庭の真真中に避難しそこにま とまって座らせた。 (バス)空き地に停め、揺れが収まるのを待った。その後子 どもたちを送り届けた
3	幼稚園	県中	保育終了後のバス送迎及び 延長保育中	(送迎バス)園児10名。緊急地震 速報の直後、大きな揺れ (園内)大きな破損等はなかった。 紙芝居棚や食器棚、職員室の仕 切りなどが割れた。	(送迎バス)大きな横揺れ、ガラス 越しに見える電柱の揺れ	(送迎バス)「みんなしっかり手すりにつかまって!」。 (延長保育)部屋の中で職員と一緒に待機。余震の際には すぐにテーブルの下にもぐれるように職員がそばにいた。ほ とんど顔を外に出すことなく、床に伏せたような格好で、 テーブルの下に常に体を半分隠していた
4	保育所	県中	午睡終了時 まだ眠っている子もいた	玄関に飾ってある植木鉢などが落 ちた 携帯の警報が鳴った 時計が落ちた ピアノの位置がずれた テレビと観音開きの戸は職員が押 さえた	吹雪になり、外には避難できそうに なかった 揺れがなかなか収まらず動けな かった 電信柱も激しく揺れ「外に出たら危 険だ」と思った	部屋の中心に集めて、ふとん・タオルケットを上からかぶせ た 所長が「大丈夫だよ」「がんばれ、もうちょっと」と声がけ 職員は普段よく聞かせるうた(ことりはとつても歌が好き...)を 歌った 2歳児は全員おむつにした。子どもから目を離したくなかつ た 上着を着せて、すぐに外に出せるようにしていた
5	保育所 ※事例3 と同一園	県中	県内文化施設からの帰りの 電車に乗車中(年長児)	駅と駅の間(鉄橋付近)で停車	電車に同乗していたJICA研修者 (看護師、保育士など)に助けられ た ワンセグ携帯から情報を得た 園長が避難先を探しに走った 電話は不通、園へ連絡手段がな かった 子どもたちは約2時間、電車の中 にいた	子どもたちを連れ、他の乗客と一緒に2キロ先の避難先に 向かった 鉄橋を渡る時、子どもが下を向いて泣き出し始めたので、 みんなで歌を歌いながら歩いた
6	保育所 ※事例2 と同一園	県中	午睡中(年中・年少児)	建物の壁紙が破れたり、保育室 の時計が割れた 職員室の棚は倒れたり、機材ラッ クがずれた	突然、吹雪になった	近所の避難所に避難 子どもたちを起こして、着替えずパジャマのまま避難 職員は園に上着や毛布を取りに戻ったり、ブルーシートで子 どもたちを囲って寒さを防いだりした
7	保育所	県中	午睡終了時 目覚めてトイレに行く前で、職 員の休憩も終わっていたので、 全員が保育室にいた	掛時計が落ち、ピアノや冷蔵庫が ずれた	突然、吹雪になった 揺れがひどく部屋に移動するのも 難しかった	子どもたちに毛布を掛け様子を見ていた
8	保育所	県中	午睡終了時 1～2歳児は1階の部屋、3～ 4歳児は2階で寝ていた	建物の土台が損壊。地盤沈下 水道管も破損し、断水 時計が落ちた 職員室の戸棚のガラスが割れた	揺れが長く、2階の子どもを下にお ろすタイミングが難しかった	5歳児は起きて勉強をしていたので、机の下にもぐらせた 揺れが収まった後1階に下ろし、身支度させて机の下にもぐ らせ、お迎えを待った 0歳児は毛布をかけて守った。落下物に気を付けながら様 子を見た
9	保育所	県中	午睡終了時 0歳・1歳はそれぞれの部屋、 残り4クラスはおゆうぎ室で大 人数で寝ていた	おゆうぎ室の照明が激しく揺れた 天井のエアコン外れがららして いた 職員室の棚の中身が落ちた 給食室の保管庫がずれた	舞台の上にも上がれないと思っ た。逃げ場がない感じ	上から落っこちて来たら大変だと思って、頭から毛布やら布 団をかけたから、中でむれて暑かったと思う
10	保育所	県中	午睡中 おゆうぎ室と、乳児室で分か れて寝ていた	天井の扇風機が落ちそうになった	停電にはならなかった 断水になった 近くの消防署の人も様子を見に来 てくれた 保護者も2人ほど迎えに来た	揺れた直後、毛布をかぶせて様子を見た 外に出るため、洋服を着せた 先に小さい子をおぶったりして外に出した。外は寒かったの で、子どもたちに毛布をかぶせ、下にもシートや毛布を敷い て様子を見た ストーブは危ないから止めて、窓を開けてから外に逃げた 「先生たちが守ってあげるから」と、職員が子どもたちを囲む ようにした

表2 福島県内保育所・幼稚園の事例の概要

事例	⑤本震～余震時の子どもの様子	⑥当日のお迎えまでの状況と子どもの様子	⑦保護者との連絡、お迎え時の様子	⑧当日および休園中の園と職員の状況、対応
1	3歳児は瞬きもせず、じっと大人の目を見ていた 4、5歳児は「怖い」と友だち同士で泣く、その様子を見て泣きたい園児が集まる。「ママ」の声も。	スクールバス2台に50人の園児と11名の教職員が避難。バスを暖め、保護者が迎えに来るのを待つ 園児にはおやつを配り食べていると迎えが来ることを話す。	親が迎えに来て会社は大変な被害で帰ることになった	12日は自宅片付け、13日は幼稚園の片付け、午後は園児の家庭訪問 ガソリンが入らない、バスも教職員の通勤も無理、保護者も車が動かない 15日に緊急網で保護者へ連絡。在園児は春休みに入る。 園舎の修復は3月28日までかかる
2	泣き出す子どももいた。「大丈夫だよ」と声を掛け合った	(特に記述なし)	保護者全員に早くお迎えに来て頂くよう電話をした。電話はつながった。携帯はつながらなかった。5時近くに全員を送り出した。	園舎に被害がないことを確認し、全員で子どもたちの安全を確認した。教室や遊戯室の落ちた書類や本の後片付けをした。その後、先生方が安全第一で帰宅する。
3	(送迎バス)子ども達は「キャーキャー！」と遊園地の乗り物のようで不安は少ないように感じられた。	(送迎バス)普段の倍近くの時間をかけ、最後の園児を降ろす。 (延長保育)職員と共に迎えを待っていた。	(延長保育)保護者と電話連絡がつかなかった。帰宅完了は18時頃。	保育室や職員室の片づけと余震に備えての備品等の整理。割れたガラスの片づけや、二段組になっていた紙芝居棚を下に降ろすなどする。暗くなってきたので、職員も帰宅。連休は在宅の状態での勤務。一部の職員は避難所に避難、同様に避難中の在園児の家族に付き添う。園児全員の安否確認ができたのは13日。
4	怖さと、タオルケットで自由を奪われたのと、泣き出す子どももいた 大人たちの緊迫感が伝わったのか牛乳が嫌いな子が、おやつのごくごくと飲んだ。緊張してのどがからからになったのと思う 地震警報が鳴る度、「来た！」とテーブルの下にもぐることの繰り返し	子どもをひとりにさせないように、だっこしたりおぶったりして待っていた テーブルの下に毛布をひいた。何度も余震があって、ストーブをつけられないので寒かった テレビで地震の状況が映っていて、子どもも見ていた	保護者からの電話が鳴りっぱなし。「先生、大丈夫ですか？ 行きたいけどいけないのだから、生きていますから」 お迎えも普段より早かった。すぐに保育所に来た保護者もいた お迎えの時は、子どもも、お母さんも泣いていた	当日の夜は遅くまで残った。保育課から連絡が入り休園を決めた。修了式はできないことになった。夜9時半ごろまで保護者に電話をかけてそのことを伝えた 職員は帰らずにみんな残っていたが、先がちょっとずつ見えてきた6時頃から少しずつ帰した
5	子どもたちは、とにかく泣いていた。トラウマにならない方がいいと思う	(特に記述なし)	園には集会所に避難すると伝えたので、園との間で連絡がとれた親が5人位、集会所に迎えに来た。職員がいたので避難先に案内されて、それぞれ子どもを連れて帰った。残り子どもたちはあらかじめ頼んでいたタクシーが来てくれて園に戻ることができた。園に着いたのは大幅に遅れて夜8時頃だった	当日はほとんどの職員が残っていた。職員も家庭を持っているのに、残っていてくれた
6	子どもたちはずっと泣いていた	(特に記述なし)	連絡が取れない保護者もけっこういた	(同上)
7	泣く子どもも何人かいた	余震が続いていたので、お迎えを待っている間は、おゆうぎ室に子どもを集め、職員と共に居た	お迎えはいつもより早めだったが、遅い保護者もいた。「保育所の方が安全だ」という保護者もいた 「無事でよかった」と泣き出す親も何人かいた。自営ですぐ来られるような親は直後に迎えに来ていた 最後は午後7時半	当日、所長は市の緊急会議の後、家に帰った深夜2時頃、市からの電話で翌朝5時から炊き出しの指示。 翌日は全職員が出勤し、休園の連絡。連絡に丸1日かかった。 休園中には、保護者とは3～4回電話で連絡を取った。
8	最初は泣いた子どももいたが、やがて静かに待っていた	(特に記述なし)	お迎えはいつもより早め。お迎え時にも余震が続いていた 「子どもたち無事ですか」と電話をもらったり、すぐに駆けつけた保護者もいた 「命を守ってもらった」と感謝して頂いた 最後は午後6時半	(特に記述なし)
9	0歳児は興奮する様子もなかった 大きい子は泣いて怖がっていた。怖がって床にはいつくばったまま、起き上がろうとしない4歳児もいた おもらした子はいなかった。怖くてトイレどころではなかったのかもかもしれない	おやつ時間も、机は出さず、そばに毛布を置き、すぐにかぶれるようにしていた。おやつは各教室で食べさせたが、食べ終えた後は、子どもを集めて、そこになるべく多くの職員がいるようにした	「子どもは大丈夫ですか？」と駆けつけたものの「安全でいるなら、もう一度戻ります」と言って、家の片付けをしに帰った保護者がいた。 保育所のほうが安全だと思ったのだろう。 親が帰ってしまって泣き出した子もいた 実は、早くお迎えに来て欲しかった。けががないようにと、職員は必死だった。最後は午後6時頃	(特に記述なし)
10	怖がっていた。大きい子でいつもふざけている子も、真剣な表情で指示に従っていた女の子で泣きだした子もいた 職員は真剣な表情だったから、それが子どもにも伝わったのと思う	寒かったのであまり長い間、外にいるわけにもいかないと思い、保護者に電話して子どもを迎えに来てもらうことにした。	保護者との連絡はなかなか取れなかった。すぐには来れないという保護者もいたお迎えに来て「来たなくても来ませんでした」と涙ぐむ保護者もいた。 「保育所で守られていると思ったから」と、自分の家を片付けてから来た保護者もいた。保育所は安全な場所で、何とかしてくれていると思ったのだろう。最後は午後6時半	当日は何とか全員に休園の連絡をした休園中も保護者などから連絡には対応。断水が続く開所できなかった 保護者とは何回も連絡をとった。連絡が取れない1名の保護者については、サークル活動を共にする他の保護者を通して連絡を取ることができた。

表2 福島県内保育所・幼稚園の事例の概要

事例	⑨翌日以降、休園を経て保育再開後、もしくは避難先での状況	⑩保育再開後、もしくは避難先での保育、子どもの様子	⑪地震後のこれまでの対応を振り返って	⑫現在の状況(県外等への避難に関して)
1	約1割が北海道から長崎まで、これは両親のどちらかの実家保護者には、年間行事通りには行かないと連絡	新入園児保護者は放射能に敏感になっている余震は経験している在園児と新入園児の差が大きい外遊びは1時間位は良いと思うが、数値が決定しないので30分。	園長としての采配が大切 1週間前に避難訓練を実施訓練が園児にも教職員にも役に立ったと思う。	(特に記述なし)
2	16日に予定していた卒園式は延期、25日に実施。終業式は中止。入園式は4月13日。	大地震や余震の影響で地震ごっこなど結構見られた	日頃の防災教育が今回の対応に活かされている	休園者4名、退園者1名。影響は少ない状況
3	13日～県外避難の動きが活発化。避難所にいた在園児の家族も県外に避難が多くなる。修了式は中止、卒園式は延期。園HP内に「りんじ掲示板」を設置。27日に卒園式。28日～保護者から園再開の問い合わせが急増。31日、始業式を8日することを通知、この辺りから園独自の保育への姿勢を連絡し始める。始業式まで、職員会議で保育内容の話し合いを何度も繰り返す。	「大ホールに行ってもいいんだよ」と言う「行ってもいいの？」という反応が多い。以前は部屋遊びをしなかった子が、折り紙をしたり、お絵かきをしたり。「放射能」についての言葉が多い。マスク着用は外そうとする子が多い。積み木を瓦礫のようなイメージで津波ごっこをしているときもある。以前より「先生の動き」をみていて、目で追っている子が多いように感じる。だっこやおんぶを求めてくる子が多くなった気がする。	自然に触れられないのがかわいそう。窓から桜吹雪が見えて「きれい！」と言っても、それに触れられない。(津波ごっこなど)「遊び」への影響は薄まるのか不安。登園を地震でいやがる子ども、来てしまえば大丈夫な子もいる。不安を忘れることが出来る場所なのかと思う。外遊びが出来なくても、仲良しのお友達と一緒に遊ぶことが出来る楽しさ。友だち通しのつながりを大切にしていきたい。	3/16～新入園児の入園取り消しの連絡が増加。「放射能からの待避」「保護者の職場移転」等が主な理由
4	再開は24日から	休園期間が長かったからか、子どもたちは元気な様子。見た目には変わりなさそう。保護者からは「音に敏感になった」「夜目が覚める」ということも聞いた。余震が来たときなど「怖い、怖い」と言う子や、「地震来た、お茶碗壊れた、ママだっこ」などと家での状況を思い出す子もいる。しきりにだっこを求める子もいる。普段から職員は子どもに歌を歌って聞かせている。現在はそれほど怖がらず寝ているようだ。	リーダーの存在は大きい。自分がリーダーという気持ちを持てておくことは必要。散歩中などでよくやった。散歩に行っていたら大変だった。「重かった」。子どもを親に帰せるかどうかとても「重く」感じた。預かった子を返すという根本的なことが、実は大変なことだったのだと感じた。	避難して子どもの人数が減っていくのがつらい。先の見通しが立たない。頻りに電話連絡をしているが、保護者が真剣に考える気持ちもわかるし、引き留めることはできないと思う。
5	再開は24日から。年長組で登園したのは数人。残りは自宅にいたり、実家に避難したりしていたようだ	登園した子どもたちは、当日の様子を話したりはしていたが、余震が来ると、不安を感じている様子で、怖くて泣く子もいた。余震のとき職員にしがみついて離れない子もいた。今はだいぶ落ち着いている。	事故もケガもなかったのがよかった。子どもを外に連れて行くのは慎重にしなければならぬと思った。若い先生が本当によく動いてくれて、訓練が的確に生かされていたと思う。	3名ほど休んだままの子がいる。
6	(同上)	(同上)	(同上)	(同上)
7	再開時には出席率75%位。市内で2番目に出席率が高かった。地域的に出席率が高いということは、避難する人も少なかったのだと思う。東京や実家に避難するだけの余裕もないのかも知れない。必要とされていたのだと思う。避難したままの子は1組だけ。他県に避難している。	朝、泣いたり騒いだりする様子もなく、おだやかに始まった。休園中は家庭で保護者と一緒にいたことで、心の安定が図れたのかも知れない。地震ごっこが流行っている。赤ちゃんの人形の上に布団をかぶせて、赤ちゃん人形を守ろうとしている。	性急に再開せずよかった。ガス漏れが見つかり再開できる状態ではなかった。目視で大丈夫だと判断しないでよかったと思う。全員無事で、午睡時だったこともよかったのだと思う。毎月避難訓練をしていて、いろいろな想定をして訓練していることが活かされた。若い3年目の先生は、「自分が動揺したらダメだ」と思ったという。	一時保育の利用は少なくなった。特にリフレッシュの利用が減った。
8	再開は25日から。県外に避難している子どもも結構いて、当初は人数が少なかった。目を追ってだんだん人数は増えてきて、やがて通常通りの人数となった	登園した子どもたちはいつも通りの様子だった。しばらく自宅にいて保育所に来たとき、情緒的に不安定な子はいた。急な音でパニックのような状態になったりした子もいた。小さい子だったが音に敏感になっていた。	当日の午前中に避難訓練(火災訓練)だった。日頃の訓練が活かされたのだと思う。訓練は大事だと思った。どういときに地震が来るかはわからないので、いつも同じ時間に訓練をするのではなく、午前中かも知れないし、給食中かも知れないし、集会をやるときにも、もし地震が来たらどうするかということを考えておかなければいけないと思った。	(特に記述なし)
9	避難した人は3組～5組。親の実家が他県にあるなど。保護者の仕事先も被害を受けて、自宅待機になった例もあったようだ。保護者は「いつから開所ですか？」と待ち望んでいた。開所当日は出席率が高く、7割位。翌週には普段と同様の出席率に。「2週間も家にいたから、子どもがうるさくて仕方ない、早く保育所を開けて欲しい」という声が続く	今でも余震があると顔色を変える子が1人いる。午睡中もまだパジャマを着せていない。靴下もはかしたまま。上靴もはかかせて、すぐ避難できるようにしている。小さいクラスの子も、余震がくると、ぱっと机の下に入る。地震に対してはかなり敏感になっていると思う。今は登園を渋る子はいなくなったが、再開してしばらくは「地震が怖くて行きたい」と登園をいやがる子がいた。	午睡を想定した避難訓練もやっていたので、活かされた。本震の時は気が付かなかったが、振り返ってみると別の避難経路もあったと思う。毛布や頭巾は用意しておく方がいい。おゆうぎ室に子どもたちがまとまっていたからよかった。安全に保育することがいかに大切で、難しいことかと感じた。あの日は帰るまで生きた心地がしなかった。	(特に記述なし)
10	再開は24日から	ほぼ普段通り。揺れが来ると、大きい子はさっと机の下に入る。本震のときのような緊張感ではないように思う。	緊急の時のための連絡網は必要だと思う。仲良しグループだけのまとまりではなく、全体に声をかけるということが大事だ。	(特に記述なし)

表2 福島県内保育所・幼稚園の事例の概要

事例	⑬現在の状況(放射能対策に関して)	⑭現在の状況(室内保育等に関して)	⑮要望、今後の課題
1	外遊びはさせない 外遊びは出来ないことを知っているように口に出さない 体力的な遊びの消化を計画する。室内での保育は目が届く。担任としては良い。 マスク、長袖着用、雨の日は長靴、帽子。迅速に出入りする。	屋内保育の遊びの約束(サッカーでなく、手で打つことや廊下は走るのではなくスキップする。スキップの苦手な子ども言葉を知り体リズムを覚える) 室内と外遊びの体の動かし方が、どう変化するか観察、言葉の表現や情緒安定や忍耐力等を観察していく。	県も市も連絡が届くまで時間がかかる 今の現況は風評だけで終わらず段々と不安になる
2	室内での遊びが続いている。表土を削る工事を実施。 保護者の反応としては、早く外で遊ばせたい。放射能が元に戻ってほしい。原発事故が収束してほしい。表土の撤去は喜んでいて、1時間以内の外遊びから始めることにしたい。うがい、手洗い、砂ほごりのある時は外に出ない。砂を入れ替える	室内の遊びでストレスがたまっている 中遊びが中心となり、子どもが生き生きしていない。元気がない。これは問題である。震災による子どもたちの心に寄り添った保育の配慮	放射能の除染を継続すること
3	3/23、水道水から放射性ヨウ素検出、掲示板に市の発表内容を掲示、同時に園の水道水の安全について確認。4/8、園の水道水からは放射性物質が検出されなかった結果を公表。4/18～園内5ヶ所(園庭・中庭・通路・保育室・ホール)の線量計測を開始、HPなどで公表。4/28、お便りにて「地震や原発に係る保育方針、有事の際の避難態勢など」を知らせる。5/1、園庭の表土の削り取り作業。土の移送先は未定。	市内私立幼稚園協会の研修会において「子どもの心のケアプロジェクト」が提案され、精神面、身体面、生活する環境面での配慮が行われている 子どもたちの絵には、暗い色への傾倒等、いわゆる震災時の絵の特徴は認められない	(特に記述なし)
4	現在は子どもを外に出せない。数値も高く保護者も心配している。不安だ。当分は短時間しか外には出られないだろう。夏になり室温が高くなると、窓も開けられない状況で、あせもにもなるだろうし、ストレスも高くなるだろう。 保護者にはお便りを作って、現在の状況を説明するようになっている。	体育的な遊びを保育に取り入れているが、今後の保育は課題 植えた野菜も食べることはできず、「みんなが作ったおいもだよ」と言っても、実際は買った野菜の代用になるだろう 散歩ができないのがつらい。日々の何気ない歩きが子どもの身体を作ると思う。散歩ができなくなって、どう影響するのか分からない。	職員のケアも欲しい。夜中に余震が来ると涙が出てくる。休園中も職員は出勤して、園の安全確認のほか、炊き出しをしたり、手伝いに出かけたりした。
5	「どうして外で遊ばないの？」と言う子どもはいる。「もう少し待ってね」「ホールで遊ぼうね」と言ってホールの中で活動している。中での活動は先生たちもストレスがたまりそうだ。 保護者には説明の文書を出した。特に苦情は来ていない。	今後は大きい子どもたちには、砂に触れた後の手洗いや水の問題などを指導していくつもりだ。畑があり、今年も羊掘りくらいはさせたいが、迷っている。子どもたちを外に出せないのは困っている。	携帯は使えなかったが、パソコンは使えたので、今後はメールで保護者に連絡する方法も検討したい。
6	(同上)	(同上)	(同上)
7	市から子どもを外に出さない方針を指示されている。砂遊びもさせていない。「どうして外に出れないの？」と言う子はいない。自宅で言われているのだろう。 水筒で家から水を持ってきた子がいた。保護者向けにはお便りや張り紙で状況を伝えている。	戸外での活動が制限されている中でどうやって室内で活動していくのか、避難訓練など保育所の安全・安心についてももう一度確認する必要があるだろう。土いじりや、家庭菜園の活動、「どうして食べられないのか？」についての子どもたちへの指導は、これからの課題。	(特に記述なし)
8	子どもを外に出せない。子どもも保護者から聞いているようだ。保護者も関心が高い。この状態がいつまで続くのかが分からない。使えない食材、水の問題は、入所式の後の説明会で理解を求めた。1人だけ、家から沸かした水をポットに入れて持ってきている子がいる。	おゆぎ室の使い方を工夫し、体操などを取り入れている。子どもたちのストレスがたまっているのが心配。保育も工夫しないといけないと思う。花見も中止、散歩にも行けず、運動会も延期になり、羊の苗植えなども無理と思うし、代わり保育をどうしたらいいのか。	建物の修復の予定が立っていない。早めに直してほしい。
9	子どもを外には出せない。戸もあまり開けられない。保護者から「子どもを外には出さないでくださいね」と言われることもあった。「水は大丈夫か」と保護者から訊かれる。水を持って来るなら断らずにそれを飲ませる方針。	おゆぎ室で運動遊びを多く取り入れる工夫をしている。散歩に行けないし、困っている。冷房も使えないし、これから暑くなったらどうしようかと話している。子どもたちは「外に出たい」とは言わないが、家を出ないように言われているのかも知れない。今後の状況によっては、放射能対策も教え必要があるかも知れない。	(特に記述なし)
10	子どもを外に出せない。子どもたちは「どうして外に出れないの？」とは言わない。家を出ないように言われているのかも知れない。	(特に記述なし)	(特に記述なし)

表2 福島県内保育所・幼稚園の事例の概要

事例	種別	地域	①本震までの状況	②本震時の状況、被害	③本震直後～余震時の状況	④本震～余震時の子どもへの対応
11	保育所	県中	午睡中 3歳児は翌日に満了式を控え、当日だけはパジャマに着替えていなかった。0～2歳は部屋で寝ていた	おゆうぎ室の天井が外れた 壁備付けの棚がずれた 天井のエアコンが外れた	2階からの避難用の滑り台は、落下物が怖く非難は無理と感じた 電話は不通、携帯も固定も通じなかった	庭の中央に避難させ、ごさの上で様子を見た 職員は避難経路を確保し、いつもは閉じている門のチェーンも外させた いつ誰が迎えに来るか分からないので、子どもの人数も確認 乳児はおんぶ、だっこ、避難車に載せて、外に出た
12	保育所	県中	午睡中 年長児はおゆうぎ室で勉強をしていた	室内の木製窓枠が床に落ちた 天井のエアコンが外れた	その後、何度か「ゴーツ」という音とともに余震がガタガタと来た。 吹雪になってきたし、外に連れ出すのもどうかと思っている間に、揺れはおさまってきた。	すぐにテーブルの下に隠れた 小さい子は布団をかけて守った 外には出なかった 職員が手分けして室内の窓枠をすべて外した 子どもにつく係りと、建具を外したり片付ける係りとに分かれて動いた
13	保育所	県中	午睡終了時	建物の大きな被害はなかった	近隣の人々が声をかけてくれた	部屋の中心に子どもを集め、毛布を掛けて職員が囲んだ外に避難。吹雪になったので、毛布で子どもたちを囲った 揺れが落ち着いたところで部屋に戻った 子どもがトイレに行く時も、職員が目を見守るようにした
14	保育所	県中	午睡中 年長児は午睡せず、起きていた。年少、年中児はホールで午睡中	職員室ではモノが落ちた 保育室は落下物もなかった	動けず、しばらく様子をみていた エレベーターも止まった	とりあえず布団をかぶせて様子を見た 園庭に避難した
15	保育所	県中	午睡中 職員が打ち合わせをしようとテーブルに座ったところで	特に大きな被害はなかった	近隣の人々や市職員が駆けつけた。 停電になり、真っ暗になった。	子どもたちのもとへ駆けつけ、暖房を止めた 子どもたちを起こして、毛布で囲んだり、防寒着を着せた 外には避難しなかった ガラス窓から離れて、柱のそばに子どもを寄せた
16	保育所	県中	午睡が終わり起床している時	特に大きな被害はなかった 部屋にはTV、家具など全くない状態であった	天井中央のエアコンが落下しそうになった	天気が悪く吹雪いていた 部屋の壁側に子どもを集め、出口を確保し、頭を手や毛布で覆い丸くなっていた。その後裸足のまま所庭の中央に集まる。余震の合間をみて、毛布やジャンパー、靴を着用させたり、ダンボールで子ども達の周りを囲い、風が当たらないようにした。
17	保育所	県中	(特に記述なし)	大きな被害はなかった	(特に記述なし)	(特に記述なし)
18	保育所	浜通り	午睡中	津波により園舎は損壊	(特に記述なし)	子どもたちを起こし、ジャンパーを着せ、リュックを背負わせて裏の神社へ向かった。この道筋は普段の避難訓練の経路であり、保護者にも周知してもらっていた。途中の道は悪路であり、子ども達も辛かったと思うがよく頑張った
19	保育所	浜通り	(特に記述なし)	津波の被害はなかった。けが人も出なかった。建物内では壁にひびが入る、水道管が破れ漏水するなどの損傷	(特に記述なし)	(特に記述なし)

表2 福島県内保育所・幼稚園の事例の概要

事例	⑤本震～余震時の子どもの様子	⑥当日のお迎えまでの状況と子どもの様子	⑦保護者との連絡、お迎え時の様子	⑧当日および休園中の園と職員の状況、対応
11	子供たちも泣かずに避難していた。頑張ったと思う。	雪が降り、妊娠中の職員も2名いたので、毛布や布団で暖かくするようにした 近隣で火事があった 人数の確認はお迎えに来るたびに、間違えないようしっかり把握した 5時過ぎ、少し落ち着いてきたので、給食の残りや牛乳を出して食べさせた。不調を訴える子はいなかった	「お母さん無事ですよ、大丈夫ですよ」と言った途端、「よかったー」と泣き崩れる保護者もいた。「不安だったけど、保育所だから安心していました」という保護者もいた 無事に最後の子まで帰せたときは、ほっとした	全ての保護者に休園の連絡をし、子どもの様子を聞いた。保護者への連絡は3回位 職員も家庭があって、子どもがいたり家庭の心配もあったが、帰らずに保育所で頑張ってくれた 震災後の行動、子どもの様子、電話のやり取りや、保護者あての文書など、詳しく記録を残してファイルにまとめている
12	小さい子供たちは突然お布団をかけられたので、訳が分からず泣いたという感じ 2歳児も机の下にさとと自分たちで入って行った。日ごろの訓練か 何名かは泣いていた	3時ころまでは様子を見ていた。揺れが落ち着いたところで、それぞれの部屋に戻った。おやつ時間になった。おやつはふつうに食べていた	すぐに園に駆けつけた保護者もいたが、迎えに来れない保護者もいた 「保育所に居てよかった、家に帰ってきていたら大変だった」という保護者もいた。「一旦帰るからもう少し預かってもらっていいか」「帰ってもかえって危ないから」という保護者もいた。 お迎えが来て、お母さんの顔を見ると泣き出し、全員の子どもが帰ったのは7時半過ぎ	(特に記述なし)
13	避難訓練の通りに子どもたちは移動した 大きい子が「お部屋に帰ったらどうするの？先生？」と聞いてきた。「担任の先生がいるから、机の下に入れればいいから。大丈夫、所長先生がいるから。」「所長先生、だっこしてくれる？」「先生がぎゅうっとして守るよ」「じゃ先生、お部屋に帰る」	おやつを食べた。おやつを食べたら廊下で、毛布を常に脇に置いて、「余震が来たら戸をあけて毛布をかけてこたつ(のよう)にしようね」と言っていた 余震が続いていたので、子どもをばらばらにせず、2つの部屋に集めた	保護者に「子どもは安全に避難しました」と電話を掛けた。やがて保護者が迎えに来た。保護者は「保育所にいるのが一番安全でした」と言っていた 泣き出す保護者もいた 最後のお迎えは特に遅いこともなく、6時半には全員を帰せた	(特に記述なし)
14	子どもたちも怖かったろうが、泣いたりさわいだりはなかった	(特に記述なし)	保護者もすぐに駆けつけて来た。「大丈夫か？」心配して来られたり、早めに子どもを連れて帰った保護者もいた 子どもたちを保護者に返したのは、ふだんに比べて早かったと思う	市から翌日は休園の指示。保護者に連絡した。卒園式も中止。 市からは休園中も連絡要員として職員は出勤するようにと指示。 23日まで休園、24日からは再開できることから順次開園することとなった
15	(特に記述なし)	懐中電灯で照らし、暖房も止まって寒いので毛布を掛けて、おやつを食べさせて様子を見ていた	お迎えは3時過ぎから。最終的に全員を帰し終えたのがおよそ6時(通常は8時) 働いている保護者が多いので、子どもたちの様子を確認してまた仕事に戻る保護者もいた	(同上)
16	揺れの怖さ、寒さで震え出したり、泣き出しそうな子の姿があった。 不安や怖さで声を出す子、泣き出す子、状況をよく把握できない子など様々	避難後は村のバス、ワゴン車の中に避難。保護者が迎えに来るのを待っていた。 車、バスの中は始め静かだったが、体が温まると会話する姿が出ていた。ただ、お迎えがなかなか来ないと不安になっていた ので、手をつないだり、言葉をかけて安心してられるよう配慮していた。	(特に記述なし)	月曜より保育できることを翌日に電話連絡。電話がつかない家は直接自宅に行き連絡する。県外非難や村外避難して連絡がつかない家もあり。 放射能問題があり、16日～27日まで休所
17	(特に記述なし)	(特に記述なし)	(特に記述なし)	(特に記述なし)
18	(特に記述なし)	小学校の体育館に移動し保護者のお迎えを待つ。体育館は停電と断水。外は吹雪いてきて寒く、夕方になっても停電のため真っ暗であった。電話も携帯も不通であった。体育館のマットを敷き詰め、窓のカーテンを外し、マットの上に子ども達を集め、カーテンにくるまって寒さをしのいだ。	保護者との連絡がなかなかとれず、道路の渋滞と重なって、保護者の迎えは深夜に及んだ。	(特に記述なし)
19	(特に記述なし)	(特に記述なし)	(特に記述なし)	(特に記述なし)

表2 福島県内保育所・幼稚園の事例の概要

事例	⑨翌日以降、休園を経て保育再開後、もしくは避難先での状況	⑩保育再開後、もしくは避難先での保育、子どもの様子	⑪地震後のこれまでの対応を振り返って	⑫現在の状況(県外等への避難に關して)
11	再開は24日から	(特に記述なし)	(特に記述なし)	(特に記述なし)
12	(特に記述なし)	小さい子はパジャマを着せていない。子どもたちは元気で登園してきた。避難した家も帰ってきた。保護者に電話しても「元気過ぎて困っています」と言っていた。特に心のケアが必要な子どもはいないようだ。	天井にある、光を入れるためのガラス窓は危ないと言われた。避難経路を変えることにした。2、3日前も地震があり「この程度だったらいい体験ができたね」などと言っていたが、その直後に本震があった。怪我がなかったのがよかった。いい経験になった。訓練は必要。	(特に記述なし)
13	再開は24日から 全保護者に、「戸外遊びは制限します。給食は、数値の高いものは与えません。給食は献立通りには作れません」説明したうえで再開した。	余震があった時に何人かは、泣き出したり不安定になる。お母さんから離れないという子が何人かいた。余震のたび、子どもたちの表情が変わる。少し敏感になっているようだ。余震があっても、職員は表情を変えないように、さりげなく「みんなあつまってー」と声掛けには気を配っている。	以前から「大きな地震のときにはどうしたらいい？」と話をしてきた。おかげで本震での対応は冷静にできた。休園期間中、職員同士で話をする期間がかなりあり、チームワークを固めることができた。職員同士の信頼関係ができたようだ。保育計画の見直しをする時間もあった。保育所ではやれることとやれないことがある。今度保護者会があるので、保護者と職員との考えを一致させたい。	現在も避難している人がいる。本国に帰った外国籍の保護者も。2週間前くらいから、ようやく出席率が上がってきた。保護者の職場もずっと休みだったようだ。
14	再開は24日から。	外遊びは自粛。入園進級式の時保護者に説明をして了解を得た。ホールで遊ぶばかりではストレスがたまるかも知れない。早いうちに、市として方針を出さないといけないと考えている。	避難訓練を毎月やっていたので、何かあったら子どもたちのところにすぐ集まる、その訓練の成果は大きかったかなと思う。未満児クラスも同様。	他県に避難した家庭はいくつかあった。現在はだいたい戻ってきた。家族とともに避難した職員もいた。退所や入園辞退がかなりあった。原発の問題がかなり影響している。一時的な避難と考えていたが、このように長引いてくると生活がかかってくる。大きな問題だと思う。
15	(同上)	感受性の強い、不安が強い子もいる。頻繁に余震があるので、そのたびにおびえた様子をする。大きい子たちも、音に敏感にはなっていると思う。	(同上)	(同上)
16	28日より通常保育再開、25日には修了式も実施 保育中常に帽子着用。靴はテラスに並べておく	保育再開後も、余震が怖くて登所できない子、家から出たくない子、家族と離れたくない子もみられた。	毎月の避難訓練があったので、地震の時は保育士の側に駆け寄り、保育士の話しをよく聞こうとする姿があり、日頃の訓練の有効性を実感した。日々の保育の中で、子ども一人一人の特徴をよく把握し、緊急時の対応をよく意識しておかなければならないと思う(障がい児への対応)	(特に記述なし)
17	24日から通常保育を再開	比較的安定しているが、余震には敏感。先生にしがみついたまま離れない、寝ていても起きて泣き出してしまったり、パニックを起こす子も。1歳から2歳児に多い。コミュニケーションを主体とした時間を多く取るよう配慮 幼稚園に行きたくないと言う子どもを持つ親には、「いまは無理に連れてこないでください」	(特に記述なし)	(特に記述なし)
18	(園児2名が別の保育所に避難。本例はその2名についてのものである)	保育所では保育士の元を離れたがらず、少しでも離れると、ワンワン泣き出す。家に帰りたいと叫び、他の保育士には馴染まず、1先生でないと駄目と駄々をこねる。友達が亡くなったことをよく口に、「地震が来たらどうするの?」「R先生(保育士のこと)が連れて逃げてくれるの?」等々を訴える。避難訓練では、プザーの音を怖がるため、鳴らさないようにした。	保育士は、保護者から「地震や津波から子どもを助けてくれて有難う」とお礼を言われるが、その時は逃げるのに必死で、果たして子どもにきちんと関わられたか分らないと、自分を責め続けている。	現在福島県海岸地区では、津波の他放射能の問題もあり、人口の流出が激しい。特に子どもを市外や県外に移転させる家庭が多く、子どもの数が激減している。
19	3月11日から約2週間休園。主な理由は断水 4月1日までに修復を終え、現在は平常時と変わらない態勢	(特に記述なし)	(特に記述なし)	(特に記述なし)

表2 福島県内保育所・幼稚園の事例の概要

事例	⑬現在の状況(放射能対策に関して)	⑭現在の状況(室内保育等に関して)	⑮要望、今後の課題
11	エアコンは使うことにした。外気を入れることは控えるようにとテレビなどで報道されているので。本来ならカッパを着て、玄関に入るまえにほこりを払って、ということまですべきなのかも知れないが、送り迎えは車で来るし、車を降りて玄関に入るまでの1分も掛からない間であるので、それほど神経質にならなくてもいいのかなと思う。	外には出せないで、おゆぎ室を有効に使っている。体操したり室内マラソンをしたり。子どもたちは今のところ楽しんでいるようだ。これから先、この状態が長く続いて、水遊びができなくなると困る。子どもたちには、放射線の話はしていない。それでもまわりで(大人が)いろいろと言っているのを子どもも聞いていると思う。砂にはさわらないほうがいいとは言っている。	(特に記述なし)
12	(特に記述なし)	(特に記述なし)	(特に記述なし)
13	ミネラルウォーターを持ってきた保護者や、園の水が心配で自宅保育にした保護者もいた。給食についても「保育課からの指示で数値の高い葉物は省いて作ります」と園内に掲示した。保育所独自で放射能を測定しガイドラインを作ろうとしている。洗濯物は外に出せるのかどうか、細かい問題は多くある。コートは中に入れてもいいのか、玄関に置いておくほうがいいのか。	部屋の中での運動遊びを、各クラスで取り入れた。保育者として、外に出ることができないくらいは夏の水遊びについては悩んでいる。先が見えないところが大変。工夫だけではどうもならない。秋ごろになったら保護者の間に温度差が出てくるだろう。「そろそろ外に出そう」という保護者と「まだまだダメだ」という保護者と。そういう状況での保育も考えていく必要があるだろう。	(特に記述なし)
14	過度な注文をつけてくる保護者はいない。市内の公立・認可保育所については市がモニタリングの計測をしている。	5月下旬に親子遠足の予定だった。行事の取りやめをする保育所が多いが、子どもたちのストレスもたまっていると思う。市内の複合施設などを借りるなど、どこかで親子の活動を実現させたいと考えている。	本来なら園ごとに線量計を持っていて、今日の測定結果は大丈夫だから外遊びをしましょう、というようにしないと、保護者の理解は得られないだろう。ある程度、保護者に理解してもらえないような対策が市として必要だ。
15	水については保護者から問い合わせがあった。市でもこれには素早く対応した。市からペットボトル水の配給があり、ミルク用の水はペットボトルの水を使うという掲示をすぐに出して、保護者の理解を得た。給食についても、保育課から来た文書を拡大し掲示して、数値の高い野菜は使用しないことを保護者に伝えた。本来は地産地消の取り組みもいろいろしているところなのに、使えない状態になっている	(同上)	(同上)
16	ミネラルウォーターに切り替えた。品不足で確保が大変だった。戸外に出ず室内での活動。余震時はやむを得ずテラスの外へ出るが、現場としては放射能の心配がある。積算放射能を考えると、半年、数十年後はどうなのか心配する。	(特に記述なし)	悪天候時、および電話等連絡手段がない場合を想定した避難場所も必要ではないか。
17	表土除去で敷地内の放射線値が大幅に低下した。測定機も独自に購入。国の基準、市の基準どちらも大きく下回った。外遊びはこれまでは禁止。市の指針が出たので、これに基づき0~2歳児は15分間、3歳児以上は30分間、外遊びの許可を出すか検討。「地産地消」を推奨し地元の食材を用いてきたが、現状園児たちに食べさせたくないのが本音	(特に記述なし)	(特に記述なし)
18	(特に記述なし)	(特に記述なし)	震災後、心理学者やカウンセラーによる「子どもの心のケア」が実施され、行政も歓迎する傾向がある。しかし子どもにとって保育士はかけがえのない存在であり、今回のような不測の事態が起きた時こそ、本当に子どもを守って上げるのが保育士の仕事である。
19	市から計測器を借りて敷地内の放射線量を調べた。雨上がりには若干高くなる。また、屋外では地面より植物の葉の上が常に高い値であることも分かった。数値はいずれも国の基準を大きく下回った。保護者からは「外で遊ばせてやってくれ」という意見も聞かれた。安全を最優先に考え外遊びを中止	(特に記述なし)	(特に記述なし)

特に甚大な被害があった被災地の保育所の開所状況 調査結果(全保協調査)

岩手県	開所	開所	その他
一関市	4		25
遠野市			13
奥州市	4		24
岩手町			3
山田町			9
田野畑村			1
花巻市	32		
釜石市	3	2	2
葛巻町			4
岩手町			5
雫石町			6
滝沢村			14
住田町			2
久慈市	2	1	18
宮古市			14
九戸村			4
野田村	2	1	1
軽米町			2
洋野町			9
紫波町			4
矢巾町	1		6
大槌町	2	3	2
盛岡市	17		36
平泉町			2
大船渡市	4	2	6
金ヶ崎町			2
藤沢町			5
一戸町			5
二戸市			8
八幡平市			10
大迫町			1
北上市			17
陸前高田市	1	5	4
西和賀町			5
合計	72	14	269

※その他とは、連絡が取れていない等、様々な理由により開所しているか不明のところ

※データは平成23年4月6日現在

特に甚大な被害があった被災地の保育所の開所状況 調査結果(全保協調査)

宮城県・仙台市	開所	開所	その他
気仙沼市			12
南三陸町			5
石巻市	2		31
女川町	3		1
東松島市			12
松島町	1	1	1
利府町			8
塩竈市	4	6	2
七ヶ浜町	3		
多賀城市	8	1	
名取市	7	1	
岩沼市	6	3	
亘理町			3
山元町			3
丸森町	4	1	1
角田市	2		
大河原町			2
柴田町	3	3	
村田町	1		
蔵王町	2		
白石市	5	2	3
川崎町	1		1
文和町	2		
大衡村	1		
富谷町	6		
大郷町	1		
色麻町	2		
加美町	3		1
大崎市	24		1
葉原市	5	9	
登米市	17	1	
涌谷町	2		
美里町	2		
仙台市	119	4	
合計	236	52	70

※その他とは、連絡が取れていない等、様々な理由により開所しているか不明のところ

※データは平成23年4月6日現在

H23. 3. 16	秋田県民間保育所協議会	<p>(北海道地域)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特に被害なし、函館付近で津波が少し海岸部に上がったが、特に影響なし。 <p>義捐金(社)札幌市私立保育所連合会でまとめて送金する</p> <p>(青森県)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会員外保育園で、三沢地区の1園が津波の影響で泥、土砂等が園舎床上に流入した。園舎が老朽化しているため廃園の方向。八戸地区の会員外保育園2園にも泥等が流入しているが、復旧は可能のようであり、それまで近隣の保育園を利用しては被害なし ・日用品(給食材料、ガソリン、灯油等)、医薬品等不足しているガソリン不足のため、職員の通勤が困難である。義捐金一会員園に被害がないこともあり、義捐金職がどこまで高まるか <p>(岩手県)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・三陸地域3保育園あるが、現在のところ音信不通であり、状況不明である。 ・日用品不足、ガソリン不足のため、自家用車で通勤の保育士が通勤困難である。 <p>(秋田県)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・被害保育園なし。3/16～18計画停電 ・日用品不足(給食材料、ガソリン、灯油等) <p>(山形県)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・被害保育園なし、庄内地域もなし ・日用品不足
H23. 3. 17	八戸市保育連合会長	<ol style="list-style-type: none"> 1. 石の森保育園園長より三戸郡施設は被害なしとのこと。 2. かわぐち保育園・おいらせ町は敷地浸水、建物被害なし、通常保育実施。 3. 八戸市保育連合会施設68か園の園児・職員的人身にかかわる被害は皆無。 4. 地震による建物・器物の被害は下記4施設。 <ul style="list-style-type: none"> ○一部壁面の剥離、壁の一部亀裂。ポイラー停止。いずれも軽度の被害につき自前で修繕可。 ○ビデオデッキが落下により破壊。 ○下記の2か園を除く66園は通常保育実施。 5. 津波による被害 2施設(海岸沿い施設1川沿い施設1)どちらも1～2メートルの高さで浸水し、基礎、外壁、一部のサッシを残すのみの損害に遭遇し保育不可。

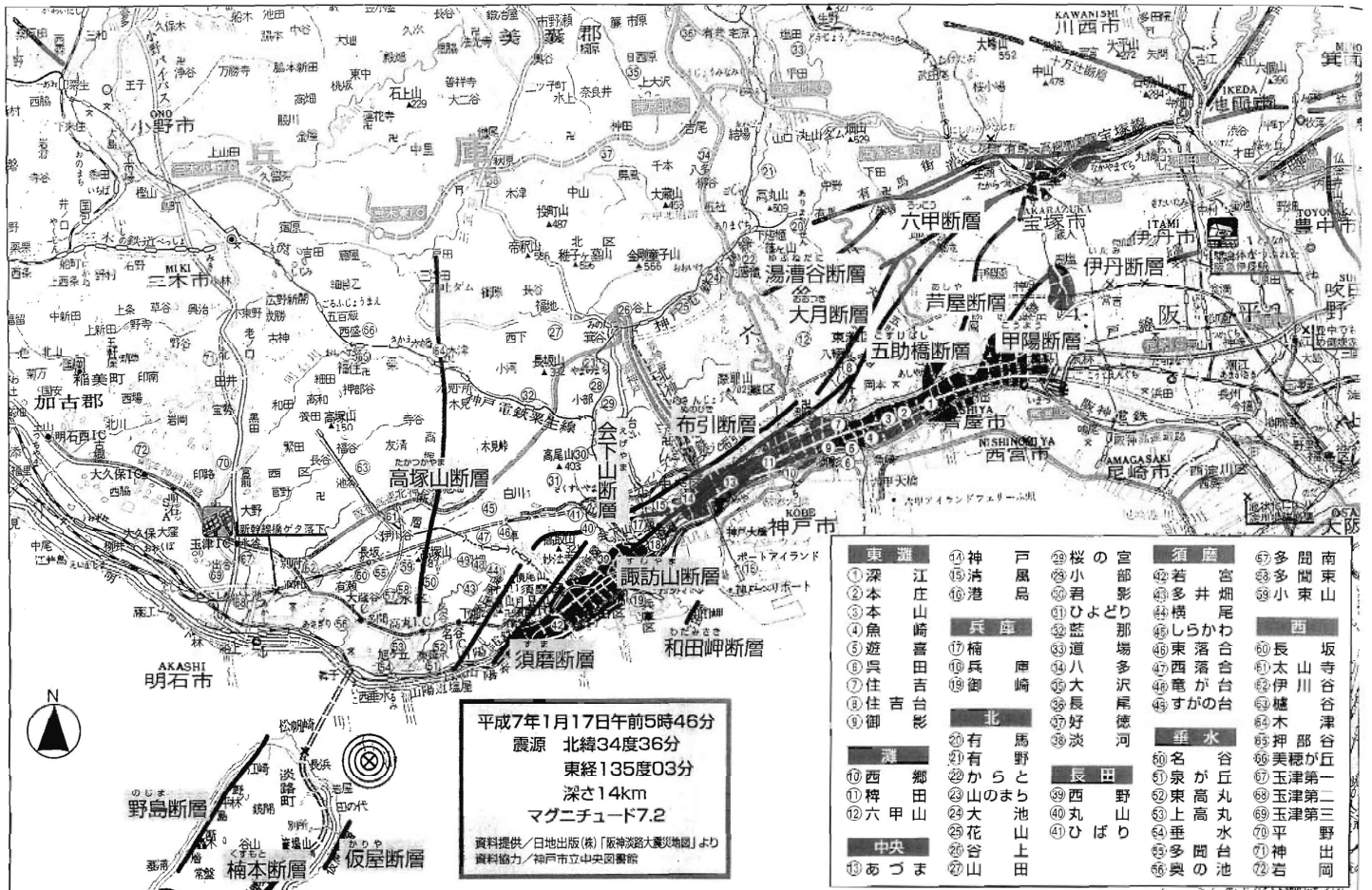
H23. 3. 23	岩手県私立保育園連盟	<p>被害園:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新築はますか保育園 修復復帰開園まで1か月前後。その間の協力園として隣接の白鷺保育園が受入れ、保育実施。 ・浜市川保育園 修復復帰開園まで半月以上。その間の協力園として隣接の多賀台保育園が受入れ、保育実施。 ・八戸市と協働し3月14日より合同保育開始。 <p>6. 11日の被害後、14日(月)青年職員が相互に連絡し自主的に後片付け手伝いを行い、同日電話回線復帰。八戸市会長指示の下、各園長の協力により多数の保育園から多くのボランティア職員が派遣され14日～17日の4日間で重量物、車の撤去を除きおおその園舎内外の後片付け終了予定。</p>
H23. 3. 24	茨城県民間保育協議会	<p>佐々木岩手県私立保育園連盟会長より連絡があり、22日までに連絡が不通であった3園に確認が取れたとのこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・岩手県下閉伊郡山田町 山田町第一保育園(施設床上浸水) ※園児、職員については被害なし ・岩手県下閉伊郡山田町 豊間根保育園 ※園児、職員、施設については確認中(現在避難所として使用中) ・岩手県釜石市 釜石親愛幼児学園 ※園児、職員、施設については被害なし <p>他会員園についての被災は免れたのではないかとのことですが、逐一情報が入りしりしだい連絡をいただけたらとのことです。</p>
H23. 3. 30	岩手県私立保育園連盟	<p>別添表</p> <p>佐々木岩手県私立保育園連盟会長より連絡</p> <ul style="list-style-type: none"> ・岩手県下閉伊郡山田町 山田町第一保育園(施設床上浸水) ※園児2名死亡 1名行方不明、職員については被害なし
H23. 4. 4	千葉県民間保育園協会	<p>浦安市 入船北保育園(下水道に被害があり現在修復中)</p> <p>同 井天保育園(被災化による被害あり詳細不明)</p> <p>旭市・銚子市内の各保育園については園舎内の壁等に軽微なひび割れが散見される程度で大きな被害は出ていない。</p>

阪神・淡路大震災記録

阪神・淡路大震災記録

平成7年(1995)1月17日午前5時46分

震度7・活断層図と園配置図 (平成7年1月17日)



死者、不明5千人超す

初の「震度7」判定 兵庫県南部地震

救援続々 捜索も懸命



兵庫県南部地震発生から約1週間、被災地の状況は依然として悲惨な状態にあり、救援活動は続々と進められている。捜索も懸命に行われている。死者や行方不明者の数は5千人を超すと見られている。被災者の生活も依然として困難な状況にある。

地震のなみ異常体制で発行

地震発生後、各地で異常な事態が発生している。被災地の状況は依然として悲惨な状態にあり、救援活動は続々と進められている。捜索も懸命に行われている。

地下鉄の柱も被害

地下鉄の柱も被害を受けた。被災地の状況は依然として悲惨な状態にあり、救援活動は続々と進められている。捜索も懸命に行われている。

阪神神戸線の復旧は半年後

阪神神戸線の復旧は半年後と見られている。被災地の状況は依然として悲惨な状態にあり、救援活動は続々と進められている。捜索も懸命に行われている。

県南部地震

神戸中心部に大惨事

情報が死傷の報に不安拡大

神戸中心部に大惨事が発生した。情報が死傷の報に不安が拡大している。被災地の状況は依然として悲惨な状態にあり、救援活動は続々と進められている。捜索も懸命に行われている。

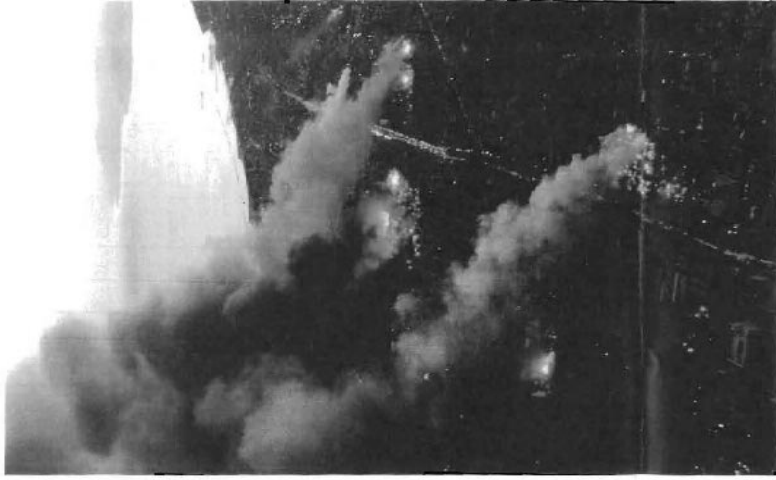


高速道路ぐにやり

交通網ズタズタ JR運転再開ど立たず

交通網ズタズタ JR運転再開ど立たず。被災地の状況は依然として悲惨な状態にあり、救援活動は続々と進められている。捜索も懸命に行われている。

地響き 恐怖の烈震



いたる所で煙がたちをぼる長田区（朝日新聞社提供）



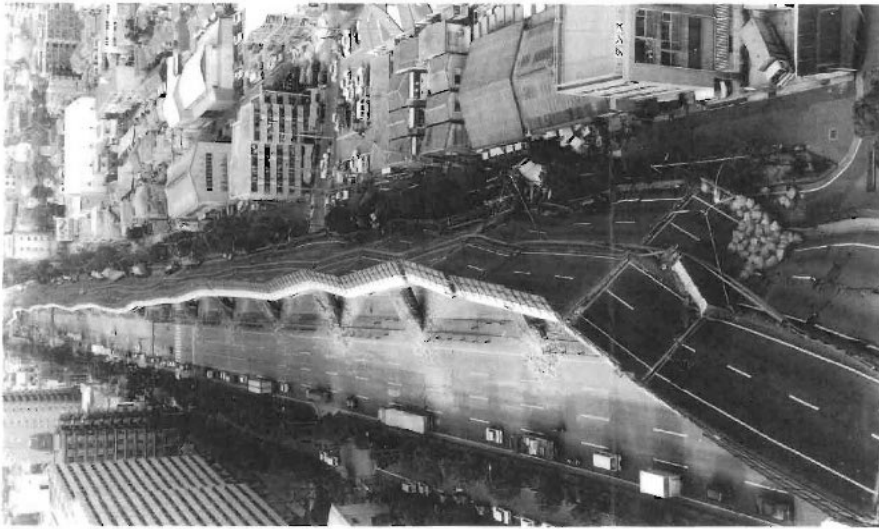
1つのまちがすっかりなくなってしまった



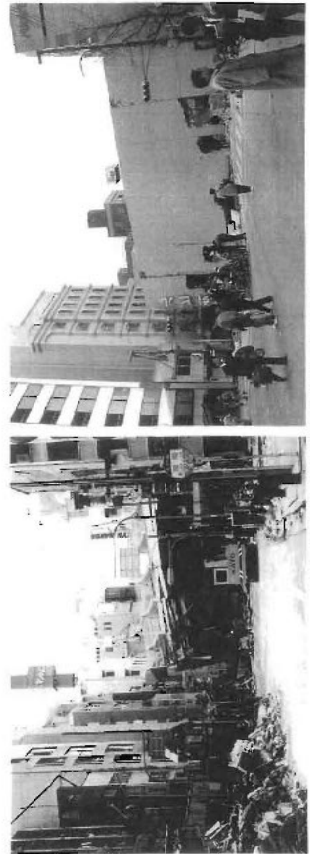
アーケードだけ残った長田区の商店街



一面ガレキの灘区



倒壊した阪神高速道路神戸線（東灘区）（読売新聞社提供）



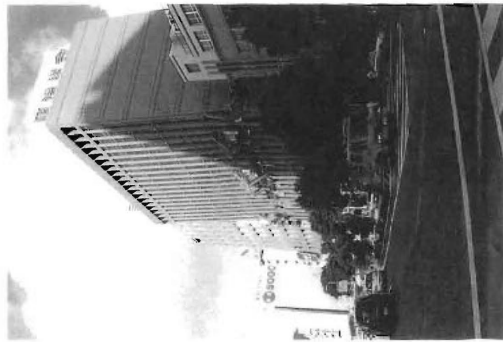
倒壊したビルが道路をふさぐ（中央区）



ビルが傾いた交通センタービル



倒壊した木造家屋（灘区）



中間層が崩れた明治生命ビル



1階部分がなくなった兵庫県庁舎



落下した阪神新在家近辺の高架橋



陥没した神戸高速大開駅



新交通ポートアイランド線の桁（けた）落下



線路だけが宙ぶらり（JR六甲道～住吉間）



駅ビルも崩壊した阪急電車

阪神・淡路大震災による被害状況

神戸市の被害状況

	東灘区	灘区	中央区	兵庫区	長田区	須磨区	垂水区	北区	西区	計
公立 保育所	4名	2名	—	—	3名	1名	—	—	—	10名
私立 保育所	—	2名	—	1名	4名	—	—	—	—	7名
公立 幼稚園	3名	—	1名	—	—	—	—	—	—	4名
計	7名	4名	1名	1名	7名	1名	—	—	—	21名

兵庫県私立幼稚園の被害状況

園数	人的被害		保育の実施状況		園舎等の被害状況		なし
	死亡 園児	けが 園児 教職員	休園中 園	休園中 園	全壊 園	半壊 園	
254	30人	40人 教職員 2人	7	247	20	36	157
							41



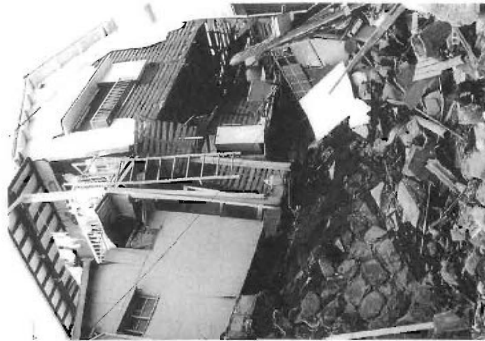
塙壁が崩れ避難勧告がでた造成地（東灘区）



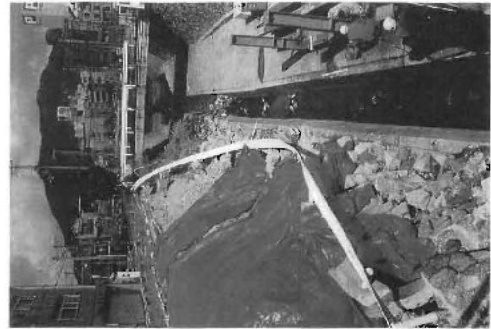
河川沿いの曲がりくねったガードレール（東灘区）



産卵をおおおう一面のビニールシート（1月26日須磨区）



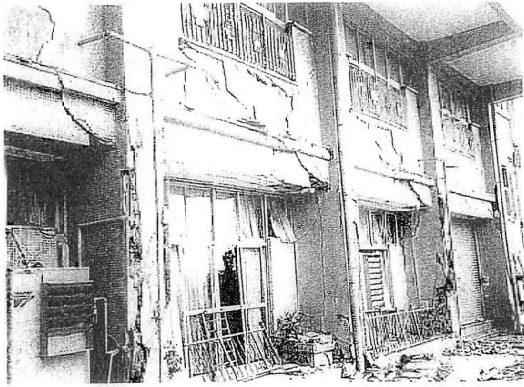
カケくずれとともに家も崩壊した（灘区）



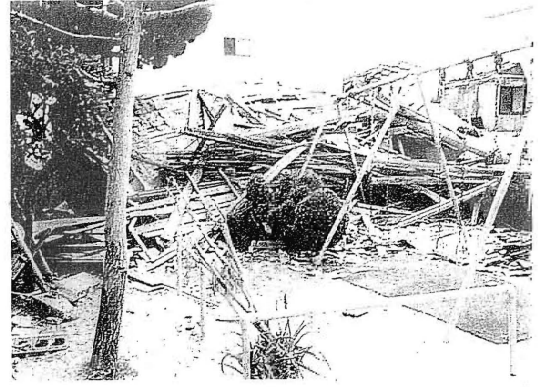
護岸が崩壊した妙法寺川（須磨区）

M 7.2 の 衝 撃

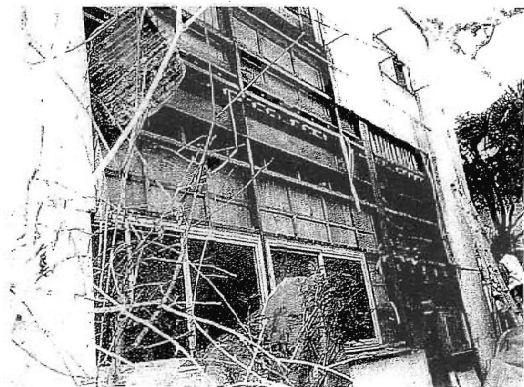
幼 稚 園 の 園 舎



昭和幼稚園



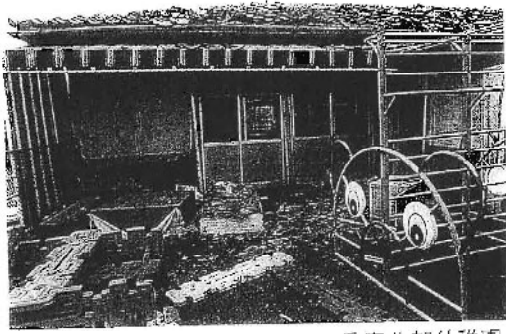
愛光幼稚園



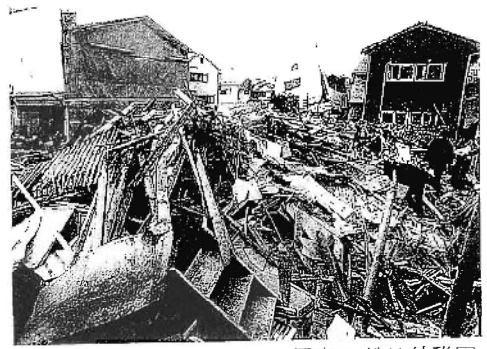
大手幼稚園



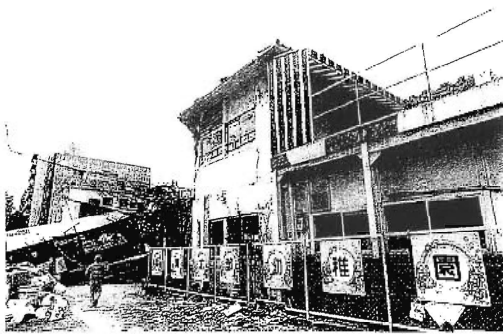
六甲幼稚園



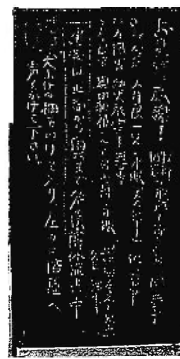
兵庫北部幼稚園



須磨みどり幼稚園



兵庫北部幼稚園



光の子幼稚園



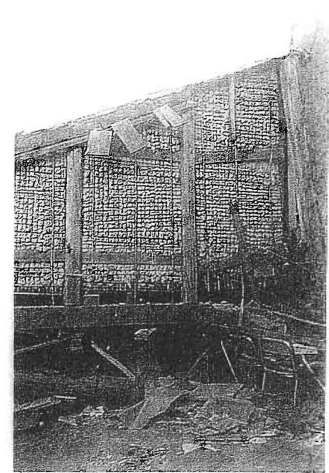
須磨みどり幼稚園



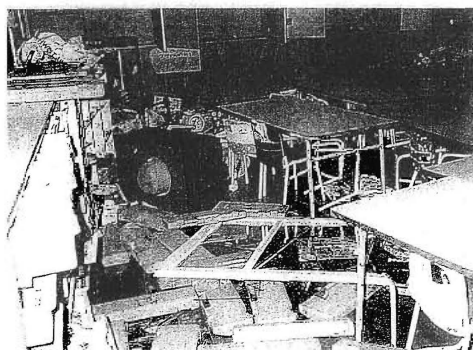
八幡幼稚園



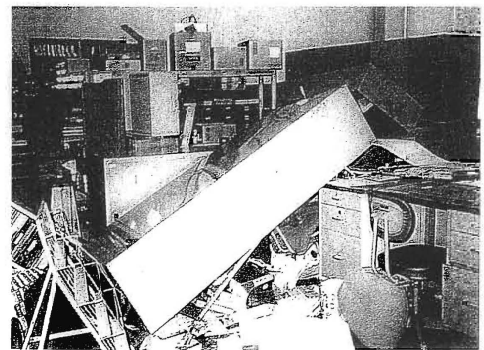
八幡幼稚園



一里山幼稚園



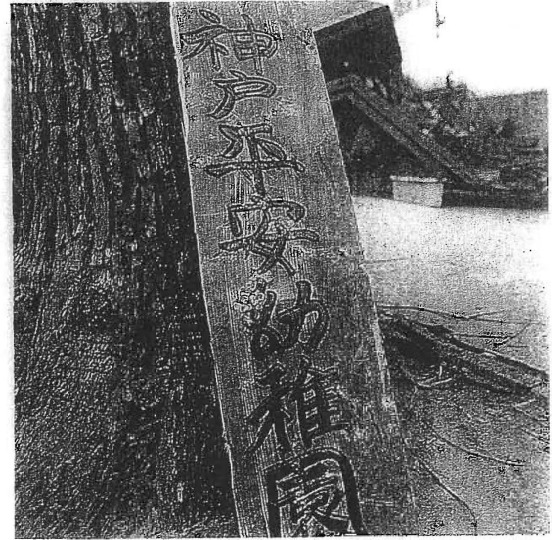
明舞幼稚園



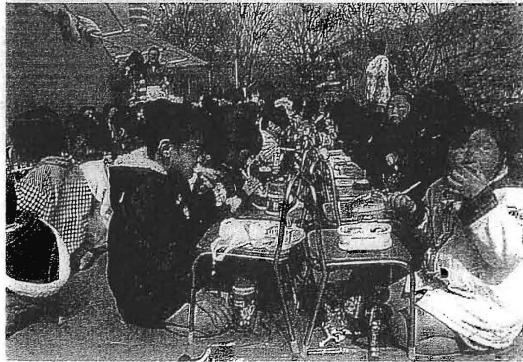
宇塚信愛幼稚園



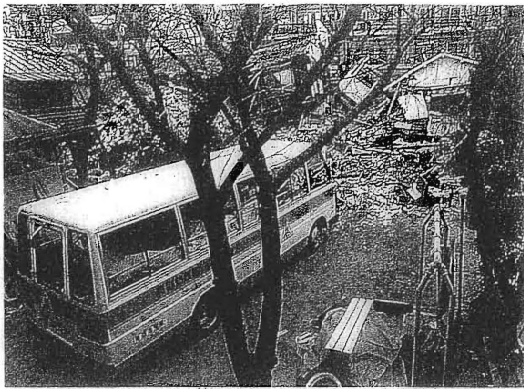
光の子幼稚園



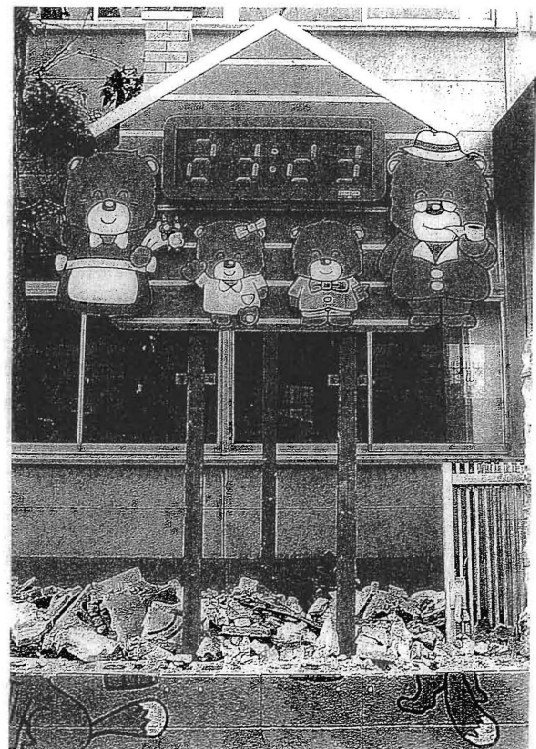
神戸平安幼稚園



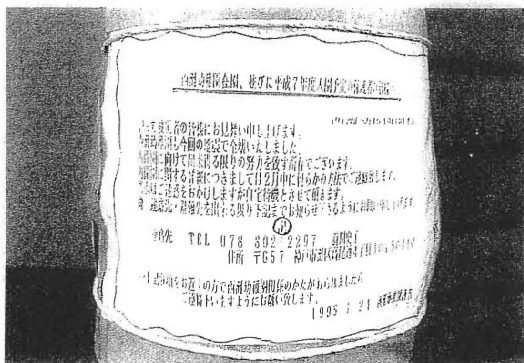
昭和幼稚園



西灘幼稚園



昭和幼稚園



西灘幼稚園

阪神・淡路大震災後の動き（活動）

7年1月17日	兵庫県南部地震発生。 兵私幼協災害対策本部設置。（西宮市松風幼稚園内）	7年4月5日	文部省・兵庫県 共催による災害関係事務手続説明会。（私学会館）
1月18日	全日私幼連災害対策本部設置。	4月11日	被災園へ災害見舞金交付。（42園）（神戸） 近畿地区公団体長会。（神戸）
1月21日	近畿地区会菅田会長、災害状況視察。	4月15日	兵私幼協災害対策特別委員会。（私学会館） （義援金配分等の検討）
1月24日	近畿地区会災害対策委員会。（京都） （全日私幼連小林会長ほか出席）	4月17日	全日私幼連災害対策委員会。（東京） （義援金の配分等）
1月25日	文部省等関係機関へ緊急支援要望書提出。（私学総連）	4月24日	近畿地区会災害対策委員会。（大阪）
1月26日	兵私幼協常任理事、各市長会議。（尼崎市）	4月27日	文部省・大蔵省等への要望。（全日私幼連・兵私幼協 東京）
1月28日	近畿地区会災害対策委員会。（和歌山）	5月2日	兵庫県知事に対し私立幼稚園の救援対策を要望。（兵私幼協等） 兵私幼協理事会。（私学会館） （災害対策について）
1月30日	各省市・私学共済・私学振興財団等へ被災状況の報告と支援要望。 （全日私幼連・兵私幼協）	5月8日	近畿地区会会長を訪問し義援金対策の協議。（和歌山）
2月3日	兵庫県知事に対し被災園の状況報告及び支援要望書提出。（兵私幼協） 兵私幼協緊急理事会。（三田市）	5月11日	} 全日私幼連常任理事会・団体長会及び理事会。（東京） （災害対策）
2月8日	文部大臣へ私学の早期復興のための支援措置に関する緊急要望書提出。 （全私学総連） 兵私幼協、被災園児の入園料・保育料の減免（除）の取扱いについて見解発送。 近畿地区会災害対策委員会。（大阪）		
2月9日	兵私幼協、災害対策等に関する顧問弁護士依頼。	5月18日	兵私幼協災害対策特別委員会。（私学会館）
2月14日	文部省等関係機関に被災私学に対する支援要望書提出。（私学総連） 近畿地区会災害対策委員会。（大阪）	5月23日	兵私幼協災害対策特別委員会。（私学会館） （義援金の配分について）
2月15日	兵庫県庁に貝原知事を訪問、被災園の復旧支援の要望並びに一般県民への義援金目録を寄贈。 兵私幼協緊急理事会。（私学会館） 兵私幼協災害対策特別委員会設置。	5月26日	兵私幼協理事会。（私学会館） （災害対策について）
2月17日	文部省・私学共済・私学振興財団共催による災害事務手続説明会。（三田市）	5月29日	私学総連、理事・評議員会。（私学会館） （災害対策について）
2月27日	全日私幼連災害対策委員会。（東京） （被災状況報告及び義援金の依頼等）	5月31日	全日私幼連総会。（東京） （義援金御礼と災害報告）
2月28日	兵私幼協災害対策特別委員会。（私学会館） 全日私幼連常任理事会。（東京）	6月5日	近畿地区会長へ御礼。（和歌山）
3月7日	兵庫県に義援金1億円寄託。	6月7日	近畿地区会役員会。（大阪） （近畿地区会義援金報告）
3月8日	全日私幼連理事会。（東京）	6月8日	全日私幼連政策委員会。（大阪） （被災地私幼政策会議）
3月13日	} 文部省・私学共済・私学振興財団共催による災害事務手続説明会。（東京）	6月9日	全日私幼連政策委員会 兵庫県視察。（被災園）
14日		6月16日	第一次義援金交付。
3月16日	兵私幼協災害対策特別委員会。（私学会館）	7月3日	全日私幼連団体長会。（東京）
3月25日	近畿地区会災害対策委員会。（大阪）	7月12日	第二次義援金交付。
3月31日	「被災にあった子ども達への心のケア」教員研修会を実施。	8月31日	第三次義援金交付。

第3章 被災者の救援及び生活支援対策

・式次第

13:55 0開	神戶市合同慰霊祭	中島	後藤 市子
14:00 0開	1分飾	山	山 山
14:01 0開	神戸市合同慰霊祭	山	山 山
14:05 0開	G線上のアリア	山	山 山
14:09 0開	神戸市長	山	山 山
14:20 0開	神戸市長	山	山 山
14:28 0開	神戸市長	山	山 山
14:31 0開	神戸市長	山	山 山

神戸市合同慰霊祭の開催

震災により犠牲となられた方々を慰霊するとともに、災害に強いまちづくりの決意を表明し、市民の防災意識の高揚を図るため、神戸市合同慰霊祭を開催した。

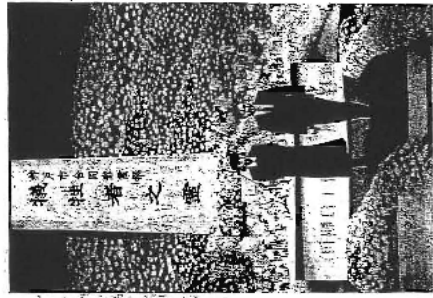
2月7日の市長記者会見で慰霊祭の実施を对外発表。その後、ご遺族に対して個別にご案内ができない状況にあるため、ご遺族、並びに一般市民に対しては報紙により広く参列を呼びかけた。

3月5日は市の公共施設で半旗を表明し、市意を表明した。

(神戸市合同慰霊祭の概要)

- ・日 時 平成7年3月5日(日)午後2時より
- ・場 所 神戸文化ホール、屋外特設テント(大倉山公園、湊川多聞小学校・楠中学校各グラウンドに設置)
- ・形 式 無宗教形式とし、香料、供花、供物等お供えは辞退。
- ・犠牲者名簿 3月5日までに判明した死亡者3,876人を犠牲者名簿に掲載し、壇上に配置した。
- ・献花の方法 3月5日 式典で主催者・米賣献花(菊のリース)を行った後、参列者献花(菊1輪)を午後7時まで行った。
- ・参列者数 3月6日 参列者献花(菊1輪)を午前9時から午後7時まで行った。

日 時	人 数
3月5日(日) 午後7時まで	11,200人
3月6日(月) 午前9時から 午後7時まで	1,820人
計	13,020人



神戸市合同慰霊祭に参列される皇太子同妃両殿下



天皇皇后両陛下による激励(長田区)



合同慰霊祭で献花される皇太子同妃両殿下



共同仮設店舗で営業を再開した富前市場を視察される秋篠宮同妃両殿下



神戸諏訪山小学校の避難者を激励される皇太子同妃両殿下



神戸動物救護センターを視察される秋篠宮同妃両殿下

仮設住宅の人々との交流

幼稚園から約五分のところにある御旅公園に、仮設住宅が建った。その住宅は、高齢者・障害者のために建てられ、約百二十三名の方が居住されている。一人住まいの高齢者は、六十四名で、住宅を失い、心身に大きな打撃を受けておられるという。高齢で障害という重荷を背負っておられる方々に、近くにいる私たちに何かできることはないか、いや何かしなければならぬと考えるようになった。

仮設住宅を訪ね、交流の意思を述べると、「ありがとうございます。ぜひよろしくお願いたします」とのこと、さっそく幼児たちには、心をこめて描いて作った「ミニ額縁」を持って、第一回の交流（平成八年二月二十六日）を行った。会場となったふれあいセンターの集会場に、大勢の方々が集まっておられた。幼児たちは、歌い、合奏をし、恐竜体操をした。一緒に「雪」の歌を歌った。一人一人の方と握手をしながらプレゼントを渡した。会場は、笑顔、拍手、拍手でいっぱいになった。「ぼく、ドキドキしたわ」「おじいちゃん、大きい声でしようずやなあいうてくれてん」「次はいつ行くの」と本当にうれしそうであった。

その後十回ほど交流を重ねた。お手玉遊びをしたり、手作りのお手玉をいただいたり、ふれあいセンターミニ運動会に招待されたり、手作りのボーリングを作って待っていてくださったり……日を重ねるにつれて、お互いの気持ちを通じ合い、交流が待ち遠しくなっていた。

その中で、いちばん印象に残っていることは、運動会と生活発表会（呉田幼稚園がやきをのこし）に来てくださったときのことである。運動会では、ぜひ参加させてほしいとのこと、どんな形で

参加していただくか、教職員で話し合い、保護者の理解を得るようにも努めた。

当日は、四十五名の方が出席され、一緒に汗を流し、幼児たちには、いつものあたたかい拍手を送ってくださった。幼児を核に、保護者、地域、米賣の方々が一つになれた。仮設住宅の方々と幼児たちの交流から、幼稚園が、地域の方々に支えられ、育てられていること、同時に、幼児の「かがやき」が人々を元気づけ、励まし、希望を与えていることをつくづく感じた。どうぞ、仮設に住む方々、この困難を乗り越え元気を出して前向きに生きてくださいたいと祈らずにはおれない。

それからというもの、園庭活用が活発になり「泥のひろば」の利用者も多くなり、日曜日は少年野球の試合場やグートボール、夏休みはラジオ体操の場として、地域の方々に大いに利用されていることを何よりもうれしく思っている。

平成七年八年度 呉田幼稚園長 勝 又 寛 子



「あつ砂や！ はだして遊ぶつ」

幼児が園庭の片隅に小石で周囲を囲み、砂場を作ろうとしているのを見て、

「あつ、砂や」

「お山、作るう」

「みんな、砂場で遊ぶう」

「はだして、遊ぶう」

と、幼児のうれしそうなきが響き、笑顔がよみがえった。

幼児たちによりよい環境を、と殺風景な園庭の景観を何とかしようと考え、工事用のフェンスを取りはずし、花壇フェンスと花を植えたプランターを並べた。

園庭が、明るさを取り戻した。

その中で学んだことは、人のすばらしさ、協力し助け合うことの大切さ、人は困難に遭遇した時、優しさと強さを発揮するものだとことを知った。

「ジャンボがこわれている！」

幼児が大好きだったジャンボすべり台に、大きな亀裂が入った。

お腹ですべったり、転がったりして、友達とスピードを競い合った。鉄ボールやフープなどの用具を使って遊びをつくり、みんなの触れ合いの場、笑いが絶えない遊び場だったジャンボすべり台。

平成七年九月十八日、ジャンボすべり台の修復工事が終わった。テープカットの日、ジャンボの上からニコニコ笑顔で園庭を見下ろす幼児たち、テープを切るや否や、我先に勢いよくすべりおり、何度も何度も繰り返すべって遊んだ。こうして、ジャンボすべり台とともに笑顔が戻ってきた。現在の幼児たちは、震災のことをほとんど知らない。

でも、私たちは忘れない。大好きなすべり台を滑ることができなかった幼児たちの寂しかった思いを、命の大切さを、そして、みんなで力を合わせて生きていくことのすばらしさを……。

大池幼稚園



風を切ってすべったよ



大きくひびわれたジャンボすべり台と園庭



職員作業で作った仮設砂場

有馬幼稚園

阪神・淡路大震災に遭遇し学んだこと、思ったこと

各園の感想文の中から

1. 施設・設備について

- ☆ もし園児の在園中に発生していたら、教員・職員が倒れその下敷になったり、園舎が倒壊した時など、どんなに大勢の犠牲者がでたかわからない。あまりにも関西は安心との速報で油断していた。今後は、これ以上の頑強がでて戸棚やピアノが倒れないように、全てフックで留めたり、耐金でくりつける等日常の準備が大切で非常時対策を日頃からたてるのが肝要である。
- ☆ 保育室の安全について総点検をする。ガラス（窓・額ぶち）ピアノ、戸棚・両開き戸の継ぎ目を見直すことの大切さを痛感している。
- ☆ 毎年のように園舎・園庭の大修理をしていたので大地震でも倒壊をまぬがれた。気にかかる所を毎年補修する事が如何に大切か身にしみた。今後もしっかり点検をしなければならぬ。
- ☆ いつも依頼していた工務店がいち早く修理に来てくれた。常日頃から工事業者との信頼関係を作っておくことも大切である。
- ☆ 園再開の前に専門家に見てもらい、診断を仰いで、我が園安心して預ける事ができるような信頼を得るだけの処置をする。
- ☆ 怪我や、体調を悪くすることのみ念頭に置いて近代的設備に頼りすぎずは、困る事も多い。先ず基礎をしっかりする事が大切である。

2. 避難訓練など

- ☆ これまで避難訓練にしても火災の想定が多く地震の訓練が少なかった。「生命線」を目標にいざという時にどのように対応するのか具体的な方法について教員の共通理解を深め、幼児といえども自分自身を守る事についての防災新聞に真剣にとりこむよう指導することが大切である。
- ☆ 今では「グラッときたら机の下へ」が子供ながら身についてきた。防災アクションを持つことを奨め、日頃の保育の中に身を守る方法を楽しく理解させ、安全教育をたえず心がけなければならぬ。

3. 子どもを親に手渡ししたり、連絡する為

- ☆ 緊急時はどのようにして確実に親に手渡せるか。電話が使用不能の時の連絡網（緊急避難時の1次・2次・3次避難先をふまえた）
- ☆ 非常時の素早い連絡方法を日頃から準備し、電話に繋がなくても職員と園、園児の家庭と園の連絡網を作成しておく必要がある。連絡のつかない時はどのようにするかを各家庭と充分連絡をとって非常時に決め、保育室の壁に貼っておかないと、いざの時に間に合わない。
- ☆ 無線又は携帯電話をバスの積み込み、いざの時の連絡ができるようにする。
- ☆ FAXが電話よりよく役立った。

4. 水の確保

- ☆ 園の井戸水が近所の人達に役立ち喜ばれた。
- ☆ 園のプールに換水が無く、下水用水が確保できて助かった。（今後冬も水をためておく）
- ☆ 近くの溝をせき止めて下水用の水として運んだ。飲み水の何倍も生活用水を必要とする事に初めて気づいた。

5. 心のケアについて

- ☆ 子どもたちの中にも夜泣き、嘔吐等の症状がでたり不安感から便所も一人で行きなくなったりしたので、伸び伸びと安心して遊ぶことで、早くこれらの症状が治るようと考え楽しい保育を心掛けた。一方母親が子どもを手放す不安を訴えるものもいて、子どもの方は意外と早く元気に遊べるようになったが、母親の分離不安の方がなかなか難しい問題であった。
- ☆ 明確に相談に応じられるような専門家を擁した機関の必要性を痛感した。

6. 各種調査について

- ☆ 県・市当局や県市幼稚園団体等から状況と似た内容の調査表がきて忙しい繁雑な時に大変であった。できれば話し合ってお互いの調査用紙で済むように、他はコピーで見るとしてはしかった。

7. 文部省・兵庫県教育課について

- ☆ 大きな被害を受けたため、安全性についての調査を希望する幼稚園に、文部省は早々と災害状況の調査表を派遣していただき、相談と指導に当たっていただきました。子ども達をお預かりするのに安全を確保しなければなりませんので、専門家に見ていただくことができて安心いたしました。
- ☆ 兵庫県教育課においては、兵庫県私学協会、兵庫県私立幼稚園協会からの賛同を受け、災害復旧補助について公私の格差分を経費補助として追加していただくなど、格別のご配慮をいただき感謝しています。
- ☆ 文部省の復旧補助については、申請手続きが複雑で三社見直しなどが苦勞しました。メジャーをあてての写真を撮っておくことが必要なことなど大変勉強になりました。震災により心身ともまいっている中、復旧補助の申請をきめられた幼稚園も多数ありましたが、兵庫県教育課の親切な指導により申請することができました。
- ☆ 保育料、入園料免除について、先に公立学校のことが新聞発表され、その後「私立学校はどうするのか」同様のように考えてほしい」と陳情を重ね、8割から0.5割の助成をするという結果がでた時はありがたかった。
- ☆ 免除の基準となる全壊、半壊、一部損壊等の基準が市によって異なるようで、市の証明を見て判断する保育料減免の対応に心を痛めることも多かった。
- ☆ 102条園についても、同様の措置をしていただき大変感謝しています。

子どもの心のケア

8. 全日私幼・私幼・各市私幼団体に対して

- ☆ お忙しい中を一生懸命対応して頂いて感謝している。全私幼の対応がかなり早く、そのバックアップに力強さを感じた。特に全国私幼の仲間から多額の義援金をご協力戴いたことに心から感謝申し上げます。今後もし各地に大災害の起きた時は全私幼の仲間として助け合い励まし合う大切さを感じました。

9. 今後の危機管理について思うこと

- ☆ あまりにも無防備で油断していた。今後このような事態がたえず保育中に発生しても、しっかり対応できるよう、常日頃から考え準備しておかねばならない事を肝にめいた。防災と危機管理について見直しの必要性を強く感じた。
- ☆ 天災に備えて引当金の準備金を積立てておくことも大切ではないか。天災後にも必要経費を見直すべきである。
- ☆ 園は地域の人々と共に生きる時、その存在の意義がある。非常事態の時には園児の安全確保と保護者への正確な手渡しは当然の事であるが、その後も地域に開かれた園としてお役に立つことが大切である。（避難者受け入れ等）
- ☆ 救急用品など日頃から少し多い日に備えておく事が大切である。飲み水の確保もミネラルウォーターでなくても、毎日やかに水を汲み置きするとか、生活用水は、プール等にいつも水を入れておく等、日常の準備が大切である。
- ☆ 額ぶちなどの落下を防ぐためフックを取り替えたり、ガラスをアクリルに替えることが大切である。
- ☆ 月日と共に忘れることなく、毎年見直して非常時に備えることが大切である。

10. 今後大災害で施設・設備に被害がでたとき

- ☆ 巻尺をあてて被害の規模がわかる写真をとっておく。
- ☆ 一級建築士など専門家に被害状況を調査していただく。
- ☆ 被害状況を県・市及び幼稚園団体へ報告する。

災害を体験した子どもたちの心は、種々の苦しみと恐れ、大半が壊れていると考えられる。

災害に子どもたちから大切な家族や友人、家、自分の宝物など多くのものを奪っていった。そして子どもたちの小さな脳の中では、まだあのときの恐ろしさを忘れることができずにいることだろうと思われる。

このつらい時期を乗り越え、こころ豊かにたくましく成長していくためには、子ども自身の力だけでなく、保護者や周囲の大人たちが子どもたちの傷ついた心を正しく理解し、愛情のこもったケアをしていくことが大切である。

ここに、震災を体験した幼児の行動の列を挙げ、そのケアの仕方を考えてみたい。

例) 4歳の他園からの緊急入所児A子は登園時、父親の胸にしがみついで激しく泣きつづける。

考えられる原因として

- (1) 産婦である母親が震災直後、A子と父親に預け被害の最も大きい灘区へ仕事に出かけたが、交通渋滞で帰宅できず職場で寝泊りする日が続いた。
- (2) 面倒をみていた父親の一日も早く仕事に復帰しようとする姿をA子は察知して、母親のように帰らぬ日の不安があった。
- (3) 同居している隣室をもつ叔母が、地震時パニック状態に陥った姿をA子は見えていた。

以上のようなことが原因となり、A子の精神状態が一層不安定になっていったのである。入所1週間後、母親に手を引かれ登園して来たA子は門柱にしがみつきて「ママいかないで」と泣き叫ぶ。

A子の気持ちが落ち着くまで家庭で面倒を見るよう母親に勧める。母親の職場も少しは落ち着いたということで、園の勧めに応じてくれた。

そして一週間後、A子はやっと笑顔で元気に登園してくるようになった。

例2 2歳女児B子は退避の準備をさせようとパジャマを出した途端に泣き出し、絶対に寝床に入ろうとしない。
カーテンを引いた途端、更に大声で泣き出す。部屋の明るい所に連れ出すと泣きやむ。

考えられる原因として

- (1) 震災時、文化住宅の2階に住んでいて全壊。B子は両親の間にさまされるようにして屋根の下敷きになり約2時間後、親戚の人に助け出してもらった。
- (2) 事業は被災時経歴が長いので、自分の身も気遣いありでB子の全交介助が不可能な状況であった。
- (3) 一時親類宅に身を寄せるが、もともと父親が日雇いのため生活のメドも立たないまま、仮設住宅に引っ越す。しばらくの間親類と一緒に過ごして心の安んでははかれたかに見受けられたが、職探しに出る父親と身体をいたわる母に連れられ約1時間かけて仮設から通園してくるようになる。

震災時、B子は強い恐怖心を抱き、指やみの中にあることが、すなわち恐ろしいことの無数のイメージを持ってしまったようである。

家庭では暗くなるとあかあかと電気をつけ、テレビのボリュームは大きくしないと恐がり、泣き続ける。寝る時もそんな中で泣き寝れるようにして寝るらしい。保育園では当初、午睡時間になると保育者がカーテンの外側(窓ぎわ)で抱っこしたり、廊下の電灯の明るい場所で抱っこして眠たくなるのを待つようにした。

次第にパジャマに着替えるまでになり、そのうちカーテンの外側に布団を用意し、そこに気持ちのいいミッキーマウスのパスタオルを敷き、やさしく語りかけながら眠りをさせていった。完全にカーテンを引いた中で眠れるようになったのは2ヵ月後であった。



☆こころや体調の変化はないだろうか
災害の恐怖やショックからこころやからだのバランスをくずすことがある。
毎日の健康管理が大変で健康に対する母親・保育者のやさしい気遣いは子どもたちに安心とやすらぎを伝える。

- 脱喪のチェックポイント
- ・元気はありますか
 - ・イライラしていませんか
 - ・いつもと変わらない顔色ですか
 - ・皮膚の赤みや、張り具合などは変わりがないですか
 - ・病気を思わせるような症状はありませんか
 - ・機嫌はいいですか
 - ・食欲は以前と変わりないですか
 - ・目はいきいきと輝いていますか

保育士の声

- ・交通事情が悪く保育園の門に立ったのは地震から4時間後でした。再開するまで同時に全児童が無事だと聞き安心しました。(げだつ保育園 山田 由美 保育士)
- ・大震災により、生きているのではなく大自然の恩恵に守られ生かされていることを痛感しました。日々保育に生かしていきたいと念じます。(げだつ保育園 山田 諭子 園長)
- ・個人を大切に支え合う「共生」が芽吹き育っている。私たちは今こそ、福祉としての保育の業を目に見える形のあるものにしていこう。(東岡山保育園 谷口 穂子 主任保育士)
- ・大地震、子ども達は親しい時間でもあった。保育中だったと思うと身震いがした。数日後全園児の無事確認ができた。救われた。感謝です。(天海乳児保育園 岡島 久枝 保育士)
- ・地震後、子どもたちの災害を確かめるため職員と家を訪ねた。全員無事だった。全園無事だった子どもが多かったが全員無事良かったと思う。(天海乳児保育園 斎藤 美保 保育士)
- ・地震後、洗心心を閉めてくれたのは、被災された長田区、瀬区の友人達でした。その方々の心強さ、前向きなノアイト心でした。(あさひ保育園 今井 真紀 保育士)
- ・辛い家族や家も無事で園へ出勤。電話連絡で園児の無事を確認しひと安心。子ども達が一時避難している保育園へ足を運びました。(山合保育園 大賀 順子 保育士)
- ・地震から3時間後、私は子どもたちと共に保育室に居た。寒さと揺れのおびえながら、この子どもたちを守るのは私心だ!!と強く思った。(あい保育園 松井 優子 保育士)
- ・地震によって欠けたものはたくさんありますが、得たものも、多くありました。そしてこれからも子どもたちと共に成長していきたいです。(げだつ保育園 山崎 優子 保育士)

阪神・淡路大震災における

東灘区 9園 (深江・木丘・本山・魚崎・遊喜・兵田・住吉・住吉台・御影)	
<p>教職員・園舎・園舎の被災状況</p> <p>(教職員の安否) ・電話不通、交通機関マヒの中、出動可能な教職員(二輪車に乗れる)により、安否確認 ・確認事項 ・負傷者、死亡者 ・激震地に居住し避難している者</p> <p>近隣の小学校と連携をとって役割をとるべきであった</p> <p>緊急時の園舎等の状況確認について、組織図を作成しておきたい。常設の電話では対応できないので、軽量の携帯電話が必要である</p> <p>(園舎の被災状況) ・建物に破壊し、手がつけられない状況である ・二次災害が予想され、看過できない状況である ・被災箇所の確認・危険箇所の調査指示 ・被害状況の報告</p> <p>報告</p> <p>教育委員会 対策本部 園長会</p> <p>対応</p> <p>管理課(応急補修) 水道局(水道工事) 住宅局管轄課</p>	<p>在園児と家族の安否(生存)確認</p> <p>(家庭訪問) ・徒歩、自転車で行く ・本庄幼稚園では、倒壊の家が多く自宅にいるのは52名中9名である ・留宅には、安全確認の除紙をする ・地区にガスが発生し、全員出動できない日もあった。各自自宅から電話で安否を確認する</p> <p>(避難所を訪問) ・同僚家庭が多く2名で行動し1名は連絡係として園に待機する</p> <p>(近隣小学校との連絡) ・小学校の先生と連絡を取り合い、兄弟関係から居場所を知る ・小学校で、児童の名簿と園児名簿を一緒に持ち帰る</p> <p>(消息の分かった幼児への対応) ・消息の分かった人には、電話や園よりで幼稚園の無事を知らせる ・本人及び家族の無事、居所・連絡先をクラスごとに、名簿一覧表を作成し記入する ・市外(遠方)に避難している場合は、電話又は手紙で連絡をとる</p>
<p>(全園した園舎分室)</p> <p>・園舎損壊程度・教職員の安否などの被災状況などの報告 ・小学校教員兼用手続き ・重要物品の搬出→保管場所の選定・輸送手段・搬出順位の依頼 ・ボランティア・報道関係者への対応 ・事後作業状況記録と写真 ・プレハブ園舎建築状況等記録と写真</p> <p>被害の軽度の園から教職員を災害地へ派遣することを考えるなど全園が共同で支援組織が必要である</p>	

幼稚園としての対応

<p>避難所となった場合</p> <ul style="list-style-type: none"> ・避難所になったいきさつをよく把握し対応が適切にできるよう努める ・幼稚園本来の姿に鑑みよう見守る ・被災者の状況を見て援助する ・保護者、地域との話し合いの場を見つけて参加する ・住民への食事配りや清掃など教職員も協力する <p>今後も地域の方々と交流を深め、信頼関係を築いていきたい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園の門扉の鍵が壊れ、2保育室がすでに避難所になっている。教職員が地域と共有の姿勢で対応する ・非常時の対応を地域とともに話し合い決めておきたい (回答) 避難住民を受け入れるために必要な箇所の鍵は、区役所と防災福祉コミュニティ等がそれぞれ保管する ・地域住民100名が避難してきて、5保育室を開放するが、まだ公園に待機している状況である。地域に向き姿勢をとる。物資、医療、購送物の対応が十分できないため避難住民は、できる限り指定避難所へ移動することになる ・指定避難所への移動を円滑にするために地域との連絡を早くとる ・臨時に避難所として開放した所も、指定避難所と同様の運用となるような措置をきたい 	<p>今後の課題 (平成7年3月31日 調査)</p> <p>幼稚園再開に向けて</p> <p>(臨時登園) ・避難指導をする(リュック、長ズボン着用など)</p> <p>(保護者会) ・家庭の状況を確認する</p> <p>(園舎・通園路など環境整備) ・深江、本山、本山3園合同で再開を進める ・園舎・通園路の詳細な安全点検をし確認する。</p> <p>(避難所となっている幼稚園) ・園の現状を把握 ・テントが張られているが、園庭の1部に遊び場となる所を確保する ・避難所になっていたため、夜間、廊下などを清掃し、保育環境を整える。お昼の消毒は保健所に依頼する</p> <p>(再開の準備) ・在園児園舎一覧表にもとづいて再開のプリントを手渡す ・「登園の日時についてのお知らせ」を提示する ・指示先 (避難所、避難所、自宅) (仮入園先幼稚園)</p>
---	---

たくさんの方々からの贈り物

ロマンボール協会より
ペンダントの講習会



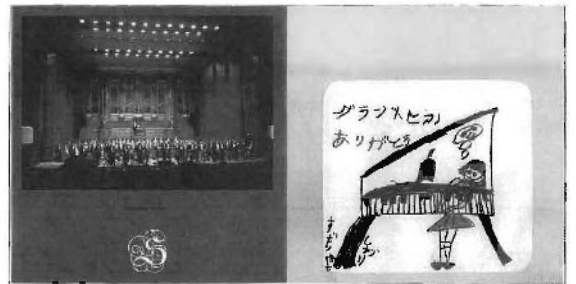
おばさんへのプレゼント



プログラム



外国のお友達からの手紙



ドレスデン国立歌劇場管弦楽団バンフレットに掲載された園児の絵

3. 外国からの激励

今回の震災に対して、外国からも多くの支援、励ましを受けた。地震発生後、本市が姉妹・友好都市、親善協力都市提携を行っている各都市の市長から見舞い、激励の手紙を受け取ることも、支援の申し出があった。神戸市長あての見舞いの手紙は37カ国、128通にのびた。また、市民に対して、海外在住の日本人を含め、外国からの激励、寄せ書きが多数寄せられるとともに、折り紙、字畫のためぬいぐるみ、被災者支援のためのCDなどが寄せられた。アメリカ・カリフォルニア州マリブ市からハリウッドスター等著名人の色紙をもちにつくられたメッセージカード約1,500枚が送付され、市内2カ所で展示した。激励の手紙などに、関係部署を通じて、保育園、学校、遊戯所等に送付された。

また、約40国・55件におよぶ海外各国の大使・市長、在日外国公使の大使・総領事等が神戸市役所を訪問し、義援金・見舞金や支援の申し出などを行った。

姉妹都市からは、前記の見舞いの手紙以外に主なものとして、次のような支援を受けた。

○シアトル

- ・中長期的な支援活動を行うため、シアトル市を含む周辺地域の行政、経済界、民間の主要組織からなる神戸地域対策委員会を設立。
- ・シアトルの各団体・個人から多くの義援金・見舞金を受けた。

○マルセイユ

- ・芸術家団体がチャリティショーを開催。

○リオン・ガ・ジャネイロ

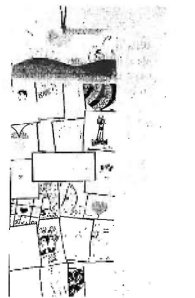
- ・4月30日、神戸ユニバー記念競技場でヴィッセル神戸と同市選抜チームとのチャリティサッカーマッチを開催（約2万0千人観戦）。同市長も同時に来神。収益金を義援金・見舞金として寄付を受けた。
- ・日本人会からの義援金・見舞金の寄贈。

○天津

- ・義援金セット、下着、靴下など日用品450

箱の寄贈を受けた。

- ・8月2日、神戸国際会議場で「武蔵京剣オベレック」を開催。市民約1,200人が観劇した。
- ブリスベン
 - ・お茶、トイレットペーパー、食器などの日用品、水、食料品など約50の寄贈を受けた。
 - ・8月29日～31日、同市長が来神。義援金・見舞金を受け取った。
- パルセロナ
 - ・義援金・見舞金を受け取った。
- リガ
 - ・12月21日、リガ・カテドラル少年合唱団が神戸を激励のため訪問。津島小学校で歌の交流会を行った。



ハーバランドスペースシアターで展示を行った『歯をこえる心』イラスト色紙展



ニューヨークから送られた激励の寄せ書き

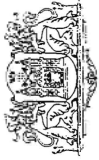
ドレスデンからのプレゼント

新園舎が完成した平成九年一月十八日に、グランドピアノの贈呈式を行う。遊戯室にあったグランドピアノが、阪神・淡路大震災で壊れてしまったからである。この話を、新聞社を通して知ったドレスデン国立歌劇場管弦楽団の指揮者の方から、「グランドピアノを寄贈したい」との話が、日本の音楽事務所から前園長にあった。新園舎が完成して、新しい遊戯室で贈呈式を行うことを、年度当初に引き継いだ。新園舎の引っ越しも終わり、明るく木の香りいっぱいの遊戯室に、素晴らしいグランドピアノが届いた。

贈呈式の内容には、いただいた方への感謝の気持ちと幼児たちの元気な姿を、ドイツに届けようという目的で計画した。二箇井小学校の富井先生のピアノ演奏を聞いたり、幼児と親が歌ったりするミニコンサートを開いた。ドイツの歌「カッコウワルツ」を、ドイツ語で「クッククックルフトアウステン」と幼児たちの元気な歌声が遊戯室いっぱい響きわたった。また、当日は、音楽事務所の代表の方から「このピアノで歌ったり、合奏したりして、音楽の大好きな子供になってください」と管弦楽団の方のメッセージも伝えられた。会の様子をビデオに撮り、幼児のメッセージとともにドイツに届け、その返事は、「来年の二月に日本で演奏会を開催するので、そのときに御影幼稚園にも寄ります」とのことであった。幼児たちは「ドイツってどんなところかな」「どんな人が来るのだろう」と今から楽しみにしている。震災でたくさんの方々から励ましをいただいた中で、世界的に有名な音楽家の方との交流は、いつまでも幼児の心に残り、素晴らしい思い出となることと思う。

平成八年度 御影幼稚園長 梶田 みよ子

姉妹都市リガ市からの見舞いの手紙



RIGAS DOME

RIGA CITY COUNCIL

17.01.1995.

Mr. Kazutoshi Sasayama
Mayor
City of Kobe

Fax No. 078 322 2382

Honorable Mr. Kazutoshi Sasayama,

With our deepest sympathies we are turning to you since the tragic events have taken place in your city and its surrounding area. We are very sorry to hear about one of the most disastrous earthquakes in our history that has overtaken your region, especially Kobe being our partnercity.

We feel very much worried about the situation in Kobe. We would like to express our condolences to all citizens of Kobe and the people who have suffered in this tragedy.

On behalf of the Riga City Council and all citizens of Riga, please accept our support and concern in this tragic for all of us day.

Yours sincerely

Māris Purgailis
Mayor

3. K. Valdemāra Str., Riga, LV - 1509, Latvia
Phone: (371) 2078563, Fax: (371) 205439
Telex: 161122 RIKVAS SU

K. Zolotare Str. 2, Riga, LV - 1509, Latvia
Telephone: (371) 200030, 25441, 25439
Telex: 161122 RIKVAS SU



アメリカの
読書会



ホルンと演劇と歌



兵庫県六甲郡
一宮町森林組合より
コクハウスと
テーブル



自衛隊より
ひな人形の奇譚と
吹奏楽の演奏



＜資料出典＞

兵庫県私立幼稚園連盟、神戸市立保育園の資料より

3. まとめにかえて

1) 調査のまとめを終えて

今回の調査では、いくつかの幼稚園や保育所にヒアリングした内容が含まれていた。その中で特に印象に残ったのは、「幼稚園や保育所は安全である」という保護者の印象であった。なかには、地震直後に保護者が園に駆けつけたが、子どもが無事であるのを見て一安心すると、自宅や職場の片付けをするために、子どもを園に預けたまま引き返したという例もあった。幼稚園や保育所なら安心して子どもを任せておけるという、保護者の信頼がそこにあるように感じた。一方で、保育者側は、全ての子どもを保護者のもとに無事帰すまでは、とにかく必死であった様子が見て取れる。今回の対象の多くの園では、保護者と連絡がとれない状況のなかで、繰り返される大きな余震に耐えながら、子どもと共に保護者のお迎えを待ち続けていた。甚大な被害が生じた沿岸地域にある園では、保護者と連絡が取れないまま一夜を明かしたという例もあった。

そうした、いわば極限下の状況にあっても、保育者は毛布や布団、送迎車の暖房で子どもが寒くないようにと工夫をし、子どものおやつを用意し、子どもと歌を歌うなどして、子どもを勇気づけた。自らも家庭を持ち、その家庭も被災しているにもかかわらず、園の先生方は遅くまで園に残り、翌日以降も出勤して園の片付けや保護者との連絡をとり続けた。ヒアリングの内容のあちこちに、そうした保育者としての献身的な働きを見ることができた。今回の大震災での民衆の対応に、世界から賞賛の声が上がっていると聞く。筆者は、被災してなお、献身的な保育を行った保育者の先生方にこそ、今回のヒアリング対象には含まれていない園の先生方も含めて、特に敬意を表したい。

本震から半年が経過し、被災地でも少しずつ復興のきざしが見え始めていると言われる。被災県にある幼稚園や保育所でも、ほぼ元通りの保育を行っているところも増え始めていると聞く。

しかし、依然として避難生活を余儀なくされている子どもたちや、不自由な環境の元で生活している子どもたちも数多い。筆者がいくつかのヒアリング調査を担当した福島県においては、都市部の園においてもなお、元通りの保育とは言い難い状況が続いている。

先日、筆者は今回のヒアリング対象となった福島県内の保育所のうち、何カ所かを再訪問し、現況を知る機会を得た。その地域では現在もなお屋外活動が短時間に制限されており、子どもたちはほぼ毎日、室内でのみ過ごすことを余儀なくされている。夏のプールも見送られ、運動会も大幅に縮小されるなど、従来の保育とは事態は一変している。それでも保育所の先生方は、室内で身体を動かす遊びを考えたり、遊具を工夫したり、毎日智慧を働かせて保育を工夫していた。ある所長先生は「今のところは何とかやれています」とおっしゃっていた。先生方の工夫のおかげか、少なくとも今回訪れた園では、落ち着きがなくなったり、姿勢が悪くなった気がするなどの声もあったものの、懸念する声はそれほど多くはなく、幸いにして子ども体力や様子に目立った変化は見受けられなかったように思う。

しかし現場の不安は、今後いつまでこのような状況が続くのか、という点である。屋外活動の可否についても、一定の基準はあるものの、事態が長期化すれば保育者を悩ます問題で

あろう。低線量の被ばくが子どもにどのような影響を及ぼすのか、保育環境の制限が発達にどのような影響を及ぼすのか、そしてそれらの対応について、現時点では十分な知見が示されているとは言えない。こうした問題に積極的に焦点を当て、できるだけ早期に実証的な知見を積み上げ具体的な処方箋を呈示したい。これは研究者にとっての責務のひとつのようと思われる。

最後に、今回のヒアリング対象の園のうち、被害が甚大であった沿岸部の園では、何人かの子どもたちが保護者のもとに帰った後、結果的に命を失った。冥福をお祈りしたい。

今回の調査に協力していただいた全ての先生方とその関係者、現職の保育者の方々、そして子どもたちに感謝いたします。

(音山若穂)

2) 災害に学ぶ ～資料収集を担って～

この度の学会企画緊急シンポジウム実施に際して、資料展示が決まったことを受け、できるだけ多くの事実を集めることを心がけた。

実体験の提供や聞き取りに走って下さった方々によって具体的な事実の詳細を明らかにする一方で、多くの声を拾うために岩手、宮城、福島の学会員、学会役員、名誉会員の皆様にアンケートをお願いした。資料内容には地域差、施設差、資料提供者の立場の違いなどの偏りがあったことは否めない。しかし、それの中に共通する基本的な実態が浮かび上がってきたといえる。

「保育の場で地震、津波、放射能による前代未聞の体験した」、それは子どもにとって、保護者にとって、保育者にとってどういうことであったのか、その意味は後世において検証されることであろう。今やるべきことは「そこで、子どもは、保育者は、そして保護者は何を考え、どう行動したか」を明らかにし、残すことである。そして、そうした現実を理解し、共有して、今後の保育の在り方に向けての糧にしていくことが関係者の責務であると考えます。そのため、阪神・淡路大震災の記録からあらためて学ぶために、シンポジウムでの報告と資料の提供をお願いした。

災害からの復興に道は険しく、放射能災害は進行中で、物心両面での支援が求められている現状にもかかわらず、過去の出来事として忘れられようとする危惧と過剰に被害地を忌避する差別の風潮にさらされている。単に元に戻すのではなく、この状況から学び、先に進むために、さらに継続して現場を支え、実態を究明するための継続的な活動が必要であり、保育に関わる科学者の英知、実践者の経験知や保育力の統合、結集が必要とされていることを忘れてはならないであろう。

4月はまだ災害の渦中にあった。その中で資料提供の呼び掛けに応じてくださった皆様に心から感謝の意を表し、内容表示等の不備があったらお詫びを申し上げたい。

この資料集作成作業担当者は、資料収集に当たった関口、音山、シンポジウムに参加した首藤の3人であったが、主な整理作業は音山が当たり、その労に負うところが極めて大きい。また、資料収集から展示表示、記録集になるまでの間に多くの方々が陰に陽にお力をお貸し

くださった。こうした力が今後も保育の発展を支える礎になるであろうことの証を得たとも言えよう。

関係各位の更なるご活躍、ご発展を心よりご期待申し上げます。

(関口はつ江)

緊急シンポジウム報告書作成作業部会

関口はつ江（東京福祉大学 災害時における保育問題検討委員会副委員長）

音山若穂（群馬大学 災害時における保育問題検討委員会研究委員）

首藤美香子（白梅学園大学 災害時における保育問題検討委員会研究委員）

4. あとがき

保育学会ができることを問い続ける

第64回大会での緊急シンポジウム報告書を会員の皆様にお届けします。

日本保育学会理事会において設置された「災害時における保育問題検討委員会」として、本記録の編集を担った。幾度も読み返しながらの編集・校正作業を通して、こうした記録を残し、時間とともに忘れてしまうことなく、学ぶことの大切さを改めて感じている。

この度の震災に際しての保育者の行動、保育所・幼稚園の対応は大変な状況のなかでこれ以上望めないすばらしいものであったと感じる一方、その後の復旧・復興過程を顧みると、この記録にもある阪神・淡路大震災での経験が十分に生かされているとは言い難い現実も明らかである。たとえば、災害時の連絡方法、保護者への引き渡しや預かりの体制、子どもたちを避難させる際の保育者の絶対数の不足、被災後の保育所運営費の問題、津波に対する準備等々。そして、保育学会としてできることとしての災害時のガイドライン作りや災害に対応する学会組織としてのあり方、保育関係機関との連携等々。阪神・淡路大震災以後の災害経験から私たちは想像力を働かせて、私たち自身の問題として考えておかねばならなかったのではないか。おそらく、この記録にあるシンポジウムに参加した会員の多くが、ガツンと頭を叩かれたような思いを感じていたに違いない。「私たちは何をしていたのか」「保育学会は何をしていたのか」と。

このシンポジウムを機に、災害時における保育問題検討委員会では、あらためて阪神・淡路大震災の記録を整理するとともに、岩手、宮城、福島の各県の震災時の保育の状況と問題について、当該保育機関に負担をかけないように配慮しながら各地域の地元研究者によるプロジェクトチームを組織し、聞き取り調査に着手した。また、震災にかかわって行われている子どもと保育に関する調査・研究について、それら資料を共有し、重複する調査によって保育現場の負担を軽減できるように、自治体や大学等の関係機関に対して、どのような調査や取り組みが行われているかについての動向調査を始めた。さらに福島県については、放射能災害下で行われている保育とそこに暮らす子どもたち、保育者とともに実践研究を進めている。

これらの取り組みで集められた資料から、これまで先送りにしてきた前述の課題をできるだけ解決していきたい。子どものために、保育の充実と発展のために保育に携わるものの叡智を結集する時であろう。本記録はその第一歩である。多くの方々の力によって本記録が編まれたことに記して謝意を表したい。

被災された方々のご心労、ご苦労を察するに、言い尽くせない思いを言葉にしてしまうことすらためられるが、心からお見舞い申し上げたい。そして、それぞれの場で行われ

ている保育や子どもに向け、できることがあれば、それを行うことが私たち保育に携わるものの役割といえよう。まだ始まったばかりの復興の道のりである。そこに生きる子どもと保育者とともにあり、ともに歩みつづけましょう。保育学会ができることを問い続けて。会員の皆様のさらなるご協力を心からお願いし、編集後記とさせていただきます。

(太田光洋)

日本保育学会第64回大会(玉川大学)
緊急シンポジウム「災害時における子どもと保育」報告書

発行日 平成23年12月20日

発行者 一般社団法人日本保育学会
〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-2 B.Rロジェ T-1

編集 災害時における保育問題検討委員会
委員長 太田 光洋
副委員長 関口はつ江
副委員長 島田 ミチコ

印刷 よしみ工産(株)

非売品